

根岸橘三郎著

This Book is dedicated

to the Memory

Of

The Late Joseph Neesima

And

My Son, the Late Wataro

Negishi.

新島襄先生印畫譜

第一圖　（右上）先生渡米後第二年目、プイリツプス學院在學中の小照。（中央）先生の兩親。（右下）脫走の途次、上海で撮影した先生の寫眞（未亡人所藏）

第二圖　先生の誕生された神田一ツ橋外板倉藩邸正門。（原圖、安中表書役嶋島氏所藏、著者の摸寫に係る）

第三圖　（左上）先生脫走船の船長セボリー氏。（中央）脫走のため先生の乘込んだスクーナー型帆船「ベルリン」號。（右上）船長セボリー氏の承諾書。

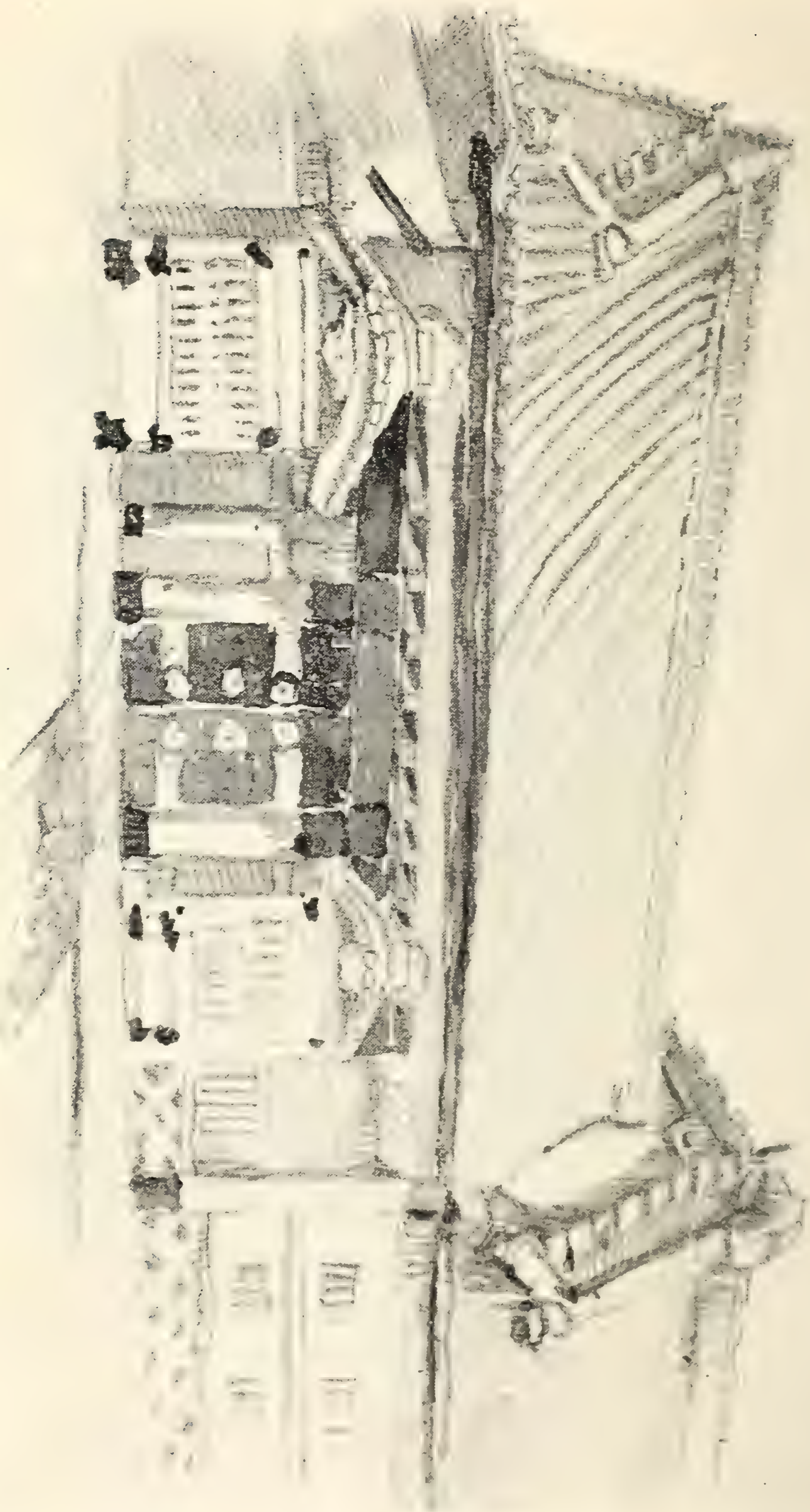
第四圖　先生海軍傳習所時代、氣焰を吐露した落書。

第五圖　同上時代、先生の寫した數學の教科書。

第六圖　大磯百足屋方で先生の永眠された室。

第七圖　上州安中に於ける先生の舊宅。（著者スケッチ）

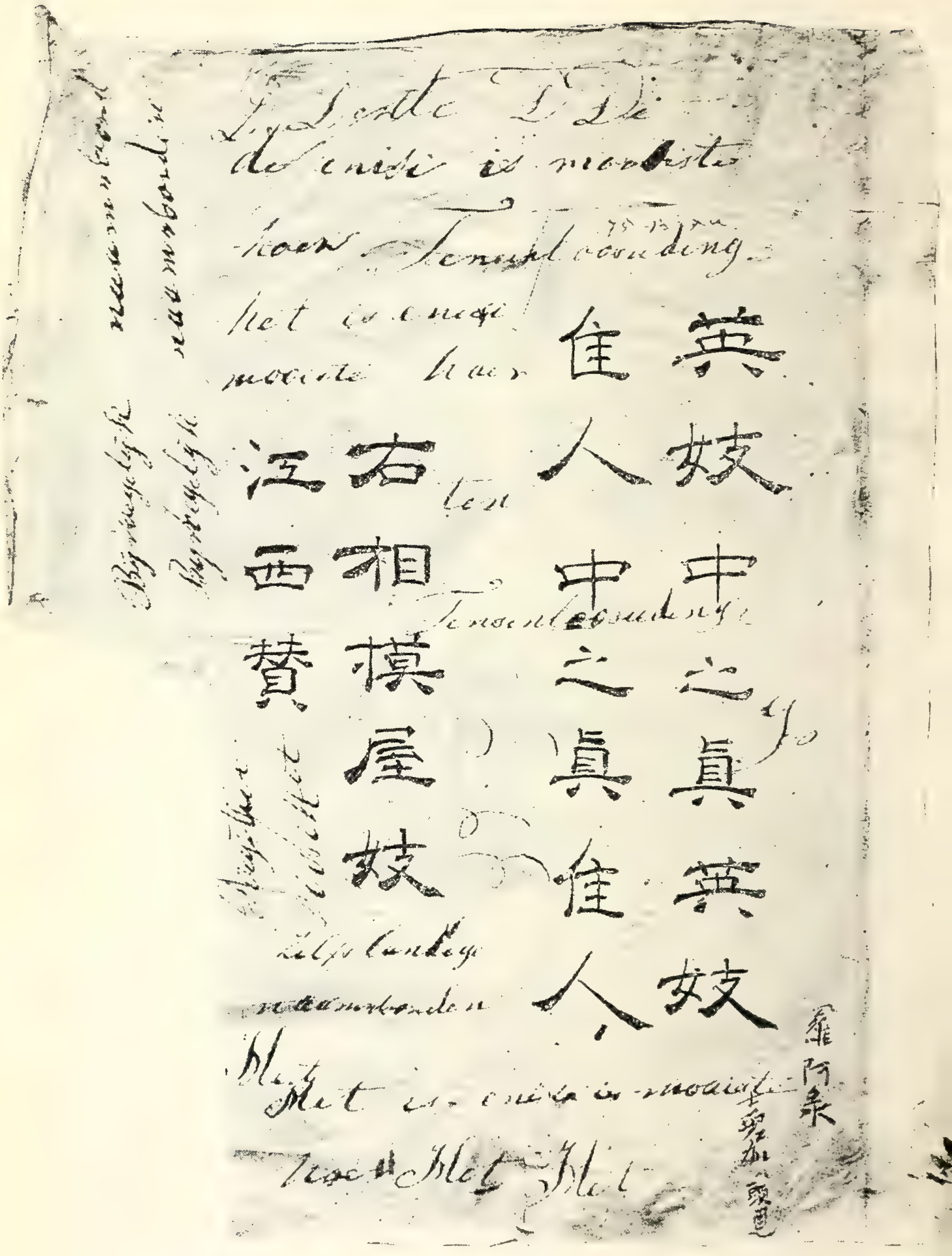


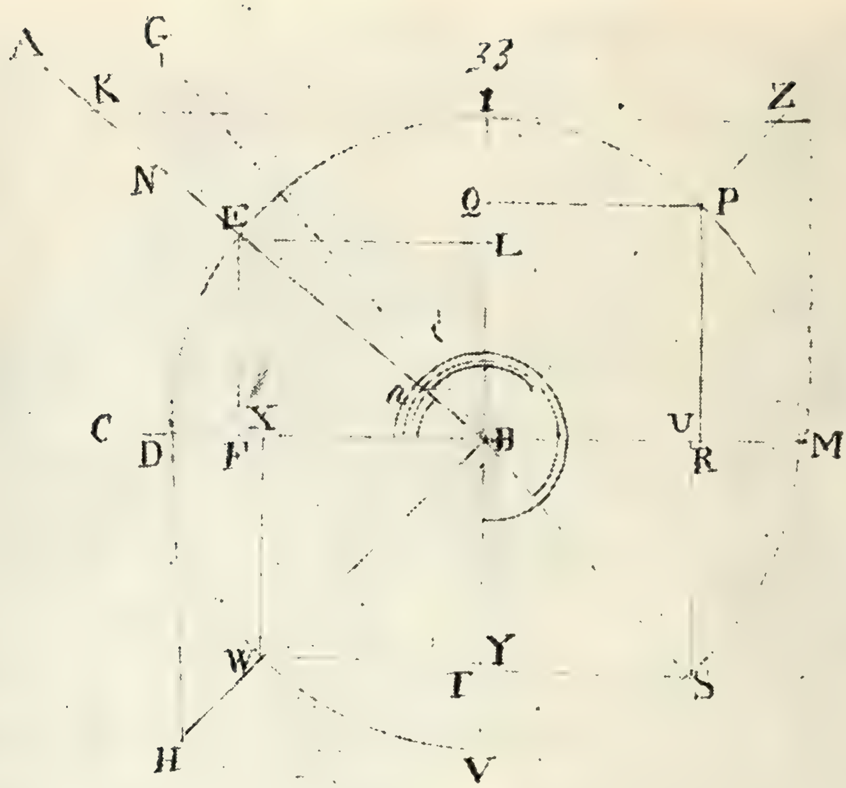




W. T. Savory
Captain of the Schoner "Berlin."
On the night of the 16th July 1864. With Mr Fukuei's request, that of the Captain Savory who were so kind taken this great risk being payed for Mr Neezima as so far to Shanghai, on the night of the Hakodade harbour, he lifted this Negative to Mr Fukuei's hand, as his remembrance to be carried out Fukuei wishes.



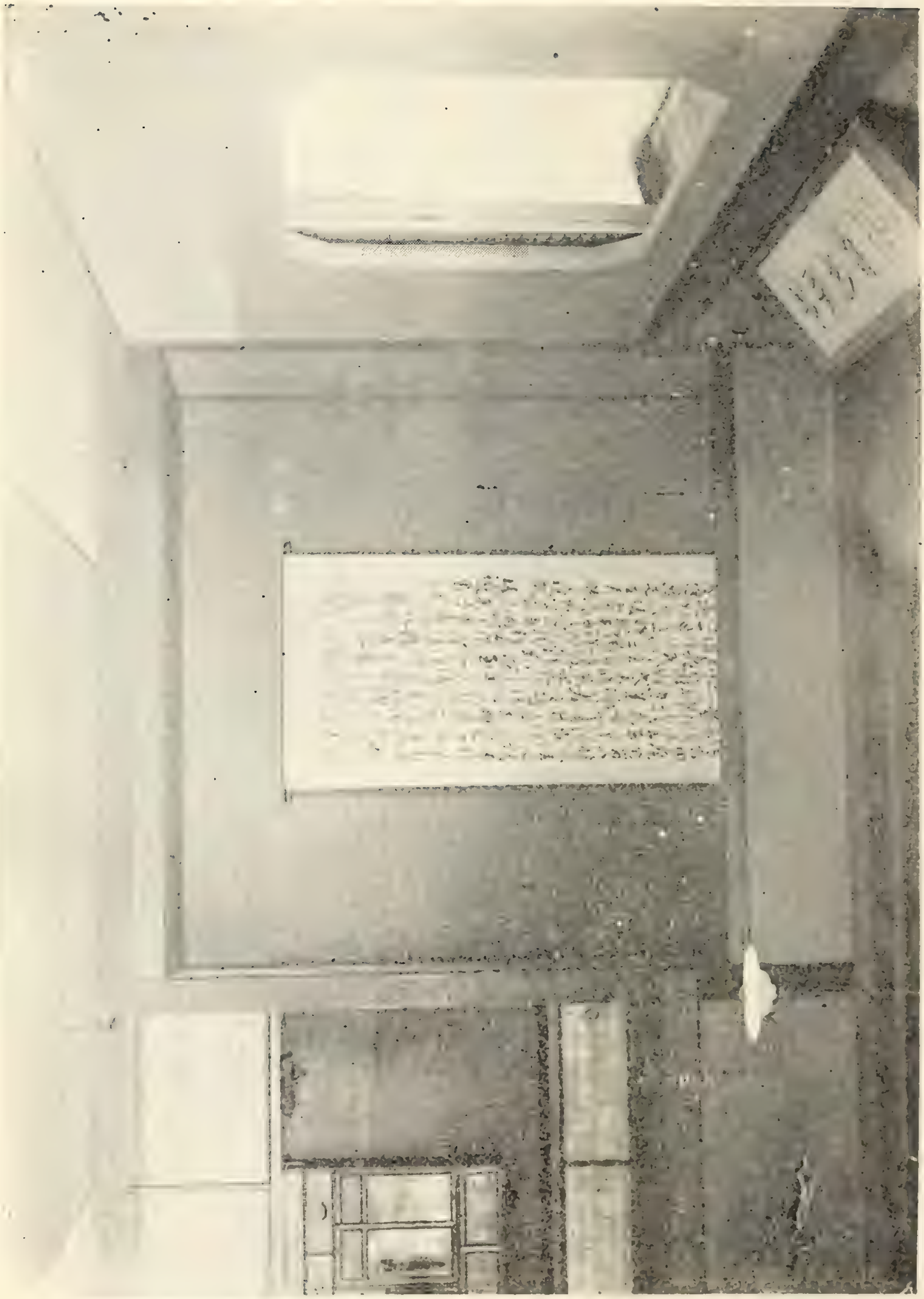

英妓中之真英妓
佳人中之真佳人
右相模屋妓
江西賛



Als men, uit het toppunt B, fig. 33, van een hoek ABC, met eene willekeurige opening des passers BD, een cirkelboog beschrijft, welke de beide beenen van den hoek in D en E doorsnijdt, dan verkrijgt men de goniometrische lijnen van dien hoek, of, wat hetzelfde is, van den overeenkomstigen boog DE, op de volgende wijze:

1° De sinus is de lijn EF, welke uit het snijpunt E van het eene been loodregt op het andere been valt.

2° De tangens is de lijn DN, in het snijpunt D van het eene been loodregt opgerigt en verlengd tot zij het andere been in N ontmoet. — Of wel, de tangens is het gedeelte van de [illegible];





本書に與へられたる諸家の序跋

三宅雪嶺博士　有嶋武郎氏
德富蘇峰氏　厨川白村博士
海老名彈正氏
河上肇博士　荒木寅三郎博士

數へ歳にて大隈侯及び山縣公六歳、伊藤公三歳の時、新島氏が生れられ、此等の人と同年代で稍々若い方になります。伊藤の謂ゆる天下志士領袖なる東湖、南洲、象山、松陰、景岳より後れ、寛政の三奇士より約半世紀も後れますが、前は準備時代であつて、愈々實現期に入ると共に、氏が精神界に貢献せられたこと、公侯の政治に於けるに譲りませぬ。公侯と同壽命ならば或は優りましたらう。

大動搖は大淘汰を促し、玉をして愈々玉質を發揮せしめ、石をして愈々石質を發揮せしめます。新島氏は二個の大動搖を經、殆ど理想的に性格を鍛錬し、識見を醇化せられたやうです。二個とは、第一に日本の幕末、第二に米國の南北戰役。

幕末の動搖は、東に起り、西に盛んになり、西が勝つた形ですが、寛政の三奇士を始め、開港斷行でも、大老殺害でも、兵制改革でも、軍艦建造でも、東方の人の手に成り、實に新日本建設の機運が全國に萠しつゝあつたのでありまして、苟も相當の眼識ある者は奮つて立たずに

居れず、東に東湖、象山等が出で、西に南洲、松陰等が出で、伊藤公の謂ゆる風氣の先を開き中興の運を佐けました。新島氏は少しく後れ、伊藤が西に出る頃に東に出られました。

幕末の志士も優劣區々ですけれど、何處か一藩一國の重きを以て任じ、鼎鑊甘きこと飴の如しとする氣分があります。同じく生きるならば、徒らに生きたくなく、何等か生きるだけの事を成したいとします。醉生夢死といふので滿足し得られませぬ。新島氏が十八歳で船長となり二十二で國禁を犯し米國へ渡られたのも、當年の志士の意氣です。

所で米國へ渡られたのは新世界未曾有の大戰亂が片付いたか片付かぬかの時です。戰亂は何の事情より起つたにせよ、戰勝者の主張する所は奴隷廢止に存し、實に正々堂々、孔孟も考へ及ばなんだと思はれる事、其の爲に身を捨て、財を捨て、盡く捨てゝ顧みぬなど、天晴れと感歎せずに居れませぬ。エマーソンや、ロングフエローや、其他純愛純正といふべき人が生存し、其人を見、其事を聞いては、識らず知らず人道に引入れられ、黄金崇拜の如き、南北を分離させた經濟的利害の如き、忘れるとなしに忘れてしまひます。

新島氏の書簡に『亞人は英人と違ひ、外國を奪ふ事を企てず、只々至聖の道を萬國へ擴め、共

に其道を樂しみ、共に有無を通じ、厚く兄弟の交りを爲さん事を望む』とあります。當時さう見えましたらう。既に國務卿シユワードが太平洋の彼岸に利權を擴張すべきを明言しましたけれど、一般に知れ渡らず、人道に重きを置く人々は、之を耳にしても反對を唱へましたらう。天涯地角、異境の同情に感じた青年が、『人々の申すには、我日本十年を不出して頗教化に赴き獨一眞の妙道救主耶蘇の明教を奉ずるならん』といふのは尤もの次第です。

『富貴功名は花上草頭の霜露なり、僕は眞神の臣にして、我日本の民なる故、眞神日本の爲に丹心を盡さん事は僕の急務と云ふべし』と慶應三年に書き送られた所は、新日本の起る時に生れ、新世界の花を開く時に成人し、新島襄といふ人物を造り出したものです。其前に新島襄が出でず、其後に新島襄が出でませぬ。

美しい虹よ、常に現れよかしと望むも益ありませぬ。彼は特殊の日光と特殊の雨とでのみ出來上ります。

新島氏の性格は高く、大きく、力があり、光があり、潤ひがあります。松陰が米國へ往けばさうなりましたらう。景岳が米國へ往けば、さうなりましたらう。

然し後に日本も變はり、米國も變はりました。明治二十三年新島氏が歿せられる時、何の感想でありましたか。憲法發布あり、帝國議會の開かれるので、聊か安んぜられましたか。政治は末、敎化は本、敎化の足らぬので不安を感ぜられましたか。後に日本は支那と戰ひ、露國と戰ひ、世界戰役に加はり、米國は西班牙と戰ひ、比律賓を奪ひ、世界戰役に陸兵を歐洲に送り、更に英國と海軍力を均しくし、到る處に排日熱を高めようとします。新島氏の在米中、英は露を畏れましたのに、次いで獨を畏れ、今は米を畏れて居ります。

新島氏は長命して如何に働かれましたか。本來才能に長じ、機を見て愈〻活躍せられるを想像し得ると同時、才に過ぎて德を傷けられるやうな事がないかと氣遣はれます。同志社大學寄附金に關し、顯官の力を藉られたのは、事柄が事柄で、怪むべくもなけれど、何か他に方法がなかつたかと惜まれます。とかく寄附金は人格の暗礁です。

新島氏は江戶子の理想的模型に近く、若し中村敬宇、田口鼎軒、佐久門貞一の三人を合はせば、同模型の人物となりさうに考へられます。

主人公と同鄕なる根岸君の本著は、材料が豐かで、穿鑿が屆き、叙述が生き〻〻し、歿して

三十三年を經た偉人を眼前に現はし、事實が小說より面白く、後人の言行が古聖賢より教訓多しといふを證明するを覺え、讀み來つて想ひ浮んだまゝに記載します。

三宅雄二郎

貴著中には仁兄にあらざれば克はざる地方的色彩頗る▷厚に現はれ一種出色と存候。

歳末餘日なく候處倍御清祥大慶に存候。陳れば過般御來示の新島先生幼年から少壯時代の記事概略寓目仕候。其中には迂生の創聞に屬するもの不鮮少候。先生元來自己に就て語るに不好、故に多年先生に親炙するものと雖も恐らくは貴著に對して意外の感を做すもの迂生一人に限らざる可しと存候。貴著は專ら逸事奇聞の方面を開拓せられたる趣有之、凡そ先生に關して多少のインテレストを持つものは必らず貴著を一讀するを禁ずる能はざるは迂生の固く保證せんとする所に御座候。先は御禮を兼鄙意開陳仕度如此。早々不一

大正十一年十二月念八

猪　一　郎

根岸仁兄大人

玉机下

日米の正氣を有したる新島先生

藩籍によれば、新島襄先生は群馬縣下碓氷峠の麓近き山里の安中町に生れ育ちしかのやうに聞ゆれども、之は戸籍面のそのことであつて、先生は江戸の眞中、神田一ッ橋附近の安中藩邸に呱々の聲を擧げ、而して純粋の江戸子として生長したのである。恐らくは海外發途前一回も安中の地を踐むやうなことはなかつたかも知らぬ。且板倉家は徳川家と深い關係もあつたから先生が江戸の安中藩邸に生長したのは、九州地方の藩士が江戸の大名屋敷にて生長したのとは大分其趣きを異にして居つたのであらう。從つて江戸の氣風習慣は善惡共に先生は之を受けたに相違ない。先生は板倉閣老の家子郎黨でもあり、又江戸の神田子でもあつたから、青春の野心に襲はれたこともあつたらうが、時代は恰も日本分けても徳川家に取りては危急存亡の秋であつて、苟も多少の氣魄を有するものは蹶起せずしては居られなかつたのである。當時の志士仁人をインスパヤーした所の慷慨悲憤の正氣は痛く先生をも衝動し、その憂國の至情は一個の噴火口となつたのである。外には日一日と切迫を告げつゝある外交問題あり、内には温和派の

公武合體論あり、又更に一歩を進めて討幕に及ばんとする氣勢も次第に募りつゝあつたことなれば、實に儒夫も起たざるを得ない天下の情勢は海外の知識に憧憬しつゝあつた先生をして遂に萬難を排して國外に飛び出さしめたのである。

當時北米は四ヶ年間の苦戰惡鬪を經て奴隷廢止の偉業を成就したる曉であつた。しかも人道の歌を高らかに謠ひたる豫言者の國、新英州に先生は到着したのである。當時の米國は先生に取りては何も彼も新しき理想鄕であつたらう。青春の先生を魅した江戸の社會と新英州のそれとは雲泥も啻ならなかつたのであらう。リンコルン式の大統領と吉原の大門を閉ぢた板倉式の閣老とは天地霄壤の別があつたらう。先生と溫い握手を交換した所の新英州の女子と江戸のそれとは到底比較にならぬ相違があつたらう。先生も武士として生れた武士であつたからには、素町人とは固より撰を異にして居つた筈なれども、藩主や閣老に對しては土下坐したこともあつたらう。況んや公方樣の尊顏は遠方からすら拜する譯には行かなかつたらう。此封建時代に生長した先生が自由平等の民主的社會に加入し、しかも民衆主義のクリスチャン團體に加はり、さてはワシントン府の白堊館にて大統領とも隔意なく握手したことの如きは、夢か現かと自か

ら迷うたこともあつたらう。先生は日本にては已に死刑の宣告を受けて居る身上なるが、不思議にも米國にて復活し、しかも思想の根底から改造され、全く新英州人となつたのである。彼は第一の故鄕にて受け得た所の教養の一部を改善したるに止めず、宗教、倫理、社會、政治、あらゆる生活に於て全く更生したのである。彼は生みの父母を失ひたれども、生みの父母に劣らない養ひの父母を得たのである。彼は肉の兄弟姉妹を失ひたれども、肉の兄弟姉妹に勝る靈の兄弟姉妹を見出したのである。而して彼が日本の江戸子として生れ付きたる凡ての美質は寸毫も之を傷けなかつたのであるから、米國人には立派なる日本の好男兒として特に珍重がられ、又敬愛せられたのである。

要するに新島先生は日本の江戸子として米國に入り、又北米の新英州人として日本に歸り來つたのである。彼には江戸子として更に江戸子以上のものがあつた。是れ其江戸の繁榮に耽溺しなかつた所以である。彼れ亦新英州人に復活して更に新英州人以上の氣魄があつた。是れ復日本に歸つて日本精神界の指導者となつた所以と思ふ。此非凡の精神が如何に叙述せられ得るべきかは、根岸氏が最も苦心した所である。白米も天然自然の儘ではない、藁あり、穗あり、

糠あり、白米の美味を知る者は粉糠を厭ひ、糠を厭ひ、穗を厭ふ、況んや藁の如きに至りては全然白米に關係ないかの如く思ふ。先生の傳を讀むもの復この過ちを重ぬることなくんば幸である。獨り之を重ねざるのみならず、讀者をして白米となる所の生氣の生長振を突きとめしめんと試みたるは、著者根岸氏の最も苦心した所であると信ず。

大正十二年一月七日

京都室町の寓居に於て

海老名彈正

日本人の魂は昔から、理想的に清淨なものに對して極度の憧れを有つて居り、其處には何うしても拔き去ることの出來ない特殊の潔癖があるやうに思はれる。勿論吾々の周圍に存在する現前の事物に、理想的に清淨なものが存在し得る筈はない。そこで吾々祖先の魂の要求は、現前の事物を觀念的に淨化する方面に亢進し、そこに幾多の特殊なる習慣と風俗とを釀成した。斯かる潔癖は勿論人物に對しても向けられた。その結果は、特定の人物の短所弱點をば總て洗淨し、只その長所美點をのみ抽出して之に獨立の人格を賦與し、更に觀念的亢進の作用により、之を神として崇拜するに至つた。古代の神話時代において、一個の人格者が分拆して觀念され、和魂と荒魂との二つの神として祭られてゐるなどは、その一例である。斯樣な一方的の潔癖は、現代の吾々が、吾々の祖先から遺傳して、今なほ多量に維持してゐる所である。特定の人物に對する一般國民の評價が時によつて甚しき激變をなすのも、恐らく其のためであらう。何等かの機會に、特定の人の或る方面の美點に感激すると、生きてゐる人をでさへ、其の生時に、之

を神として崇拜する。けれども其の感激が稍々沈靜した頃に、偶々その人の他の方面における弱所を發見すると、先きに神として天の上にまで推し上ほせたものを、忽ち僞物と看做して地の底にまで押し附ける。斯樣な譯で、或る場合には犬養毅氏を憲政の神として尊敬した同じ新聞紙が、他の場合には犬養正三位が外交調査員に親任されたなどと言つて、頗る嘲笑の意を漏らす。私は近頃或る詩人が某老政治家をよんだ詩を見て、我國に生くる公人の長壽を悲むの感に耐へなかつた。その詩人は、件の政治家を自分の乘つてゐる同じ電車内に發見したのである。その姿、もし彼が二十年前に死んだならば、それは高名なる藝術家の鑿によつて萬古に傳へらるべきものであつたのに、生ける彼は、今電車の内にあつて、同乘者の注目をさへ受け得ない。詩には斯樣に述べてあつた。明治大正の吾等が其の仲間を神としたのは、ただ乃木大將だけである。思ふに若し大將が再び人間に活き復へられたならば、吾々は何時かは大將を其の神の座位から引きずり卸すに至るであらうが、只その特殊なる精神の高揚による彼れの白刄に對し、一旦强烈なる感激を受けた吾等は、その特殊なる精神の一面を抽象することにより、今なほ之を乃木神社の神靈となしつゝあるのである。かくて大將の傳記は、遂に神の傳記となるであら

う。大將を銅像として見るよりも、神殿の扉の奥、晝なほ暗き所に、髣髴として鎭坐する忠義の魂と觀念することが、吾々の要求なのである。

我が國にほんとうの傳記が行はれぬのは、或は以上述べたるが如き國民性に本づくかと思ふ。しかし私は、人間らしき人間としての西洋の偉人の傳記や逸話により、少からざる刺戟を受け得た自分の經驗に本づき、吾々の仲間から出た高名な人々の生涯につき、眞にリアリスチックな傳記が出て、それが多くの文學的作物と同じやうな興味と利益とを、吾々よりも若き次の時代の人々の精神に寄與せんことを、常に希望して已まざりし者である。

新島先生は或は神となし得る人格者であらう。しかし本書の著者が、言はゞ西洋流に、先生を在りのまゝの人間として傳へんとされたことは、私の最も喜ぶところである。多年少からざる勞力と費用とを費されて、普ねく蒐集され得た資料は、たとひ未だ十分に統一整理さるゝに至つてゐないとしても、資料自體が讀む人によつて無上の寶となるであらう。著者の需に應じ、平生の所感を述べて、本書の公刊を祝する所以である。

河　上　肇

新島先生の傳を公けにされる、そのことに關して私は始めて根岸橘三郎氏とお會ひした。而して氏の難有いお心がけに色々感じ入つた。私はまだこの度の氏の著作をたゞ一端だけ卒讀したに過ぎないけれども、著者としての氏の態度から推し考へると、故先生の風丰を髣髴する上に新生面を開くものがあるに相違ないと信ずる。色眼鏡をかけて物を見るほど下らないものはない。凡ての人や事件はその赤裸々な當體に於て最上の意味を持つ。恐らくこの書はその使命をなし遂げるであらう。私はこれを著者に期待し感謝する。

一九二二・十一月下旬

有島武郎

冬のはじめ或日の朝、先輩の所から私の宅へ電話があつた。根岸さんと云ふ人が今から行かれるから、會つて異れと云ふ事であつた。やがて訪ねて來られた來客の老紳士を、私は書齋に請じた。その人は、米國ではよく誰でも提げてゐる黑い大きな革鞄の中から校正刷を出して私に示された。それが即ちこの新島先生の傳で、客は、之を書いた由來に就て語られ、精しく其書の內容を話して、校正刷の一部を私に渡して行かれた。

初對面の時間は、主客ともに忙しい身の常とて、わづか二三十分に過ぎなかつたが、あとで、根岸さんが殘して行かれた校正刷の一部を見ると、そこには私を動かす一つの大きい力があつた。それはあの、しばらくの對談の折に見た根岸さんの誠意と熱情と感激とであつた。その面に、その言葉に、虛僞なき熱誠の貴さを私は見たのであつた。

傳記文學の爲に何よりも大切なものは、第一に、史料の蒐集である事は言を俟たない。新島先生と同鄕の士である根岸さんは、この點に於て多くの便宜を有せるが爲に、根本史料の蒐集

には遺憾なき努力を致されたやうだ。集められた資料に、精緻嚴密の考察を加へて、あらゆるdataを精査せられたのである。昔から宗教の祖師豫言者などの傳記は、遠く時代を隔つるに從つて史料の散逸すると共に、後人の感激尊信はまたやがて偶像崇拜の心と相結んで、はては多くの誤傳を加へhaloを增して、遂に傳記の眞を逸するのが常である。新島先生の場合のごとき今の時に於て資料を精査蒐集するに非ずんば、後代に至つて又同じ遺憾を繰返すであらう。根岸さんが今日に於てこの資料湮滅を防がれた功績は、永く沒すべからざる者である。

第二には、その人物に對して傳記の著者が捧ぐる熱情と感激とあるに非ずんば、單なる史料蒐集は、遂に生命の力なき腐儒の閑事業として了るか、或はまたかの文筆の士を傭うて草せしめた藩侯富豪等の傳記類と同じく、舞文曲筆に成れる內容空乏の惡書と成り了るであらう。根岸さんの新島先生に對する感激と情熱とは、私が初對面の第一印象に於て先づ強く私を動かしたものであつたから、此點に就ては再び繰返す迄もあるまい。

以上の史料と感激との二つの要件を滿たすがゆゑに、ロックハアトの『スコット傳』や、トレヴリアンの『マコウレイ傳』は、ボズウエルの『ジョンソン傳』と共に、不朽の名著として

後人の敬重に値ひするのだ。根岸さんが心血をそそがれた此一巻の新島先生傳も亦た恐らくは傳記としての此二大要件を具備する事によつて、不朽の意義を有する者であらう。

日本の新しき文化の建設のため、一つの大きな礎石であつた豫言者新島先生の傳記が、根岸さんの手によつて完成された事を喜びつゝ、私は此數行の蕪辭を寄せる事にした。

大正十一年十二月

厨川白村

出版さるゝまで

新島襄先生は私と同郷同藩の先輩であり、略ぼ同じ社會の空氣を吸ひ、同じ土壤と同じ歴史の範疇に棲息した方ですから、先生の生活の上に降りかかつた總べての種の出來事が、私の心情に反射的に繰返され、先生の官能的性癖の一つだも共鳴があります。且つ新島家の家政狀況、遺傳的特質、心的發達の原因、意識、本質的支配の機會、又特殊の感化薰習等、總じて先生の規範標準を打ち立てた諸相を略ぼ明かにしたので、その背景に先生を點じて卒直に記しました。

さて先生を聖人の雛形と見て居る人々は一樣に驚異の眼を瞠つて、斯くあるべき筈でない、斯くあつてはならぬ、斯くあるべきであると假定したのと、私の本書中の記述とは、全然別個の事柄です。併し、人は立場に由つても違ひ、東西に於ても違ひますから、異を立てたとて別段不思議とも思ひません。均しく聲音に倣つて書いたものでも、外國人は Neesima と書き、日本人は Niishima と書きます。さうして日本人が西洋流の綴り方て見てネエシマと讀み、外

國人は日本流の書き振りを見てナイシマと讀みます。聲音を寫すに相違のあるべき筈のないものでさへ然る以上、形而上の相や道德生活の事實に就いて解釋を異にするのは寧ろ當然かも知れません。併し先生が一足飛びに手輕に安直に人間最高の規範を攫み得たと考ふる人があるなら、それは少しく複雜過ぎる獨斷ではありますまいか。先生も一定の筋肉と神經とをもつて生れた以上、周圍の刺激に應ずる性質をもつて居たことは肯定されます。されば先生自身にしても、この混雜なる狀態に明瞭なる解決を希望し、自己の經驗が與へ得べき悟性の解答を要求するための參禪したり、擊劍を修業して品性の實現能力の養成に資したりして、心的の成熟に逹するまでの波瀾重疊は目まぐるしい程でした。かうして自ら發展し、自からそれの內容をば創造して行く處の奮鬪振りや、個人の權威を主張し、人道の存在を强調して來た潑溂さは到底私の筆では十分寫すことが出來ません。併し繪にかかれた應擧の虎よりも自然の猫が勇猛である如く、若し私の說明に幾分の生命がありとすれば、それは純粹に先生の聲であり、先生の內感自律の形象だからです。結局、私の射照した所は、先生の系統的情勢を點檢して、宿命的な先天的な不動的な存在やら、新興生活の潑溂な興奮やらが、精神と肉體の兩方面から攻め寄せて

來た時の苦慘な戰鬪振りや、その多角的の個性の成長を可能にするために、あらゆる機會を捉へて大膽にまた眞摯に再生か死滅かの恐るべき緊張となつた時の光景、將たまた人間の能率を高めようとの意志を實現し、一度經過した自然主義と戰つて凱歌を奏したことであります。時間的經過から云へばまた先生が、先生の肉温かく血動き、火の如き感情と鐵の如き意志とをもつて戰つた生長期と、確實な教養上の理想を立てゝ、その人生觀及び認識上の統一を求め、世界を總括して觀るやうに努力された期間までの事なのです。

さて私の心情に先生の人格が最も強く衝擊を與へたのは、明治四十二年の春、長男が安中小學校から半紙百枚を賞與せられた時であります。これが契機となつて、愛子の生活を高く正しく準備し、素質を陶冶し端的に、強い人格者と交通を開き、強い生活に觸れしめたいとの考へから、この半紙に先生の傳を草したのであります。

豫言者、先覺者は一見環境の空氣に逆行するやうでありますが、實は最も深刻に且つ十分、環境の空氣を吸收して居るのであります。結局、先生の生活もまた環境の影響を極めて多く受けて居ることが分りました。其處で私は同鄕同藩といふ關係から、先生の人情の機微に觸れて

まゐりました。此處に於てか、先生の光顏が巍々として私の前に輝き、先きに傳說的、倫理的高所からその驚くべき不可解の偉大をもつて當面に私を壓した先生は、小兒の如き温顏と怡容とをもつて私の眼前に現はれてまゐりました。さうして先生が少年時代や青年時代に、彼自身の熟慮や、選擇によつて生活を建設した道程は、略ぼ私共の辿つて來た途と同樣であります。今先生の青年時代の手帳を見れば、

爰に三尺四方の水槽あり、四石一斗を容る。今、八石二斗八升入の水槽、高一尺五寸、幅四尺なれば、長さ何程。

などいふ算術の問題を取扱ひ、白文に訓點句讀を附けてゐる所は、背つて吾人の受けた課題と同一であります。果して然らば、先生個人の力がよくその法を得て、その價値を創造した妙味は、吾人の蹈襲する思想の樹立若しくは學問說明の標準であり、さうして又物心二界相關葛籐の調和者であり、或は自己對社會の間に生ずる矛盾の解決者たり、生活方法の辯護なり或はまた安心立命の究竟地であります。斯くして可なり先生の發展の道筋が分り、思想の經過が慈しみのある姿となつて映じ、不思議にも私の心は無意識に先生の生命に惹付けられました。さ

うして強い人、健全な人の運命は、何等かの意味に於て復活への道に導きました。一家を擧げて一九一六年に私が渡米したのも、實は先生の異常に力強い感化を受けたからであります。

滿庭櫻の頃、春宵の月を飛石傳ひに、私は私の庭内に住んだ竹内氏を、母の勸めるままに訪ねました。この竹内氏は舊藩時代、先生の祖父と同僚の關係がありましたから、果して要領を得ました。且つ氏の路次一つ隔てて前に造士館と云つた藩士の教育所がありました。新島先生が歸朝匆々、第一聲の傳道說教を試みた初陣の紀念館であります。さうして人々の心に響き通る理想と意義とを喚び起こし、力強く文化の潮流に打込んだ地點であります。私の家は代々造士館の教職に在つた關係上、明治になつて其の全部と武器庫の跡を包容して邸宅としたのです。勝殷公入城の節、領内後閑村長源寺山に狩りを催したが、その時この武器庫の中の武具を先生もまた支給されて、勢揃ひに參加したと云ふ紀念の地であります。斯かる空氣の渦の中で先生の話を聞くのですから、一層の感興を持ちました。竹内氏が興に乘じて語られた中に、到底この種の仁ならでは知り得ぬ消息をも伺ひました。さて、山田氏が安中町龍昌寺に住職をしてゐた頃、新島家は一戸を引拂ひ、暫らくその庫裡に同居してをりましたから、新島家の人事は委

細承知の筈と敎へられました。すると、今まで無關心で居つた妻君が半疊を入れて「山川さんが江戸から來た時は實に奇麗でしたねえ」と、何か意味ありげでありましたが、「何を漠迦」と制し、話はまた本筋に這入りました。

さて、翌日前記の山田氏に面會して、先生の兩親の誕生地、親戚、さては先生が歸朝匆々、明治八年、直接先生から洗禮を受けた安中の信者の人名簿や、先生と信者との往復書面を手に入れることが出來ました。これが非常な栞りとなり、次ぎ〳〵に交渉がつき、また材料が集まることになりました。

當時安中に於ける初代の信者で、先生が常に安中のヨハネと云つて信頼して居られた千木良昌庵氏の遺族が、私の近所に住んで居られましたから、同家に就いて安中敎會設立に至るまでの記錄や、先生の歸朝當時、安中に於て傳道説敎をされた時の筆記や、安中キリスト敎會日誌等が私の手にはいり、それからそれへと手が伸びて、同藩士や先生の緣者に問ひ質すと、いづれも大小の要領を得ることが出來ました。

先生が歸朝匆々の頃は、同志社を安中に興こさう計畫でありましたが、工部卿、伊藤博文君

の勸誘によつて關西に地を相したのであると云ふことを、關島老人から聞きました。同氏は安中表の書役でありました。文書に忠實なる人で、一度目を通した公文書は一々手控へを存して置きましたから、自然、藩の活字引であり、從つて先生の出來事も精確に知悉して居りました。私は日露戰役後、不圖、習字に興味を見出し、爾來、同氏の永眠まで七八年間通學し、傍ら繼續的に先生の史實を承知致しました。故に同氏の文書をそのまま記述した所もあります。また小林老人から舊藩の扶持米の支給、藩札の購買價値や、硬貨幣との兩換步合、藩士の給金、現代通用貨幣との價値の比較、並びに藩士の內的生活、文化、彼等の社交、內職に眼の舞ふやうな生活が、それら古風な立法者の意見に基いて束縛を設け、因襲的道德律に服從を強へられたものであることを聞き、結局、偉人、英雄が早く鄕里を棄てた動機が、制度の流弊から釀されたと云ふことを承知し、初めて先生の行路に起伏、凸凹のあつたことが了解されました。同氏は戶長、町長と歷任し、漢籍の素養もあり、錚々たる藩士でありました。

先生の祖父辨治が天保の昔、初めて安中屋敷に奉公に出て、無人の野を行くやうに振舞つた光と影とは、不思議にも強い朗かな人格として、正面から堂々と先生が現はれて來た伏線とな

つたものであります。さうして辨治の決然として郷土を去つたことが、實に彼の意義ある所でありました。この稀有な物語りは、これも同じ舊藩の松本君から承知することが出來ました。また清水姉から、先生の青年時代、江戸の御家中の誰れ彼れとなく、先生を「今韓信」と噂して居つたと云ふことや、また家庭に於ける影響から當然分けなければならぬ謎が判然としたり、嗜好の一面が明瞭になつたり、また衣服大小の好みにわざとならぬ調和の美が保たれてあつたことなどを承知しました。姉は先生の姉おみよさんの裁縫弟子でありました。

同藩の先輩に丹所啓行といふ方がありました。先代が板倉家の勘定奉行でありましたから、新島家の出納を知悉して居りました。およそ、一家の經濟狀態は有意識的にもまた無意識的にも家族の中に還元せられ、過去、現在の情勢を點檢するに重要の力點であります。また同氏の令閨も前述の清水姉と友人で、同じくおみよさんの裁縫弟子でありましたから、新島家の雜多な內容を承知致して居りました。今度、私は眞に歷史を讀むと云ふことは、容易なことでない事をつくづく經驗しました。同一の事柄を目睹したにしても、甲と乙とによつてその印象の全然相反することが珍らしくありません。例へば先生の眉面の疵が、その一例であります。

藩制時代の先生の消息に關して、一層滿足に且つ一層周到の示教を受けたのは、飯田逸之助氏であります。聖堂出身で、東京府下裁判の判事で、板倉家の顧問でありました。先生の脫藩に就いては、連帶の關係を持つて居たのであります。藩制の頃、添川完平氏の助教授で、先生に素讀を敎へ、四書を敎授された方です。重大の價値を有する材料を提供して下さいました。いづれも活きた史實に觸れたものであります。則ち脫藩途中、同君に送つた手紙や、渡米後ハーデー氏の宅から送つた最初の書簡や、その他少年時代の漢文詩稿、幕府の海軍傳習所時代の微分積分の筆記帳や三角術の運算帳など、先生の智識が完全に了解せらるべきものであり、且つ先生の本質的優秀を實證する底のもので、確かに能率が非常な高度に進んで居つたことが分ります。

さて新島公義君は新島家の正統相續人で、先生が反つて新島家の別家であります。同君が提供して下さつたものは豐富な研究資料でありました。この精細な資料によつて先生の普遍的常識の內容と、專門的造詣とを一層擴充することが出來ました。さうして本傳記の內容に確定的不動の基準を與へたと信じます。また間接には先生の精神的活動の狀を十分に語るものであり

ます。これらの參考資料を概括すれば、蘭學家杉川玄端から學ばれたピーター大帝の和蘭原本文法、生理學など、原文を叮嚀に美濃紙に毛筆で寫し取つたものであります。一々假名を振り返り點を付し、苦慘な研究振りが、瞭かに讀まれます。さうして嚴密な科學的方面に精神の長く伸びて行つた先生を見ることが出來ます。此處にもまた海軍傳習所時代の試驗答案や、微分積分代數方程式の筆記帳や、算術の帳面などがあります。禮樂、射御、書數と價値を倒換し、現實脚下の思想潮流に絕望を感じつつ、憧れの眼を睜てて國境外に視線を向けた轉回期が、種種なる意味に於て結び付けられてをります。前記の貴重な手帳の中に、即興の詩や俳諧和歌が雜多に樂書してあります。幾多の曲折と興奮とを遠慮なく漏らして、これまで沈澱し切つた生活の解放を目的として氣焰が揚げてあります。また、漢學の素讀や詩や繪を先生に奬勵した、同藩の江場と云ふ方の訂正した少年時代の詩稿なども、私の手にありますが、本傳中所々に記入してあります。いづれも先生の生きた象徵で、他人の示し得なかつた先生の個性や人格一切の基礎たるものであつて、眞に敬虔の情を以て迎ふべきものであります。

先生の敎養が既に高いものであり、また求めて努力し心の眼が豁然として開け、宇宙人生は

斯くの如きものと觀念した時、初めて自分の立場の是非も分り、進む可き道も知れ、結局、詮じ詰めて經驗を超越したものが世界には多き事を知り、凝つて絶對實在の眞理に全心を傾けました。先生は、キリスト教が先生の宗教的要求と共に、智的要求に尤も滿足を與ふるものと信じ、神を表面に立てて、その人格性を信じ、その慈善性を信じ、これを中心思想として、脫國したのであります。編纂中、私が遭遇した危險は此處でありました。自分の智識から勝手に或る概念を作り、それを尺度として他人を測ることであります。例へば先生の脫走の主脚點を精神的活動と見ずして、功利的本能の發作と斷じたるが如き場合で、かの北海道で脫國の助成者だつた福士宇之吉君に面會して初めて史實を承知し、自分の官能的滿足が全くゼロに墮したやうの場合でした。それによつて私は漸く、偉人は特殊の本性を附與せられた至高の意思から誘導せられて居ると云ふ事實を承知しました。

先生の箱館滯在中、土佐の浪人で神主となつて箱館に居られた澤邊辰馬と云ふ方が先生を、ニコライの日本語の教師に薦めました。この方にも東京で面會して、當時の先生の有樣を訊くことを得ました。

大正五年一家を擧げ米國に移住してから、絶えずハーデー君の後裔や先生の舊交者を訪ね、或ひは先生の在學されてゐた學校などをも參觀して種々材料を蒐集し、最近に至つてはハーデー氏、即ち先生が在米時代の父と仰いだ方の長子エッチ・ハーデー氏の未亡人と屢々通信して先生の當年の消息を伺ひました。またボストン市の圖書館の藏書たるマッギー女史著「ジョセフ・ハーデー・新島の少年時代」といふ本を謄寫して送附を乞ひ、參考した處もありました。著者は先生渡米匆々時代の日曜學校の教師でありました。デーヴィス君著「新島襄傳」の最初のページは、多くこれからの拔萃であることを、デーヴィス君から聞きしました。

私を最も啓發したことは、未亡人八重子夫人から贈られた新島家の慶事や、特殊の出來事を年次的に記載したる備忘錄であります。傳說が扞格し齟齬して、全然對立の許されぬ時の如き場合に、大なる權威となつたものは、如上の日記であります。新島家の事態の連續は、畢竟この備忘錄を經緯として、的確に認識することが出來ます。一層適切に云へば、それ自身が先生の傳記の體系を形造つて居るのであります。その出來事を分柝して見れば、私の耳目に觸れたものが悉く事實によつて證明されます。また年次を逐うて吟味して行くと、先生の生活の深化

と發展との輪廓であり、且つ特殊の歴史と關聯し又は順應して發生した趣きが感得されます。即ち、先生の誕生祝ひ、元服祝ひ、航海旅行の餞別や、先生の祖父や親父の除日に至るまで記載してあり、云はば新島家の眞の歴史の縮寫であります。

斯くあらゆる方面に材料を蒐集して行く時に、不圖、孔子の舊家の壁の中から孝經を得たと云ふ事を思ひ出し、安中なる新島家の舊宅の襖を申し請けて內張りを念入りに調べましたが、果してその中から新島家の小遣帳や、先生の幼年時代に樂書した反古など、實に貴重の材料を見出しました。

猶ほ、安中近傍に散在せる先生の血縁の方からは、或ひは產衣の切布を頂き、或ひは敎示を受けたことなど、枚擧に遑ありません。斯く本書を綴る上に有力なる材料を提供して下さつた諸君に、衷心から感謝の意を表します。終りに本書編纂上、知人の有益なる指導を辱うし、また某氏の原稿の整理訂正等に多大の勞力を惜まれなかつたことを謝します。かつまた之れに併せて、本書が社會に見ゆるまでに到りし同情者各位の高誼と、校正や印刷に從事せられた諸氏

に衷心敬意を表します。

一九二一年•サンクス•ギヴイング•デー、
北米合衆國、カルフオルニア、バークレーにて

根岸橘三郎

目次

五兩、竹光の脇差――雅號の曲江、詩美の鄕原――江戸勤務替へ――侮蔑の眼を以て商人を見下した哲學はその影を潜めた――辨治と云ふ名は智勇辨力の代名詞となる――千古を隔てゝ同じ哀史の一齣――家老尾崎直記、好漢自から好漢を知る――辨治の顏役振り、犬の喧嘩――大坂加番、大鹽平八郎の亂――先生の生活の苗床――先生の論理的明晰と想像力――辨治のお伽噺、破天連の由來――雙六君の手向語り。

第三章 ……………………………………………… 41

父民治の瞑想的氣分――立案者の主觀にかかれた文化的生活――民治は鰻上りに地位の梯子を登つて行つた――大勢順應主義、聖者の沈靜――大橋流の名筆――常套倫理の先生に仕上げたかも知れない――先生の書體と脫走まで持ち續けたる王陽荀――今韓信、藤田東湖の三尺刀――蕎麥と鰻と天麩羅――先生の慈母、素性、半農半商の藍玉商賣――政略結婚と宿命結婚――槍先の功名が飛ぶかも知れぬ――先生の誕生、ミシア的出現――天然詩人――水天宮の申し子。

海上の四ケ月、ボストン到着、斷煙――米國上陸の第一印象――オールド・コーナーの書籍店、ロビンソン・クルーソー――ロングフエローの莊宅を訪ふ――二十三歳の森公使――恩人ハーデー氏――先生のフレツシユ、イングリシユ――フイリツプス學院入學――リツプヴアン・ウ井ンクル――アンドヴアーに於ける敬虔の生活――ヒンドン夫妻――昔日の船長との往來――アンドヴアー時代の先生のクレデツト。

第十二章 ……………………………………………………………………………………… 273

アンフオースト大學時代――新意義に於ての國家主義――國家の存在を强調する必須科目――自由と解放との發展、自由黨系の色彩――同志社の主義綱領とアンフオースト大學――シーリー君の閱歷――アンフオースト出身の副大統領クーリツヂ氏の演說――先生の洗禮、ボストンの日曜――バチエラー・オブ・サイエンス――船長テーラーの死を悼む――岩倉大使と會見――先生の調査に由つた日本の教育制度、修身と理科――歐洲漫遊――ドイツのクリスマス。

第一章

系圖

- 中島市右衛門
  - 新六
    - 忠七
      - 養子 由五郎
        - 民五郎
          - 友太郎
            - 友三郎
      - 別家 新島辨治（先生の祖父）
        - 民治（父）
          - 養子 公義
          - 別家は襄
          - おくわ
          - おまき
          - おみよ
          - おとき
          - 双六
  - 文六

〔備考〕 中島市右衛門は寶暦年間、上方から上州碓氷郡郷原村に土着。養子由五郎は上方の浪人、

腕に槍疵あり、髪結師となる。民五郎は線香屋となる。土地にては今でも線香屋と呼稱す（吉野屋號。（友太郎は菓子屋、現に碓氷郡原市町に居住す。吉野屋と號す。文六は絶家。菩提所は鄕原村の壽昌寺。宗派は新義眞言宗にして、開基は應永六年己卯十月。氏神は諏訪神社鄕原村字琵琶窪に在り。祭神は建御名刀命、都美齒八事太主神の二柱。

先生は上州安中、板倉藩士で、江戸屋敷で誕生致されたのです。その藩邸と云ふは神田一ツ橋外で、明治二十年の頃、第一高等中學校のあつた所で、後ちに外國語學校が建てられました。現今の錦輝館の所などは板倉藩邸の跡です。藩邸の前には信州飯山一萬石の本多の屋敷があり、左右の隣りは柳原と豐前守松平の屋敷がありました。

板倉藩邸の地積は約四千坪でありましたから、重役の人々が獨立の家屋に住む位で、その外の格では武者長屋に住んだものです。一軒前が六疊二間に臺所と、それに應じた二階があつたわけで、今日なほ大名屋敷の武者長屋が芝區邊りには存在して、奇異な感覺的な形と色とを淡い夢のやうに投げて居ります。

先生の出發點が大厦高樓でなく、棟低き質素の家であつたことは、何となく最初から平民的を象徴して居ります。私はこの邊を大へん面白いと思ひます。若し隔絶した位置の人であつたならば、多少心理狀態も異るでせうし、世相を觀る上にも變つて來るでせうが、先生の如きは理論のある所は十分これを採用し、不合理の所は飽くまでも妥協しないと云ふ氣分が、おのづから起り易いのは當然の事であります。日常の生活に於ても、その思想に於ても、自ら治める自由を持つて居り、また自由に働かなければならなくされて居た事は、神の御心であつたと思ひます。キリストにしてもその搖籃の記事は馬槽によつて始まつて居り、日本の厩戸皇子なども母后が馬宮のところへ行かれた時、お生れになつたからその名をつけられたと申すことです。いづれにしてもナショナル・リーダーとして社會に立つ人は、妙な攝理に由るのが通例のやうであります。さりとて今も昔もまるで金錢と云ふ事に緣が缺けてゐては、學問の修業などは出來るものではありません。元龜天正の頃でさへ、甲斐の國の銀山を吾が領土に入れて軍事的成功に必要な財源を供給せしめ、自己の强大と光輝とに資せしめんといふ心理狀態が、當時の英雄をして甲駿の地を爭はしめた譯です。また太閤が大坂を見立てたのも、日本の要港として蓄

積した富の偉大なものに駕して、これらを政治上の目的に供用して、天下の政治と商業の權力とを握らうとした所存であつたのです。人間開發の原則はどうしても經濟と離れるわけに參りません。

先生の情操が完全に涵養せられ、また有らゆる欲求を總合し統一して、最後の意味と價値とを與へた強烈な信仰も。還元すれば、第一、家庭に相當金錢の餘裕のあつた所から、潑溂たる意氣と決心とが起り、隨つて個性に醒めたのであつて、次第に人道の存在を強調し、而して新しい愛國心が萠芽し、新しい人生觀が擡頭して來たのです。第二、先生の遺傳が良かつた事で、而かもこの先天的な不動的な存在が、感情的にも心理的にも強い自信を惹き起さしめ、親の踏んだ道よりも大きく賢明でなければならぬと云ふ理想に目ざめ、一層、その内容を擴充したのであります。第三、自己の周圍の境遇、即ち環境が非常に都合がよかつた事、謂はゞ三拍子揃つてゐたのですから、その運命を十分に開拓することが出來たのであります。

さて、小祿の新島家に、どうして金錢の融通が利いたかと云ふに、先生の祖父辨治と云ふが俠客肌で、小者の社會からは板倉の親方と云はれた人で、人足の出入れや周旋などのコンミッ

ションで大分經濟上、都合がよかつたのです。一體、家格の良い所では結局、理想があるにしても嚴重に制肘せられ、空虚な特權を樂しむ以外に何等の動きが取れませんけれども、新島家のやうな新興の家では、別個の倫理的動因から生活を振興し發展せしむる事が出來ます。さうしてそれが復活への途であると信じた以上、全く自己の衝動であるにしても、これが必至のプログラムであると云ふ意氣をもつて、歩一歩立案者の主觀のままにその基礎を築き上げます。且つ之を社會のセンチメートルに順應さして行くことが出來ます。かうした事は先生の活動略取を好むやうになり、或ひはじつとして居られない力が充たされたわけです。一例を擧ぐれば、その頃外國語を研究するなどと云へば異端者扱ひにされたに係らず、英語の辭書が十五兩、今の金子に換算すれば大略十倍位にも當るでせうが、先生のために買はれたさうですから、先生の敏感多角的の性根と照應して、家庭教育の餘裕のあつた事がわかります。併し、何さま當時祖父辨治の給料が五兩二歩三人扶持、父民治が五兩二人扶持でありましたから、二人の年給をそつくり充ててもまだ五兩ばかり不足するので、御納戸に事實を具申して、その十五兩を拜借したとのことです。これは私が關島老人から先生の父の直話として聞いたことであります。

如何に經濟上に餘裕があつても、境遇が許さなければ回心の機縁に觸れる事は出來ません。幸ひにも、名君が上に在つて、先生を指導啓發いたされました。即ち板倉伊豫守勝明甘雨公と申す方です。さすがは名君、常套の倫理を超越して、孺子教ふべしといふ意氣込みで先生を鞭韃いたしました。さて日々板倉公に伺候する人々は、何れも巨匠雷名の大家でありました。即ち蘭學の杉田玄甫同じく玄端、儒者では江戸に於ては林檉宇、古賀洞庵、南溟、浪華にては篠崎弼、後藤機、公長等でありました。また添川廉齋を聘し、大山融齋、山田飛を招き、鋭意庶政を釐革し、民業を興隆いたしました。私の所持してゐる印章の中に、君公から山田氏に下賜されたのは「山田飛爲予司牧、節儉以律身」にして、添川氏のは、「清廉傳家」でありました。かういふ風に、君臣時に逢ひ諫鼓庭に鳴ると云つた文王の治を實現して居りました。新島先生はこの際お茶坊主、即ち今日の諸官省の給仕格で、始終杯盤の間に周旋し、送迎に忙殺され、自然名士に接するの機會が多く、時には雄辯を聞き、時には藝術の氣分に身心を游離さすこともあつたのです。

書癡歌　三十六韻　肖像畫上　　大山融齋

天生書痴翁、置之東湖東、磊落殆殊衆、豪俠孰得同、十五志於道、蚤游藝園中、
自想滄海珠、秘光沈靄江、至寶有時見、志士莫一逢、晩成藏大器、天爵存鄙躬、
道是濟世業、文章不尙空、經史收方寸、善言服膺胸、乾乾日勉彊、功名早晩通、
壯志浮雲上、高氣壓巒峰、不學敵一人、願抗天下雄、見聞伊物說、嘔噦病腸蟲、
熟思蚊虻俗、下視衆愚蒙、目睫不得辨、玆以獨自降、揮手辭鄕國、發憤游上邦、
溫溫君子質、洋洋王都風、交聘于賢良、賓事於侯公、業隨日月盛、人知道學崇、
豈圖三顧幣、遇一代文宗、經義博且大、詞章富亦工、奉命司教授、陪從侍后宮、
講學移士風、潤澤及村童、宜哉上好善、下臣盡其忠、城南又城北、讀書聲常充、
十年勤勞兒、廿年有成功、屈仲如尺蠖、老癡一生終、甲寅六十一、暴疾背發癰、
歳餘病牀臥、掛冠易形容、功成名已遂、埋首讀書窓、洗眼鄒魯淵、漱口濂洛瀧、
練磨盡精力、文雅拆正衷、豪膽猶未衰、稍覺識見窮、輕薄膚受輩、聖德向誰訟、
花鳥報春夏、月雪好秋冬、朝歌四時景、夕醉三杯醲、腹無毫髮汚、心廣自豐也。

又

三才道廣一無知、腹裏空虛老益癡、浮世從來夢中夢、歡憂苦樂自隨時。

世は太平無事の時にも、君公を圍繞する空氣の中には西洋の科學や哲學の思想すべての知的生活に、體達と人格と實在とを十分に供給すべき認識理解の世界が、さながら行爲創造の世界として經驗されるやうになりました。當時君側の儒者添川廉齋が、一道學先生であつたと思ひきや、實際政治家であり、世界の大勢に通じて居たことは事實であります。而して經世家たる第一資格に於て必要なる蘭學を君公に吹き込みました。勿論氏自身としても亢亢蘭書を繙いたことは、氏の詩によつて承知されます。

和戰紛紛孰是非、且看人事與天時、群鄉讜議雖尤善、當路苦辛容不思、
古法今來異其俗、冬裘夏葛有攸宜、書窻亢々繙蠻籍、狂使吾曹中夜悲。

かうした空氣は進歩と發達とを生命とする先生に一層奔放の氣勢をあをり、命を賭けても蘭學の得喪を以て窮極の成敗の岐るる所とする迄に思ひを寄せさせました。

いづれの世でも歴史は聰明者の獨占であり、宇宙は聰明者の舞臺であります。結局、思想力ある者が斷じて宇宙の帝位に立つのであります。鍋島閑叟公や、島津齋彬公、毛利敬親公、加州の前田家など、諸侯の牛耳を執つてゐた人々は、夙に西洋の文化を理解して居つたのです。故に熱心に科學の研究を奬勵し、造船所を興し、或ひは軍事を研究するなど、悉く文化の施設を致しました。また王政維新の大業を成就した雲上の方々に於かれても、夙に文化に理解と共鳴の在つたことは疑ひありません。安中藩は新たに抱へた儒者、山田飛によつて新思想の脈絡がつきました。この人は近藤重藏と親交あり、近藤氏は即ち幕府紅葉山文庫の長で、大鹽平八郎をその助手としてゐたとの事であります。當時、長崎に舶來した圖書は一旦その文庫に傳送させ、此所で近藤や大鹽の檢閲を經て、その治安に妨害のものは悉く燒き棄てたと云ふことです。この際、漢譯の聖書が荷詰めとなつて來たものださうで、これが近藤等の關係ある人々には何時となく分與されたものであります。斯くして早くから聖書が安中藩には這入つたのであります。

翻つて近藤重造を見ると、眼を西洋の新書に曬すので時勢を透察し、幕府の政治が既に暗愁

の色を浮べてをり、外交が曖昧であつたので、自ら樺太に日本の國旗を樹て、占領の正式手續を執行したのであります。かうした氣慨は味方には深く尊重されながらも、彼の直接行動には強い反感を與へ、終ひに政敵に呪咀されました。山田先生もエトロフまで探險致しました。

惠吐呂府三十六詠之一　　山田　飛

神洲地盡北天涯、望接魯西氷海陲、
秋風毎導春風到、七月月初櫻發花。

斯かる進歩的悲壯性を帶びた人々の活動に培はれて、開國進取の曙光が見え始めました。私が所持して居る物の中に、大鹽平八郎の近藤重造に宛てた書面があります。これは山田先生から惠與されたものです。これらの消息は安中藩と新思想家との往來を語るものと見られます。先生が興奮を荒立たせ、良心にも刑罰を科すると云ふ時代に、荊軻が「風蕭々兮易水寒、壯士一去復不還」と云つた幻影を趁うて進んだのも、彼等によつて暗示を受けたのであります。

先生は甘雨公の意圖を諒として、それに順應した陣を張り、形勢を按じて歩武を進めましたその裏面にはたとひ、策畧が藏められてあつたにしても、其處に先生一流の打算の精確と必勝

よ出て打つに戰逐鹿局、結も成就したのよく首尾が走が脱の計畫が樹てられてありました。かの

れ自然に鍛練さから、關係が閙氣のつた雰圍續して居常に君公を圍が、うといふ才幹經歷の新人物

て、一種の冴えた腕を揮うたのであります。

爲官應閣老娶妻應江西。

又

男兒志願是功名一醉紅裙亦有情。

余愛楊州狂杜牧能評花月又談兵。

かういふ風の趨勢ですから、先生に又他の一面のあつたことが明かです。成る程、先生は狭斜の歌舞であれ、伊達であれ、隨分人氣の舞臺を華かに引き立ててゐたのです。さうして確かに蜃氣樓の一面がありました。結局、複雜なる心の全性格を統一して眞面目に嚴格になつたのも、實はかうした本能の忌憚なき解剖から反省してきたのであつて、果して自己の生活が忠實であるや否やと云ふ問題に逢着した時が、別人のやうになつた時分で、そこから生活を本質的に吟味するやうになつたのであります。

私が先生を觀てその過去の出來事に最も多く興味を感ずるのは、過去は未來に對する測量機であるからです。さうして先生の心理の詳細を說くに方つて、一層濃厚に、一層端的に、先生の先祖の人々が私の眼の前に密雲のやうに凝り集つて來るのを感じます。かの聰明の子に不肖の親があり、英雄の子に豚兒が生れるなどは、唯一つの波瀾に過ぎずして、實は驚くべき眞理が含まれてをるのであります。隨つてその祖先の思索行爲の跡を點檢すれば、據つて來る先生の色彩が目睹されます。

新島先生の祖先は、確かに優越の質を蘊んでゐた人に相違ありません。併し何處の產であつたか判然致しませんが、寶暦年間卽ち八代將軍の頃、上方から中仙道を下つて、終ひに上州安中藩の領分なる鄕原村に土着した神官であります。苔蒸した石碑を撫でて見れば、

安永四未五月

天 夏雲道香

寛政八丙辰七月二十日

秋月道可法士

千代宮媼神子 位

とあり、普通のとは異つて居ります。それぞれに憑つて繋がる所のものを見ると、先祖の人人がすべて無準備でなかつたことが承知されます。私の同鄕なる上杉神官に尋ねましたら、修驗者であると答へました。修驗者とは山伏で、京都の聖護院の宮から許可を受けるものださうです。抑もこの先祖の戒名天夏雲道香は暗示に富んだ言葉で、天夏にして雲の道香るの意であります。單語に賦せられた意義は色々に解釋されますが、實際に或る命題を構成するものとすれば、その墓所が白雲山妙義と指呼の裡に相對して居る所から、最後の冠冕を飾る墓誌としたのか、或ひは逝去したのが五月であり、而かも五月雨の妙義が最も詩美の形相である所から槪念的に聯結したのか、或ひはまた、抽象的に彼が眞理を追求する想念が無限に旺盛な夏の雲の如くあつたのに應じたのか、いづれにしても徹頭徹尾、彼の胸奧に描いてゐた生々した畫圖であります。

さて、鄕原村に落付いてから、姓を中島と名乘り、二三代此處で過ごしました。墓は鄕原村の壽昌寺に屬した地にあります。文化三寅三月、新島先生の先祖が調印致しました「宗門人別改帳」と云ふのがありますが、當時宗教に對する藩政の一斑を知ることが出來ますから、左に

記載いたします。

起　誓　文　檀家五十五人　壽　昌　寺

一、従御公儀被仰出候御制禁、并寺々より之條目之通、可相守之旨奉畏候。右百姓中名之上に印形捺申分、前々人別帳面印形仕上候通、拙僧共旦那に而御坐候。若脇より切支丹宗門と申者御座候はゞ、何方迄も罷出急度可申分事。

一、前々被仰渡候通、浪人一切抱置申間敷候。不都合之者御座候はゞ、御役所申遣御指圖次第可仕事。

右之趣堅相守可申候。仍印形如件。

海保左次馬殿

野村傳右衛門殿

小林市郎殿

右は僧侶と檀家と連帯にて郡奉行に届け出でたものであります。また檀家から寺へ差し出した誓文は次の如くであります。

一、切支丹宗門は御制禁に付、年々御穿鑿五人組中間として無油斷吟味仕候處、不審成者無御座候。宗門之儀者、帳面印形之通に御座候事。

一、切支丹類族之者無御座候。若身持變り不審成者御座候はゞ、安中御奉行所申上可く候。其通不仕組合罷在候はゞ、五人組者不及申上、庄屋組頭共急度御處分可被仰付候也。

さて郷原村に土着してから、代々寺子屋を開き、村の子供等の手習ひの師匠を致し、傍ら生花などを教へてをりました。明治四十四年の夏、私は儘田君を郷原村に訪ねました。氏は新島家の先祖の筆子の一人であります。氏の案内で先生の先祖の菩提寺や屋敷跡や過去帳などを拜見しました。既に上方の産ですから、多少の教養があつたと見え、趣味嗜好も普通の人とは違つて、餘程デリケートの觀賞力がありました。儘田君の話に、或る時師匠が筆子の一人に、碓氷川某所の水車の許に行き、其處の水を汲み來れと命じたところ、弟子の思ふやう、同じ水に違ひがあるものかと、つひ近くの水を持ち返つた。軈て茶に點じ一と飲みしてこれはいかぬ、水が異つて居ると云つたさうです。これらは相應な理由と知惠とが含まれて居るので、無法な無理解な遣り方ではありません。察するに、事實は事實として的確にそれを認識すると共に、

彼等の道徳に缺陷の含まれたことを、親切に匡正したのであらうと思ひます。彼等の淺薄な遣り方が、いはば漫然物理的に混合されてゐた時に、師匠の方は化學的に融和してゐたと見る可きであります。

また先祖が新宅を出したといふ宅地の跡を見ましたが、本家新宅いづれも等面積で、「文政」と刻した稻荷石で境界をつけてありました。私の鄕里の慣習としては、通例本家六分新宅四分の割合ひであるのに、この家の平等に分けられてあるなど、既にデモクラシーの精神が見えてゐます。さて新島先生の祖父辨治といふ人が安中藩に出かけた後は、養子に家を繼がせ、床屋を業としてをりましたが、維新前後から線香屋に業を替へました。

第二章

新島先生の祖父辨治と云ふ人は、身の丈五尺二三寸の男で、横へどつしりとした、眼の鋭い、口の引緊まつた、慓悍性の方だつたさうです。その威力の緊張さ加減が、私には目の前に浮び出てゐます。元來が活潑な氣象の人でしたから、先代の糟粕を嘗めて、村の若衆とそりを合はすやうな譯には到底參りません。ひとつ技倆一杯の芝居を打つて見たいと云ふ一念に驅られて鄕原村を飛び出し、安中屋敷に仲間奉公に參つたのです。その行き方がまた餘程色彩に富んだ一種の芝居です。本姓中島を新島と新しい看板に出直して、先づ新規の家を立てるといふ仕組みは、太閤が羽柴といふ苗字を手製したのに似通つて、仲間時代の草履取りの日吉丸を思ひ出さゞるを得ません。かうした清新な意氣でその方の用意を急ぎ、從つて創造能率の卓越を發揮するために、また生の經濟の最大原則を遂行するために切實に意識した進潮は、一種の社會的革命の豫感を有する個性の新理想を喚起したものですから、當時としては社會から手酷い批難

攻撃を受けたのであります。また一方には祖先繼承の鄕土を捨てるのであるから、檀那寺からも苦情が出ました。それにも係らず、辨治が非常な決心を以て斷行したと云ふことは、これが隔世的遺傳となつて先生の特殊な血液を染め、雄魂毅魄が胸底に旺湧して來たわけで、脚は地上の一點に立つ自由と、地上の各點に移住する自由とを有するものである、との暗示を得たのであります。

さて、忠孝や愛國を鄕土とか田園とかに局限して考へた時代には、その反對に、たとへ世間から辨治は一種の錯覺を持つ人のやうに取あつかわれたれども、用捨未練なく鄕里を棄てゝ、「人」といふ言葉は絕體の徵象であるとまで感じた行き方は、辨治自身の發動伸達ではありながらも、また一動機としてはその背景に妻のおくわと云ふ一點紅が隱れて居つた事を、どうしても看過するわけには參りません。實に辨治が日吉丸的道行きに墨潤の精妙を極めてをるのはこの妻おくわさんであります。恰かも山内一豐の妻で、これも鏡底に大枚五兩の小判を深く秘藏して居つたさうでしたが、この時こそとそれをすつかり辨治に與へて竹光の脇差を用意させ、さうして晴れの舞臺へと門立たせましたのであります。荒寥を極めた沈靜の自然に圍繞せら

れた郷原の里に、錦繪のやうな此の華やかさを思ひ浮べさせます。

さて辨治が乾燥無味なる郷土を捨てゝやがて交錯して演ぜられたる悲劇喜劇の數を描ける彼の社會生活の斷層を當年板倉家の儒官山田飛が

氣呑三字內一眼無人　駕馭群雄幾屈伸

昨日爲レ奴執レ履手　掃除六十六州塵

と豐公を詠史して彼に送た愉快の詩があります。如何にも辨治の劇的氣分を釋明して居る絕好の讚であります。

辨治の先祖の葬られてゐる郷原の高臺から妙義山を見れば、ブルーの山にコバルトの山態容姿、全く畵中のものです。脚下に流るゝ碓氷川は日夜滔々として、永遠を趁ふが如き趣きがあります。人間の子も此の詩興の中に在つては、藝術の琴線に觸れずして止まざるべきであります。里の青年等は村相撲を取り、鼻歌うなるその間に辨治は白雲佇迷する妙義山を仰ぎ、岩を噬んで飛沫となる溪流を臨んで、限りなき命と永遠の性とを懷ひ、いつしか藝術の人となつて既に雅號を曲江と稱し、俳段に頭を高く星の世界に走せ、または曉の菫の色に思ひを述ぶるや

うになりましたこの辨治が郷里の附近は昔から「横對すみれ」と云ふ名所で、歌枕などにも載つてをります。

辨治は丙午の生れですから、妻君には運が拙いと常にこぼして居たさうですが、死別生別十八人も代つたさうで、最後の妻は二十人目に柳原藩の高橋家から參りましたが、これも不縁に終りました。先生の父民治を產んだ辨治の妻は、父忠七の後妻の連れ子でおくわと申す方でした。後に民治はこの母の名を自分の長女につけたのです。民治を生んで間もなく亡くなりましたから里子に出し、自分は三十一歳の血氣盛りに安中藩に仲間奉公に參つたのです。さうしてまづ、妻のおくわさんの里なる安中町大和屋に落ち付き、傳手を求めて屋敷に這入りました。天保十亥十二月二十五日、徒士格に取立てられ、初めて板倉の臣籍に加はつたわけであります。その大和屋の娘さんが私が、未だ安中に居た頃、同町の久保庭家に居ましたが、新島と云ふ姓は本姓中島と大和屋の新野とを、一字づゝ取合せて造つたのだと話されました。參考としてこゝに述べて置きます。

さて、屋敷奉公は仲間から始まり足輕と進むのです。足輕は定祿を給せられますから士の籍

に入りますが、仲間は臨時日傭の格で進退出入極めて自由です。その當時松本氏と云ふのがありました。今日でもその家は安中で相當に暮らしてゐますが、當代の松本君の話によれば、氏の養父が萬端辨治を世話したさうで、本人もこの事は餘程感謝して居つたさうです。

徳川幕府の施政方針が圖らずも元祿、享保の文化を催し、太平を致したものですから、富の勢力が武士の勢力に更代せんとする傾向を表はしました。富の進歩は一方に武家の失墜を意味する事になり、社會的勢力として富の侵略となり、社會の直覺的本能は武士に一種無能力な異名を與へて、三貧士などと云ふ嘲笑の語が出來、從來侮蔑の眼をもつて商人を観た哲學は影を潜めました。封建制に於ては、上は諸侯から下は百姓町人に至るまで、世襲的ですけれども、その創業の人物は萬石は萬石相應の力量があり、百石は百石だけの技倆がありますから、やはり、一種のデモクラチックの社會であつたのです。それが制度の弊が生じて、段々人を化石にしたのであります。然るに辨治が安中へ仲間奉公に出ました時が、恰かも時代變遷の際でしたから、調法がられること夥しく、新島辨治と云ふ名は寧ろ智勇辨力の代名詞となつて、とん〱拍子に進路を啓發したのであります。

儼然たる武士の外貌は存してゐても、恰かも大厦高樓に白蟻の喰ひ入つたと同じく、太平に慣れた武士はたゞ一種の體裁にばかり捉はれてゐましたから、實力の手腕家は封建の社會にあつても身を立てるのに難くはなかつたのです。辨治の技倆は忽ち認められて安中に奉公後、間もなく江戸屋敷に勤務更へになりました。時勢が人を造るか、人が時勢を造るか、新島家は前途洋々たる春の海に漕ぎ出でた一艘の舟でありました。

此處に辨治が安中を出發して江戸表へ參ります態裁は、恰かもナザレのヨセフが妻のマリヤとキリストを驢馬に乘せて、エジプトへ避難した有樣と、時の千古を隔てたゞけで、同じ哀史の一齣であります。即ち駄馬を傭うて片荷に妻の忘れ片身の民治を、片荷に屑紙など包んだ風呂敷を荷付けて、中仙道を江戸へと上つたさうで、その時の哀れな有樣を折々松本君などに話してゐたさうです。やがてこの松本君も辨治の後を追うて江戸勤めとなり、その家に世話になる事になりました。辨治が先年鄉原から安中に出ました節、松本君の養父に一方ならぬ世話になつたので、おのづから報恩の時節が到來したわけで、辨治も非常に松本君を優待したとの事でした。その頃の新島家は世帶向きも良くなり、江戸住ひの氣分も見えてゐたさうです。

當時、板倉藩に有名な大目付尾崎直紀と云ふがありました。役目が今で云ふ警視總監といつた格でしたから、飛ぶ鳥も落す勢ひでした。板倉家中の名家であります。かの「安中宗三郎」といふ小説の中に家老尾崎とあるは、この尾崎家を諷したとの事で、先づ安中と云へば、直に尾崎を聯想さする程の家柄でありました。この尾崎直紀は、中々世話に砕けた方で、後には安中藩の名家老職となりました。辨治の腹のある頭の鋭い人格を見拔いて、身分の高下にも拘はらず、意氣相投じて好漢おのづから好漢を識ると云ふ風に觸接してゐました。

さて辨治は次第に江戸市中の親方株に顔が賣れて來て、彼の神田和泉橋の人足周旋業の人屋五平や、鹿島屋清兵衛、また神田長谷川町と町名にまで付けられた長谷川與八等の顔役連と親交を結びました。本篇の主人公新島先生の產衣は中々立派な品で、家老格の子弟でなければ用ゐぬ程のものですが、それは人屋五平の贈り物だつたさうです。これらの社會では單に板倉の親方と呼んだ方が分りが早かつたさうで、吉原の全盛遊びも數回やり、替り目毎の芝居の總見もしたもので、田之助は辨治の贔屓役者だつたとの事です。辨治が顔役振りを如何に發揮したかは、或る時板倉上屋敷の前の本多家の犬と板倉家の犬とが喧嘩をして、談判が餘程難しくな

つて來て、上役の出たのではどうしても納まりが付きません、そこで辨治が出ますと、忽ち示談が成立ち穩便に解決したと云ふことでも、知ることが出來ます。斯くの如く辨治の行動は、人の注意の及ばない處に事物の細部を注視し、水をも漏らさぬ遣り方で、その上氣象が凛烈の快男子でありましたから、天保七年、板倉伊豫守が大阪加番の際、その隨行を命ぜられました。その時の餞別を贈られたる人名控へを見ると、同藩士は僅少で、他は悉く町家若しくは顔役ばかりであります。かうした事は結局、辨治の信頼が異彩を放つて居る事を證明したものであります。

大阪へ出立に付餞別到來控

一金壹歩　矢野七右衛門

一紺足袋二　橋本良助

一同　一　伊多木陸三郎

同　てつ

一小菊七帖
金壹朱　宇津木清六

一煙草、砂糖　坂本榮松

一煙草二玉　きく堂

一煙草入筒　濱地屋東作

一下煙草入一
一單物地　大吉屋武氏衛

一小菊二十帖　小出安兵衛

一小菊十帖　油胴紙　乘物屋太郎右衛門
一金百疋　松川屋八郎兵衛
一金百疋　浦和より
一砂糖一袋　萩原東平
一玉子三十二　本屋市五郎
一扇子一對　手拭二　吸江寺
一煙草二角　津金長元
一小菊五帖　風呂敷一　中野弐次郎様
一煙草一　紺足袋一　小越彦藏
一煙草角一　伊多木米作
一金壹朱　尾崎千吉
一金弐朱　風呂敷一　田邊周助様
一小菊二　手拭一　高橋利右衛門
一髪附二すき一歯磨一　深川治五郎
一扇　團二　小簑庵

一小菊五　今井たき
一菓子打でんぶ一　坂本榮譽
一金平糖　風呂敷一　正阿彌又三郎
一精ご十　加藤善藏
一積眞線一　金井清兵衛
一金平糖　岩井粂次郎
一三種漬一箱　足袋二　三木戸平
一手拭四　茶二　日付文藏
一紺足袋一　小菊五　木村平助
一煙草一玉　内山藤藏
一生姜糖　浦江里次郎
一煙草角一　大坂屋平助
一胡椒入金米糖一　上州や利七
一足袋一　手拭一　山城屋多七
一唐紗羅紗　風呂敷一　武藏屋次郎右衛門
一小菊十帖　平樂半六
一小菊十帖　さかえや幸右衛門

一小菊　五　　加賀屋文右衛門
一砂糖　一曲小　　中村良蔵
一浴衣地一反　金貳兩　　加納屋吉兵衛
一手拭　二　　越後屋
一金平糖　　指物や忠吉
一風呂敷　一　　松川や勘右衛門
以上

備考　浦和は先生の母の里
吸江寺は在京藩士菩提寺
右挨拶として辨治より返禮したる控

一箱入猪口　十　　中村良蔵
岡田耕助を禮に遣はす
一茶はん十　はし十　　指物や忠吉
一人形狀箱　一　　平樂半六
一茶はん十　はし十　　上州屋利七

一こんぶ二　はし　　浦江里次郎
一茶わん十　こんぶ　　内山藤蔵
一茶碗十　こんぶ　茶たんい　人形　　目付文蔵
一人形一湯呑一　こんぶ　三組盃物　はし櫛一　　三木戸平
一大盃茶碗三　はし梅皮　　金井清兵衛
一こんぶ茶碗　五　　加藤吉蔵
一酒道具一式　　坂本榮譽
一人形一箱　こんぶ　　今井たき
一山水茶碗十　はし十　　深川治五郎
一茶わん十　はし　十　　高橋利右衛門
一吸物椀　はし　二十　　四邊周助
一人形　こんぶ　水入一　　尾崎千吉

一茶わん 十　こんぶ一 盃 一　小越藤藏
一座ぶとん　盃 こんぶ　中野武次郎
一眞鍮鍋　こんぶ 湯呑一　津金長元
一振出臺一こんぶ一　さけかこ 一　吸江寺
一はしたい 一　茶わん十お六櫛 一　本屋市五郎
一茶わん十 はし十　萩原東平
一錫皿十 はし十　百人一首 一部　浦和
一吸物わん十はし十　小出安兵衛
一茶 碗 十　濟地屋東作
一大盃さし込 一　こんぶ 振出臺　菊堂

一三組蓋ものはし　火箸 櫛一茶碗し 十　宇津木清六
一人形ちりれんげ　こんぶ 盃 一　伊多木ふさどの
一吸物椀五 人形 一　橋本良助
一小廣蓋 狀箱　矢野七右衛門
一錫皿十 蓋もの 一　大黒屋武兵衛
一摺 物 二　小簑庵
一人形一 はし 二十　花かんざし 二　横井様
一菓子盃　たゝみいわし　屋根屋岡本傳次
一同 上　大工庄助
一三組丼 こんぶ　小松忠八
一茶 碗 十　中村や菊次

以上

辨治の十八番は柳踊りと云ふのであつたさうです。また舞臺に於ける役者の情緒的表現や臺詞に對して、一種の批評眼を持つて居りました。「天川屋儀平は女ぢやごんせん」は、むしろ「男

でごんす」と云つた方が端的に人の肺腑を衝くのであると、員屓役者に忠告したさうです。彼が蒼勁の體軀を搖がして觀客席から最屓役者に聲をかける時は、舞臺が水を打つたやうになつたと云ふ事です。辨治は機會と便宜とが許せば、獨特の清新の創意と放膽とを何處までも生地の儘に猛烈に實現して行きます。その鋭敏なる感受性は到底、自己一人の狹い天地に跼蹐して居るやうな人でなく、あらゆる問題を自己の自覺の上に立てゝ、すべてのものゝ中に自己の生命を發現し、すべてのものを自己の中に生かします。辨治はどうしても自己を社會から切り離して、その紛雜から逃避する譯には行かぬものである事を知り、たゞ邁往直進することによつてのみ、全圓の生活に達し得るといふ哲理を覺りました。故に實利的、物質的生活に深化し、徹底し、隨つて眞と善と美とを憬仰し、鑑賞する生活に達しました。

辨治が潑剌たる第一の生活意志は、直接間接に先生に深刻な影響を及ぼしました。「新」ために作られた新島なら生命がなかつたものが、必然的に生れた「新」であつたから、辨治の生活に生命があり、先生と云ふ非常の傑作が出來たのであります。天才は常に求めずして新しき何ものかを提供します。その思想にか、その美にか、その行動にか、「新」は實に天才の看板であ

ります。先生の思想や生活は、前代のそれと異つた潤澤と豐富のものでありますが、辨治の旺盛の活動を目撃してゐた先生ば、幼年時代から常に目前の切迫した必要に向つて氣息をつぐ間もない程に奮闘して來た。それが取りも直さず辨治その儘の氣象であります。

先生が生活の苗床の中に於て生活の優秀な空氣を呼吸してゐた事は、先生が目前の必要事以外に目を轉ずることを得たわけであります。また先生が感情と理知との方面に偏倚してゐた少年時代に生活の根底となる實利を略取する心懸けや、また壯大新奇な想像や潑溂を昂奮さすやうなお伽噺が、大空を緩く流るゝ詩のやうな夢幻境に先生を導きました。これが先生の性格の何處かに後まで此の神秘が持續されてゐた動因であつたらうと思ひます。若し先生にかうした指導者がなく、一途に強制的にのみ注入されたものであつたならば、先生はどうして個性を重んずる自主的獨創的人格の人になり得たでありませう。若しまた先生が頭の善いのに任せて論理を辿つたならば、恐くは嗜好も感情も意志も反つて皆な打ち壞さなければならなかつたでありませう。人が論理的に確實であるものを欲し、論理的に明白ならんとすれば、一日も生存する事が出來ないでありませう。これを日常生活の場合に考へてみても、朝起きてから寢るまで、

理性の滿足を求めようとしたならば、どれくらゐ不愉快且つ窮屈の思ひばかりをして居なければならないでありませう。結局、論理的にのみ進むことは、自滅の外ない事になります。其處に或る不合理のもの、即ち理性以上の或るものが加味されて、これらが初めて健全なものとなるのであります。人間にはお伽噺の世界がなくてならぬわけであります。お伽噺の世界は神秘の世界であります。神秘を認むる人は、一つの不分明の事を許容して、萬事を明白ならしむるのであります。

先生も世間の子供と同じやうに、幼年時代には次ぎから次ぎへと新しく玩具を要求したり、樂しく跳ね廻りたり、またお伽噺の世界にも住んだのであります。さうして辨治の膝は先生のためには、最初の敎壇でありました。先生のやうな論理の明晰を欲する頭も、かうした機會に神秘を認め、一つの不分明の事を許容して萬事を明白ならしむると云ふ、大切の學問を知らず識らずの間に致しました、とにかく辨治が底力のある聲で、しかも明るい調子で自分の體驗した事や、または觀照を經た事を話し出す時に、如何なる平凡の事にも生命があつて、幼年の先生は殆んど無批判、盲目的に歡迎じたのでありました。左記の物語りは先生に辨治が毎晩繰返し

て讀まれたものであります。

破天連由來之事

去程に、「だかん」大臣を始め諸臣評定ありけるは、今日本へ渡すべき行法の勝れたる者は、何國にあらんと評定しける。左大臣申けるは、是より三十里西に切支丹と云ふ國あり、さて申けるは、臣道師の爲に來る、南蠻王の使なり。大王貴僧を都に召さる御たのみの事の有るに就て、臣今迎ひに參りぬ。早々都へ登り給へとありければ、宇留岸聞いて、かゝる山中の隱遁者に何をお賴みあるべきかと云へば、吳我されば貴僧の道行勝させ給ふこと隱れなければ、日本へ渡し、日本人の心をはからひ、行法をひろめさせせんとの事なりといへば、宇留岸聞いて、我不才の身なり、渡りて弘法すべき智慧なし。歸りて此由大王へ奏し給へと云ひ捨て、かきけす樣に失せにけり。吳我大臣あきれはて、此儘に歸らんも本意なしと、此處彼處と尋ぬる處に、四方八面黑雲おひ、行先も見えかぬれば、詮方もなく南蠻の方へ歸り、此旨を奏しける。「ごかん」が曰く、是は破天沖饗應のうすき故、あざむくかと思ひ、かゝる事も天輪岸山と云ふ處なり。此國に行法の勝れたる道人二人あり。一人は宇留岸破天連と云ふ。一人は富羅天破天連

と云ふ。皆僧形なり。秘術を行ひ、其の身自由自在にして、虚空に登り、天にも寄らず、地にもつかず、雨を降らし、風を起す事之術を得たる故に、天を破り、雲に身を連ぬる事の自在を得たるとて、天連と云ふ。是破天連宗門の根本也。又伊留滿と云ふ者あり。是弟子の如くなる者なり。此外道行を以て日本人をなつけなは、自ら大望を成就し給はんと奏すれば、大王大きに悦び、然らば其天輪岸へ誰をか遣はすべしとありければ、「ぐかん」申けるは、某が悴呉我大臣を遣はすべしと、終に呉我に命じて切支丹國天輪岸へ赴きける。彼岸に至りて彼方此方と尋ねける所に、宇留岸破天連に行合けり。呉我大臣詞を正しうして。今一度金銀糸わたを澤山に遣はすべし。重ねて饗應せば參らぬべきにあらずとて、種々の珍物寶物を差遣す。又呉我大臣を遣はしけり。さて再度の使歸り、宇留岸は富羅天に申けるは、南蠻大王より呉我大臣を以て某を都へ呼寄せ、日本へ渡し、弘法させんとの勅命也。我れ考ふなるに、彼の國の大王は欲深き故、日本の人の心をはからひ、攻取るべきとの工みならん。然るに此の運氣を考ふるに殊の外淸くして、某が術を以てはからひ叶ひ難し。是に依て辭退してさりぬと云ふ。富羅天聞いて、尤の事なり。此上いく度迎ひに來るといへとも、行く事なかれと、互ひに岩屋に入りぬ。呉我大臣重ねて種々の土產を持參り、宇留岸が岩屋に至り、謹んで申けるは、大王是非迎ひ來れとの勅命也。此品々貴僧へ給はる土產なりと、色々を取出し、宇留岸が前に積置けり。宇留岸之を見て申けるやうに、我れ

は山中之隱者なれは、如此の物に眼をつける者にあらす。人間の欲深きとは相違なり。いまわしいいまわしと云ひて、かきけすやうに失せにけり。大臣力及はす、又都に歸りて、右の樣子を具に奏したりける。大王も「ごかん」も、さては彼は賢者なり、此上は某參るべしとて、父子もろ共に打連れ、彼の岩屋に至り、宇留岸に尋ねあい、禮義を正し申けるは、普天の下率土の中、何れか王土にあらずやと理をつくして申ければ、宇留岸良久しく思案し、さらば勅に從ひ參るべし。此岩屋に我友あり、暇乞して參るべし暫く待ち給ふべしとて、行方知れず失せにけり。「ごかん」父子は、若しや欺くかと思へとも、詞に任かせ待ち居けり。扨、宇留岸は富羅天が岩屋に至り、大王より兩三度迄使來り、兩度は辭退せしかとも、左將軍直に參り、理をせめて招く故に、力及ばず、今は勅に從ひ參るべし。定めて四國の人の感じたる如く、日本へ渡り、其の通りいたせとの事と見えたり。日本へ渡り、首尾調はば、書翰を差遣はすべし。其の時は共に日本へ渡り、我に力を添へて、大王の望を達し給ふ可しと、暇乞して、左大臣父子の待ち居たる岩屋へ歸りけり。父子大に悅び、用意の乘物に打乘りて、南蠻の都に歸りける。

去程に、宇留岸都に着きしかは、大王悅喜不斜、宇留岸にのたまふ樣は、此度貴僧を賴み、日本へ渡し、破天連之法をひろめ日。本人を歸伏させ、其後大軍を以て日本を責め從かひ、我領國となすべき望なり。彼國は小國なりといへとも、神國仁義之國なれば、中々通常の事にては歸伏せまじ、隨分行法を

以て人をなつけ給ふべし。先日本へ捧物を遣はすべしとて、七種の寶物を用意しけり。第一は七十五里を一目に見る遠目鏡、第二は芥子を卵の如く見する顯微鏡、第三は猛虎の革、第四は四十四丈四方當砕く鐵鉋、第五は伽羅百斤、第六は八疊釣の蚊屋、たゝめば一寸八分の箱に入る、第七はとんだつといふ南蠻の珠數紫金にて作る、四十二ヶ國を表して四十二粒の珠數なり。以上七品。さて宇留岸にも種々の珍物をあたへ、日を極て南蠻船に打乘り、日本へぞ渡しける。　中略

嚴敷御詮義有之、門徒改宗仰付けらるゝ事

然るに、コウスモウシユモン兩人は、粟田口にて磔に行はれる。其後所々を御詮義有之、改宗を仰付けるに、表向は改宗して內證は耶蘇の繪像を掛け、此宗門を尊みける者多し。然るにきびしく御吟味有て、皆々を搦取り、急度改宗いたす者は其通り、又相そむき改宗せざる者は、罪科に仰付られける。此時に彼切支丹宗門滅亡せり。扨それより二十四年後、慶長十六年、加藤肥後守淸正病死せしを幸に、肥後國宇土郡にハヒヤンの弟子共、此宗門を弘め、門徒多くなり、中にも宇土郡ふるひ村實向寺と云ふ禪寺ありしを打破り、眞藏主言僧を追出しければ、此出家江戸へ下り、將軍秀忠公の御代寺社奉行へ訴へ

ければ、御仕置被仰付、一先靜り、其後寛永三年の頃、近江國丹波より六十六部の様に出立て、鏡を見て、物を與へなどして、此宗旨を進めて如斯者あり、依之此宗門の者多くなりけり。其頃、京都の所司代板倉伊賀守勝重、吟味をとげられしといへとも、命を捨て思ひ入たる愚人共故、邪法つきず、其節、關東より切支丹吟味役として、大久保相模守上洛して、彼宗門の者共銘々搦捕、俵に入れ五所結ひ、首斗り出し、四條五條の川原へ出し、改宗する者は助けると、役人より申聞せても、初めの程は聞入れず。彼等がいふやうは、さて有難し、是則ち耶蘇尊の御慈悲、たとへ八ツ割になるとも、此身は天へ引上られんと、破羅天僧の文を唱へ、改宗せさる者も多かりける。中にもころび出たくなりて、俄に改宗願ふ者は、町役人年寄に請合ぜ、何宗なりと旦那寺より手形をとり、其後改宗の者は御助被成ける。斯様にしても轉せぬ者をば、俵に入れ積重ね燒殺し給ふ。其頃、近江國すみたけと云ふ所にて、此宗門起る。是は、コウスモウが暫く此所に居りし時の弟子共なり。御詮義強くして早速靜まりけり。夫より此宗門無之、扨大阪にて轉せぬ者三人、内一人は富田にて鏡屋七兵衛と云ふ者、逆磔にかゝりける。又右衛門と云ふ者も同罪也。青物屋宗吉と云ふ者は水責にて相果る。又京都にて轉せぬ者四人、内二人は磔、二人は牛裂の罪科に行はれける。其後拾三年過きて、將軍家光公御代、寛永拾四年、肥前國天草島に於て、彼宗門一揆起り、御敵對をなす。是等は其殘類なりとかや。世澆季に及ふと雖も、餘類殘りて反逆

をなす。前代未聞のくせ共なり。此節切支丹滅亡せり。

卒直に云へば隨分牽强附會のものでありますが、話す人によつて新しき何ものかを提供し、また聞く耳によつて無限に新しい興味を見出すものであります。總じて事件の意味はそのものに内在するのでなくして其れを取扱ふ人に依つて附與されるものであります。物は聰明に取り扱ひさえすれば最も含蓄ある意味に於て最上の知慧が見出さるゝものであります。

平凡と云ふ地平線を飛び出して來て、流石に江戸の空氣を呼吸しては、人に對する負けじ魂も調和ある魂の人となり、彼の鋭い耳は微妙の音樂にひきつけられ、詩歌の情濃やかに鮮彩なる感覺を働かせ、情緒生活を樂むやうになりました。元來、趣味には階級的差別のありやう筈もなく、たゞ美の天地に溶け込むのであります。故に藩中の誰彼となく、身分は家老でもまたは下郎でも、詩壇は平等神往の天地であります。發句の「春興」と云ふ摺物の中には、辨治の「曲江」を初め、家老の「樗年」もあれば、「一知」も加はると云つたやうなわけで、辨治は益す人に用ゐらるゝやうになりました。直截に云へば、辨治の特殊の人格は常識的で、少しも瞑想の氣分がありません。春は歌ひ、夏は働き、秋は讀み、冬は眠ると云ふ風で、物に滯らず、庖刀物

を解くの概、痛快であります。辨治のものした、キリストを描いた條りに、次ぎの如き自己流の字句を用ゐて平氣で物を取扱つて居ります。「南蠻人の尊む本尊と云ふは、耶蘇如來也。天地の始め此の佛より何物もなし。只此の佛の力に由りて、人間、鳥獸、森羅萬象に至るまで、造り出したる根本の佛なり」とやつてのけ、また「日本には耶蘇尊の法なき故」云々など、簡單に外來の事物をも表現し、鈍根も利根も、花は散りても月は缺けても、彼の常識に映じては、一塵も滯ることなく、活水常へに涸るゝ事はありませんでした。

落花流水と筆の伸び行く辨治の文や俳句は、その人みづからの主張とも告白ともなつて居ります。否なむしろ辨治の實生活上の信條が「則天去私」といふそれを體得し、その境地に達して居るのであります。その人格の投影たる左の文を見れば、全體がその象徴となつてをります。

文略、さて天下の大變、上樣寺入、大名國入、家中の涙硯にあまり、拂物買手なし、買物高價、いづれに心得て宜敷候や、可然御心添奉願候。

二月二十一日

早々頓首

新島辨治

俳句つけ加へ候間、御笑覧可被下候。

○風あおる草葉に蝶や舞ひもどる

○忘れがたきや安中の芋のあぢ

と瓦解の際、目前に差し迫つた大禍難を無事に避く可き妙計を案出して、随分暗示に富んだ文を同僚の鈴木遷義氏の許に送つて居ります。氏は前に述べた松本氏の實兄です。

明治の初年、辨治が平番で御殿にあつた時、公武軋轢の際京都から吉報が到着したとて、その即吟に、

○五月雨やかつ色見する勝負かな

とあり、また寶と云ふ題で、

○たからとはいのちのほかは子なるべしまごひこそろふ花や月雪

と詠つてをります。

かのミルの父親が吾が子を激賞して、我の傑作であると誇つた事から辨治を見れば、彼はその孫に全く活ける生命の詩を詠み出したとも見られるでせう。即ち新島先生は、辨治の傑作で

あります。

さて、人に一敵國の感を抱かしめた辨治は、新島の芝興したる全盛を一人で脊負つて、流石によく先生を鍛ひ上げました。されば辨治の生活の豐富な資料の一部は、やはり先生の生活の一部に組み入れられ、その對象が錯綜し流轉しつゝ、近景と遠景とを無限に積み重ねて居るのです。惜むらくは先生の歸朝を待つ暇なく永眠し、長杉槍の如く林立した安中の妙光院に葬られました。孝子民治、字は公勤、滿腔の情を墓に誌して

先考新島府君之墓

明治三年七月十四日卒

享年八十有五

草廼葉耳假能宿利乃朝乃間茂思延波永記露廼玉能緒

入相や故々路にひゞく秋の聲

不肖公勤幷書

その墓の前に露に輝く草花を捧げて、人の情けの美はしき手向語りを傳へた先生の弟双六君

も、やがて祖父辨治の後を追うて、また一基の墓の主となり、さうして辨治の墓と二基並んで窮巷反つて傑士を出す話柄を傳へて居ります。

明治四年辛未二月

新島雙六之墓

行年二十五

第三章

新島先生の父民治は、文化四年二月十四日呱々の聲を上州郷原村に擧げました。其處は板倉家の領地であります。生後間もなく母の死に遇つて里子に出された爲め、母の愛撫は受けませんでしたが、父辨治が一層不憫に思つて養育いたしましたから、激しい風波にも逢はないで成長いたしました。天保十戌年十二月二十五日、徒士に取立てられて書役になりました。書役とは簿書の整理、御納戸向の事、公用文書の保管等の任であります。慶應二年正月十一日、徒士小性に進み、初めて士籍に這入たのです。五兩三人扶持を頂きました。一躍蟬脫の野心もなく靜穩に一生を送つた方で、辨治の直線的氣分に比べて、民治は餘程人格に丸味を帶びて居ました。辨治の常識的なのに反して、これは瞑想的であります。筆子たちは師匠民治を惠比須と綽名して居たさうですから、その人と爲りの一端は想像いたされます。

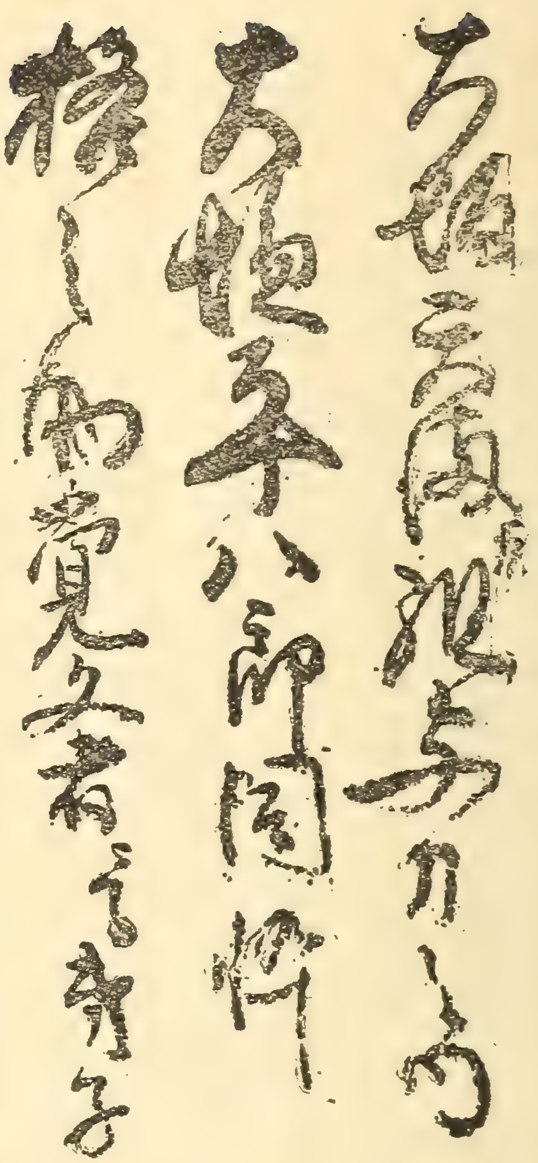
辨治の創業時代は、金糸で織つた蜀江の錦のやうに華やかでしたが、當代は學究的な餘程地

味な氣分でありました。辨治が衝動的な企業精神をもつて戰つて來たのとは違つて、沈默の推移が新島家の基調をなすやうになりました。けれど枯禪流の生活でなく、たゞ生活の幸福安寧といふ結果を招徠し得べき方法順序の下に、歩一歩その新基調を築き上げました。言ひ換へれば文化的生活をするといふのが、立案者の主觀にあつたのです。隨つて先代と變つた別個の倫理的動因のあつたことが感得いたされます。民治もまた清新の筆を俳壇に染めて、芭蕉の流れを汲み、唯一の趣味をこゝに求め、雅號を「是水」と呼びました。一體、辨治のやうな磊落の人の子にどうしてかういふ保守的の色彩を帶びた人が生れて來たのでせう。

若し血の價を無視したならば、遺傳の理屈は帳消しになつてしまふわけです。併しこれらは單純に衝破し盡すことは出來ません。深奧抜くべからざる遺傳の理法は、間濶遺傳となつて新島先生に傳はつたのであります。且つまた民治夫婦が先生を育てたならば、常套倫理の先生に仕上げたかも知れませんが、辨治と云ふやりての喧ましやが楔を打込んで、先生を一個絶倫の生命の人に鍛ひ上げたのであります。

辨治は創造的活動の精神を先生に吹き込むと共に、また親爺として始終民治を啓發してをり

ました。辨治は自分の波瀾の多い生涯を潜り抜けてゐる間に、民治は段々と鰻上りに地位の梯子を登り行くのでありますから、大勢順應主義と云つたやうな趣旨を附與した意味が、辨治の言葉の如何なる定義の中にも含まれて居ないものはありません。子を視ること親に如くはないの感を深くされます。丁度影の形に添ふと云つた親しみのある企てに於て、耳聞目睹した事實を材料にして我子を諭ゆるの親切、尋常一様ではありません。



一筆啓上仕候。先者時分柄追々向暑に相成候處、久々御尋不申、彌益御勇健被成候段、珍重奉存候。當地不事に罷在候、乍憚様貴意易思召被下度候。然處二月十九日、大阪天滿東組與力之内大塩平八郎、同忰格之助、覺文者に而弟子數多御座候。而上々様を大切、下を憐み、民百姓の爲、我一命を捨てゝの

此度のさうどふに御座候由。くわしき事は別段有之、御上様に上有之由、彼等の行者心むほんの心にてなき事、先あらまし風分致居候。當地甚しくこんきういたし、町方も追々施行も出し候得共、一向よくくらし兼われ等共も不印にくらし居候。是も上の御政事向の場合にはかく々々、しらざる處も有之やに風分致居候、政事は人の心を治むるを一と申候に付、追々御奉公にも活きたる覺文を心掛け候事、專一に御座候。甚乍惡筆、珍敷風分別紙認め入御覽候間、御一覽之上者、火中被下度候也。　辨治

かういふ風に物事が辨治の眼底に映じては、生々した人間の心に即して動的に具體的に事象を垂示し、人生と社會を抽象的に見ようとはせず、眼。頭、常に鮮やかに物象を見て、心境をこれに調和せしめようとするのであります。

民治はその心理的傾向に於て、全然父とはその選を異にして居ります。その見る所は靜的はた抽象的に觀照して、一呼一吸、聖者のやうな沈靜な氣分を持つてゐました。故に社會の事に對しては、自分の職務以外には、別にこれといふやうな感興を持たなかつたやうです。たゞ平穩無事太平の逸民としての世渡りでした。「民治」の二字はよく名銓自稱を現はしてゐます。民治が上州安中町大和屋なる母の里方の甥に當る許に送つた手紙は、民治の性格を能く寫して居

ります。

以愨札申入候。御揃容様御機嫌克御消光之御事と奉賀候。偖而道中無滞御歸邑之趣之に而一同安神仕候爰許不相變無事消光を致居候間、御心易思召被下度候就而申上候通り、書は心の畫と申て、心の外に現はれたる者に候故に、心正しければ筆又正しと申候に付、精々學び可成被下候。法帖は普通御地表にある千字文の類にて宜敷、又は商賣往來の樣の者にても宜しく、世間にては能く唐様と和樣とに彼是と申翟も有之候得共、心掛け次第にて上達致す者に候間、御工風肝要と奉存候。猶々御孝養專一に可彼成、書外は期後便候。頓首。

文化四年丁卯 二月十四日生 新島是水

同年十月十日生 妻 登美

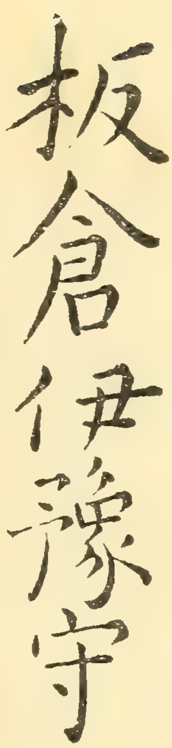
右明治十三年庚辰二月十四日

西京於圓山寫之 年數七十四年齢

自記

辨治は生立ちが生立ちですから、几帳面に讀書手習などの修養を積む機會がなかつたのです。それゆゑ民治には十分文筆を仕込んだに相違ありません。いづれの時代でも自分が足りなかつ

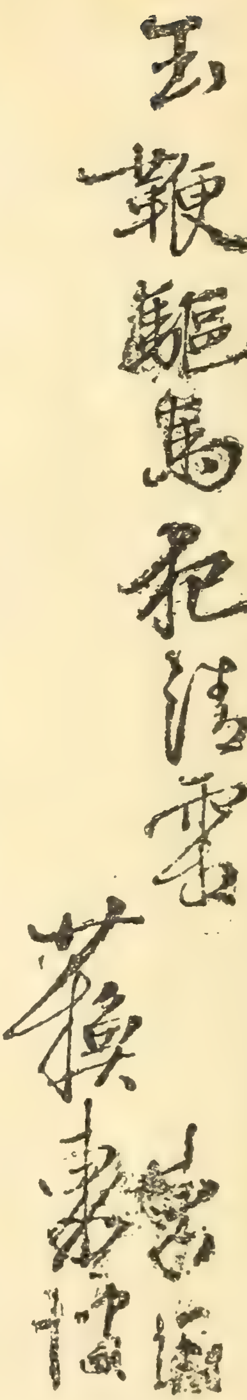
た學藝を、それだけ子供に注ぎ込むのが親の心理です。民治もよく父の意を體して精々文筆を勵み。終ひに大橋流の名筆となりました。當時最も普通に行はれたのは御家流で、次ぎは大橋流、この流は餘程漢字に近い明瞭の書體です。よく世間では書法を和様、唐様などと區別しますが、いづれも六朝時代や義之の書體から脫化したものらしく思はれます。それですから、御家流の中にも名筆の者は、法帖の書體のやうに優美な趣きがあります。その頃、安中藩では習字が餘程もてはやされて、柳公猷の玄秘塔の帖や、顏眞卿の多寶塔や、懷素の帖などは常に士林の話題に上つたものです。新島先生が脫走當



時まで所持して居られたのは、王陽荀の和刻の帖で、これは多分父の民治が與へたものでせう。今は私の手中に在ります先生の小階は全く王陽荀で、草書は蘇東坡の書體でした。

さて新島家も辨治が雄飛して居つた派手な交際振りとは變つて、今は藩の子女たちが手習に詰めかけて、一種の寺子屋の風になりました。さうして民治は好々翁の布袋和尚として、筆子たちの懷かしみを繼いで居りました。當時の先生の様子を伺ふと、唐棧のぶつ裂き羽織を着て、

大小を佩いた形容は、それとなく一種の激勵を同輩に與へたさうです。家中の甲乙が、今韓信と先生を綽名いたしました。その當時、藤田東湖が黒縮緬のぶつさき羽織を着て、朱鞘の三尺刀を佩き、板倉邸の最寄りを時々通行したさうですから、自然、先生の頭にかうした似通つた空氣が湧き立つたのであります。



先生の末に雙六といふ弟がありました。怜悧な方で聖堂にも入りました。元治元年、十五歳で句講師になり、金一兩二人扶持を戴きました。この雙六君は、天性の麗質でしたから、同僚と青樓に上る時は、いつも杯盤を周旋する阿嬌に特別の秋波を送られたさうです。酒數行にして得意の漢文を朗讀するのが、十八番だつたさうです。これはやはり聖堂に這入つた同藩の仁から聞いた話です。その得意の漢文とは自作の焚書論であります。

焚書論

秦焚書非焚書也焙秦也、記曰國無三年之儲謂國非其國、無儲猶不可況無資乎、使國非國者是焚國也、而焚秦者始于商鞅矣、鞅破壞先王之井田暴滅先王之政敎、嚴法繁刑剝骨流血天下、不曰暴秦則曰無道之秦、李斯燒焚六經而使後世至於先王之禮樂刑政絶滅而不可考、亦何怪乎、而鞅斯不特焚秦、亦自焚矣、何則當貶孟軻氏高唱仁義之道於齊魏之間、鞅固雖非其徒、鞅之有才豈可謂略聞其說乎、而李斯者荀卿之徒亦必習聞仁義之說而不能、…………下略

文藝にかけては先生よりも、前途が光りに滿ちて居たそうでした。私が安中教會に寄贈したる氏の書幅がありますが、何人にも前記の印象を經驗せしめますそれば

勝敗兵家不可期、包耻含垢是男兒。
江東子弟多才俊、捲土重來未可知。

錄小杜之詩　公錫

氏は學窓の生活から將さに文學が政治の方へ轉移しようとして居た動搖期に病牀の人となり

て一大打撃に逢ひました。

民治は一顰一笑を惜み、空疎の道を歩まず、格物致知といふ夫子でした。かの辨治の腕利きで、人心作用の微妙を察し、談笑の裡に人事を解決するのとは、大いに趣きが違つて居りました。人世の曲は低くとも、型のある社會には、民治の如きは先づ無難の人物であります。

民治の子供は皆なで六人、上から四人は女ばかりで、末の二人が男です。中にもおみよさんと云ふのが最も立ち優れた器量人で、七歳の頃既に小倉百人一首を諳誦した程の才物でしたが、佳人薄命、才子多病の言葉に漏れず、足が不自由になつて、あたら一生を日蔭の花と送つた方でした。また英才の雙六さんも、先生の歸朝に先立つこと三年で終ひに亡くなられたことは、前にも申し述べておきました。その外の女子は皆な相當の家に嫁しました。

新島先生の家庭にはこれぞと申す趣好物はありませんが、煙草は辨治君初め一家大抵好んで用ゐてゐたやうで、先生も召し出さるゝ十六歳の頃までは、常に喫煙して居ましたが、全くこれに緣を絕たれたのは、ボストンに上陸後、初めて米大陸を見たその瞬間でありました。先生が蕎麥を好いたのは有名な話で、辨治の天麩羅、民治の鰻と共に隨分面白い話に富んだもの

です。

先生の母親、即ち民治の妻君の素生は、餘程苦心しましたがはつきり分りません。先生の未亡人や新島公義さんなども御存じないところを見れば、夙に廢家になつたものでありませう。併しよく〱調べた末、中仙道浦和在の蕨村の産で、半農半商の片手間藍玉を商賣にし、また紺屋もして居た家であつたといふ事を知りました。これは先生の親戚なる木暮君の家に、おみよさんが故あつて一時寓居した際話されてゐたと、木暮君が私に聞かせました。成る程、先生の誕生や五月幟の祝ひに、浦和から金百疋とか五十疋とか、また袴着初祝ひにも浦和鍵屋金藏様から金二百疋贈られたなどありますから、多分この人が先生の母親の身内の方に相違ないでせう。

如何にして民治の妻が浦和在から來られたでせう。所詮は出雲の神樣が此の縁談を纏めたものとして、何はさて置き、私の一番關心する問題はそれにぶつゝかつて始めて新島家に眞に新しい生命の曙が來た事です。

第一、縁談は人一代の運の係はる所ですから、何人でもその選擇を愼むのは當然であります。

尤も人間の處世の方便を重く見る人は、政略結婚と云ふ事をやるのであります。

抑もこの結婚には餘程辨治の智略がめぐらされたので、所詮は理智の結晶です。併し民治のためには、こゝが一種の宿命結婚であつたかも知れません。先づこの結婚の由來と云ふは、浦和在から時の權勢家、尾崎大目付に行儀見習ひに奉公した女子の、貞淑で而かも衞生的美人であつたのを見拔いて、辨治に意中を漏らしたものに違ひありません。相卽微妙、辨治はその福音を其のまゝ民治に傳へたものでありませう。そこでいよ〳〵黄道吉日を選んで、その式を天保二年新春の頃擧げました。男世帶の冬枯れの新島家に一陽來復、萬綠叢中紅一點といつた風に久方振りに春が音づれて來ました。その年の「春興」に初春の題で民治の詠んだ句があります。

○初ゆめをゆめにはなさじ朝日さす　　是水

辨治のは

○尊やな鶴もあやかる御代の春　　曲江

四海波靜かに、新島家は新婦を迎へて、風雲月露・黄卷赤軸も汲み盡しがたき萬水を映し、融々無限の善に參じて此處に豫言者的の新島先生が生誕いたしました。

天保三年十一月十八日、長女お鏵を初めとし、おとき、おみよ、おまきと次ぎ次ぎに子寶が加はつて來て、辨治の曾つて歌に詠み出たやうに子福者になりました。以上の四女は家庭の甘美を十二分に味つて、光輝ある生ひ立ちをして參りました。けれども潤澤ある内容の一面に、深秘なる功利的本能の幽光の囁きが泄れて參りました。それは武家は男系によつて家祿が保證されるのであります。勿論、養子の制度がないてはありませんが、武家に男の子を尙ぶ念は、殆んど本能になつてゐます。若し間が惡いと折角の槍先の功名も飛ぶかも知れませんから、かういふ狀態を背景として今の新島家を思へば、さすがに忍耐強い民治の愚痴もいたく同情いたされます。疳癪玉の持主なる辨治君は、破裂もしかねまじい濃厚の低氣壓に襲はれてゐりました。所詮は不運の寄合ひと悲哀に泣いてはみたものゝ、天の大任を下すや先づその人を苦しむと云ふ道理は此處であります。神の鞭は堪へがたいほど無慈悲ではありません。そこに深い智慧があります。今や感情に惱された新島家の功利的欲求は消え失せて、銘々の精神に溫雅の神が宿りました。

新島先生のお母さんは、心の淸い方でありました。さうして谷間にかほる百合の花でした。

或る時これが光耀の天となり、神の心を讀み、世に惱める人を慰むることを、無上の喜悦といたしました。その心に一種不思議なる恩寵の與することを證得しました。

かくて天保十四年一月十四日、卯中刻即ち鷄鳴八聲の曉新島襄先生は誕生いたしました。地は一清の松の綠、千代吹く呉竹のさゞめきに、新島家の喜びは比へやうもなく、蓬萊の島は見ずとも、不死の藥は採らずとも、無事長久、固き巖の動きなき基礎が出來ました。祖父の辨治



君は喜悦の眉を動かして、覺えず掌を打つて「占めた、占めた」と叫びました。これが直ちに先生の名に付けられて、七五三太と申したのであります。また、しめ繩の引廻はされた松の内の事なれば、しめ繩に因んだのだとも云ひます。萬歲の聲、風を忘れて枝を動かし、昨日まで思ひ煩つたことは。今日は早や限りのない悅びとなり、實に過ぎこし年月は夢から夢へ移つたの

であります。次ぎの部屋では父の民治君が獨り快心の微笑を洩らしながら、左のやうな屆書を認めました。

私妻、今朝卯中刻出産、男子出生仕候。依之來二十日迄産穢罷在候間、此段御屆申上候。以上。

一月十四日　新島民治

御大目付衆中

早速、家中の知己や懇意先へ出生の通知をすると、翌日から祝ひの客が引きもきらず、正月の陽氣を十分に發揮いたしました。當時の祝儀到來控ひが新島家にありますが、その時代の素朴の風と社交の慣例とを見るべく、眞に活きた歷史であります。

天保十四癸卯年

正月卯中刻　新島氏

男子出生に付到來之品控

一酒壹升　目付文蔵殿　仲蔵殿

一うど　飯田太郎作様

一味噌漬　矢部幾蔵殿

一うず飴　内山庄助殿

一同　市原利八殿

一菓子一重　芳賀彦太夫様

一同　福長庄次様

一酒壹升札　清原來次様

一味噌漬大根二　宇津木清六様

一甘酒一曲　針木豊次郎様

一煮染物　岡田源七郎様
一酒壹升五目すし　矢部米藏殿
一すし　一包　目付　仲藏殿
一同　橋本良助樣
一酒壹升札　菅沼總藏様
一酒壹升　南玄昇様
一酒壹升札　米つき　萬助
一菓子袋　乗木彌五郎様
一扇子　一對
　太織産衣　橋本良助様
一干瓢　中村良右衛門様
一最中　一重　芳賀與四郎様
一鰹節二本　煮豆　一重　清水五郎右衛門様
一巾着　一　悴田三郎兵衛様
一酒壹升札　飯田太郎作様
一太織縞産衣　岡田源七郎様
一酒壹升札　小林祐吉様
一水飴　小田稔之助様

一太織産衣　×大和屋武兵衛様
一金壹朱　田邊周助様
一巾着　一　○尾崎直紀様
一かれい　五　田中彦七郎様
一いな　三　河野茂十郎様
一いな　五　小越藤藏様
一菓子　松原判三郎様
一煮豆　一重　金井清兵衛様
一同　田邊繁吉様
一煮豆　菓子袋　深川堪五郎様
一交魚　江場牧右衛門様
一巾着　濱地屋東作様
一太織表地　篠田常吉様
一同表地　小出安兵衛様
一羊かん　三木戸平様
御作事惣中
二階定八

備考　○印は媒妁人×印は辨治の妻の里なり

先生のお母さんはおとみと申して、中仙道浦和在蕨村の產であります。文化四年十月十日生れで、民治と同年です。蕨村は信越線の上野驛と大宮驛との中間の小驛でありますが、彼の武藏野の原の一部で、四圍の景色は實に雄大であります。榛の木林、田畦、隴畝と相連り、さながら慈母の懷に在るやうな靜けさと穩かさとが、現はれて居ます。その中に際立つて人目を惹く玲瓏たる富士の曙の秀色は、心なき身にも神彩を感ぜぬわけには參りません。斯かる美しい自然に包まれて、おとみさんは生ひ立つたのでありますから、一念の鏡に淸く高く寫された實在は、そのまゝ無意識に己が身を以て詩をよみ出したので、いはゆる詩人ならぬ天成の詩人でありました。これに比べるとかの辨治や民治の詩は、捉はれた詩であります。

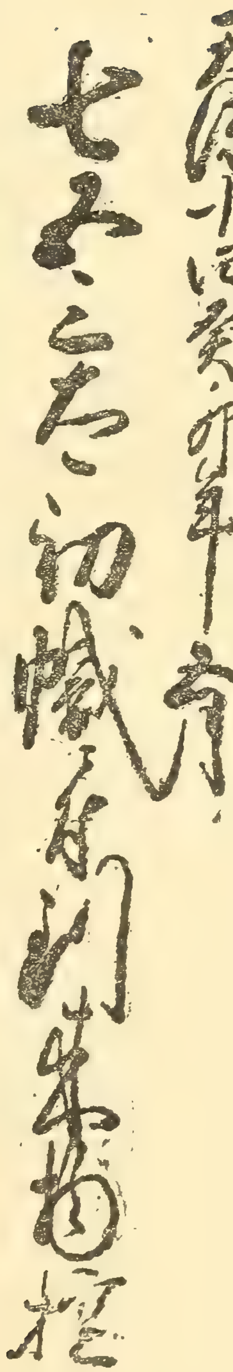
新島家が維新後、安中に退隱された時の事で、例の松本君の直話ですが、おとみさんが或る年、同氏の宅に年賀に參られましたが、手拭を頭に冠つたまゝ年始の祝ひを述べて、そこ〳〵に歸られたといふ事です。その素朴眞純なる情趣は、眞に尙ぶべきであります。これもその當時、近隣の本島沖造氏の妻が「コレラ」に罹つた時、先生のお母さんは單獨で厚く看護したさうです。道德的感情の高調されて、如何に潤ひのあつたかを、髣髴させる話です。

一體、新島家の人々の生活は、彼等が情緒の上に體驗したものが、直ちに神であつたに止まらず。また彼等の意欲の發動から樣々の神樣を拜たのです。その是非は暫く措くとして、それが反動的に、實驗の精神と方法とによつて、先生を聰明にし、また先生の生活を合理的に深化し、淨化した效は異大なものです。

さて祖父を初め兩親が、一心を籠めて日本橋の水天宮に日參して、先生が授かつたのでありますから、その申し子であると云ふことは、新島家の人々に深い感銘を與へました。それですから先生にも幼少の頃から是非何か成就させて、その名を恥かしめぬやうにと心懸けたものでそのために先生は十一歲の幼時、擊劍の試合ひに勝ちを取るやうに、水天宮にお百度を踏まされたといふ話を、未亡人から聞きました。その外何か困難の事に遭遇すれば、直ちに水天宮に祈願を掛けるといふ習慣が、自然に造られたのです。自分が水天宮の申し子であるといふ信念は、始終先生の心中に一種の光輝となり、その生立ちに益す高調を帶びてゐり、さうして水に緣ある海洋の健兒となつたのであります。

新島先生のお母さんは、日々感激と感謝に充ちて、自足樂易の生涯を送つて居られました。

先生の誕生は新島家の黄金時代でした。先生は世にも稀れなる幸福の幼児として、祖父辨治の膝の上にいつくしまれ、姉さんたちの手から手に愛撫されました。梅の花移ろひて櫻とすぎ、菖蒲咲く五月の節句には、武者人形、飾馬、軍旅地などを勇ましく動かして、弓劍の威をふるひました。



天保十四年癸卯五月

七五三太初幟に付到來物控

一飾　馬　　宇津木清六　　一五本道具　一飾　　大黒屋武兵衛

一弓矢飾　　白井長藏　三枝喜助　　一弓　矢　飾　　濱地屋東作

一清正人形　　×岡田源七郎　　一同　一飾　　三木戸平

一飾馬　小越藤藏
一同　今井戸一
一鷹　福長庄次
一同　橋本良助
一金太郎人形　目付 文藤
　　　　　　　同 仲藏
一キク印酒壹升　飯田丈助
一劔菱壹升　芳賀代助
一酒貳升　田中左七郎
一泉川壹升　菅沼總藏
一劔菱壹升　内山庄助
一祝歌一首目刺五　芳賀右中太
一華花壹升　南玄昇
一熊乗金太郎人形　二階定八
一菊印酒壹升　中村良右衛門
一飾大小　鈴木豊吉
一同　市原利八
一弓矢飾　藤井清藏

一同　乗木彌五郎兵衛
一金百疋　中野敬助
一菊印酒壹升　田邊はつ
一同壹升　山下邑太郎
一同壹升　×長崎直紀
一金貳朱　淺草 安兵衛
一劔菱酒壹升　江場牧右衛門
一ふき黒鯛及あじ二　清原來次
一金百疋　×浦和より
一劔菱酒一升　御厩部屋頭
長門屋瀧右衛門　ゆかはら藤吉
田中長次郎　表御門
裏御門　新野友次郎
野村傳右衛門　御關所
御勘定所　常吉
藤吉　萬助
富郎　德平

虎吉　龜吉　　御書方吉田健助
龜太　文藏　松島町
加藤谷藏　松忠　八次　　備考　×印は特に新島家に關係深き人々なり

天保十四年弘化と改元、その四年の十一月十五日に、先生の袴着祝ひが擧げられました。その節「坊に身を使はるゝこそめでたけれ」と、祖父辨治のものしたのは、その得意、想見するだに餘あることで、實に新島家の運勢は紫氣斗牛を犯すと云つた風です。同年十二月十四日、二男雙六君誕生、翌年即ち嘉永元年五月、初節句が祝はれましたが、祝儀到來物の數僅かに七つこれを先生の盛儀に比すれば、氣運の有象轉移の樣が、ありくと見られます。

弘化四赤年十一月十五日

目出度七五三太袴着初に付

一帶　一筋　大和屋武兵衛樣
一雪駄　一　菅沼總藏樣
一同　一筋　×岡田源七郎樣
一酒壹升巾着　一　×尾崎直紀樣
一傘　一　飯田文助樣
一酒　壹升　星野清七郎樣

一同　壹升　田中仁兵衞様
一足袋一　内山良助殿
一酒　壹升　金井戸一様
一金　貳朱　三木茂作様
一酒　壹升　橋本元三郎様
一同　壹升　江塲牧右衞門様
一酒　参升　宇津木清六様
白井長藏様
三枝善助様
德田源吉様

一同　壹升　目付　文藏殿
英助殿
一金　貳百疋　×浦和鍵屋金藏殿
一蛇目傘一　横田豊次殿

備考　×印は特に新島家に關係あり

さて先生は世の激しい荒波にも逢はず、呉竹のいとすなほに生立ちて、早や十六歳の冬を迎へたれば、即ち安政四年十一月十五日の吉辰に、元服の式が行はれました。この式は幼年から青年に這入る最も意義ある式ですから、知己の中から特に武運に強き人を選んで、前髪卸しを願ふのが、例となつて居るのです。卽ち新島家では、安中藩江戸邸に於ける馬術の指南家岡田源七郎氏に、この式を依賴したのであります。さうしてその擧式の屆が、祖父辨治から大目付に出されました、

安政四丁巳年十一月十五日

七五三太前髪卸に付、岡田源七郎殿相賴。

新島辨治

私孫民治悴七五三太儀、當巳十六才罷成候に付、今日前髪取卸し候此段御屆申上候。以上。

御大目付衆中

十一月十五日

右に付到來品控

一扇子一對銀札二　田邊順助樣
一銀札二　野村元兵衛樣
一劍菱一　藤田高造樣
一同一　×星野三太夫樣
一銀札三　汇場谷五郎樣
一扇子一對松節二本　志賀健三樣
一扇子一對劍菱一　根岸園藏樣
一同一　坂本彥太樣
一銀札三　田邊順之助樣

一泉川一　飯田丈助樣
一銀札二　橋本元三郎樣
一劍菱一　横井保吉樣
一金五十疋　×岡田源七郎樣
一足袋一　清原米次樣
一あじ十　內山庄助殿
一銀札二　市原利八殿
一同二　小林祐吉樣
一劍菱札一　岡崎勘助殿

一書翰袋　綴本　　目付　忠藏
一銀　札　三　　金井清兵衛樣
一同　　　三　　田中隆平樣
一酒　札　一　　×添川寛平樣
一銀　札　三　　芳賀作藏
　　　　　　　　同　多喜三

一かれい　黒鯛　　御厩部屋頭
一酒　札　一　　藤田高造樣

備考　×印の添川氏は儒者にして先生に漢籍を授けし方星野氏は家老職で、新島先生を間接に指導した方で、奬勵のため硯を與へたのであります。

先生の誕生後、凡そ十年間は新島家の常樂の春でありました。辨治の直覺的の洞察力を中心にして、人間の力の可能を確信する舞臺面でありました。故に生きんとする精彩が、そこに溢れて居たのであります。民治は少しく本質的でありましたが、よく生きんとする感情と理知の方面に力を注いだのは、十分新興の新島家に現はれて居ました。さうして先生には、これらを背景として更に意義ある生活の强烈なる意志の力が、象徴されたのであります。先生十歳にして詩を賦し、漢文を草し、十四歳の頃既に蘭學の大意に通じ、西方文化の骨髓たる科學的、哲學的概念に觸れ、近代的文化の氣分がその家庭に這入り、更にこれらの文化的生活を徹底して眞と善と美とを憬仰、鑑賞する境地に進んだのであります。

當時、新島家の才媛振りを發揮して居ましたおみよさんが、不圖した腫物から足が不自由になりました。法輪こゝに一轉して、雲の色慘となり、最早一家の夢圓やかなる能はず。熱鐵迸しる祖父辨治の荒修業、父民治のお題目三昧、母おとみのうるみ勝の眼先生はたゞ心の眞を籠めて、神佛に祈願すべく瀧に打たれ、或ひは母が曾つて日參した日本橋の水天宮にお百度を踏むなど、一心不亂に祈願を續けて居ました。やがてこの哀調の風が精神的に活きんとする所の滿足換言すれば宗教の活が初めて打込まれたのであります。

おみよ病に付醫藥の控

竹内様

二十三日　一小藥　一貼
二十四日　一煎藥　二貼
二十五日　一煎藥　二貼

二十三日　一煎藥　二貼
二十五日　一粉藥　一貼
二十五〇　一膏藥　四枚

二十六日　一煎藥　三貼
別　壹包
二十八日　一煎藥　二貼

二十七日　一煎藥　三貼
別　壹包
二十九日　一煎藥　二貼

別　一包　別　一包
一晦日煎薬　二貼　一朔日煎薬　二貼
別　一　別　一
一二日同　二貼　一三日同　二貼
別　一　別　一
一四日同　二貼　一五日貼　二貼
別　一　一粉薬　壹

一六日同　二貼　一七日同　二貼
別一　水薬　別　一
一八日同　一貼
蒸薬三粉薬一
以上

備考　竹内氏は醫師なり

祖父新島辨治之藩歷

一大坂加番隨行被仰付
天保七年五月十四日
一御徒組除被仰付
天保七年正月十一日
一徒士小性金貳分增被仰付
天保十五年正月十一日
一中小性格給金貳分增被仰付
嘉永六年正月十一日
一中小性被仰付
萬延二年正月十一日
以上

父新島民治之藩歷

一徒士格御取立被仰付
天保十年十二月二十五日

一徒士小性被仰付
慶應二年正月十一日

以　上

新島家之人事

一おくは出產
天保三年十一月十八日

一おくは初節句
天保四年三月

一おくは疱瘡
天保七年二月

一出　父
天保九年四月

一民治病氣全快祝
天保九年

一おみよ疱瘡
天保十年十一月二十二日

一おまき同斷

一おとき出產
天保十一年六月十六日辰上刻

一おとき疱瘡
天保十一年二月二十日

一男子出生(新島襄先生)
天保十四年癸卯年正月十四日卯の中刻

一七五三太初幟（新島襄先生）
天保十四年五月
一七五三太袴着初祝
弘化四年十一月十五日
一雙六出產
弘化四年十二月十四日明六ツ時出產
一雙六初節句
嘉永元年五月
一雙六疱瘡
嘉永二年三月
一敬德湯治
安政三年六月十一日
一おとき奉公
安政三年二月
一七五三太前髪落
安政四年十一月十五日
一おまき婚姻
安政五年十一月三日

おとき婚姻
文久元年三月十二日
備考　新島先生は疱瘡に罹りし事なし、安中藩にて種痘をなした最初の人なり。
一雙六聖堂入り
文久元年十一月
一雙六句讀師御雇給料二兩弐人扶持
元治元年五月十八日

第四章

新島襄先生藩歷

一七五三太徒組被除給金四兩貳分壹人半扶持

安政六年正月二十八日

一敬幹初めて安中表え御供被仰出

文久元年三月十一日

備考、敬幹は先生の字である、

一七五三太備中松山表え軍艦乘組周防守様より御頼に付出帆

文久二年十一月十二日出帆同三年正月十四日到着

一七五三太周防守様御船に乘組爲修業箱館表え出張

元治元年三月十二日

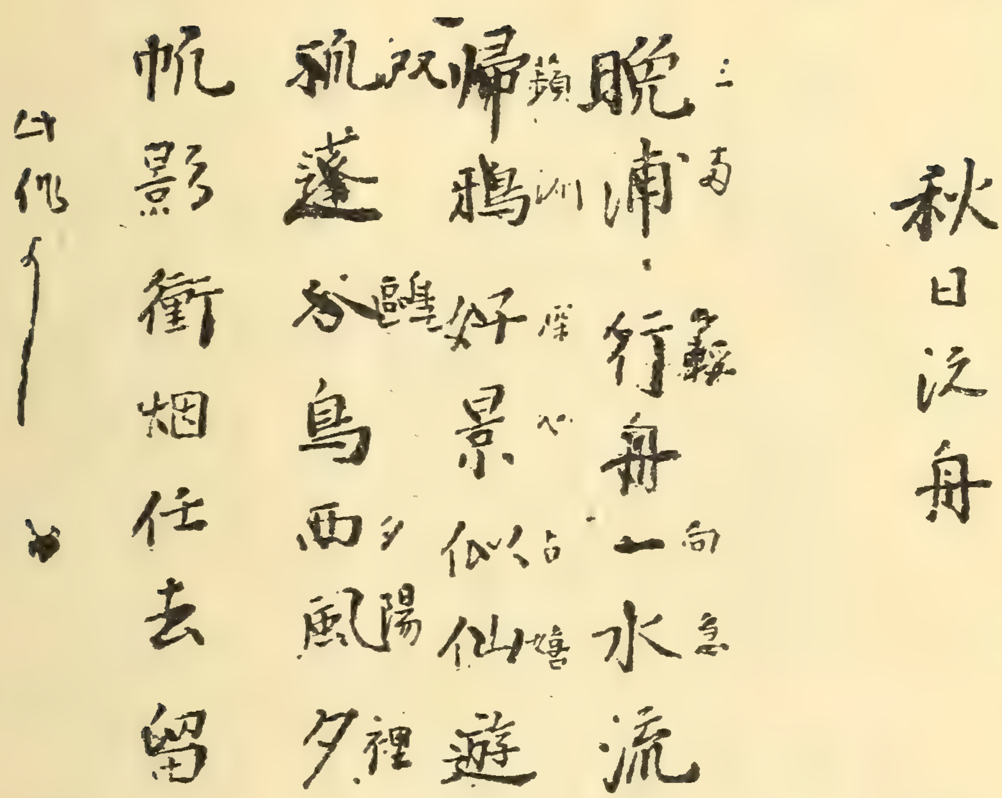
先生を「巨人」とか「英雄」とか「天才」とか曰つて、その尊稱を眞面目に固執する人があるならば、その人は多分その主張を習慣的に無意識的に表示したのでありませう。一々これを詮議立てをしてみると、その謂ふ所の主張は直ちに打ち毀すことが出來ると斷言致します。それのみならず、こうした見方は、却つて先生を裏切ることになる滑稽に陥るものであります。たゞ全く近代科學から啓發された智識の基調と、人間の本質を汲み盡さうとする誠實な企てと、また主張を飽くまで貫徹する剛健の氣象とが、先生を偉大ならしめたので、大體に於て吾人が均霑してゐる文化を背景としてゐるだけの事であります。假りに吾等を先生の位置に置ひて考へても吾等の現に置かれた環境を考察して一層適切に吾等の現に有てる能力を發揮したならば、敢て先生たるに難くはないと信じます。適切に言へば吾等に最も缺けた處のものは智的圖式を以て示されたる計畫の合理性と可能性とを洞察するに必要なる生命の飛躍と叡知の飛躍とであります。

先生の經歴を細心に省察すれば、現代文化生活上の心理的方面の諸相が認識されます。さりとて別段常人の可能性を超越した優秀な特殊の才能とか、適應性とかの所有者であつた爲めでもなかつたことが、明白過ぎるほど明白であります。換言すれば、誰にも同樣の機會が惠まれて居るのであります。されば先生が如何にして同じ機會を提供されたものを、獨り利用する能力を持つたのであるかと云ふことは、一應考へてみる必要があります。其處に一種獨特の遺傳的素質を持つてゐたことが明かに證明されます。

先生は先づ直覺的銳敏を祖父の辨治から分離遺傳致しました。且つ身體骨格まで祖父に酷似してゐます。さうして明晰銳利の頭腦が歸納的に働きますその衝動性は絕えず新しい生活を創造して行きます。他面また父民治から演繹的論理の形式を踏んで進まうとする分離遺傳を受けました。即ち、學問上の原理原則に最上の權威を認めて行きますから、鷹揚で高尙の態度があります。その他の理由としても、論理的に表示することは出來ませんが、家庭に一種の概念崇拜の空氣が漲つて居りましたから、それに關聯して樣々の神秘的意味をもつた言葉が囁かれてゐた爲めに、單に人間としての資格よりは遙かに高い程度の創造力に於て自己の本質全體を認

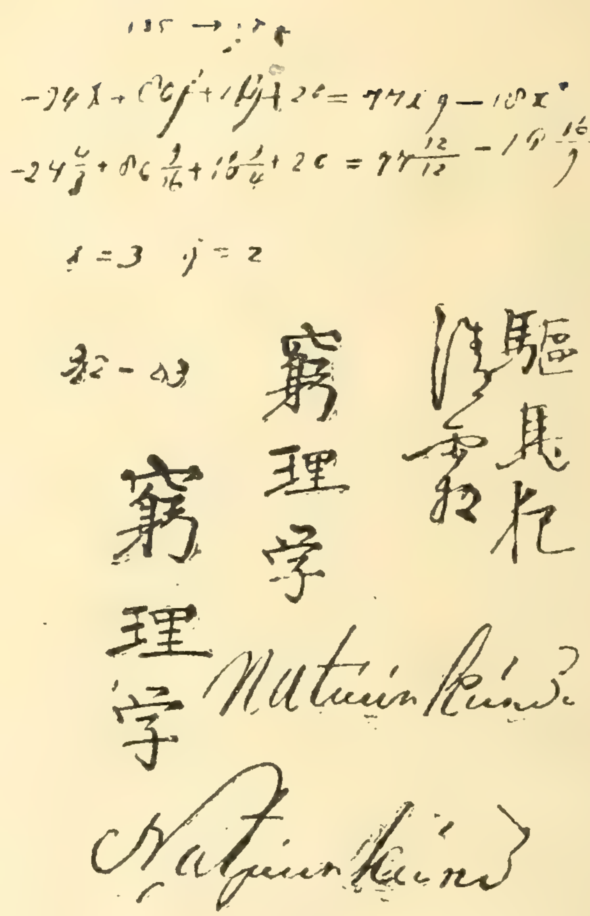
識し。倫理的發展として創造力を神人や超人に一任せず。個人みづからの直接責任として意識したのであります。此意識が新しい方面に段々廣まつて往きました、其思想に連れてあらゆる物の上つら丈けでは我慢が出來なくなつて、自己に痛切にぶつかるまでは承知しなかつたのです。ともあれ先生が名もない一青年としての生活から出發して、遂ひに晩年の位置までに叩き上げたのは、或ひは偶然の幸運から來てゐる場合があるにもせよ、その波瀾の多い生涯を潜り拔ける間に出世したのであります。故に天才とか巨人とか或ひはまた英雄とか叫ぶことの根據の不十分なことが、一點疑を容れる餘地がないのであります。

　家庭に於ては父の本職たる習字を學び、六歳の頃既に義士銘々傳を謄寫いたしました。現に私が所持して居ります。またその頃の日本畫の樂書などを例の襖の中から見出ました。素讀の手ほどきも家庭でやりました。藩例に從つて七歳から藩の學舍にて素讀の教授を受けました。次第に好學心が沸騰してまゐり。その消化力は驚くほど猛烈でありました。斯くして内省を鋭くして、自己の思想を明確にし、自己の情操を純化するやうになりました。教師もまた單獨に教授をなすのですから、個性を尊重保護して、成長の機會を十分與へたのであります。先生の



最初の素讀の教師は江場新太郎氏で、傍ら毛筆書と漢詩の作製を授けました。先生十一歳の頃には、いづれも立派な成績を擧げてをります。江場助教授の轉職後は、飯川逸之助君が句讀師として漢籍を先生に教授いたしました。飯山君が當時の次ぎの如き感想を私に話しました。「新島さんは頭腦が明晰で、一字一句を苟くもせず、文章の意味を詳細に了解する質ですから、時に由ると一章句の研究に數日を費すと云ふ勉强法で、弟の雙六君の一瀉千里に片付けるのとは大變な違ひです。

當時定府の安中藩士は約五十戸でしたから、學舍は御殿のお猪の口を以て充てられました。その長は添川宗平、字は廉齋です。最初甘雨公は一代の碩儒篠崎小竹を聘せんとしたのでありましたが辭して門下の逸足添川氏を推薦に及んだのです。是の仁已に漢籍の蘊奥を盡して蘭學に入り甘雨公と意識的に應照して居りました、氏は山田飛、太山誠と當年安中板倉家の三巨頭で太山は子弟の教育薫化に於て他二者の追隨を許さず、山田飛は奔放の機鋒を以て政事に應酬し



添川は吏務を以て庶政を釐革いたしました。なほ先生は撃劍弓馬それぞれ師に就いて稽古を始ました蘭學も十四歳の春から研究を始めました。斯くて普通の常識と品性とを陶冶する教育は

夙に準備されたのであります。

尾崎大目付に十歳の時送りし先生の手紙



一筆啓上仕候。追日冷氣御座候へ共、御惣容様益御機嫌能被成御座奉恐悦候。先以先般は御道中無御滞被遊御到着奉恐悦候。爰許被爲在候砌は日々参上仕、蒙　御懇命頂戴物等仕冥加至極、難有仕合奉存候。右御着恐悦御禮旁乍延引爲可申上捧愚札候。　恐惶謹言

十月六日

新島七五三太

尾　旦那様

参人々御中

猶以
御隠居様
御新造様えも宜敷
被仰上可被下、且先達而は御地ヶ栗被下置、誠以難有仕合奉存候。早速打寄頂戴仕候、右御禮前段可申
上候處筆不行届、蒙御免荒増奉申上候。　以上。

算術換伸録

右の書簡は先生十歳の時甫めて書いたもので、如何にも初々しい可憐なものでありますが。忠實に家庭教育の施されてあつたことや、先生が幼少ながらも尊い道徳意識を宿して居つたことを現はしてをります。尾崎氏はこの手簡を受けて強く感動し、これを稍や年長であつた例の關島氏に奨勵のために與へたのであります。

さて尾崎氏は板倉家の高級政治家で、理智感情の深さ強さに於て、新島家の慰籍者であり依頼者でありました。尤もこの消息は微妙に現はれて、辨治の知遇、民治の妻の媒介、別けて

先生に社會的位置と、人格的に成長する機會とを與へました。而もそれが制度の押し詰つた封建の空氣の中に、先生をして任意的に光明面を眺めさせました。

何と云つても常時、輕輩の新島家が大目付尾崎家に昵懇になつたことは、先生の立身出世に際限なく附纏つた一の偶然の幸運でありました。先生が輕輩者の子息でありながら、幼少の頃尾崎氏の膝の上にいつくしまれたことが、惰性的に種々の行き懸りを生じ、お茶坊主なる比較的幸運な位置に推薦せられました。一層適切に云へば、君公にその才能を認められさうして簡拔される機會となつたのであります。且つ少年氣鋭の衝動の發作と巧利の思惑とに正しき批判と修正とを與へ、卓越した人々に薫染され醇化されて、自然内生活の改善に關する運動ともなりました。

先生十一歳の時の詩

立秋

一葉梧桐玉樹開　正知物象入レ悲哉
城中酷吏今何去　無レ限新涼百尺臺

先生十歳の時から正式に撃劍を始めました。劍道は武家の骨髓であるから、家庭に於て當歳まで父兄が素面で竹刀の打込みと云ふのを敎へます。前進後進の脚部運動や腕力の發達を目的とする基本敎練であります。板倉藩の定府の士は少數でしたから、神田お玉ケ池に道場を張つてゐた千葉周作氏に藩士の取立て稽古を囑托してゐました。この時は攻防の道具が完備して技術が練磨され、實に撃劍の最高潮時であつて、現代生活の實感味は正にこゝに在りと、武士たる者の魂を魅する力があつたのです。當時千葉周作氏と齋藤彌九郎氏とは、斯道の二大双璧で、人氣の創造者でありました。新島先生はこの大家の千葉氏に就いてその技術を修め、また精神的訓練を受けたのですから、潑溂たる生活意思をもつてゐる先生の如きは、一層これに共鳴したのです。畢竟事物を捉へて共鳴すると云ふことは、これを愛しこれに同情して、何事に由らず道德的に感ずる心底ですから、撃劍も先生に對しては、人格修養の練磨となつたのです。今一つ先生をして撃劍に興味を持たしめたのは、小藩の安中から出た海保帆平氏が、一躍五百石で水戸に抱えられたことであります。安中藩では家老の最高祿が二百石でありますのに、僅か十八歳にして五百石の高祿を得たのですから、藩の子弟は非常の興奮と刺戟を受けたのです。

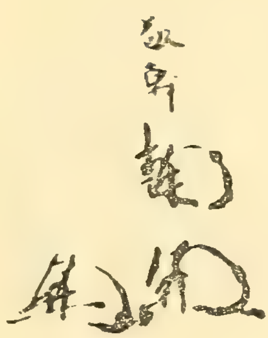
この海保氏は私の祖父が指導して居りましたが、天來の劍稟を見拔いて、勸めて江戸に出だし千葉氏の門に就かせたのであります。元來、板倉藩の名產は板倉羽子と線香花火と、この擊劍とであつたのです。私の家は代々安中表の造士館の擊劍指南家で、私の父も江戸の千葉の塾で修業中新島先生を指導した事がありました。

擊劍に興味を起した今一つの動機は、かの天草の亂に幕府が板倉の藩祖、板倉內膳正に征討の命を下した時、柳生但馬守が潛越にも、板倉氏は斯かる重任に適した人物でないとて、將軍を差し置いて獨斷で中止せしめようと致しましたが、遂ひにその機を失して、板倉氏は天草に出陣致しました。果せる哉、內膳正は戰死して、その功を奏することが出來なかつたのです。この柳生は將軍の擊劍指南役であるが、傲岸にしてまた政治的性質を帶ぶる事實にも容喙する權勢の人たるを見て、一布衣が擊劍によつて王者の師となると云ふ、而かも我が藩に關係して特別の光を放つてをると云ふことが、藩士に強い刺戟を與へたからです。故に先生は如何なる寒暑にも屈せず撓まず擊劍を勵んで、一日も缺席したことはなかつたといふことです。十一歲の時、既に擊劍の試合に勝つやう、水天宮にお百度を踏むといふ熱心家でありました。そ

の後例の海保帆平氏の弟左次馬といふ人が、定府の擊劍教授となつて、先生にも指導したのです。同時に馬術を藩の馬術師關田源七郎氏に就いて學びました。

當時、擊劍に興味をもつたのは、獨り新島先生のみでなく有爲の士は皆なこれを以て登龍門としたのです。かの安中出身の海保帆平氏の如きは、その師千葉周作氏や齋藤彌九郎氏と、天下三分の名を轟かしました。千葉氏は識見に於て優り、齋藤氏は技に長じ、さうして帆平氏は二者の長所を體現しました。故に千葉氏は海保氏を藤田東湖に介し、東湖はこれを烈公に推薦しました。烈公は更に板倉伊豫守に懇望して、水戸に抱へたのであります。後ち日本政記の著者たる會澤正志安の女婿となつて、帆平と改名しました。かういふ素晴らしい活躍が頻繁にあるので。彼等青年たちの志向を發揮し、機能を旺盛にせしめたのも無理はありません。また其の當時藤田東湖と佐久間象山との擊劍試合などは、實に歷史的題材だつたさうです。一方は水戸家の老職、水戸學派の代表者で、一方は信州松代藩の客分で、西洋科學の崇拜者、兩者とも負けじ魂の強い人で、擊劍の試合が何時も組打ちに終つたとのことです。當時これらの話は先生に一種の反響を與へたに相違ありません。

先生の名はそもそも最初が七三太、字は敬幹で、平涯、樗年、公暢、麗水、東島散人、幹、裏と、年次によつて意識的に、自分の生活の擴充と、内部生命の昂奮とが、表象されて居ります。先生の場合に於ては、稱號の變化は内面生活の流轉、また意志の表現であり、極めて興味ある象徴であります。即ち、先生の内なるものゝ外に投射されたものであります。幹とか東島



散人とか、樗年とか麗水とか平涯とか、それぞれ其の語の影に、色彩の調子や濃淡の結合關係が、あり〳〵と見えて居ります。尤も七五三太と敬幹とは、ギヴイングネームでありますから、先生自身の水準から見たものではありません。その他のものは悉く先生の主觀で、内容は人格と略ぼ同じ意味に於ての反響であります。

平涯、樗年は、先生の少年時代、毛筆畫の落款に用ゐたものであります。さうして平涯は蘭學に入つた時代の稱號であります。學と術とによつて、海洋の東西、陸の南北、津涯を知らぬ異域遠國の人文と交渉とが展開されたものであります。

端的に智力と感情と分化し、理想樣式を變化し隨つて人間の幸福を增進する方便となるもの
く構成に就いて改整の考慮が施されたときであります。樗年はそれ自體か先生の哲學的傾向を語るもので多數の現存の事實のはたらき振りと意義とより、歸納してさきに斷片的であつた。若しくは斷片的と見ゐた。情緒と意慾とそれまで潛在して居た。其等の發動の凡てが、段々相互の間に組織と統一とが成立つたのであります。莊子から出典したもので、極小限たる內外的關係と極大限の內外的關係とを體驗したものです。

烏東散人



樗年の出所

莊子逍遙篇曰吾有大樹人謂之樗
其大本擁腫不中繩墨其小枝卷曲不中規矩

烏東散人は、日本といふ國を一因子として、五世界に對立する愛國心を體驗した程度に進ん

だ時代即ち海軍傳習所時代に用ゐたものであります。純粹の一日本人として、また日本といふ國家的統一が、完全に意識された反應であります。

幹は先生が浪人時代、即ち脱藩から脱國に至る間に用ゐた變名であります。荊軻か「風蕭々兮易水寒、壯士一去復不還」と云つた、自分の生命を捨てゝかゝつた、犧牲の精神と悲壯の分子とが含まれて居ります。

襄は脱走中船長が與へた名で、別にキリスト教の式は受けなかつたけれども、確かにクリスチャン、ネームであります。襄はジョセフの最初の一綴字の音で、イスラエル民族を救つた傑人の名であります。全く人格の生長と步調を揃へつゝ、また獻身努力の積極的目標であります。

新島先生と海保帆平君とは、方面は大いに異なるけれども、その天才を發揮した點に於ては安中舊藩の双璧でありました。而も其の名を改めた點までが能く似て居ります。海保氏は晩年に父母から授與された名を捨てたのは、終世の恨事であると云つて居つたさうです。新島先生はこの點に就いて如何なる感想をもつてゐたか、終ひに知る事が出來ませんでした。

總じて先生が、生活の發展に隨つて個人の解釋の變化を惹き起された現在の社會は、抑も幕

府の末流で、鼎の中心が動き始めました。これは社會がそれ自らの統制に缺陷のあることを知り始めた結果であります。さうしてこれが民族心理に新局を打開する運動となつたのでありま す。この新思想の先驅をなしたものは、世界の一大潮流が世界を密接に結び付け、貿易、風俗習慣、思想、感情等、一國にあるものは他國に傳はること、從來よりも遙かに速く、強く、深くなり、善惡に由らず、この潮流に乘じて生活狀態を一變し、道德的の考へを適應しなければ世界に孤立するの止むなきに至ると云ふ心理と、一つはフランス革命の思想、ドイツの勃興、就中イギリスの重商主義の政略が、差當り極東の政局を繁雜に導いたからでした。さればイギリスの商人が、富を蓄積し金力を贏ち得んがために、自由競爭の名目の下に、あらゆる營利的手段を行使し、極端な弱肉強食が行はれ、無限に物質を自國の手に蓄積することを欲するに至り、その目的のためには政府さへもが後援をするといふことになり、鴉片戰爭もその結果として突如として平地に波を起し、吾が琉球をもイギリスが一時的占領するといふ物騷の世の中になりました。斯くの如くあらゆるものを犧牲とし。抵抗力の少い所かに横領を始め、彼等の意のまゝに慾望を滿足せしめようといふ傾向は、國際政局を益す煩瑣に導き、國家を統一して對

抗しなければならない氣運を促進しました。故に、階級の利害の按排調和にのみこれ忙はしき封建社會は、猛然として覺醒し、世界的經綸を講ずるといふ段取りになつたけれども、全然、無準備の悲哀が曝露されました。故に敏感の青年は、國情政治の研究國際政局の研究に興味をもち、從つて外交に重要な語學の必要を痛切に感じ始めました。

板倉家儒臣添川廉齊之文

吾聞暎夷之國古不通遠在歐羅巴州西北孤島之中。長身隆準猫眼睛拳髮艸如。鬚眉紅其仁其性貪兇如鬼蜮。竭來經商通萬國巨船稛載鴉片烟。其意不必在貨殖。愚民食之快一時。耗性有漸不自識蠶食。南夷窺粤瀕。包藏禍心非一日。維時淸國道光十九年。下詔特禁市毒煙臣林則徐專管之。故絡來深觸牽連貪虜何會循約束。敢向上國爭權玻巨礮大艦蔽天來。狂猘狺々。狗嚙虎掠其資財婬其婦女。烽火旁午歲四周。大江以南無乾土。廟堂議論相擁窮。自古庸臣主和戎。二千萬金換煙土。割地欺君銜其功。寧知生靈膏鋒鏑。孤壘大小空抒抽。此時乍浦城陷。誰切齒深閨弱女。其姓劉從容矢志赴井死。滿庭鬚眉輸巾國誰有一人捐軀命而厲衆士。唯有粤中義士民捐

餉團練護鄉隣。無事歸農有事勤。百萬勁旅指顧陳。吾讀其擬罷心目言々忠憤字字慟
哭。滿廷文武班陋塑。誰有一人敵王氣而雪國辱。嗚呼。嘆夷麼小醜矣。跋浪而來
三千里。非有趙魏之甲孫吳略。所恃者船堅而砲利耳。胡爲牙畏之如虓虎。撫之如
驕子。吾聞覺羅氏以武功肇基。康照乾隆兼文德。致治重照累年。二百之安長治果
危兇弩末。遼南宋局委靡不振。咎歸拙近傳和蘭差使節又向琉球騰口舌莽未
得聞其詳。或是嘆夷之狡譎。故生事端窺我門閾欽。惟我祖宗仁厚澤浹民心)。忠義磨
厲傳至今。男子國中眞界子。一毫髮外人侮。或日彼意不過求市易。豈遽覬覦把大逆。
此言其一未知二。須觀漢土已然迹。若許互市必乞地。彼向室內築城郭有少不
如意一時裂眥。起倉猝之變尤可虞。纏禍多事自此始。利害甚分明。苟安眞可鄙。男子國
日本刀。卒鋭士勇。利刄吹毛彼若能來。十萬人我斬爲二十萬。斷血紅直染海門濤。不
然祖宗在天之靈赫震怒。永世罰殛。奠汝祚呼嗟乎。眞男子好鬚眉謹面効寸忠。而巾幗
之辨髮兒。讀嘆夷犯清國事狀。數種作長句以記之。

弘化甲辰八月作安政丙辰嘉平月重錄爲。小林君直鄉。有所不爲齊學人添川要。

先生は十四歳の頃、既に漢文の大意を研究し、傳統を消化し、さうしてこれを新意義の上に解釋することによつて、更に新時代の生命を托し得べき何ものかを期待しました、その意想感情を吟味すれば、武士道とした處が何んと云つた所が、單に傳統の末技の上に立つて、極めて卑俗を喜ばすに過ぎないものであるといふやうな見地に到りました。何となれば、その基礎を單に名譽心の上に置いた爲めに、必然の勢ひとして僞善を生じ、虛榮となり、體裁を裝ふことゝなり、結局、傳統を傳統として保持することの、却つて危險であることを感ずるやうになりました。そこで先生は舊き衣を新文明の基調の上に脫し去つて、自己の世界を啓きました。

即ち、先生が今まで繼承して來た形式と內容とに見切りをつけ、先づ善を行ふ者たるが爲めには、如何にして善に達するのが自己に許されたる道であるかと云ふこと、換言すれば、如何にして善に達するのが、自己に取つて利であるかを會得し、經驗を積み、叡知をもつて體驗の命名に就いて、類似と相違、安定と不安定などそれらの性質に隨つて識別することを始め、そこに感情から知覺を、空想から實在を區別し、分類することにいたしました。抑もこれが先生の生活方針の端緒でありました。一度かゝる生活方針が工夫されて來ると、生活を構成する諸の

要素のはたらく傾向や、それを取扱ふ方法を一層洗練し、またこれを實在化した上に、それの法則までをも工夫することになりました。此處は則ち科學の境地であつて、自分の生活の幸福の繋がるあらゆる事物と事件とを、科學的に整理して行くことを得たのは、如何にも恵まれて居ります。

先生が理知の人間生活に目覺めるまでには、隨分、無邪氣な氣焔を上げて、滿足氣に見えたものであります。左の漢文はやはり月並みの感銘ではありますが、當年の先生としてはその奥底に光つてゐた希望で、こんな幻影を追うてゐたものであります。とにかく物事を新しく見直ほさうとする力が旺盛で、簡單な意思に戻つて、その永久的な力によつて、清新な氣分を吹き込まうとする努力は、先生の一生涯を通じて絶えず繰り返されました。

書坤輿圖後

昔者豐太閤登清水寺閣。西望慷慨曰男兒當伸武於海外耳焉。悒鬱之爲遂頒朝鮮地圖於諸將。直擣其巣窟王子就擒八道爲震始使將虜知有男兒國。永耀皇威於海外。當此時未聞有　五

大洲也。未聞有英佛米魯也。今也。英佛嶄然角立於歐羅巴。徽手數萬艨艟數千以戰爲商。以商立國。魯也橫斷歐亞二洲。接境於我唐太。至於長舌。曰一母乳五兒。其志蓋不小也。米也南北橫連協和修政精勵圖治。其文物之盛殆罕比。而其地脈之所起伏。海路之所循環。此圖經緯規畫頗盡其詳。抑我之所至冠亦能至。彼之能來我亦當往。若使此圖展于豐公之前歟。我銳鋒之所向必不止鷄林也。嗟乎豐公之事既空矣。而我勢亦大異矣。今也只在知己知彼修己制彼而已。不知彼則不能制彼。知彼必非至彼地。則不能知彼。制彼亦必非至彼地則不能制彼。而知彼制彼共有俟于此圖也。想夫盈者必缺盛者必衰。英佛之富強其能久富強耶未可知也。大姦似忠大詐似信。米之恭儉退讓或深藏機知耶未可知也。志大者才疎也。魯之韜晦不測。或尾大不振耶未可知也。孰能跋涉彼地而察其情狀者。書其後以俟酬志之。曰云。

新島未定稟

鬼頭健拜閲

伏乞

是正

一緒慨然思遠慮深　　於保貞妄言多

行文森嚴議論悠遠　　堀粲妄評多罪

文機活潑令讀者拍案呼快

龍　安　言

三谷退　拜讀

井田鼎　拜讀

先生は二六時中、藩公の左右に侍して居りましたから、餘暇を勉學に利用したのであります。故に自分の好學心を滿足さするわけには參りません。常に深更書をあさり、螢雪の勞を積みましたので、自然身體を害し、眼病に罹りました。然し不撓不屈は先生の氣象で、賜暇休暇中、藥餌に親みながら研究を續行いたしました。恢復後出仕して、蘭學の教師杉田玄澤が當時、芝區金杉に塾を開いて居りましたが、二里半もある其處まで、一生懸命で、外神田から徒歩で通つたのであります。これがために藩主の怒りに觸れて禁足を命せられ、或ひは笞罰を課せられた事などもありました。

さすがは明主板倉伊豫守甘雨公だけあつて、天下の推移を豫察し、儒臣山田飛が傍らから輔佐して、急進派の思想をも參酌して、菅沼總藏、岡村喜四郎と先生の三人に、蘭學の修業を命

じました。それは安政二年正月のことでありました。以來漸く先生は公然藩費生になりました。惜むらくは甘雨公、その翌年正月逝去されました。これが先生のためには大打擊で、九仞の功を一簣に缺ぐほどの危機に際會しました。甘雨公に一子あり、熊若君と申して、聰明な後繼者でしたが、不幸、夭死されましたので、甘雨公の舍弟勝殷公が順養子となられました。當代は尋常の方で、先代の積極的政策を踏襲する識見に欠けて居りました爲めに、蘭學修業は中止になりました。當時先生の落膽は思ひ遣る可きであります。聊か激越の情を左の漢文に泄らしてあります。隨分放膽の文ですから、若し有司に漏れたなら、今日の謂はゆる不敬罪に相當する重き處分があつたゞらうと思ひます。

安政二年正月僕受先公之命共君託田島先生學蘭書此有歳月。時君以學蘭書託村田先生。未數月田島先生蒙上命行於長崎。君又請田島先生共行於長崎。于時去年八月也。僕自是無所干囚託手塚氏學又有數月。時添川先生見僕漢學不成而勉蘭書。謂僕曰。爾欲學蘭書勿廢漢學。今縱令雖勉强不知漢學何得成乎。僕自是如犬牙學漢書與蘭書又有數月。僕於是也遂知不得兩全。廢一欲學一。然更鼠首不决。時朋友竊知僕迷謂僕曰

爾近比不樂何故乎。僕以實告之。朋友曰爾非多欲乎。人猶不能一何能兩全乎。勉強與不得兩全。不如勉一得一。僕自聞之遂廢蘭書。且君等還藩。僕又何面目學蘭書乎。初先公欲令僕等學蘭書。因問僕等左右。曰予欲令彼等學蘭書如何。左右曰可。遂命僕等學蘭書。然僕今忘先公之德不能成遂廢。嗚呼。嗚呼。勝○可誅乎。勝可誅乎。僕自是克己欲學漢書。願君勉強。僕頓首待君榮名揭天下而已。再拜再拜。

備考。勝○は甘雨公の承繼者たる勝殿公を指す。

先生は、自己の生命が此處に在るとばかりに、眞劍に勉強してゐた蘭學を中止されました。先生に取つては正しく精神生活の中斷でありますから、その興奮の情、察すべきであります。これに加へて同僚の菅沼氏は、光榮ある藩費生として長崎表に蘭學を修業いたしました。さうして此の任選に於て、其處に感情の沙汰があつたのですから、先生たるもの一層猛烈に反感を持ちました。かくて先生は野にくだつた浪人の如く「まゝよ、余は英語を以て成功の道程に上ると云つて、例の眞劍な態度で突進しました。若し此の際、先生が蘭學の修業を續けてゐたならば、遂ひに英語を學ぶ機會がなかつたかも知れません。果して然らば、英語の寶庫に這入る

ことが不可能で、アングロ、サクソンの民本主義なる正義人道の理想に思ひを潛めることが、出來なかつたかも知れません。また自主自發的に獨立の人格者となり、神の偉大なる創造進化に調べを合せて行くことも出來ず、從つて淸き愛の奉仕をして行くことも出來なかつたかも知れません。先生が脫走の途上。暫時北海道に居つた時に、ニコライ教師の日本語の教師をして居ましたが、その時に同氏から舊敎の感化を受けず、且つロシア語に行かなかつたことも、確かに神の恩寵であつたと思ひます。先生が斯く外國語の二過渡を常に幸運に轉じたのは、結局日本の國家のために、將たまた日本人の精神的生活に惠まれたことであります。私はこの事實を通じて明かに活きた敎訓を得た心地が致します。およそ自己の努力は神的生活への道でありまたそれが自主自發的に神の進化の偉業に參加し得る態度であります。かの謂はゆる神から受ける助力と云ふのが、この情感であります。天は自ら助くる者を助くるといふ敎訓を味ひ得ました。

先生が蘭學修業の中止を受けた時は、既に蘭學が傾き始めた時です。これに代るところの英語の內容が、日本の國家的意識に充實と共鳴とを與へました。斯る現象に依つて見れば外國語

が或る一國の知識階級を支配して行く場合に國民生活上に於て有利なる影響を蒙むる場合と不利なる影響を蒙るものと又は相並立する場合とがあります。蘭學は不思議にも佐幕的色彩を帶び、英語は志士寒生の自覺を促がして、京都方を圍繞した空氣の裡に這入りました。且つアメリカで出來た英語の書物は、最初から安價に輸入されましたから、普通の讀み物となり、最早第二の國語とならうと云ふ有樣となりました。一先生はこの點に於ても確かに眞實健全に生み出さる可く有利に機會を利用した人であります。

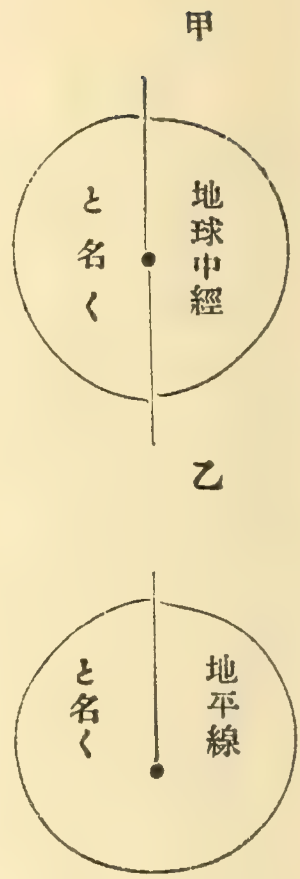
先生の十四五歳の頃書いたものに、「地球論」と云ふのがあります。先生の普通學に於ける造詣を知ることが出來ます。

地球論

夫地球は天上獨一眞神の造る所にして、何の代より出來し者なるを知らず、且往古地球に住みし者、自己の所見に隨ひ、太陽と太陰は天上に浮遊する天體なる者と考へ、殊に太陽は我地球の軸とし廻り、太陰は我地球を中心とし轉する事を知らずして、只地珠の表面は一文字にして渺然極りなき者と椎考し

たりし。然し紀元前六百年時代に最早「與尼西」學校の教授職なる「ターンスフアンミレテ」なる者、地球は圓なる者にして、茫々極りなき者に非ざる説を立たりしが、世人此説を妄誕として信せさりしに、後に至り「磨日耳波援斯」なる者、初て地球を一轉旅行せしせり、此説漸く行はるゝを得たりし事、實に紀元後一千五百十九年也。此より地理幾何學日に開け、遂に地體は扁圓にして、橙實の如なるを知り、山陵川澤は猶、橙皮上の凸凹に類する事を發明せり○或人若し地球を一度轉旅せんには、七千二百小時行（我一萬〇百八十五里、二九二一なり、而して一時行は我が一里、四一四六〇五なり、）を歩む事を要するならん。「如何となれば、則ち地球を三百六十度に分ち得て、一度は二十小時行（我二十八里二九二一。）なる故なり。（三百六十度に二十小時行を乘ずれば、則七千二里小時行となる。）○或は又一晝夜八十小時行つて進む蒸瀛車の速力を以て地球を一周せんには、九十日程を費やすならん。（但八十小時行に付ては一日、七千二百小時行に付ては幾何の比例にて、九十日を得たるなり。）○又或人此蒸瀛車に乘りて對蹠の人を訪尋せんに、九十日の二分の一則ち四十五日の時を要するならん。（但對蹠とは卽ち圖の如くにして、甲人の頭も天上に向ひ甲人の如く乙人の足も地球の中心に向ふをいふなり。）

玆に度量學の法に因り、地球の周圍七千二百小時行を三、一四一六を以て除すれば、則二千二百九十二時行を得るなり。(但圓經一尺なれば、則ち其の周圍は三尺一寸四分一厘六毛なり。故に圓經を求めんには、周圍を三、一四一六を以て除すべし。)之を甲より地心を徹し、乙に至るの線となす。此線



に隨ひ同上の蒸滊車にて甲より乙に至らんに、一ケ月は費やさゞるべし。其れに倣ひ、地の表面より中心に至らんには、則ち十四日强ならん。(但地の表面より中心に至る線を地平經と名く。長さ一千二百四十六小時行なり。)之に依て、世人の地球を案外に廣大なりと思は、誤れる事を知るなり」

先生とおみよさんと雙六君とは、兄は弟姉妹中、月前花下に鮮妍を競ひました。おみよさんは七歳にして小倉百人一首を誦んじ、雙六君は史記の項羽本記を暗誦し、先生は少年期のお茶坊主時代には、更に唐宋詩醇の巨細を明記いたしました。該書は齋藤拙堂の編纂したもので、且つ甘雨公と文献應酬の間でしたから、君公はこれを愛讀し、唐突に該書の何の題の平仄は如何、

その用字は如何と云つたやうに、先生に索引する事を命じましたから、勢ひ精覽いたしました。斯くして先生十一歲頃の詩作は、音韻唐詩の風があります。そうして青年時代のには、反つて甘雨公の詩と品別し難いものがあります。これは先生が少年時代に永く君公に奉仕して居りましたから、その臺閣の氣品文獻の思想とに君公の薰化を得たのであります。かの石田三成が小太閤であり、森蘭丸が小信長でありたる如く、先生は正しく小甘雨公でありました。

此の時代の新島先生の詩

秋日冷

三兩輕舟向急流蘋洲深處占嬉遊
一双鷗鳥夕陽裡。帆影銜烟任去留

客舍聞砧

月色如霜玉杵聲。孤燈夢斷嘆長征。
不知丁東誰家婦。又是關山萬里情。

秋郊聞笛

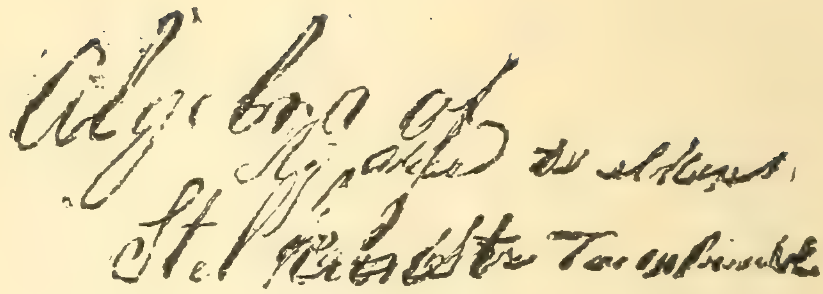
歸犢背頭夕日熏。落梅一曲聲聞。
無端立盡秋郊路。劉喨餘音入暮雲。

先生は少年時代をかうした膺揚の裡に消息致しましたけれども、生活の實感味は稀薄ではありませんでした。否な先生の普遍的の常識から割り出した經濟思想があつたのであります。それは文化生活と經濟生活とには離るべからざる關係があつて、個性の發達も成長も皆經濟的に關係して居るといふ事であります。故に先生は、人間的生活をなし、個性發展の機會を得るためには如何なる事も囘避しませんでした。則ち經濟的觀念の中樞に、武家には一種の錯覺があつて、何事も消極的態度を取るのを、先生は意氣地なき事と思つて居ましたから、堪へ得るだけの心力と體力を捧げて、人生の積極的建設をなしつゝ、進んだのであります。故に、常に自他の利益と幸福との事情の下に生活せんとする意氣込みが、事々に現はれてをります。故に機會と便宜とが許せば、潑溂たる第一の生活意志を猛烈に實現し、實利的物質的生活を深化し。

徹底させて、當面の實利を略取しました。かうした事は結局、先生が生活の苗床の中にあつて既に生活の優秀な種子を呼吸してゐた證據で、如何なる行爲の中にも經濟といふことと量と質との注意が拂はれて居ります、則ち、先生が少年期や青年期に於ける手帳や筆記帳の綴ぢ糸は手習の反古を利用して紙撚となして用ゐて居ります。かく瑣細の事にも、その經濟思想が生活に實現されてをりました。後年ハーデー氏が、先生の金錢の費途は如何にも當を得て居ると云つて賞讃した程で、かねて其の方面の訓練のあつたことが分ります。

先生は一瑣事にも常に相當の省察を加へ、觀照をもつ位でしたから、志向の問題に關しては深い體驗と十分の觀照を經たものであります。そこで先生はみづから近世教育の洗禮を受け、すべての學科の中から品性を養成するのに最も重大な意義をもつ修身と理科とを選擇しました。修身は理科の精神であり、總合であり、理科は修身の系體であり方便であり、結局、修身と理科とは同一精神によつて互ひに照應的に、互ひに塡補的に効果を顯し來るといふことを理會し、先づ整理的科學に出發して、數學や文學を熱心に研究いたしました。少年期の終りに數學全體を修了し、代數の二次方程式や平面幾何をも習得して、概念の全體を體系的に確かめしま

した。次ぎに勢力的科學に移つて、理化學を研究し、續いて生物的科學に入り、生活の概念に



就き研究をなして、生活全體の事實及び法則を研究する生理學を修め、神經系統及び其の機能を講究する心理學に進み、以て普遍的の常識を準備し、やがて專門的研究に這入る能力を養ひました。

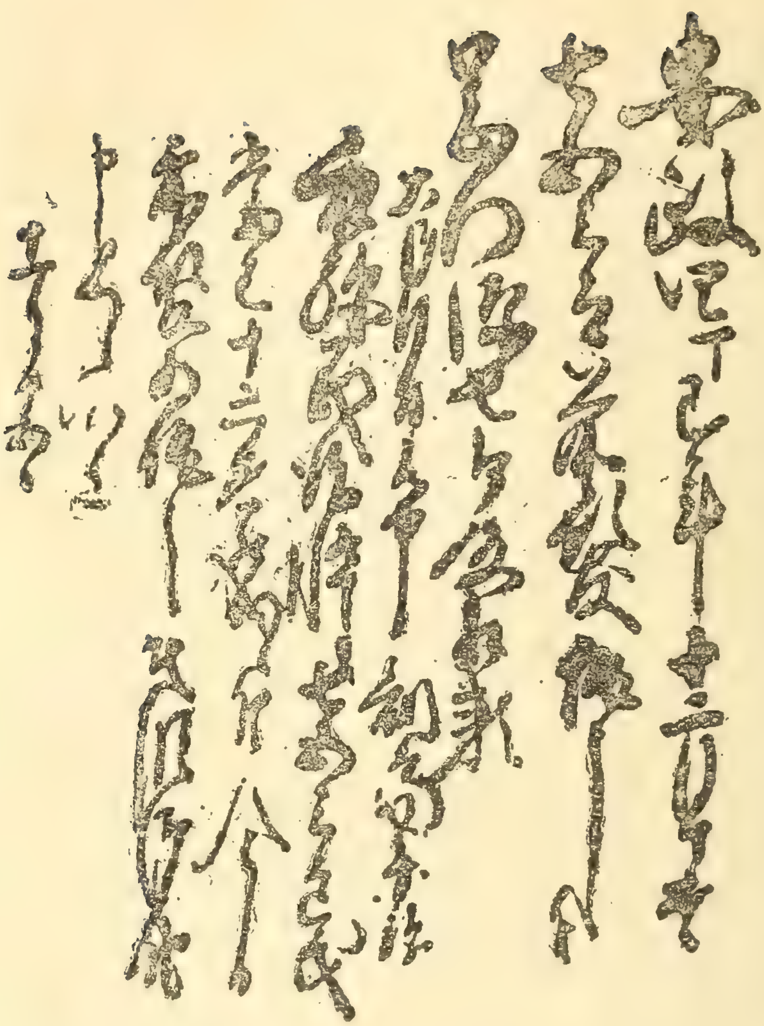
新島家は抑も力の可能を信じた、祖父辨治の意志の活動に始まりましたから、父民治の割合に用心深い態度の中にも活動力があります、さすがに傳統の氣分ば絶ゑません。先生は更に徹底的に高き新文化の必要を自覺し、階級や權力で計つた能率の代りに情と誠とを要求し、この徹底性を推し廣めて行きますから、事苟くも生命力の核心に觸れるものに非らざれば滿足いたしません。例へば擊劍でも先生には結局人格の修養となつたのであります。若し先生が、外律的の考へを以て、名譽とか、武功とか、功利とかいふことを目標としたならば、むしろ擊劍よりも槍を撰んだに相違ありません。何んとなれば、武功を奏するには、槍の方が優つて居るといふこ

とが武士の輿論であり、太刀は槍下の功名と云つて、第二位的のものに評價されて居づたからです。じつに戰史にも刀の功名は少かつたのでです。けれども擊劍は建國以來國民的の競技でました。國民の趣味に適し、さうして確乎不拔の性格を陶冶するものでしたから、先生はこれを熱心に勵みました。

さて、先生は甘雨公の左右に奉仕してゐた數年間に、活きた政事學を學び、經世の實を解し重厚溫雅の品性を陶冶いたしました。また新來の哲學思想を通じて、天地萬物を我が一心に統攝し、因果の世界を脚下に踏みつゝ、青年期に這入りました。

第五章

安政四年十二月十五日、前髪卸執行の屆書を大目付宛に出して元服の式を擧げ、先生は愈よ



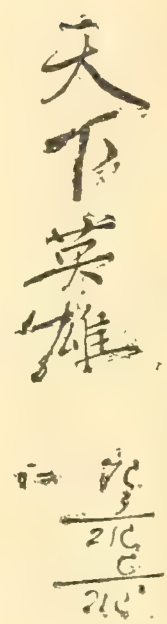
名實共に青年時期に這入りました。眞に實質の光澤をもつた青年式であります。現時の徴兵適齡と同じ形式でありますけれども、その內面價値は先生の場合に於ては、同日の論ではありません。何んとなれば、既に意義を具現した價値ある生活にまで擴充し來たのであります。また

素質を陶冶し、境遇を改造し、その理想を遂行する可能性が、十分であつたからであります。安中藩に於ては、士以上の子弟は十六歳の正月十五日、士以下は其の年の十一月十五日に召し出されて起誓文に記名押印するのであります。この式は公人生活に打つて出る重要の力點でありますから、この場合金釘流の記名などいたす者は、上役の中で冷笑されると云ふ皮肉な試驗です。

先生の脈管には、常に理智を溶かした感情の液が流れてゐました。既に少年期に尋常中學校高等學校の學業を修得して、常識の哲學が先生全體の象徵となつて居りましたから、立派な發言をして卓越性を發揮しました。加ふるに始終、甘雨公に扈從して居つて、精神的支配者たる自負心と圓滿によく調和して、その眞面目に構へた態度は如何にも力強い表情であつたから、老吏を驚かし、秀才を以て登第第一となつたのです。けれども階級といふハンディキャップを以て、名譽の元服式は士以下の子弟格で取扱はれたのであります、

さて先生の青年期は、アメリカ流に云へば謂はゆる「カレーヂ・ライフ」に這入つたので、換言すれば、普通學から專門の學科に移つたのであります。即ち幕府の海軍傳習所に、藩の選拔

生として、入學いたしました。さうして國防の第一線は海上に在りといふ經世愛國の理想を現實に行ふ場合となりました。その科目は高等數學、微分積分、測量術、航海術、機關術、築城術、並びに艦政。一班原則として今の海軍兵學校と同樣であります。オランダ人ヘルセカーチ氏が教官で、すべて原書を用ゐたものであります。これらの諸學科の新島先生の筆記帳は、いづれも私の手中にあります。最早時代が推移いたしまして、平民も臺閣の人も、能力と質との問題になり始じめてまゐりました。必竟、先生の社會的に價値のある生活は、科學的の基礎が決定的の要素となつたのです。

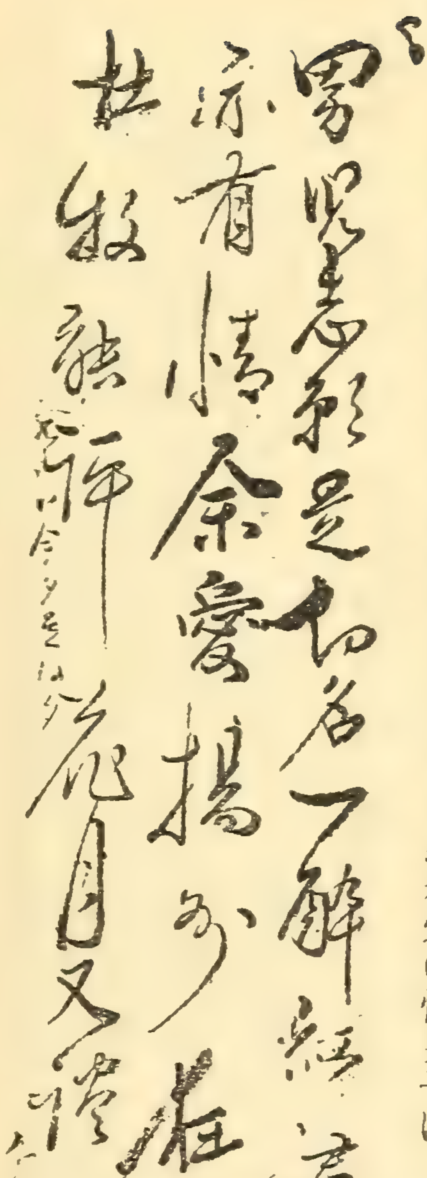


單に大和魂を振り廻はして、肉彈を飛ばすといふ簡單な考へではありません。

先生の青年期は先生自作の詩、卽ち海軍傳習所在學中に作つたのが、全幅の脚本となつてをります。

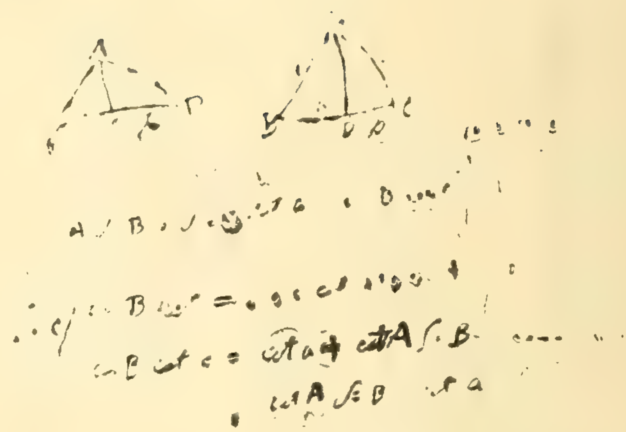
男兒志願是功名。一醉紅裙亦有情。
余愛揚州狂杜牧。能評花月又談兵。

この脚本を注脚して活動したのですから、其處には北部の燕姫も出れば、南部の粉黛も色とりどりに出沒して、鳴物入りの戯曲其のまゝです。先生は元來江戸子で、灰汁拔けした方で、白晳の色、漆黑の髮、眉は半輪の月を描き、四嶽相稱應し、豐瘦度に合ひ、耳は聳いて聰明を表はし、口は紅唇咳唾玉をなす貴公子でした。意氣壯榮の快男子に、桃紅李白の背景は大抵附物のやうです。



口さがなき京童に板倉の冷炬燵とて、名所司代振りを評判されて以來繼承者に深刻の影響を及ぼし、精神生活の上にもまた何ものかの熾烈な欲求を與へ、所司代なる名譽は板倉家の標語となり、基本的信條となつて、傳家の印象にも現はれてをります。即ちその印象の冠冒は「經國牧民」、左右は「版京尹裔」「安中侯印」の三顆對であり、印面は京都所司代時代に刻せしめたもので、鈕は唐代の刻朱舜水傳來のものであります。が私が所藏して居り

ます。さて、冷炬燵と云ふのは、非の打ちどころがないの意で、火の音便に通じたのです。當代の板倉勝殷公は微温的の炬燵となり、嘗ては千代田の登城に板倉の冷炬燵と謳はれ、名君の



象徴とされたものが、時代の變遷につれて内容の意味が反對に變つてまゐりました。勝殷公は初めから正室を置かず、顔貌の素描は新島先生と正反對で、顔面神經も全く違つて居りましたから、從つて心理的傾向もその趣きを異にして、結局先生と對立若しくは思想の並行が出來なくなりました。併し幸ひにも家老職横井三右衛門氏が輔佐して先代の遺圖を繼紹し先生を安中藩の進士として幕府の海軍傳習所に派遣したので、先生のためには横井氏は再生の恩人であります。この家老職は流石に時代の潮流を感得し、俊才の藩の子弟を拔擢して學業の便を與へ、その才能を十分に發揮し他日の奉公を期せしめ、絶えず有機的の社會に注意を拂つて居りました。さうしてニコライ教師が東京

で傳道を開始すると、直ぐにその信者となり、自分の娘を副牧師なるロシア人に嫁さしめた程の、冷靜な行き方の人でありました。

さて海軍傳習所は東京築地に設置されてあつて、現今の海軍大學校が即ちその跡であります。元來、幕府は自己の海軍必要上、これを建設したのですけれども、海洋そのものゝ性質から海軍の實價値は諸藩と連盟して居なければ、完全な働きの出來ぬものであります。故に諸藩に慫慂して、英才を此處に送らしめたのです。それ故生徒には各藩の俊才を集め且つ研究事項が「新」であり、從つて立派な海軍國となつて制海權を握り、英國の海軍にも獨力當り得べき實力を養はうと力瘤を入れたもので、その學習する學科といひ、技術といひ、いづれも血精を帶びた男子のためには、この海軍傳習所は好個の天地でありました、大體に於て、新島先生の海軍傳習所在學中は、一段と新しい氣分に恐悅して居り、且つ家庭は平穩無事、念頭にかゝる一物もなく、英雄胸中閑日月といつた調子で、結局、洒々落々、光風霽月でありました。字を逐ひ行を追うて父民治の手記を見れば、次ぎの如く認められてあります。

一安政五年午十一月三日内々おまき
差遣候に付祝物到來

一金　貳　朱　岡田　源七郎様
一上田縞　一反　中村道勝様
小杉たけ切半襟
一うがひ茶碗　一
紅　粉　貝　白井福藏様
一銀　札　三　橋本　元三郎様
一小杉　一風呂敷　一　飯田丈助様
一まゆはけ　二
白　粉　筆　二　坂本藤吉様
一半ゑり　一　和　紙　星野　三太夫様
一小　杉、扇　子　肉布庄助服
一日　傘、雨　傘　伊勢や　藤四郎
以　上

一安政六年己未正月二十八日七五三太徒組除金四
兩貳歩壹人半扶持被召出候御祝に付
一銀　札　二　清水　おうん様
同　おうたさま

一同　二　金井清兵衛様
一同　二（板倉家の砲術の先生）星野潤四郎様
一同　三　福岡松三郎様
一同　二　山下林藏様
一菊　印　酒　壹升　飯田丈助様
一金　五　拾　疋（馬術の先生）岡田源七郎様
一銀札　三扇子　一　根岸團藏様
一銀　札　三　橋本元三郎様
一同　三　芳賀代助様
一同　二　渡邊整八郎様
一同　二　清原來次様
一同　三　藤田專造様
一同　三　丹所太平様
一同　二　青木常平様
一同　二　市原利八殿
一同　二　内山庄助殿
一同　二　宇津木棟藏殿

一同　五　鯰田源吉どの　久保孫平どの
一銀札三（新島先生に漢籍及書を教授）　江場釜五郎様
一下緒　一箱　津金喜太郎様
一銀札　二　添川鐐之助様
一銀札　二　扉子　一　星野庄右衛門様
一銀札　二（先生の句讀の教師）飯田逸之助様
一同　二　富岡文平様
一ぼら　二尾　坂本藤吉様
一銀札　二　田中隆平様
一同　三　石井和兵衛様
一同　三　白井福藏殿
一同　三　田邊潤之助様
一同　二　松原左仲様
一同　二　內田周事様
一同　二　湯淺健次郎様
一同　二　野村彦兵衛様
一同　二　酒井對馬様
一同　三（板倉家の故實家）深川惣右衛門様
一同　三　岡本銀之助様　田中銀三郎様
一銀札　五　目付　米助　忠藏
一同　二　志賀健三
一交魚　伊勢屋藤四郎

以上

肉と骨との高き韻の外、何者も背景に有しなかつた先生も無言の勇姿を認められ、全體の答案の解決に突き當つたやうな氣が致します。他に競爭相手があらうがあるまいが、それは問題ではありません。全く何等他の刺戟を待たない自身の生長であり、創造の努力であり、蘊蓄と

容積との反響であり、益す興奮を荒立せ、火の玉といふ綽名を學生間から受けました。

先生は海軍傳習所に安政四年三月、創立早々第一期生として入學し、安政七年三月まで滿三ヶ年間修業しました。校長は木村圖書、教頭は勝海舟で、課業は日々午前八時から午後四時まで、陸上と海上とに於て、學科と實科との並行教授を受けたのです。當時の一期生は各藩から昌平校の俊才を轉校させたのです。然るに傳習所ではオランダ語で教授を受けるのと、基礎になる科學の準備がなかつた爲め、孫子呉子の兵法と方程式が代つて、近代の兵器及び軍略を研究することは、彼等には頗る困難のことで、無慘にも討死を遂たる學生が多かつたのです。先生は從來の科學的研究が大いに効果を奏し、全體の上に一大偉彩を發揮しました。海軍傳習所の最初の二年間は海軍一般の知識を注入し、終りの一箇年は專攻學科を修めたのです。先生は、同僚の鬼門としてゐた數學と測量觀測とを專攻いたしました。さうしてこの際、國家全體の組織の部分としての軍備をも、研究することが出來ました。當時の學科の成績は、先生を推薦した横井家老職がよく承知して居りましたから、私は現在東京に居住してをられた同氏の令息を訪問して聞知いたしました。則ち海軍傳習所在學中、先生の嗜考學科は數學でした。從つ

てその體系に屬する物理は、最も得意であつたとの事でした。先生は經驗理性及び科學の基礎の上に立つて、能率の上るやうに當來の知識を運用して行きましたから、活動が常に有意義であり、且つまた經濟的であり、合理的でありました、左に横井氏から得た新島先生に關する書面を記載いたします。

前略。當時幕府は築地(今の海軍大學校の所)に御軍船練習所を置き、各藩の有志をも紹介して、海軍の修練を講せしめし時に、新島氏も安中藩より練習生に入學し、氏は數學に於て(數學專門を主とせり)大に上達し、測量械を使用する程度に至り候。前述の如く宗家にて海寶丸を購入して以來、新島氏同船に乘りて一端備中に赴き、翌元治元年江戸灣に歸航し、北海に航して鹽鱒を目的として、同年三月函館に航行する事になり、其の際新島氏は再び同船に便乘して、六月上旬函館に着したるが、氏の米國渡行の楷梯に有之候、而して函館着の上渡米の盡力者は豫て御話せし澤邊氏、及び常時澤邊方に寄寓せし菅沼某の兩名にて、其の紹介にて御話の英國人の商館の番頭に依頼せし由に候。以上が新島氏函館渡行までの事實にて、現に當時海寶丸に乘組居りて、新島氏と知人なりし宗家の舊臣は、現在に居候。同人は新島氏歸朝後、氏か來訪の時は留守、同人が京都に來訪せし時は新島氏留守、斯く相互二三回に

及んて、終に生前に一別以來の面談を遂けざりしと云へり。草々。

十七日　　　　横　井　拜

根　岸　雅　兄

先生が海軍傳習所時代に親交を結んだ友人は、後ちに文學博士となつた川田剛氏と、今一人は杉田廉卿氏でありました。先生が勝海舟に知られたのは、實にこの時でありまず。海舟の逝去されるまで、當時の關係は持續されてゐました。先生の京都丸太町の自宅の書齋の正面に、勝海舟が當時先生を贊した額面が揭げてあります。

この海軍傳習所時代に、先生は海洋の自由を保持するために、一國の海軍力を養成するといふ前提は、やがて理想としては戰ひの道具たる戰艦兵器を絕滅すべきであるといふ、人道の大局に想到してゐりました。戈を止むるを以て武とする見地に立ちました。この時代に在つて餘暇每に先生の愛讀したものは。オランダ語で書かれたピーター大帝の傳であります。この傳は伊藤博文君や佐久間象山先生なども愛讀してをりました。これを見ると、志士の着眼は一層高所に在つて、彼等は國民的に統一のある國家を建て、制度形骸の上から世界の大勢に適應す

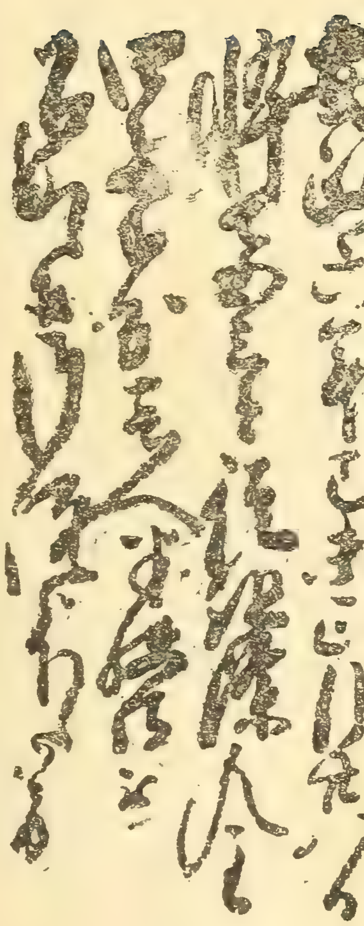
べき新天地を開拓しようと欲したものらしく、その歸結として彼等の性情がピーター大帝に共鳴したのでありませう。俊傑はいづれも浮世の小娛樂に滿足する樂天家ではありません。彼等は哲學的に徹底した自覺に達するまでは、生きた心地のせぬ程に煩悶するものであります。抑も天下を取らうとか、または哲學的の安心を得ようか、さやうの問題の起つた時、いづれも彼等は浮世の成功に跪いて、靈魂の平和を犧牲にするの愚は致しません。この場合、哲學的の安心を得ようがためには、帝王の業をも抛ち去つて顧みざる程の勇氣を出したものであります。

Peter de groote.

先生の頭の善い學生であつたことは、數學が得意であつたことで分ります、さうして先生の生命の徹頭徹尾が、數の象徵であつたことを忍ばせます。先生の頭の數字　は、寫眞の物象に對するが如く。萬聲を寫し。萬意を達する實務的本能でありました。故に先生の哲學も、教育も、處世も、一切が「數」の象徵であります。抑もギヴン・ネームの七五三太が數の標號であり、「太」い「アルハ」、「七五三」は「ヲメガ」を意味します。和訓は英語の「シンメトリー」に音韻相通じ、幾何學的整齊の體形を

象徴してをります。天才の道もこれに由らなければ、その妙を傳へることが出來ません。無限もこれてなければ、計ることが出來ません。およそ數の概念ばかりは、文化人も、野蠻人も、銀行家も、貧乏人も、ユダヤ人も「支那人」も、アメリカ人も、日本人も、そのクオリチーに於て同一であります。この一つなる眞理に立つて世界的の使命を自覺したのが、謂はゆる先生の「數」の生命で、またその生命が「數」の宗教であります。獨一眞神、三位一體と、數の發展が人間の實際生活の過程であり、さうして宇宙全體が無限大の未知數なるを以て、即ち人間は一個の靈的實在の單位若しくは一單位の人格者として、初めて神の經綸を度ることが出來、また體現することを得ると云ふのが、先生の宗教觀であります。先生の生涯は、恰も默示錄の記事のやうに、「七」と云ふ數を基礎としてその精彩を放つてをります。即ち、精神生活の中樞であり、また緊張のあつた時であります。七歳にして漢學を始め、十四歳にして蘭學に入り、二十一歳で脫走を企て、英語に移り、二十八歳でアメリカの大學を卒へ、三十五歳の前後に同志社創立並びに結婚が行はれ、四十二歳の時同志社大學設立の運動を起し、四十九歳で永眠いたしまし。た先生が精神生活の上に新境地を開拓しやうとする努力は、實に傍觀者の驚嘆心を唆る一種

のローマンスであります。先生の精神力の發動機は、絶えず順應の作用を行つてをります。先生を單に境遇の人として、その精神力に敬意を拂はない者があるとすれば、謂はゆる一を知つて二を知らぬ者と云ふべきであります。先生が傳習所を卒業して、機會を要求してゐた矢先に、流星の如くに、一葦を放つて太平洋に漕ぎ出でたのは、つまり宗家で軍艦を購入したけれども、それを操縦する人が無かつた爲めに、先生にこれを依賴したからの事です。宗家とは板倉家の總本家、板倉周防守のことです。軍艦海寶丸をアメリカから八千兩で買ひ入れ、これをその領地なる備中玉島港に回航しました。同時に先生をして、藩士に、海軍に關する事項を教授せしめようと、期待して居りました。



　先生の遠洋航海、即ち海洋の初舞臺は、實に鮮やかなものでした。先生の船長振りは、教壇

に立つた聖者の如く、肉は靈の光に溶け、一味碧瑠璃の潮水に泛んで、出る息入る息、悉く信仰生活の呼吸でありました。熊野沖の逆風、遠州灘の激浪も、靈性の權威を犯す何者もありませんでした。先生の日記に由れば、出帆後絕えず風濤と鬪た事が記載されてをります。中にも紀州熊野沖の倒瀾怒濤は、危く沈沒しやうとしかけました。けれども部下は先生の冴えた腕と、鍛鍊された頭腦と、冷かな理性とに吸ひ込まれて、外から殺倒し來る何物も、先生の靜かな優越を脅かすやうの事なく、たゞ各人の主觀の玉座を守るべき一種の障壁であるとまで、先生を尊敬したのでありました。「わたつみの潮の八重路にさく花の匂ひは同じ野路のくさはな」と、先生は一首を即詠して、萬有の生命の泉に堀りあてたやうの、徹底的の調子を示して居られます。かの巨船「タイタニック」の難破した際、英國のサー。ハンフレー・ギルヴエルトが、海底に沈まうとする刹那。WE are as near Heaven by sea as by land と歌ひました。天は西の海島の男子と、日東の快男子とに、時と所を異にして、同巧異曲の詩をうたはせてゐます。

この航海は文久二年霜月。木枯らし吹き荒む頃でありました。父氏治の手記に

一文久二戌年十一月十二日、悴七五三太、備中松山表へ軍艦乘組、周防守樣御願にて出帆致し候に付、

餞別到來、同三亥年正月十四日、無滞着備。

一風呂敷一　飯田丈助
一金壹朱（先生の姉）　速水おとき
一白足袋一　白井福藏
一玉あられ同前　植村おまき
一煙草一玉（先生此頃は喫烟せり）石井右兵衛
一でんふ一曲　御厩楽
一でんぶ一曲　星野潤四郎
一百年巻せん餅　飯田逸之助
一紺足袋一　清原來次
一同　江塲新太郎
一烟草一玉　岡田源七郎
一同（先生の蘭學の教師）　杉田廉卿

とあり、以上の餞別贈與者に、歸鄉後土産として、備中から持參の品を配布いたしました。

なほ左の數氏には、特に備中の國產を進呈致したのであります。

一柚べし　こんぶ　甲賀源吾
一かき　木村みね
一同　川田剛
一きびだんこ　飯田逸之助
一きびだんこ　淺尾藤兵衛
一柚べし　根岸團藏

この前年即ち萬延元正月十三日、恩師勝海舟は、日本最初の條約批准書を携へて米國に赴く全權一行護送の任に當り咸臨丸の艦長として太平洋を横斷桑港に渡りました。こゝに師弟の軍

艦を對照します。

艦長	勝海舟四十才	新島七五三太　十八才
船名	感臨丸	海寶丸
長さ	二十七間半	十六間
巾	四間	三間
	鐵骨鐵裝	木骨鐵裝
砲	十二門	二門
トン數	二〇〇	一二〇
馬力	一〇〇	スクーテー型（帆船）

今日、三萬噸級の太洋丸や、二萬噸級の加賀丸や春洋丸やを見た目には、殆んど隔世の感が

あります。我等の先輩が、二百噸前後の船で海洋を横行濶歩した大膽さは、實に欣慕に耐へません。

さて先生は熊野沖を通過して、鳴門にさしかゝりました。見るところのもの一つとして新奇ならぬはなく。教養のある理知を以て、活きた學問をしたのであります。神戸に投錨して、まづ以て、楠氏の墓に詣で感慨無量の涙禁じ難く、一詩を賦して社頭に納めました。

楠氏湊川の社に詣てゝ

英雄一去委塵埃。荒塚年々長碧苔。
棲鳥亦知千古恨。林頭啼向夕陽哀。

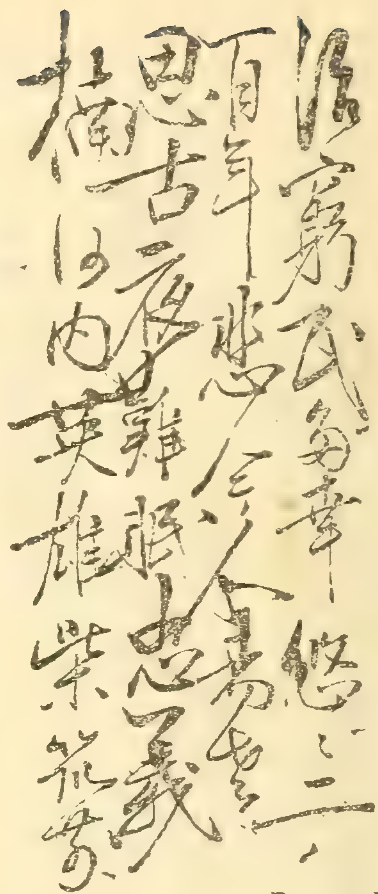
又

治窮氏多幸。悠々二百年。悲今人易老。思古夜難眠。
忠義楠河內。英雄柴筑前。

終ひに翌年の正月、無事備中に着し、投錨して任務を完全に果しました。その夜は恰かも十四夜の月であつたから、感溢るゝばかりの歌をよみました。

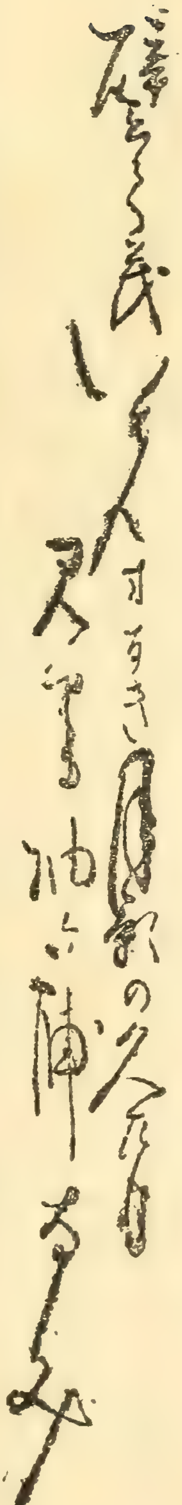
たとへてもいたんかたなき月影のくまなく見ゆる袖け浦なみ

先生は何時も自分の置かれた環境から生活の材料や刺戟を攝取して、失敗と成功とを閲しつゝ復び生活の機能に組み入れて、更新の意義を構成して行きます。人は驚愕に出つて哲學を始めると云ひますけれども、世の中で最も眞面目に人を動かすものは驚異であります。先生は總



べてのものを經驗に入つて來るまゝに受取りこれを分析して一旦、概念的の樣式に引き直した上に、更に其樣式を自由に驅使しました。さうしてそれが先生にとつては、日蓮のやうな熱となり、ポールのやうな熱となり、ルーテルのやうな熱となり、また殉教者の光ともなりました。先生が人生の眞味を嘗める舌は、科學の教ふる所を拒絕せず、哲學の究むる所に背反せず、科學の到り得ざる所、哲學の達し得ざる所の境地に對しては光明を直觀し、若しくは光明を攝取することが出來ると信じて、先生は向上努力されました。確かに先生に取つては、荒誕無稽の神話も一種の粗硬な科學で、科學そ

のものは實に洗錬された神話とも見られたことでせう。先生の叡智の進化の跡を考察する時、科學で作曲された直覺の詩を、自己の上に演奏して居られます。老莊の學も、釋迦も、マホメットも音符であります。青年時代の先生の書棚には、李白もあれば杜甫もあり、碧巖錄もあれば傳習錄もあり、ピーター大帝傳もあれば高等數學の教科書もありました。これらが皆な思はぬ所で鳴りを發して居ります。



嘉永六年、米利堅の船が渡來して、幕府がその始末に鼎の輕重を問はれてから、それが却つて善い意味に於て歷史の轉廻機となりました。外國との觸接を逃避するやうな愚かな事をせず、國家を積極的に建設して、個人としても競爭に堪へ得るだけの、心力と能力とを鍛へ上げてゐた人々が相當朝野にあつたればこそ、今日の文化が出來たのです。吉田松陰とか、佐久間象山とか藤田、大隈、近藤とかいふ人々は、世運の推移の實感に觸れて、對策をちやんと定めて居

つた人々です。何んと云つても、三千年の歴史を持つて居る日本國、屋臺骨は細くとも、中々張りがあります。天は日本國に新しい使命を下さう爲めに、驀進的に安政四年、江戸の大地を震はせました。封建が動搖し始め、特權階級以外に、布衣の寒生が地平線上に踴り出てまゐりました。室咲きの低能兒等は、寒風素雪の秀才に位置を轉倒いたしました。この地震の時先生は神田の上屋敷に住んで居りました。震災の最も劇しかつたのは神田一圓と云ふのに、不思議にも板倉の屋敷は人畜共に異狀はありませんでした。併し地を裂き海を揚るといつた變でしたから、御殿の柱は傾注して悲酸の光景を演出いたしました。その節、安中在所より新町の親方半吉といふのが、職工を伴れて出府いたし、修繕をしたとのことです、天柱折れ地維挫けたその有樣を見て、先生は世變を豫測したと思ひます。果せるかな、政治の中心は今や江戸を離れて、京都に移らうと致しました。萬延元年、桃の節句に雪が降るのが、稀有の象であるところに、大老が白晝暗殺されるといふ凶事が出來したのであります。

卓越性を有する先生は、專門的技術の範圍から國民永遠の利益を本位として見た時に、英國の海軍に拮抗する海軍がなければ、和すると云つたところが、戰ふと云つたところが、地は低

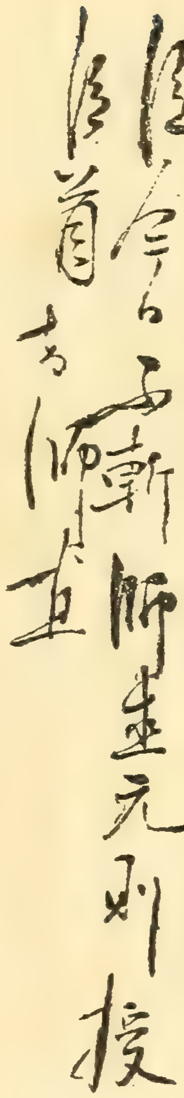
い、天は高いと云つた位のもので、何んの利益にも立つ筈はないと考へ、人が熱して脚下の事に眩惑して居る際に、先生は冷たい數學的の頭で、確かに國境を横斷して、獨特の社會を觀測してをりました。すべて高級の專門家は、實は國際的に發達しつゝある自己所屬の專門社會に於て、個性の發達のために、一大機會を發見しつゝあるのであります。先生は危急存亡に際して文を學ぶといふ筆法で、英語の天地に飛び込みました。斯かる直覺的の感受性は、後年米國ボストンのワシントン町にてロビンソン●クルーソーの傳を購究した時にも發揮され、人の喝采を博する箇所には沒交渉で、意外にも祈禱の眞味を學んだと云ふことです。英雄の見るところは恒に常人とその趣きを異にして居ります。

言語の變化は活動を意味します。例へば佛語に堪能の人はフランス人に接し、英語を操る人は自己の情操が英語を話す國民に共鳴し、オランダ語を能くする人はオランダ人を理解するのが當然であります。さうしてこれが道德的觀念に結び付き、政治的心理に現はれ、黨同伐異となります。同じ上州の先輩ながら小栗上野介はフランス語が堪能なるが故に、佛國と連衡して英語派の薩長を片付けようと致しました。先生はオランダ語で科學を學び、更に英語を研究し

て、巨人の靈にまで高められました。當時、英語の薩長、オランダ語の嗜宿・佛語の幕府と、この三系統の思想が衝撃して、新しい道徳が起り舊い道徳が廢れ・自發的に新しい社會を建設じたのが、即ち明治維新であります。一面からいへば、維新は政權の推移ではなく、語學から當然歸着すべき、文化的精神の爭鬪であります。

先生がイギリスの英語に行かずして、アメリカの英語に行つたことは、先生の聰明を裏書して居ります。既に英語の中心が、太西洋を横つて米國に移り始めた時で、米國の經濟の偉大な潜勢力の發展期でありました。事實上、今後の文化はアメリカに咲くべき運命であると思ひます。且つアメリカは人種の熔鑛爐で、隨つて世界の思想の整調される場所です。何となれば、英國では多くの場合、言語によつて自分の理想を說明せねばならぬのに反して、新世界なる米國では「自己を表現」するのに、活きた材料を以て實際的に表現することが出來ます。それに米國の地積は、ヨーロッパの人口密度の割合にすれば、およそ十億の人民を容るゝに足りませうから、從つて文學上の活動も十倍になるわけず。且つ人種が混合して居るから、相互の言葉は單純で、了解し易いものをよいとして居ります。これがアメリカに於ける英語の實際化です。

言葉の生命に流通性があり、實感味のあるのは、其處から來たのです。思想の使者として、公衆と共に歩き、公衆の必要を滿たさねばならぬと云ふのが、一般の感情であります。また宗敎にしても、生活の要求と理想とが、端的に表現されてをります。今日、日本同胞の內生活の改善にも、かうした明晰の理解ある宗敎が、一層新しい滿足を齎らす道であると受け容れられるやうになつたのは、先生自身のためにも、また日本のためにも、大なる惠みであります。



年わづかに十八歳で、而かも海寶丸の艦長として先生が、備中玉島へ遠洋航海する少し前に、例の櫻田事變がありました。落花粉々、雪紛紛、血精男子を唸らす事件で、午前九時頃の出來事だつたさうです。先生は例の火の玉に油を注いで、舌端火を吐き、「臣今日不ㇾ斬二師直首一即授二臣首於師直一」と豪語して、おつとり刀で驀然と日比谷に驅けて行つたさうです。これは新

島公義君から芝新門町の御宅で聞いた話です。この時、先生の腰に挿んだ秋霜の劍は備前の長船、祖火の辨治が石切火で淨め出て、行くさきへは必ず携へた一刀、不思議にも此の刀を佩いて、一度だつて不覺を取つた例のない業物、これを此の時先生は拜借に及んだので、怪我でもせねばよいがと、辨治は後から氣付いて心配したさうです。

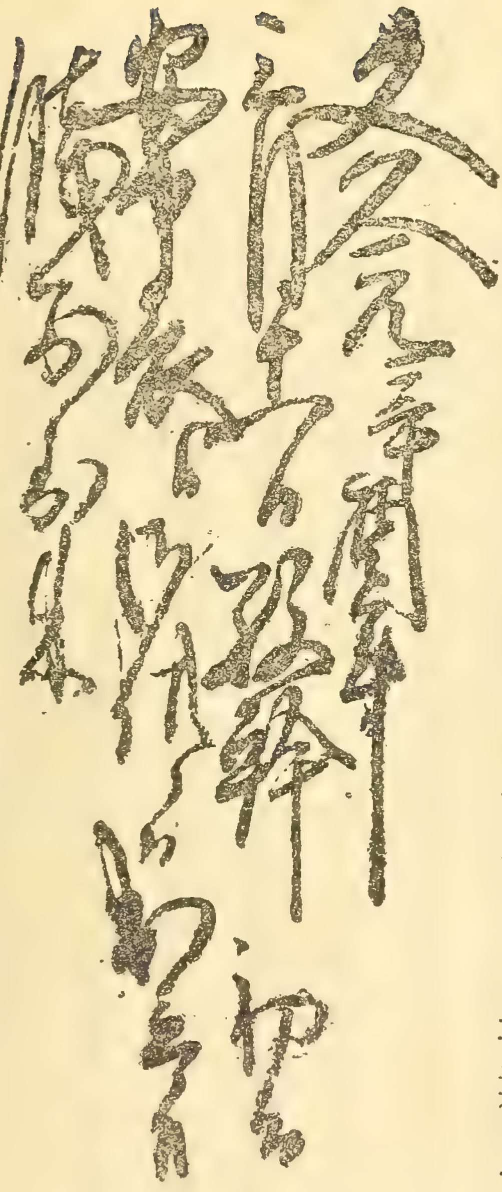
そこで先生の眉間の疵、これが問題になつてまゐります。中々の深手で慥かに刀疵であります。北海道時代の友人澤邊辰馬君の直語に、處士横議の際、向疵などは、人相を惡く見せ、對話者をして不快を感ぜしめるものですが、先生のに限つては、一諾千金を重んずると云つたやうに、內心愛敬の念を起こさしめるものであつたと、申して居りました。この疵は先生に取つて運命の一大回轉機でありました。これ程の刀疵に生命を取り止めたと云ふことが既に奇跡です。同藩の出身海保帆平君は、櫻田の事變で嫌疑を受け、蟄居を命ぜられました。それからそれへと先生の疵は迷宮に這入ります。

文久元年酉年三月十一日、敬幹初而安中表江御供にて出立に付餞別到來。

一風呂敷一扇子一對　田中隆平　一風呂敷一　金津喜太郎

一銀　札二　岡田源七郎
一元結大一束　坂本藤太
一麻裏履一　橋本嘉一郎
一銀　札二　市原利八
一まぐろ刺身一皿　白井福藏
一小菊三半切一　植村新次
以上

備中への航海の前年、即ち文久元年の三月十一日、先生初めて上州安中に君公のお供として入城いたしました。その節の行列に先生は先徒の部に編入され、祖父辨治は先發隊として宿衛係でありました。お供の總人員は七十名です。宿衛係は途次の本陣



その他、舍衛の分配などに機敏を要する役目です。若し他の諸侯と偶然一緒になる時は、先手を打つて本陣を取らねばなりません。下手をやると、脇本陣に這入らねばなりません。これらは君公の面目に關します。辨治はこの時助手として淸水帶藏、福田庄八を帶同いたしました。

第六章

先生は上州人の代表的氣分を一人で脊負ひ込んでをります。血精の所は高山彦九郎に、覇氣のある所は小栗上野介、若しそれ膽智にかけては新田義貞に似てをります。水滸傳の梁山伯かと思へば、また實務的の所もあります。先生の人格は、數奇を雀躍して喜ぶ青年にも共鳴があり、確乎不拔の思想家もそれに新趣味を見出し、瞑想家も新風光を感得します。先生の前身には野處落托もあれは、異境に放浪して、古鄕我れを容れずとも、我れ古鄕を容れる心境もあり、同胞の智識の低迷を憂悶する情熱もあれば、國家と社會との前途を思うて、苦慘な犠牲も拂つて居ります。歸朝匆々、伊藤博文君に拉せられて大阪の造幣局に行つたのは、その科學の棚卸したのでありました。明治九年、京都の內國勸業博覽會は、先生が實際施設に當つたのであります。いづれの方面にかけても、行くところ一つとして可ならざるはありません。かうした。該博の智識に立つた牧界の人でありますから、直ちに著者の個性の特色を抽出して、そ

の人を活躍させてをります。歸朝匆々、先生から激勵されて奮起した人々も多く、または先生の經驗に含まれた深い意義を捕捉し、現代生活の勇者となつた人々もあります。且つ經濟組織や合資制の產業上、有力な意義を理解して、富豪となつた人々もあります。

斯かる眞面目な先生も、一度は經過せねばならぬ青年期の危機を潜り、再生か然らずんば死といつたやうな、恐ろしい緊張した一路を踏まれました。實際かうした危機が、眞面目な誠實な人の一生に必ず有るといふことは、かのトルストイなどの生涯に見ても分かる事であります。備中玉島から江戶に歸つた頃の先生は、情熱と意志との二元場裡の闘ひの人でした。この場合に於ける先生の自由の情熱と自由の意志との調和が、取りも直さず、先生の青年時代に於ける最高悲劇の心理であり、復活への心理でありました。

先生の眉間の疵は、私の情緒を通して見ると、渾然としてその中に大なる意義が、味得されます。併し傳說は何れも小說的で、其處には一種の氣焰もあれば、また多分の色彩もあります。私は先生の操行を詮議立てする者ではありませんけれども、之は實に先生の心理と肉體との兩方面から、急劇的に深くひしひしと責め寄せて來た、不可抗力的の出來事であつたと思ひます。

この秘密の扉が開かれた時に、脱走の動機が無抵抗に開放されます。
先生の未亡人八重子さんに伺へは、先生の眉間の疵は、襄が幼き頃、一橋の藩邸の前なる御陣ヶ原に椎の立木があつて、その實を採らうとした時、警吏が來たので、あはてゝ木から落ちて負傷したものだと、話されました。また私の近所の方で當時しかもその場に居合せて、繃帯の手傳ひをしたと云はれる方の話によると、それは先生が紙鳶を物置の上で揚げて居つたその際に廂から落ちて拵へた傷と承りました。先生の姉おみよさんの直話によれば、客來があつてその客が歸るさに襟卷を忘れたのを、後ろから追ひ駈けて屆けようとする刹那、躓いて拵へた疵だと申されました。普通は脱走の航海中、船長の銀のメスを海中に落した爲めに、打擲されて受けた疵だと信じられて居ります。また或る人は船客が枕を持ち來れと云つたのに、それが手間取つて激怒に觸れ、枕で打たれた疵だと申して居ります。かやうに先手を打つたり、後手を打つたりしてをるところに、暗示が含まれて居ります。必竟、不明と云ひ放つてしまふ方が、この消息を語る一番の雄辯だと思ひます。物をあるがまゝに見ることは、被動的の仕事でなく、活動的の仕事であります。徒らに衝動によつて取り上げたり、または好尙によつて取捨

すべきものではありません。

櫻田事變以來先生の手帳は理知と情熱の若慘な記錄です。

休レ唱陽關三疊曲。陽關三疊不レ堪ニ悲一。

贈レ君馱馬河邊柳。折自ニレ南枝ニ至ニ北枝一。

の如く、今更ながら深い歎息なしに讀むことの出來ぬ、憐れな記述が一方にあると、また一方には、

爲レ官應ニ閣老一。妻娶應江西。　（右相模屋江西の贊）

と云つたやうに、一かどの英雄氣取りの態度で、盛んに氣焰を上げて居ります。これらの感覺的な多錯華麗な方面から、先生の精神狀態に多少の動搖が來て居ります。さうしてそれが刺戟的の行動だけに、先生としては飛んだ見當違ひであつかも知れないけれども、それが決して其のまゝでは濟まされません。恰かも幡隨院長兵衞が水野を向ふに廻はして戰つたやうに、反對側の大物にぶつかつて行くと、其處に感激の泉が發見されます。これが背後の支柱となつて恐ろしい爆發をいたします。何んといつても先生は生粋の江戸兒であります。壓し潰されさう

とすればそれを勇敢に押し退けて、何時も新しい世界に突進して行きます。さうして未來に生きると共に、豊かな過去を其のまゝ持續して居ります。この絢爛の渦巻きの中で一小事件に遭遇しても、先生はその事件を小さな生命と見做して、大英斷を下します。さうして部分を活かすと共に、全體に活きて行きます。頼まれたら最後、何處までも遣り通すと云ふのが、この疵の一象徴であります。併し並製の江戸つ兒が、他愛もなく素晴らしい活動を演じて、一寸興味を覺えさせますが、本當の江戸兒となると、忍耐の殼を破つた勇氣でありますから、同じ直接行動と云つた中にも、深甚、絶大の創造的努力があります。故に不聰明に代るに聰明となり、無智に代るに智となり、將た失敗に代るに成功となります。かうした積極的方針の行動が、どうして先生に取れたかといふことに就いて、おのづから一つの説明が與へられてあります。それは蓋し先生が靈活の氣を千秋に聳ゆる巨人富士山から受けたからで、先生はそれによつて、江戸ッ兒の意識を造り上げ、品位を重んじ、精神上の高潔を尙ぶ道徳的觀念を築き上げてをります。乃木大將も江戸ッ兒です。日蓮上人も富士の雰圍氣内に發生した人です。

さて神田は柳原上總屋と云つて、先生常得意とした貸船業兼貸席亭で、備中玉島航海の慰勞

會が催されました。宴會が果てゝ、先生が元氣よく歸途に就くと、薄暗い行燈の下に筮竹を握つて居た占師が、「嗚呼巨星隕」と、先生を目掛けて云つたさうです。これが滲み〴〵胸喰ひに入るやうに感じられた時に、先生が狼籍者めがといひながら刀を拔くと、何か手應へがあつたそれと同時に怺へるやうな呻き聲がしたと思つたら、その時先生の双頰にも鮮血が滴つてゐたのでした。

「嗚呼巨星隕」といふ誇張的に言つた文句の中に、如何なる迷信が含まれてあつたかは分りませんけれども、何やらその易が詮をなしたやうです。果せるかな、この數日來、新島家に起つたことは、南といふ醫士との交渉の多かつたこと、例の顏役長谷川與八の處へ祖父の辨治が數回訪問したこと、これらの情況から判斷すると、文久三年二月二十一日から三月初旬までの間に起つたことに相違ありません。先生の疵が向ふ疵で、しかも重傷でありましたから、先生が受け太刀ばかりでなく、對手もまた生死に關する場合であつたでせう。その場合の交渉は一切老練な辨治と長谷川與八との間に、手際よく片付けられたものと想はれます。然るに端なくも此の事件が急轉直下して、先生が新運動に入るべき黎明となり、直ちに新曙光に觸れる機會と

なりました。脱藩脱走など、神秘的の色調を帶びた現象が、次第に發生してまゐります。先生が、在米時代、岩倉全權に拉せられてドイツを巡歴中、ベルリン大學生は先生を「トーストマスター」として、ドイツ流の萬歳を唱へて敬意を表したと云ふことです。先生の眉間の疵が何處までも戯曲的の色調を加へながら、公衆の好奇心に投合し、意外の程度に反映したものでした。兎に角それは先生の一斷層であります。若しそれ其の事實に含まれた意義を端的に語るならば、先生の生活全體の改善を遂行せしめた動因、或ひは先生の性格の發展して行つた徑路に横はる劇的興味の主成文とでも申しませうか、何は兎もあれ、先生の眞劍さと純粋さとには、驚嘆せざるを得ません。それにまた先生が冷靜に構へて脱走の機會を作り、更に合理的生活をなすべく志向を轉向し、知覺と官能とに整理するだけの餘裕を時間の上に將、また思慮の上に見出したことは、實に驚くべき奇蹟であります。どうして斯うした強い意思、または明晰の頭腦を持つて居られたか。先生の棲んでゐた文化と敎養とはどんなものであつたかといふに、それは必竟するに、科學と語學との賜物でありました。前者は自然界の現象を利用しつゝ順應して行く態度と、後者は知的圖式を以て示された計畫の合理性と可能性とを、洞察する必要の鍵

となり、またこの兩者が先生にとつては、生命の飛躍と叡知の飛躍との翼でありました。さうして先生の語學の造詣は、使徒ポールのそれと酷似して居ります。

地を變ずれば先生はポールで、ポールは日本の新島です。その性格に於て、その閲歴に於てその境遇に於て、兩人のそれらは千古を隔てながら、なほ且つ符節を合する趣きがあります。著者先年京都に旅行して、丸田町のお宅を訪問し、未亡人に面會した。その時、先生の書齋に導かれ、未だ私の對照中に入つたことのない程、深酷な境地に立たやうな氣が致しました。その手澤の存する總てか、先生の生命の發現で、先生の欲求乃至本能が極めて有力な作用をなして居ることに、私は氣が付きました。それは「汝等の心を新にするを以て自ら變質せよ」と云つたポールの言語が、先生の信仰の結晶となつて居ることであります。劈頭、目に映じ來つたものは、乃ちポールの銅版の大額面でありました。未亡人に伺へば、一議に及ばず、「義人は信仰に由つて生くべし」と云ふのが裏の生命で、聖ポールによつて高潮され、その信仰によつて生命に入り、教へを得、平安を得、剛健の氣象を養はれ、光明を認めたのですと、申されました。何故に先生がポールの信仰生涯に共鳴したかといへば、內省に於て同一の苦悶、懊惱があ

つた故でめります。ポールの「我は罪人の首なり」、また「我は肉なるものにして、罪の下に賣られたり。我が肢體に他の法ありて、我心の法と戰ひ、我を擒にして、我が肢體の中に居る。罪の法に從はさることを悟れり」と云ふ段は、先生が青年の危機に際して、懊惱した聲であります。さうしてポールの生息した社會は、階級的區別の極めて甚しい社會で、この邊も先生の生息した封健の社會と同じです。先生に江戸ッ兒たる自負心と、精神的階級者たる抱負があるのに對して、彼には選民中の選民であるといふ自負心があります。さうして彼の信仰は、律法によつて維持される宗教で、その高尚なる概念は哲學者にこそ讃美されるでせうけれども、群集には何等の印象をも與へなかつた所なぞも、先生の生ひ立ち時代の儒教と酷似して居ります。先生に注入された儒教は、漠然たる德目倫理で、士君子と稱する仁ですら、二重生活を送つてゐたものです。それを公私一般が是認してゐたのだから、不思議な事です。少しも罪の意識のない、さうして服從を強いる國家に、最も都合のよい教育であります。國民の個性の發展することを喜ばず、皆な一樣に或る種の典型に嵌まつた人間を作り、彼等に想像も獨創も働かすことを禁じ、外律的に傳來の舊慣を墨守せしめ、たゞ以て無爲の平和を求めるに過ぎないと云

ふ悩みは、ポールも先生も同じ事でした。彼がタルソーの大學で心靈學を學んだのに對して、先生はアントバアーの神學校で神學を研究しました。ポールは自國語の外、ギリシャ語に精通し、ラテン語の造詣もありました。實際、世界の文化を代表する諸國語に通じて居つたわけです。彼はそれ等の文學を綜合し、または對照して、自分の人格を築き、これを宇宙全體に押し擴めて、宇宙的精神生活の人格を活現し、宇宙的博愛の生活に入りました。新島先生も英語に通じ、オランダ語に造詣深く、ドイツ語を解し、實際、近代文化人と理想を同じうし、憧憬を同じうし、神と共に働き、神と共に樂しむ人格者となりました。

　先生の如く多角的な個性の人は、それ自身の高度個性によつて、結局、大能のものとなる可能性があります。道徳にまれ、心靈上の事にまれ、智識にまれ、自國の國家哲學に不安なしに生活が出來ないと感じた時、その境遇に目を掩ふて居らるべき筈はありません。取材の範圍の狹小、單調なる天地に跼蹐して居ることは出來ません。探究すれは、自己そのものが社會で、自己を切り放して、社會を見ることは出來ません。自己がすべての根本であり、全體である所以を知つた時に、人類に對して純正な合理的の態度を取ることは當然で、その自己を完全に生

長發達さすべく社會をより善く改造しようとすることは、如何なる階級の人よりも先生に一層、敏感に眞摯に感じられる筈です。結局、この點まで來ると、語學が人類共通の運命を開く鍵となります。また人類の智識海の寶筏であります。自國語と他國語とを比較して、その中にある意味や精神を對立させ、分解し、且つ統一します。元來、國語には國民的特殊の色彩があります。從つてその國家哲學を特色づけます。併し、これが必ずしも聰明なものとのみは云へません。ドイツが世界戰爭を惹き起こしたやうの事は、その國民の衝動であります。カリフオルニア人が排日をするなども其の一例です。各個人が世界奉公の意思を自己に體現することが必要で、品性が國策となり、個人策となるに至つて、初めて人類に平和が來るのです。結局、愛國心の中毒や不聰明は、博言によつて矯正されます。かのポールや先生やがこの高所から俯瞰した時、コスモポリタンの概念に醇化された愛を容認することになります。さうしてこれが強い實行の力となり、初めて道德が生命のあるものとなり、自我の責任を解し、個性の尊嚴をなし、人格的個性を知ることになるのです。結局、人格の完成は、人類全體を對照として愛の奉仕をする場合にのみ得られるのだと云ふことを自得し、その思想と、その信念が、先生を海の外へ

と導きました、

ボールの傳道書簡に比すべき、先生の初めての傳道書簡があります。これは先生が例の飯田氏に宛て、米國から遙かに寄せたものであります。何處までもボールです。

新島先生の手紙

其後は存外之御不音仕候段、萬恕可被賜候。偖先生益御壯健に被爲在候半と推察奉祝賀候小生義も碌々舊に依り書上に消光せる段、何卒御安慮可被下候。さて此度愚弟へ申越候通、小生歸國之一條、如何して宜き哉、先生の御周旋を勞し度候。兼て御存之通、小生義公禁をも不顧、臥櫪千里に驅する志を起し、遂に海外を跋渉し、千辛萬苦今日に至るは、全く國を愛する深による。然し國禁を犯せし段、國刑を免れざるを得ず。其耳ならず、小生亞歐へ參りしより、如何して歐洲の各國及米利堅の、日に強大に相成しやを克々探索せし所、漸く其妙奧を見るを得たり。亞細亞及び歐羅巴の歷史を見るに、獨一眞神、無所不能、無所不知、無所不在、無初無終、「ゴッド」、萬有之造物者、見て不得、取れとも不可取の靈神、帝中の帝、王中の王の眞理、妙道を信奉せし人民は必らず榮へ、其を忘却せし國は益意頓に陷る。四千年以前に興起せし「イジプト」、其後「エッシリヤ」、「バビロン」、「ボルシヤ」、「グリー

ス」羅馬の盛なりしは、今何所に在る。印度は甚古き國なれとも、至愚の佛法を信奉せし故、益愚頓に相成候て、空く英人の所領と成れり。且支那日本に於て一切此妙道を知らざりし故、當今の日本は百年前の日本に格別の相違無之、唯古史舊經を索る事にして、一切開化に進まず、是ぞと申す新發明も不致、却て當今之日本は、百年前の日本に劣れりと思れ候。此眞神の道即ち耶蘇の福音は、孔孟の道に比すれば、唯馬と鹿の相違なる耳ならず、實に月と鯰魚との相違に齊く思れ候。耶蘇の教は益榮え、孔孟之道は益衰ん事必常なり。依て小生も頗る此道に志し、當今は「アンドワ」邑の神學館に此道を攻め居候故、何れ歸國之上は此道を主張し、有志之子弟へ相傳へ、益國を愛し民を愛するの志を勵まさん事を望む。且兼て學び得し地理、天文、窮理、精密等の學をも傳へ、富國强兵之策を起す耳ならず、人々己を修め、獨を愼むの道を教へんと存候。但し人々己を修め、其身を愛するを知らば、己の住める國を愛せざるを不得候事、自然の理なり。

兼て「ポルチュギース」人の日本に參り傳へし道は、當今强大なる英國「プロイセン」、合衆國にて信奉せる教道とは、大に相違甚大なる誤あり。「ポルチュギース」人の中には「キリシタン」宗門に入る者は羅馬の法王に隨、且法王を隨拜せねばならぬ云々、然し亞國に行れる教は、實に獨一眞神の眞理にして、我等の奉拜する所の者は、唯不可見の「ゴッド」、我輩及び天地萬物を造れる天帝なり、扨此眞神を奉

拜し、且眞神を信愛せば、必らす國を憂へ、民を愛する志を起さん。且富國强兵。かつ人心を一致せん事、此妙道に如く者なからんと存候。如何となれば、羅馬法王の「キリシテヤン」宗門を奉する者、益其勢を失へり。例令ば羅馬「イタリヤ」、「スペイン」、「オーストリヤ」、「ポルチユギース」、佛朗西等の國は、一時强大なりしも、今は遙に英國、亞國、「プロイセン」等の下に居れり。强兵にほこれる佛人も、今度「プロイス」人との戰爭には大に敗北し、有名なる國都「パリス」も十日前に「プロイス」人の手に入り、十八萬の佛兵「プロイス」に降參せり。扨小生申せし通、「マツド」を信奉する國は甚衰へ、之を閑却せる人民は必らす亡ぶと申候。是道は奇々妙々、人心一致する事、駭に堪たり。

「ナポレオン」第一佛兵を恃み、「プロイセン」に攻入り候節は、彼國にて文は格別盛にあらざりし。然し彼「プロイス」人敗を取りしより、敎育を盛にし、別して此眞神の道を主張せし故、文武共振ひ、人心盛密、益固、遂に如此强盛なる國と相成、嘗て有名なる佛兵も空く手を下し、「プロイス」人に降れり。且英國、亞國に於ても、文物日に盛に相成、色々の駭べき新發明となせり。且此道を奉する國には、格別貴賤の差別無之、富者は窮人を救ひ、貴者は別に貴からす、賤者亦賤ならず、上下共に一致し、公然癈敗すべからざるの國と成れり。依りて之を見るに、憂國愛民の士人、此道を攻め、此道を國人に敎へすんばあるへからず。何れ小生も歸國の上は此福音を講じ、國人の土炭にまみるを救はんと存候。然

し政府に於ては、今日此眞理を「ポルチュギース」人の傳へし道と一に見、矢張此教を奉する者には必ず嚴刑を加へんと存候。扨小生の如きは海外に遊歷せる身分、若し政府に於て嚴刑を加へるの沙汰有之候はゝ、天下豈至る所に住む所無からんや。「ヒマラヤ」山を跋渉し、太平洋に鯨を漁する、只小生の望む所。然し國を愛する志、日に益し月に長じ、我日本の隆興せん事耳、日夜「ゴッド」に祈禱し居候。我日本の開化に進むを見ば、小生に於て餘の志願は無之候。依て先生何卒小生の志を察し、小生の滯碍たく歸國相叶候、樣内々政府の有司と談判下し賜ひ、且此福音を講じ候はゞ、矢張前例に依り政府に於ては嚴刑を加へ候哉、又は小生縱令福音を講じ候共、身に難澁は無之候哉、克々穿鑿被下。後便には右之趣が細御告被下候。小生の亞國に於ての親友中に、亞人と相成り、亞國大統領の保護を得て、日本へ歸るべきが宜しきと、若し日本人刑を加へば、亞國の大統領より宜しき所置の有之候、右の段如何致して宜しきや、是又御告可被下候。

さて色々申上度候得共、何分寸暇を不得候故、如此亂文を以て玉机下に呈す。唯願くは加養せよ、萬恕

千八百七十一年二月二十五日　　新島幹

飯田逸之助君

妻君へもよろしく

備考。右飯田君は先生幼年時代の漢學の教師で且つ脱走の時、先生の脱走を援助した方、卽ち先生の先輩に當る同僚です。

先生の青年時代に、世界の局面は一變しました。則ち交通機關の發達がその機會を造つたので、交通機關の發達ば國家存立の外的條件に、益す重大な位置と價値とを附與する事になつたのであります。イデンの花園のやうであつた日本も、ロシアが北門から攻め寄せ、イギリスが鴉片戰爭の餘威を振つて南から詰めかけ、アメリカが嘉永年間に軍艦を日本に送つて來た爲めに太平洋は大變洋となりました。イキリスは一面ロシアの南下を抑へて、インド若しくは支那の市場を確保する爲めに、日本に干渉がましいほど世話を焼き始めました。殊にイギリスの商人は、戰線に立つた尖兵のやうなもので、彼等が商戰を開いた後から、國家の本隊で殺倒して來るといふ寸法で、貿易は國旗に從ふと、いふ政策が、隨分露骨であります。イギリスの一商人の事件には政府が必ず後援すると云ふ次第で、往々、一個人の關係から、國際談判を醸すと云ふやうなことが、多々ありました。何はともあれ、國家生存の活力から出發した政策であります。結局、金貨を多く自國に吸收すると云ふ趣意です。斯かる政府を代表する公使は、隨分

勝手な振舞の多かつたもので、譬へばイギリスの最初の駐日公使パークスが、澤外務卿と外國君主の稱號に就いて談話中澤君が「クイン」と狗犬と音韻相通ずと云つたところ、パークスは直ちにコップを澤君にふつけたといふ位で物騒な事でありました。

さて、英米が外交の樞軸で、而も幕府の外交は少しく行き詰つた有樣でした。何さま適當な外交家が見當りません。將に外交が幕府の致命傷とならうと致しました。當世の時務を解すると云つた者が、晩蒔きながら國情政治の研究にかゝり、語學の練習をやるといふ有樣で、普通の士は軍艦を見て、彼等が上陸したならば、目に物見せんと槍をしごき、または彼等は卑怯にも飛び道具を用ふるなど云つて、切歯扼腕して居つたのであります。斯かる際に、先生は深く國家の前途を思ひ、外交的恐怖が海嘯のやうな勢ひで暗く押寄せて來たその恐怖も、事情の上からは有り得る事として一應は肯定したものゝ、また靜かに考察すると、その心理的內容には確かに多くの錯覺のあることを承知して、自分が信ずる優等の意見を準備し、輿論を目的の方向に指導すべく、理想としては敵その者をも改心させる意氣込みで、海外へ飛び出しました。同時に自己の品性までも偉大にし、自己の智識をも擴充し、自己の才能をも發達せしめ、直接

行動が達し得るよりも、遙かに高い程度に於て達する方法、即ち武勇から文勇に進んだのでありきす。この時代の先生は、完全に常識を準備しその精神に於ては西洋文化の歸趣に究極の理解を見出し、その手法に於ては聖賢の衣鉢を踏襲して、其處にいみじき偕調の美を表現したので、それの與へる感じは、豪壯よりも優美、崇高よりも典雅でありました。次第に深奥に進んだ先生は、自已の理性に眞み、當然解かなければならぬ事は、何等憚る所なく其の問題に面し本然の要求に合致すべく明究致しましだから、漢學などに對する態度としても、餘程普通人とその選を異にしてをります。則ち林家の朱子學に對して、先生は陽明學派に起たれました。その立場は如何にも卒直です。かの官僚學派の主張は、人間の性情を探究するのに、論理的の遊嬉をして居るやうな、迂濶の所がありましたから、先生はそれを棄てゝ、實用經世の陽明學派に這入つたので、かの熊澤蕃山や中江藤樹と同じ流儀でありました。この邊の事は俗界に、紫雲を呼ぶのには、聊さか怜悧過ぎる思ひが致します。

先生が脫藩の前日、芝區赤羽橋畔に秋水江翁を訪ねて禪に參じたことは、小さな活字で埋めたなら、聊さか好奇心を鈍ぶらす憂ひがないでもなく、また人によつては、先生が何んだか佛

教にでも囚はれたかのやうに、妙に厭やな氣持の惡い輪廓だと探る方もあらうけれど、さういふ人こそ、自己の主觀に描いた我が佛貴し、と云つた先入觀念に捉はれてゐる人ではありますまいか、先生は詰まつた心持と智恵とに何等かの新しい轉機を見出すべく時に高い大空を仰いで心雲を眺めながら、無念無想の數時間を過ごすことが、肉體的にも精神的にも、意外に大なる効果のあることを悟り、そのために禪に參じたのであります。縱しさうした事が、消極的心狀であつたとしても、それが、先生にとつては自分の心靈の底から湧き上つた、純眞な、靜かな生活に對する、中心の要求に外ならなかつたと思ひます。さうして先生の心狀が極度の緊張を示した時に、參禪から強い暗示を受け、根底あり、統一ある、靜かな心靈生活に向つての滿足となり、先生の寂びた清淡な心境が、其處から開けて來たゞらうと思ひます。

先生の平淡で而かも清新な、さうして澁味のある俳句や歌を見ると、先生がさうした天然直寫の裡に、自己の生命を現はして來たことを知ります。私の秘藏中の先生の自畵自贊の句に、「人を茶にする畵かきか那」といふのがありますが、先生の禪味を發揮したものであります。また先生が當時參禪の樞機を洩らした文があります。

同大葬師訪ニ秋水江翁於ニ赤羽里一。歡飲痛醉至ニ午夜一而皈。師作レ醉時歌以贈レ兼。兼示レ予亦賛ニ一歌一。以示レ師兼呈レ翁。

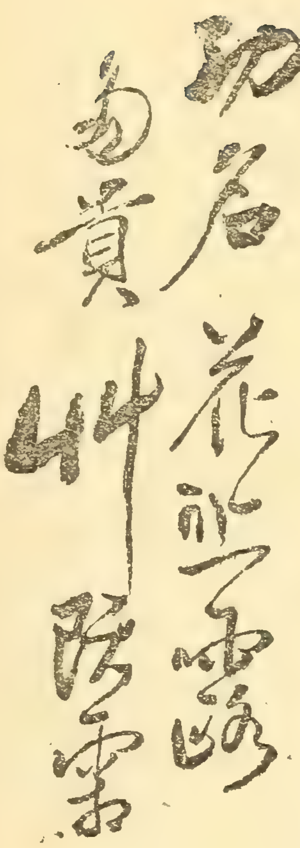
不ニレ爲握三乾轉レ坤之名臣一。須レ爲ニ嘲風弄月之逸民一。男兒氣宇天地廓也。人間何物能霸。葬師永淸而玉潔。涅レ之不レ緇磨不レ磷。浮槎杳然弄ニ法海一。直入ニ上乘一悟ニ其眞一。粗豪我是任俠子。燕趙結レ遍悲歌人。壯圖一敗痛折節一。江湖更與ニ魚蝦一馴。一朝意氣相投合。途雖ニ粗殊一情自親。君不見羽橋西環堵宅。中有ニ倜儻非常客一。柴門瀧掩老樹陰。蕭然遠與ニ紅塵一隔。我伴レ伴師來訪其人。紫電瞥々眼光射。邀レ我爲掃ニ其榻一延。話熟不レ覺日西夕一。感來懷レ古又慨レ今。嗚咽說盡興廢迹。把レ臂殷懃共相盟。歃來淋漓丹血滴。嗚乎自レ古志士抱負與レ時睽。多將筋骨供菹醢肉。放浪唯須務自晦。蹉跌或怕共噬レ臍。我將同翁脂ニ其轄一。從レ師徜徉臥ニ岩棲一。二羅衣對ニ一雲衲一。三芝之山是虎溪。高堂酒酣夜將半。纖毫狼籍杯盤亂。我醉欲レ舞君請歌。世事浮雲何足レ歎。

乞野斧　元治三元年三月十一日　敬幹

第七章

「爲レ官應ニ閣老一。娶レ妻應ニ江西一。」といふ文句が、海軍傳習所時代の先生のノート、ブックに數多く書き散らしてある所から見れば、先生が歡樂の場面に底力の這入つてゐたのも事實であり、また肉慾の天國に翺翔した事も、肯定的の事實であります。併し其所が歷史を讀むの難い所であります。維新の風雲を蘊釀した志士の人々も、「世の中の烏を皆殺しぬしと朝寢がして見たい」などゝ駄句つた逸話で飾られて居ります、それを文字通りに讀むと、如何にも相應しからぬ節のやうに讀めますけれども、能く嚙み分けてみると、朧ろの色に融け込んで居る思想に、勤王の思を述べた悲壯のもので、幕府の執政を殺して、再び天日を拜すると云つた、純な心意氣を歌つたものです。蜀山人が顚狂瓢輕の詩人であつたと思へば、何ぞ圖らん、その筋の視線を避くべき假托の妙計であつたと云ふことです。兎に角、先生も海軍傳習所時代からめき〱男を上げて、どうやら一隅に腰を下して成佛しさうにも見えませんから、あらぬ猜疑の犧牲を

避くべく、鋒芒を藏めて、周圍に柔かな匂ひを撒き散らす必要を感じた節もあります。故に、全く官能的、錯覺的な青春の奔放とばかり見るべきでありません。やはり、大石流の眞の奥に煌いてゐる。先生一流の機智が藏されてあります。



先生が一艦長として、海洋の初舞臺に風濤と戰ひ、絶望の悲哀をひし〳〵と味ひ、時に蘇生の歡びを爆發し、抑揚の强い生活から感情に起伏があり、凸凹があり、高低があることを感じ、轄然として眼に見えざる精神の王國が先生の前に啓きました。即ち、その意識の内容を撿すれば、先生は内に屬いた權勢利慾によつて滿足を贏ち得ようとした時代から、去つて創造的方法によつて遙かに高い資格のものを獲得しようとする時代に移りました。そこで、「功名花上露。富貴草頭霜。」と先生一流の哲學を撚出し、自然の論理的發展として、創造力を自己に發見し、人間生活の求心的機能を感得し、自己を拯ふと共に、國家生靈を拯ふことを、自己の直接責任として意

識しました。また一面から見ると、眞實性の稀薄となつた社會や、閑文字を讀むことの辛さや實際、自分を現實の境遇に置くことの痛にしさやを、考へてみると、内容の空虚な智識をその周圍に並べ立てたり、推理力を痲痺さするやうの事ばかりしたり、折角自分の實驗を遂行しようとすれば、必然の結果として不良青年扱ひにされたり、自分の主張を支持する理由を擧ぐれば反つて裏切られたりなどして、最早や一日も安定が出來なくなりました。何んでも自分が振返つて自覺しなければ滿足が出來ず、更にこれを他の言葉で云へば、非常に物の充實することを要求する心理になつて、已と云ふものが現に存在して居る以上、その已れを無視しては駄目だ、少くも自己を半面と認めねばならず、我の存在ほど重大な事はないと云ふ意義が、先生の常識に働きかけ、さうして陶冶される感情をして理智に交渉せしあ、事實的に具體的に、想像力によつては生活するより、智力によつては生活する方が、滿足すること一層多くして、悔恨を齎らすことが一層尠ないことを承知して、飽くまでも自分の胸に應へるものを得るまで進むといふのが先生脱滯の動因となつたのです。

先生は夜前、秋水江翁の宅で陰慘な離別をなし、歸宅いたしました。さて明日は母國の別れ

愛着の執心交る〲押し寄せて、いづれ良心の強い人ほど泣かねばならぬ、勇しい、悲ひ、運命をかこちながら、そのうち爽やかな上野の寺の鐘が、眠りの足りない耳許に落ちて來る。先生は、

惟昔嘯花吟月日　清歌妙舞々依々。
惟今只是餘何物　三尺劍與一枚衣。

の一詩を賦して、いさゝか新裝の驕慢に耽りながら、母國時代の意思の總量的決算をつけました。

花の春をめでゝ、都の人は眞底から三月を祝福すると云ふのに、先生は世に反いて、興奮を荒立たせ、超人的な意氣込みで、元治元年三月十二日鹿島立ちして、江戸を出帆いたしました。先生の行動は、野に放たれた猛獸の如く、極端な自由で、大膽であります。先生は驚異を求めて進んで行きました。それが精神的内容となり得るやうな意味への實行であり、また最後までの實行によりて體得される、その眞實の味識を摑まう爲めの、正しい形に於ける個人性の集中でありました。かうした事は、人間の創造力、個性力を深く認識した數量的發展で、また性質

的進化であります。これこそ神人を超人に改正させ、超人を凡人に改正させた意志の別名である各人の超人化、各人の神人化で、デモクラシーの開祖は、先生であるかのやうな感があります。

さて、先生脱走の船は、軍艦海寶であります。三月十三日、北海道に向つて出帆したもので、江戸灣に碇泊したのは、約四週間でありました。この間數年來、宿題となつて居つた脱走の機が、眉間の疵から急轉直下その機を早めました。さうして脱走の地點の利害、實行の按排などには餘程の思慮を廻らしたに相違ありません。即ちこの際先生の心意の働きと、行爲の向ふ所を規律としてをる思想は、吉田松陰の失脚に基いて居ります。松陰が幕府の最も警戒網を密にしてゐた長崎を選んだのは、同人の所思を果たすことの出來なかつた理由です。松陰がそれにも懲りず、再度、浦賀で失脚したのは、聊さか千慮不成功の憾みがあります。察するところ當時志士の間に惰性的に、長崎か浦賀から脱走すると云ふ心意が、強く働いてゐたに違ひありません。先生が逆に箱館を選んだのは、かなり苦心の結果であります。いづれにしても非常な危險が伴つて居るので、一歩間違へば、兩親兄弟もろともに處分を受けないとも限りません。もとより先生の脱走の動機乃至目的は、國家の前途を思うてのことで、その輪廓は極めて明瞭

でありますけれども、實際の行爲から云へば、その當時の國法に照らして不法であります。故に脫走當時の舊藩の輿論としては、父民治の書面にある通り、不忠不存の譏りを受けたのも、一應無理ならぬことゝ思はれます。

さて新島家の危急存亡に際して、輿論を整調し、且つまた先生の脫藩を幇助し實に先生を復活へ轉向せしめた恩人として、飯田逸之助氏を忘れるわけに參りません。今、便宜上先生の脫走の時機を二つに分けます。卽ち、因果的關係をなして居る脫走の前提たる脫藩と、故國を離れた脫國とであります。先生の北海道行きは表面、海軍術修業の名儀でありました。何分にも藩士の中に見當違ひの愚かな疑問を發する者があつて、海に緣のない安中藩に、どうして海軍修業の必要があるだらうかとか、また藩の常務を執らぬ先生が、反つて優遇されるのは奇怪であるなどゝ云ひ振らし、めきめき出精する先生を歪めようとする手合が、幼稚の詭計に苦心を廻らしたので、何となく藩中に反新島空氣が漂ひ、そのために新島家の人々は僅かに辛く當たられたものであります。父民治が認めた先生の前罪赦免の通知狀の一節に、前段申し述べた不忠不孝云々の外に、「大手を擴げて歸朝上陸を差し許されたり」と云ふ意味の文句があるのに

徴しても、當時の壓迫された感情に點火して、それらの手合ひに一矢を報いた着想の發案であつたことが分ります。

藩士の狂熱的分子を緩和し、舊式な頭腦を沈靜さす上に、兎に角先生を隔離する必要があつたことと、また一面、甘雨公以來の高等政策を體して、追々板倉連枝の諸侯を糾合し、海上貿易を行つて、資金の充實を圖るためには、新島氏の海軍の技術に愈よ竢つものがあるので、旁ら飯田氏の周旋に同意して、横井家老職が先生の任命を取計つたものであります。既に西南の諸藩が海上貿易を行ひ、その富を蓄積してをるから、小藩たりとも横井家老職が、政治的に機會の均等を維持する態度に出たのでありませう。故に此度の北海道行きの海寶の使命は、著るしく實際的の色彩を帶び、北海道の鹽鱒を上海に輸出する計畫であつたやうです。この間の消息は、横井家老職の子息が私に當時の事を說明された書面の一節に、明かに書いてあります。これより先き、横井家老職は甘雨公の遺策を體し、連枝板倉の諸藩を糾合して、板倉家の宗家を盟主となし、この運動に着手したのであります。幸ひ宗家は備中で、良港がありましたから、其處を根據地として、新島氏の手腕を揮はせようとしました。今左に横井氏の手紙を記します。

前略。宗教にて海寳丸を購入して以來、新島氏同船に乘り、一端備中に赴き、翌元治元年、江戸灣に歸航し、北海道に航して、鹽鱒を目的として、同年三月、箱館に航行ずる事になり、其の際、新島氏が再び同船に便乘して、四月下旬、箱館に着きたるが、氏の米國渡行の樞機に有之候。

而して箱館着の上、渡米の盡力者は、兼而御話せし澤邊氏、及び當時澤邊方に寄寓せし菅沼某の兩名にて、其の紹介にて、御話の英館の番頭に依賴せし由に候。

以上が新島氏箱館渡行迄の事實に候。下略。

十七日　横井拜

根岸雅兄

さて、飯田君は、個々藩士の要求如何に係はらず、藩の意思を統轄して行く横井家老職を輔佐するのに、理想的の人物で、徒らに他人の拘束を受けないだけの膽識がありました。その出身は聖堂で、維新後は裁判官を以て終始しました。方面大耳で、一見して閲歷のある風采でした。槍の名人で胸廓の非常に發達して居るのが、人目を惹きました。膽汁性の人で自體が既に裁判官には適役であります。かの先生の脫國を助成した福士君と、風采性格ともに正反對であつたことは、極めて面白い對照です。私は明治三十年頃から飯田君と板倉家の祭奠に同席する

機會をもち、時々氏の下谷の宅に行つて、いろ〳〵先生の當時の事を伺ひました。個人的の對話は論理の妙を極め、物事が算術の問題を取扱ふやうに、結局一定の方式から結果に到着すると云ふ風でしたから、萬事が遺算がありませんでした。先生をして首尾よく脱藩させ、また新島家の後事を全うしたこと、並びに板倉家が幕府から遺責を受けずに濟んだことなど、皆なこの飯田君の明晰な頭から出た處置が然らしめたものです。この人また情宜に厚く藩の儒者添川完平氏の助教授であつた關係上、添川氏の遺子數人を引き受けて成人させ、いづれも相當の者に仕上げました。添川氏の嗣子鉉君が、飯田氏の赴任を送る序は、飯田君の人と爲りを知るのに最も善い材料でありますから、今此處にその文を掲げることに致します。

送二飯田權大參事一序

今天子即位之四年遣二諸藩議員一。各藩舊將大改二革其政一。我飯田權大參事亦與レ焉。衆謂參事此行必能排二斥輿論一變二民制度一以振二興我藩政一矣。夫參事我藩之望也。早游二藝苑一。及二業成一甘南先公授以二儒官一。固辭不レ受。參事志在レ立二實効一也。及レ爲二監察一能著二實効一始鉉常憤二我藩政體陵夷士風頽敗文武

不一レ振。以爲二三執政不レ三得不レ二任其責一。而闔藩之人恬然如レ不レ三加肥瘠二干二其心一者與二參事言一。微諷之而參事見諭以二機會時勢一。鉉當時雖三口不二敢言一心竊非レ之。以爲機會之來豈有二言期一乎。人臣事レ吾週多事之日。安可三悠々以待二無言之機一哉。況使三無二機會一之可二レ投時勢之可一レ乘。是終無爲而止也。未レ幾有二此命一。夫參事嚮以二機會時勢一數者若須下有待中干此上者然也。顧以二參事之望一奉二行天子之命一誰亦容二異議勢是信然干其間一。雖レ然鉉聞レ之難レ得者機也。易レ失者勢也。誠觀二天下之人一動輙日投レ機乘レ矣。聞其言察二其行一乃不三過徒粉飾二口舌一。逡巡苟且以偷二安干一日一而已。今參事抱二有爲之志一投中難レ得之機上。以乘二易失之勢一必當下排二斥衆議一改革中弊政上。振與二紀綱一以大驗中昔日所學干今日上矣。參事此行鉉又跛足相望二其論事之風彩一也。必其鉉々而不レ屈。行々而不レ撓奮然毅然聲色共勵也。必其不レ畏レ首畏レ尾。逡巡禁默以爲中自安之計上也。及二其行一鉉送二參事一以規。而賀我藩有人也。

添川鉉拜乞

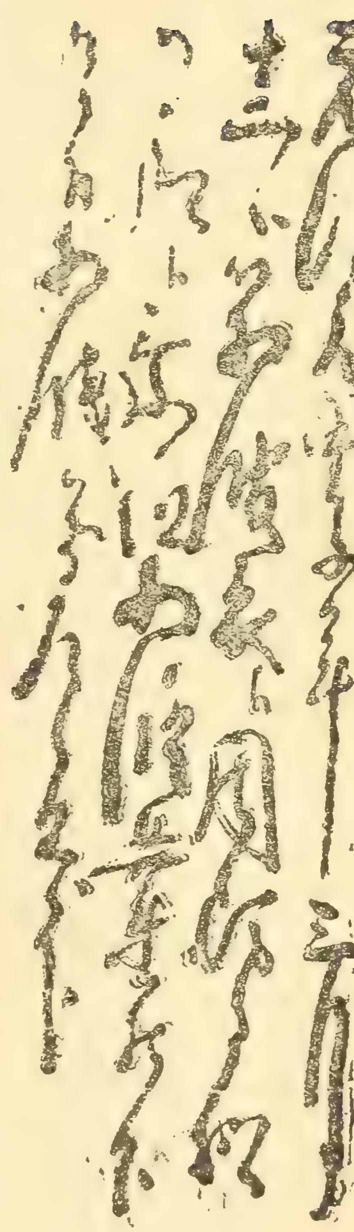
明治十一年十二月

飯田君は大きな時代思潮の推移を見抜いた人で、先生の名前が歴史に記錄される時に、どうしても切り離すことの出來ない人であります。先生の幼年時代に、その句讀師であつた頃から

逸早く先生の特能を認め、先生に十分の天分を發揮せしめ、何かの寄與をさせて行きたいと、常に同情を持つて居りましたから、新島家のためには大なる恩人であり、別けて先生が立身出世の産婆役でありました。同君はまた新島家を取卷いた隨分強い挑發的の空氣をかなり骨折つて緩和して居りました。けれども反新島の空氣は、かなり濃厚でした。先生の負傷に絡まつて物情騷然たるものも加つて居るのは無論です。聰明な子とその親とが、他人の言葉の投込みやうによつて不忠不孝となる危險の瀨戸際でありました。他人がその有るべく希求し、若しくは有らうことを欲するまゝに觀ずるのであるから、同情の缺けた風評に裏切られて、當事者としては聊さか了解に苦しむ節もあり、また挨拶にも困つたのでありませう。睚眦の恨みも必ず酬ひ一飯の恩もまた、これ報いずには措かない辨治も、この場合だけは一劍を磨して、機會の到來を竢つより外に路がなかつたのです。

三人寄れば文珠の智慧とあるやうに、神算鬼謀湧くが如き天才的の參謀たる祖父辨治と、調和性に富んだ女房役の父民治と、大きな膽力と大きな目的とを持つた先生と、かやうに新島家の三頭が、必勝の計畫を立て、攻勢防禦の形で、一面、黑布を門に張り詰めた靜寂と、他面、

飯田君の助太刀で、箱館(はこだて)に參りました。この時の餞別寄贈者(せんべつきそうしや)は姉二人、飯田君外二三の舊藩士で、天保九年、辨治か全盛時代(ぜんせいじだい)に、出火を見舞つてくれた、當時の顔役揃(かほやくそろ)ひの賑やかだつたのに比べて、これも對照(たいせう)の妙(めう)を極めて居ります。



元治元甲子年三月十二日、箱館表へ周防守様御船に乗組。爲修業罷下候付、爲餞別贈り下さる。

父　民治手記

一和　　　紙　　×飯田　逸之助様
一白　砂　糖　　△川邊　洋之助様
一手拭　菓子二折　　白井礪藏様
一金　壹　朱　　×植村　おまき
一同　壹　朱　　×速水　おとき

一金　平　糖　　市原利八様
一金　貳百疋　　△川勝様
一銀　札　三　　飯田丈助様
一金壹兩貳分　　松前様御内　鈴木能男様
　　　　　　　　邑尾四郎様

以　上

×刷は前編に説明済み、△印の田邊氏は先生と同時に甘雨公から蘭學修業を命ぜられた人。

天保九年戌十月

出火見舞覺帳

一酒壹升　重詰二	魚屋三郎右衛門殿
一鍋一　重詰二	加納屋　吉兵衛殿
一梅干壹樽	岩城屋　半七殿
一鯛行平一	三河屋三郎兵衛殿
一重詰二　汁	濱野屋　東作殿
一重壹組	木工屋　忠吉殿
一手桶一鯛一平目一	大里屋　武兵衛殿
一煮染一　餅一折	中野　敬助様
一酒　壹升	大坂屋　平助殿
一煮肴　一折	乘物屋太右衛門殿
一德利壹對すし一折	油屋　吉兵衛殿
一煮豆一曲	くす屋　友八殿
一辨當	中村道勝様
一同	福島美伯様
一茶碗十	坂本榮泰様
一茶碗十蓋物一梅干入	矢吹左一郎様
一金壹歩	武藏屋次郎右衛門殿
一菓子壹折	浦和宿和泉屋平衛殿
一茶碗五ケ	長谷川與八殿
一すし	田中清八様
一茶碗十但御陸尺	三文字屋佐兵衛殿
一餅菓子　一折	澤邊丈大夫様
一酒貳升	相模屋幸右衛門殿
一まんぢう一折	吸江寺様
一煮豆一折鰹節二本	行德丸屋十兵衛殿
一金貳歩	富士屋利七殿
一重詰　最中一折	上州屋利七殿 同　おこまどの
一茶碗十	小松川文七殿
一盆二	三河屋喜兵衛殿

一金貳歩　浦和宿鍵屋六之亟殿
一金壹分　山口屋榮取殿
一金壹分　和泉屋利兵衛殿
一金壹朱　中村道勝様
一手拭二　久次郎殿
一唐銅鍋一　濱野屋東作殿
一酒壹升　勝島常吉様
一土瓶一　町田喜八様
一蓋茶碗一　大和屋清助母どの
一土瓶一茶碗五　加瀨六郎右衛門様
一茶碗十　板橋次郎兵衛殿
一土瓶初櫻茶一斤　正阿彌又三郎殿
一煑染一重　武元太郎衛門様
一餅菓子一折　田中治右衛門殿

一煮染一重　海保三吉様
一茶碗十　御陸尺部屋頭辰五郎殿
一茶碗五ヶ小硯蓋共一　津金元良様
一菓子一折　森田萬之助殿
一煮豆一曲　飯田釜次郎様
一眞鍮行平　杉川屋勘右衛門殿
一重物一　相模屋幸右衛門殿
一祝おこし　野屋與兵衛殿
一金壹朱　安中根岸團藏様
一和紙壹束　安中鈴木龜次様
一手拭五筋　篠崎右衛門様
一茶碗十　笹屋園藏殿

以上

先生は妥協のない倘い道を踏んで、愈よ元治元年三月、江戸の花盛りを後にして、行く雁の如く、波瀾曲折に富んだ放浪の人となり、心のまゝに天下を周遊することになりました。十三

日の朝まだきに、懐しい家を離れる時は、流石に先生の聰明文雅な面にも、一條の憂愁が漂ひました。辨治式にやれば、高張り提灯を掲げて成功を祝ふと云ふところなのに、雙六君一人が總名代で先生を見送りました。先生は早朝から結髮し、新調の道中着に身を固めて餘裕のある態度でありました。雙六君は聊さか緊張の氣分で、悲痛身をかむやうの思ひが致しました。雙六君は途中で下駄の鼻緒を切らす先生はもどかしさに打ち震ひ、底力のある聲で叱る。雙六君は涙に面を曇らせましたが、先生に勵まされて、弱い心を引き緊めながら、歩みを運びました。雙六君は神經質であり、先生は彈力に充ちた體軀で、その對照が如何にも韻に和した活畫でありました。さうして背景には柳原堤の柳枝が搖曳として、腕手に絆はる無邊の魂の陰が、逍遙してをります。先生は其の時何か雙六君に懇切に訓戒を與へました、さうして雙六君の奇異な感覺的な形と、色とがちやんと言葉に含まれた意味を解し得たやうです。

父民治は胸に大なる動搖を感じながらも、己が愛子の過去を顧み、また遠き將來の愛子を想ふ時、其處に大なる誇りと希望と、悅びとを禁ずることが出來ず。料紙に、

「雲井まで名をばあげませほとゝぎす」と認め、祖父辨治はそれと對に、

「行かるればゆけ花のやま」と、半折の唐紙に揮毫して先生に贈りました。流石に祖父と父とは先生に對するのに十分の理解と同情とを以てしましたが、母は全然別世界に棲んで居る人の行き方で、我が生命と頼む先生を最早や捨てるかの如く、何等選擇の餘地のない態度で單に心盡しの手料理を薦めました。父民治の三月十二日の手記に、次ぎの如く記されてあります。

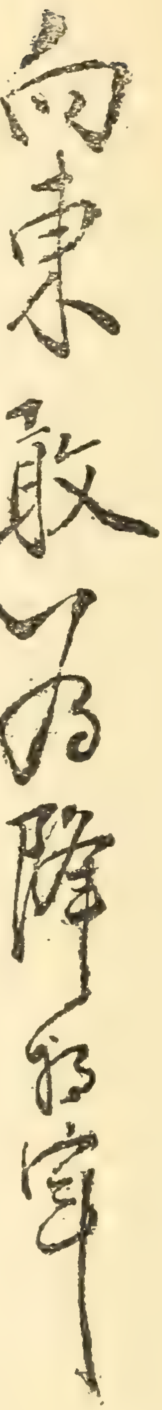


「三月十二日赤飯内祝として相贈り候事。
一餅米　　壹斗
　但御臼屋へ玄米と引替候事
一小豆　　有合せ

長者の萬燈より貧の一燈と。價値を判斷する標準から見れば「餅米一斗」「小豆有合せ」は、人々の耳に無限の響きを傳へ、また無限の光と力とを與へます。「但御臼屋へ玄米と引替候事」とは、何たるいじらしい書き方でありませう。無限の眞心を籠めた言葉で、文學的の反響があると思ひます。

先生は神田の柳原から舟を賃して、大川から品川の本船へと下りました。數日前、祖父と例

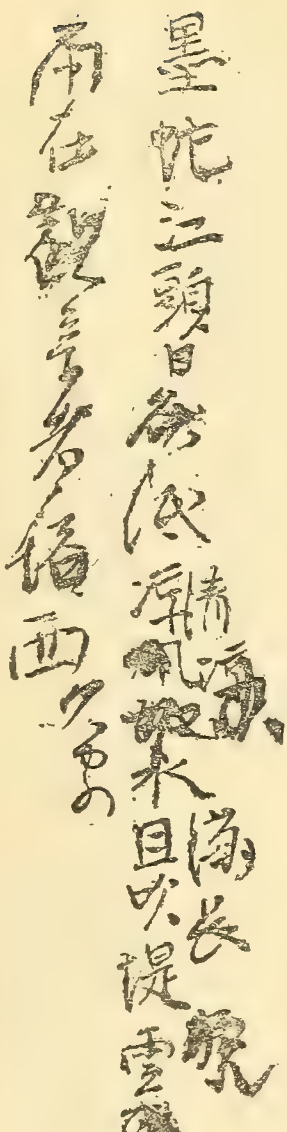
の顔役長谷川與八、鹿島屋淸兵衛などゝ、三谷まで舟遊びをした時の、船問屋でありましたが船が出た後に、落花兩三點、ひらくと舩を掠めて散りかゝりました。大川に出て、滿潮の匂ひが忽ちに感覺を新鮮にし、遙かに將軍の城を尻目にかけ、水郷滴翠のあたりに心懐を述べて。左の一詩を作しました。



黑蛇江頭日欲低。涼風如水滿長堤。
雲頭龍掛堪成畫。雨在觀音寺塔西。

一直線に銀のやうな大川をすらすらと滑つて行く間に、長い堤防に沿うた翠簾朱欄の美しい色彩や、新花榮鮮に開けて、櫻と柳との並木が美しく立ち並らんで、萬歳の色を契る風物など、目に入る限りは引き緊まつた活氣を與へて行きます。先生は懐から梯尺を取り出して靑色に塗

ゆる富士山を測量しました。かうして何物も視界を遮ぎるものなく、海の匂ひに胸を躍らせながら、本船に着きました。かのコロムブスが新大陸に向つて船出した時のやうに、先生は希望に充ち満ちた懐ひで出帆し、その夕浦賀に碇泊しました。此處で高島秋帆に面會しました。氏は長崎の人て、砲術の大家であります。彈道學、歩兵操典などを著はしました。これは私が所



持してをります。その高弟なる伊豆の韮山の代官、江川太郎左衛門は、韮山に熔爐を築き、砲を鑄造しました。高島秋帆は實に日本の海軍の發達に貢献のあつた人で、その曲盡の跡に今の海軍が生れたのです。元來、一布衣の身でありながら、砲術を以て幕府に聘せられた方です。安中藩からは新島先生の稍や先輩たる某氏がその門にはひつて、砲術を研究致しました。

高島老人は先生のために、特に他人を交へずに宴を張り、犧牲の精神の宿つた先生の心中を一氣に看破し、眞面目に心膽を吐露して語り合ひました。「金は貴殿が出せ、智慧は余が貸してやらう」などゝいふ頗る蟲のよい口を利く外交や、鼻下思案の公武論には大反對の氣焰を上げ、「余の作は、平仄もなければ、韻字もない、文士に示したら、笑はれるかも知れない、笑はうと笑うまいと、そこは文士の勝手だ」と、ばかりに、老人は自慢の作一篇を先生に贈りました。元來一介の武辯ではありません。原書も讀めば、飜譯もする。先生も「老人は外國奉行も勤まりますね」と云へば、高島老人がしたり顏で、献替の責を塞ぐことは確かに出來ると答へたさうです。この際、高島秋帆から先生に贈つた作は、はやはり私が所有して居ります。

火攻之功最烈。武子特揭以名篇。誠重之也。安平君驅龍午之牛下七十餘城之强燕。周公瑾以一炬走老瞞八十萬衆於赤壁下。雖火下技未講之時其功如此。況於方今之術乎。不可以察也。

元治元年甲子春

火枝中興　秋帆老人敎

書以贈新島敬幹供一粲云

互ひに獻酬し、栓を拔いて沸騰し、情熱を繼子扱ひにせず、極めて自由な意志を映發して居ます。

先生が高島秋帆を訪問したのは、一つには箱館奉行所の海軍部の長、甲斐綾三郎氏に紹介狀を貰ふ積りでありました。これもまた眉間の疵が、先生の思慮を痛めた點で、何分にもその頃、處士横議の際、眉間の疵などは、對者に初對面の好印象を與へるのに、不便だと考へた爲めにこの擧があつたのであります。

さて、十七日浦賀を出帆して、總州奥津に碇泊し、同所の在家に隱れて、泉石の清幽を樂み跡を烟霞に埋れて、寒士の操を守つた友人を訪ひ、詩美の人となりました、此處でもまた一詩を賦して居ります。

北風捲雪雪更暗。　欲訪幽居信馬行。
疎竹雪堆將折處。　一間茅屋讀書聲。

先生はまた脫走途中の情況を、箱館に着くや否や、飯田君に送りました。即ち、左の手紙は

それであります。

以拙筆啓上仕候。向暑之砌御座候處、彌御壯健御勤仕被遊候半事と奉祝賀候。然者小生儀、去月十二日、品川出帆、十三日、浦賀港落碇、十六日、浦賀開帆、十七日、總州奥津へ落碇、二十二日、當所出帆仕、百里灘迄參候處、俄に逆風吹來り、右舷左舷種々運轉仕候得共、寸進尺却、不得止事同船仕、同州砂子の浦と申所へ碇泊仕候。扨右の奥津出船之節、風波宜敷候處、俄に風起り、船潮に流され、殆暗礁に當らんとせし故、匆々端舟を卸し、本艦を引き候處、何分潮早く、僅か暗礁へ四五間之距離に相成候て、港之問屋よりも端舟を出し引吳候故、漸辛らき命を拾得申候。

右故、命拾祝を仕度奉存、早速上陸仕、此砂子之浦の東に當り一里程之所に、上總之江戸なる勝浦と申處へ參り、宜き酒樓を撰み、江戸製の「フロー」を上げ、一杯飲候時之心地、如何にも虎口を脫し候斗に思れ候。二十六日早朝、當所出帆、二十八日、奥州盤前郡中之柵と申處へ投碇仕候。二十九日、上陸仕、安藤侯之居城平を見物致、其日城下に一宿仕、政治風俗等探索仕。盡日記に留置候間、歸府之上可呈御覽候。且別に平城之略圖差上候間、御笑覽可被遊候。扨此港は戸口百に滿ざるに、三分之二は娼家に御座候。

當月七日、當所出帆、十日之正午に、仙臺金花山を眞の左舷に見候、節驟雨起來り、濤を掠むる風聲は、昔堅之軍を驚かし、船に逆する浪勢は、豊太閤之膽を奪ふらと思はれ候。箇樣之始末に候得共、轉殊之外手廻り、無難に十一日、南部鍬ヶ崎港へ到り、○を延ばし候。此鍬ヶ崎は實に結構なる港にて重々層々、四面皆亂山、一切風波之患は無之候。乍然、青年之者の爲にいよろしからざる所にて、六七百之戸口に、商人は十分一に滿たず、餘は盡娼家に御座候（此地女郎を「ヲシャラク」と唱へ候。總計大凡二百五十人、實に驚入候。）。十八日、當所出帆仕、十九日、風吹き且潮逆なる故、不得止南部霜風呂（此地溫泉有之候。）（此湯は甚妙にして、カサ、シツ、日、チウキ、クジキ等に宜しく候故、六七十里以外よりも人々參り候由。）に船掛り仕候。二十日午後より帆を卷き（此所田地一切無之、漁を以て業と爲す。）二十一日六ツ時、無滯碍箱楯港へ到着仕候。

此圖全く終らさるに、船頭飛來、只今便り有之候故、匆々可封鍼旨申候間、當地之形勢仔細探索仕、後便縷々可申上候。右此度御周旋之御禮旁、御安否奉伺度、如此御座候。匆々不宜。

新島七五三太　再拜

飯田逸之助樣

玉机下

四月二十五日

猶々時候折角御厭被遊候樣、奉神祈候。本文之通之始末に御座候故、此度別段星野君へは書狀差上不申候間、宜敷御取捨御鶴聲之程奉合掌候。猶乍憚江場、菅沼、竹内、添川諸君へ宜しく御鳳聲奉願候。

京師、江戸、薩長之新聞御座候はゞ、乍御頑勞幸便御申越可被下樣奉願上候。已上

取落し。

吉田（よしだ）賢輔（けんすけ）義は、二月頃當地へ參り、早速江戸表江罷歸候由、亂文御宥免可被下候。

第八章

私は新島家の定紋を見て、新島家の三代がこの標號を旗印として、世と戰つた武器であつたことを、面白く思ひます。これは祖父辨治が改姓と同時に採用した記號で、丸に根越しの笹でありります。圖の構造は丸の中に節くれ立つた竹の根幹の强い不規則な曲線と粗い線から出來てゐて、その尖端の纖細の丈枝と中央の嫩葉とが、全體に淸潤を點じて、如何にも蒼勁の感じのする圖です。その意味は宜しく磐根錯節に逢うて利鈍を別つべしといつたやうな、强い意味の象徴であります。この中心勢力が新島家の三代に、長いと短いとの差こそあれ、また輕重大小の差こそあれ、彼等の心耳に微妙な響きを傳へて、傳統の勢力となり、浮世有象の權力に反して、神聖の眞理を信じ、物の眞相に徹し、結局、眞理の禮拜をなすものとなりました。かうした修養の道程に民治が書役となつたことが、不思議にも恰好の英氣を新島家に齎らしました。甘雨公を圍繞した新思想家等が、公の閲覽に供した珍本はまづ書役をして寫さしめたものです。

これが新島家のためには、どれくらゐ開發の機會となつたか分りません。

先生が夙に世界の大勢に通じ、相當の裁斷を自己の心裡に描いたのも、辨治が得意の笑を洩らして、耶蘇如來と好奇の目を眸つたのも、民治が直接間接に生活意志を實現して行くやうになつたのも、皆いづれも書役といふ職に在つて、目を新書に晒したお蔭です。さうして人格を活現する現代の宗教に、追々見方が變化して來て、かの「ゼスイット」の姿が民治の心眼に映じ、それから同音の是水と號をつけたものであります。これも廢藩後、例の關島老人が直話されたのであります。して見れば、民治の妥協的な世渡りの中にも、かうした勇敢な人道の戰士たる奇鋒が藏められて居つたので、拔けぬ刀でなく、拔かざる刀であつたのです。先生が脫藩後、直ちに幹と改名したのは、後難を顧慮したものでありますが、一つには更に大なる意味の發現です。即ち人間は一個の靈的實在として、眞に神の事業に參加することが出來ると云ふ信念を、幹の一字に顯はしたのです。この幹と改名したのは、即ち先生の復活の第一聲でありました。

さて、先生は四月二十一日、午前四時、箱館港に到着しました。この行に於て益す卓見を徹

底せしめ、至る所に人民が餘りに時代の變遷に盲目に、且つ呑氣に暮してをるのを見て、今更ながら驚くと共に、不徹底な經世家や志士などの、贔屓倒し的の論を吐いて居るにも、驚かざるを得なかつたのであります。外交の支障は此處にも顯はれて、ロシアが蟠居して儼然國境を樹立してをるやうな有樣を見て、神州の聲名地に墜ちはせぬかと思ふ情は、人一倍でありました。上陸後、直ちに同藩人菅沼氏を訪問しました。同氏は先生と竹馬の友人で、その若かつた頃、甘雨公に拔擢され、一時は先生より幸運だつたらしく、長崎へ蘭學修業を命ぜられた人であります。一度人間の衷情を和解した文化を見た人には、お祭騒ぎをして居る小天地に生息することはむづかしいもので、何か箱館で一旗擧げようと計畫したらしく、その點から云つて、菅沼氏も一種の脫走者でありました。同人の案内で箱館奉行所に、高島秋帆の紹介狀を携へて甲斐氏を尋ねました。

當時、箱館奉行は松浦誠といふ人で、甲斐氏は即ち附屬の海軍所長でありました。教頭はかの鴉片戰爭後、休職になつた英國武官の海軍大佐であつたさうです。さて甲斐綾三郎氏は高島秋帆と同鄕で、文化の波打つ長崎に輩出した一人です。最初蘭學を學び、後ち英語の必要を感

じて、これに移つた方で、前述の英國武官を海軍所に聘し、米國人ボーデッチ氏の著書によつて生徒を教授さして居つたさうです。時勢の蘭學から英學に替り行く有様が、これによつて慥かに分ります。新島先生も英語を修めたいのが一心で、その感興を此所に繋いたのであります。この甲斐氏は、五稜廓や箱館の砲臺を築いた人なのですが、私は大正元年正月、福士宇之吉君の案内で、これを拜見し、且つ維新の際、官軍が海上から砲撃した模様などを、指呼の裡に見學しました。

先生は箱館奉行所の海軍部に登錄して、若干の授業を受けましたが、學課は既得のもののばかりで、別段啓發される程の事もありませんでした、かやうの實狀の下に、希望を滿たすことの不可能だつたのは、勿論のことでした。此度、先生が急激な行動を取つて東漂西泊と出掛けたのも、英語が新しい色彩と生命とを與へるといふ愉快な長所を見拔いて、それを研究しようと志ざしたのでありますが、右の海軍部では、この期待をも全く裏切られたので、先生は悲觀しました。

先生の豐饒の希望と運命とを開拓し、また表現することの出來たのは、外國語が先生に新鮮

な偉大な空氣を吹き込んで、革新的氣運をあをたからであります。さうして先生の外國語の過程には、第一期と第二期とがあります。第一期は卽ちオランダ語で、その祝福によつて舊信仰と感傷的文學の態度が破れ、第二期の英語時代に於て、確實な時代精神と天分を擔つて居るといふことを見たのであります。英語が筋肉となり、頭腦となつて、先生はそのために世界的品性と世界的常識とを準備する事が出來ました。今日まで日本外交の樞軸と云はれてゐた日英同盟なども、結局、幕府時代に一寒生だつた先生等が、個性發達の機會として英語に能力を總動員したのにあると思ひます。不思議にも英語が國際的に個性を解放し、重量を增し、個性と機會との關係を正當、完全にする力をもつてゐた事であります。さうしてまたそれが、世界人類に直接歡迎されるやうな、純粹な普通的な、常識と專門と品性とを準備さす力を持つて居りました。

さて、北海道に參りましたものゝ、折角の期待を裏切られ、聊さか苦痛煩悶した結果として、先生の行動に多少の皮肉が混合して居ながらも、猶ほ且つ幾分の共明が認められないでもありませんでした。文王が釣に出て太公望に逢つたやうに、意外にも先生は奉行所の兵學所で、長

州藩から派遣された井上聞多君と親しくなりました。ほゞ同境遇の人で、また性情の歸納に於て合致して居た所から、箱館滯在中僅がの時日であつたにも係らず、兩人の間には深い交際が成り立ちました。それは井上君から先生に「兄弟」といふ題で一首の和歌を贈つた程でした。この和歌は先年私が澤邊君に面會した時、同君から申し受けました。即ち、

兄弟

松に竹梅も千年の數にこそ連なる枝の花にほひぬれ

備考。先生の紋所は竹、井上氏の當時用ひた紋所は梅でありました。

井上君は元來世話好きで、また珠盤勘定の高い人でしたから、先生の生活上の糧道を安全にするために、澤邊辰馬といふ人に先生を紹介して、求職口を依賴いたしました。澤邊君は土佐の浪人で、これも爛熟の空氣の中に居られない一人で、坂本龍馬と衝突して、箱館に世を忍んで居つた方です。さうして東照宮の神官となつて、暫く納まつて居りました。先生と同藩の例の菅沼某が副神官であつたのです。この澤邊君は最初緊張した態度で攘夷を生命とし、常にニコライ敎師を暗殺することを大眼目として居りましたが、後ちには反つてニコライ敎師に感化

され、心氣一轉して聖公會の牧師となりました。明治四十年頃。同君が東京四ッ谷見付内の聖公會の牧師でありました時分、私は氏に面會して、先生に關する話を承りました。その際、初めて先生の眉間の疵が話頭に上つた所から、察すれば、脱藩二三週前に受けた疵であつたことが鮮やかになつたやうな氣持が致しました。澤邊君が先生をニコライ教師の日本語の教師に周旋いたしましたので、先生は暫く此處に糊口の資を得ることになりました。

さて先生にかうした機會を與へたことは如何にも不思議で、飯川君や澤邊君や井上君後ちにまた福士君等が、命掛けで先生の脱走に奔走して、互ひに愛の結束をしたのも、畢竟、先生の眞勇が他の眞人を來附せしめた所以で、到る所に先生か中心の重きをなして居るのば、衆人の首領たる素質のあつた故であります。それは先生が少年敏感の時代に。永く甘雨公の左右に奉仕して居て、その環境から受けた感化であります。當時、諸侯の理想とした治國平天下は、今日一派の論者が考へてをるやうな、狹い行政のみに限られたものでなく、第一の目標を世道人心の向上に置き、德を進め民を養ふことを最高任務とし、それから一切の法令や行政の方法を案出したので、高い意義に於ける經世を理想とした一大系統であります。この理想が先生の內

在的理想となつてをるのであります。こゝに先生が衆人の首領となるの才が養はれたので、海軍傳習所時代に先生が餘暇さへあれば、ピーター大帝の傳を愛讀したことなども、かうした意氣を鍛ひ上げたのだと思ひます。

その後先生は、豫定の行動を取つて脫國し、井上氏も迂餘曲折して英國に留學いたしました。新政府になつてから、一方は廟堂に立ち、一方は野の人となつて、不思議な對照となりました。兩者とも事實に於ては民主的傾向を是認したけれども、思想に於ては別途の作用をなしました。井上氏は政治的組織に獨得の傾向を示し、先生は道德宗教に特殊な傾向を示し、個人としてはかやうに各々その主義を異にして居りましたが、私交上に於ては生涯變はる所がありませんでしたかの同志社の創立に關しても、井上氏がどの位の力となつて現はれ來たかは、蓋し思半ばに過ぐるものがあります。新島先生の未亡人が、私等の主唱で先生の二十周年紀念祭を安中教會で催した際、朗讀された先生の病床日誌の井上君に關する一節の如きは、明かにその間の消息を語つてをります。

「七月十九日の朝、井上樣御出に相成り、今日午後四時頃より、大隈樣に先生を我馬車にて大切に御連

れ申す故に、御心配なきやうにと、御親切に仰せ下され、又態々御迎へに御出下され、其の夜同志社大學の爲に、全參萬貳千圓出來、十一時頃に歸宅、非常の悦ひにて、共に神に感謝を爲す」

さて、舊生命から新生命への飛躍が英語にありと、眞劍に思ひ詰めた先生が、ニコライ教師によつてこそ、自分の希望が解決されるだらうと期待して居つたところ、此處もまた思はしからず、せめて渇仰する聖書なりと研究したいと願つては見たけれど、ニコライ師と先生との思想上の距離が可なり遠いために、仕方なくニコライ師の暑中休暇旅行の機會を幸ひに、一封を遺して一段落をつけました。この時の感想を先生が八重子夫人に物語られたのを、何よりの證據と概括して私に送つて下さいました。その一節は單に先生一個に止まらず、日本文化史の新しい領域に觸れたものゝあるやうに感じます。

「嚢が箱館にて、ニコライ教師の家に在て日本語を教へて居た時、聖書を教へて下さる樣願ひしも、未た早しとて教へて下さらなかつたが、若し此の時ニコライ師が聖書を教へて下さつたならば、ニコライの宗旨を信じ、米國へ往かずして露國へ行きしなるべく、随て同志社も起らざりしならんに、此の時聖書を教へられさりしは、實に妙へなる御攝理なりしと、後に語りました」

澤邊君が先生の衷情を諒として紹介した福士宇之吉君は、先生の脱國の幇助者で確かに時流を抽きん出た人であります。かの脱藩の節の幇助者たりし飯田君とは、骨骼性質とも全く異つて居りました。當時福士君は箱館中濱町の英人商館ポーターの番頭を勤めて居りました。その頃中濱町の外國居留地は六區に分れてゐて、この商館は一番棧橋に近い東側の所に在つたのです。外國船の錨を下ろして居る所までは、僅か四五丁の距離であつたが、これが先生には當年三途の川であつたのです。先生は福士君を訪問して、爾來別懇となり終ひに刎頸の交りを結びました。自然、館主ポーターにも知られ、同人から月給十圓で雜貨部の主任に雇ひ入れたいとの交渉を受けたといふことです。星移り物變つて、明治十九年八月、先生は未亡人同伴で北海道へ漫遊し、この地點に立つて往事を追懐いたしました。その當時の感興を未亡人から私宛てに通知して下さつた一節に、次ぎの如くあります。

「後夫婦して函館へ參りし時、襄は私を港に連れ行き、此處は足音のせん事を恐れて雪駄を脱きし所なり、此處より小舟に乘つたなど、一々指點して光景を說き聞かせました。其の節、憚らずポーターと云ふ名札のある家を認め、刺を通じて其の主人に面會せしに、貧に零落したる氣の毒なる姿にて、余は君

を識らず、君は何人ぞと反問せらるゝで、嚢は貴下は私を御承知あるまいが、私は貴店の福士氏と懇意で、屡貴店に福士氏を訪ふて、貴下に默禮したこともありました。私は福士氏の助けに由つて米國に航じました。云々。」

元來、福士君は健實な人で、志士の仲間中最もよく西洋事情に通じた人でありました。最初の出身は箱館奉行、竹内下野守の下に在る幕府の造船技士でありました。即ち幕府の箱館丸は、續造船技士と氏との設計で、拵へたものです。測量や數學に長じ、黒田氏が北海道拓殖長官時代に實測を行つて、北海道の歴史に偉大な貢献をした方です。やはり簗山伯組の一人で、常に鋭い瞳を注いで、何かしら反射を得ようと、期待して居つた方です。私は大正元年正月、同氏に面會しましたが、もはや八十近い痩せ形の華奢な老人でしたけれども、話が琴線に觸れると、双頬に紅を潮して、鋭い眼光で話をつゞけます。竹内下野守と堀織部正と二代の箱館奉行に仕へ、江戸にも二回奉行の隨行員として海路を上つたさうです。貨殖の道にも疎からず、晩年は造錢家となりました。

當時、箱館に集つてゐた人々は、保安條令で逐ひ出された人か、自ら飛び出た人か、いづれ

も皆な豪氣な人揃ひで、世を忍ぶ商賣の途は別でをつても、國家を思ふ念は何れも熾烈なものでありました。先生なども安中藩が鼻元思案の佐幕主義でしたから、これに相愕を盡かして脱藩したのも、一つの理由でありました。この事は、先生が例のマツギー女史に話されたのによつても明かであります。

さて私は福士君に面會して、次ぎのやうな問答を致しました。

第一。「澤邊君が先生を貴下に紹介した書狀を今に御持參ですか」と窺ふと、氏は感激に打たれた態度でさうして追懷をたどりながら、大略下のやうな意味のものと話されました。「先生は精神の强い人で、世間に容易に得られぬ人物であるから、是非會つて與れるやうとの意であつた」と。

第二。「貴下が先生に初對面の印象は」と問へば、氏は言下に答へました。「たしか一八六四年、夏の頃でした。先生は單衣物の姿で、和氣靄然として入來されました。さうして應對繁劇を加ふるに從つて、益す高情の人たる事が分かり、この人の爲めならばと思つたのであります」と。

第三。「先生は理智に偏倚した方でしたか」と問へば、その答へは次ぎの如くでした。「科學が實生活化されて、すべての行動に大意義が、渾然と味得せられて居ました。さうして萬事を秩序整然と片付けて、

如何にも理性の明晰な人でありました。一體が寡言で、物言ふ目付き、口付き、言葉遣ひに少しも無汰がなく、如何にも對者をして氣持のよい感じを起さしめました。

第四。「先生の專門的智識の造詣は」と感想を叩くと、氏はこれに答へて次の如く語りました。「先生があれ程までに科學の中樞に這入つて研究したものうと、そゞろに敬服致しました。自分も造船家でしたから、奉行の隨行員として太平洋を江戶まで二回も航海いたし、その際、奧州鍬ケ崎で颶風に出會つてマストを吹き折られた時の辛らさなども浮ひ出し、さういふ處置を正すと先生は立どころに、その氣壓の公式を書いて私に示し、これさへ承知して居れば、何時でも平穩の航海が出來るものであると說明して下さいました。その公式を私は爾來、新島項と名けて居ります」と云つて、私にそれを示しました。則ち、

$$H=\frac{1}{\log C}(\log B-\log B')=18400(\log B-\log B')$$

此の壓方程式より、海面上の高さに由て溫度の異るが故に、氣壓の外溫度を觀測して、之を計算に入れざる可らず。猶一層精密の計算には、重力の更正を施さゞる可らず、Tを海面の氣壓とし、H米突の高處に於ける氣壓をTとすれば、Hの値は次の式にて知らる。

$$H=18400\left(1{,}00157+0{,}008667\frac{T+T}{2}\right)(\log B-\log B')$$

先生と福士君との間には非常の愛敬が増し、脱走の一週間前に先生はその相談を福士君に持ちかけました。元來、健實な福士君ですから、一應熟考すると云つて、その場は別れたのです仔細は西村某がやはり脱走に就いて福士君を煩はし、それが露顯して迷惑を蒙つてゐた際とて、同君としては無理ならぬ事であります。併し先生の意氣に感じて、たとひ命を捐てゝも惜しくないといふ念が起り即刻先生の旅宿に赴いて、金鍔を叩いて引き受けました。福士君は當時二十七歳、先生は二十一歳でありました。いよ〱脱走の計なつて、福士君は先生に一言の送辭を述べたさうです。福士君は年長者でしたから老婆心で、世には秀才でも、玉折蘭摧する者が少くない。くれ〲も愼しむべきは、傾城傾國が禍因であると、日頃の親愛を以て語り出たところ、先生は瞳を凝らして默つて聽いてゐたが、やがて強い聲を出し、頰に紅潮して「さて吾輩は、眼前肉身の事は斷ち切つて、憧憬の世界に突き拔けなければ、生きては再びお目にかゝるとも覺えず、榮華や魔の誘ひ物の數にはなりません」と、氣合ひの迸るやうな剛さが漲つて、ぢり〱と膝を詰められた時は、さすがの福士君も、先生の刄にかゝつて刺されるやうな思ひがしたとの事でした。

話はやゝ、前後致しますが、私は大正元年正月十六日午後一時、札幌區九條の御宅に福士君を訪問致しました。俥を同君の邸前に棄てゝ、氏の玄關前に立つた時、私の心はこの家に密封されてゐる主人に面會して、日頃の幻想を確實にする事が出來るかと思へば、或る期待が胸に脈打ちました。雪白の銀世界にくすんだペンキ塗りのガツテーヂ、かなり廣い邸が腰高の柵を繞らして居りました。庭には林檎の木を井字形に植ゑて、玄關まで奇麗に雪を掃き淸め土のほりめでたく、幸さきのよい兆しでありました。

流石に邸宅の模様に、主人の雅懷か思ひやられました。奥まつた玄關の式臺に立つて刺を通ずると、威勢のよい孫さんが私の前に現はれて一間の中を通り拔けて福士君の部屋に案内して吳れました。初對面ながら先生の事を窺ふと、恰かも枯野に展びて行く火のやうに應答して下さいました。望遠鏡で物を見るやうに、遙か先きにあつて影の薄かつた先生が、いま目のあたり大小をからりと投げ出し、矢も楯もたまらずに、船へ乘り込んだ調子までが、手に取るやうに描かれました。福士君に面會するまでは、先生の脫國の動機や教養の程度なども、何となく足が地上に着いて居らぬやうでありましたが、先生が雄渾な氣魄と、澄明な志向とによつて、

同胞の中に含まれた缺陷を親切に匡正し、先哲の事業を繼紹し完成するところの神聖な天職を託されたやうの感じがしたのであります。

前段、福士君の說明された材料は、字形の朧げな手帳や、腐蝕したやうな紙片でありました、私はこの高情の人が、先生をして日本の文化に貢獻をさせたのかと思つた時、やはり福士君もともに先生の事業の體系の中に組み入れられて、新文化建設に與つた一人であると思ひます。福士君は一體几帳面な方ですから、すべての紀念物を舊形のまゝに保存されて、それに手を觸れられる時は、流石に目に滿つる淚を拂はれてゐました。併しきび〳〵した風采は、橫顏の鋭い心持と相俟つて、絕倫の精力と冷靜な頭腦とを偲ばせました。ストーブの燃えさかつて居る傍らで威勢よく御自分で茶を汲んで勸められました。私はそのお話によつて、先生と福士君との相互の關係を理解し、脫走の場面に活々と輝いた目鼻をつけました。書棚の金文字や、自分で獲得した魚介鳥類の剝製が、石膏細工と交々排列せられて、非常に濃やかな情趣を湛へ、彈力ある潤ほひを匂はして居ります。さうした中に氏は、一糸紊れざる科學的の原則で、日常の生活をされて居ります。則ち維新後から着物は洋服で通し、食事も明治二十四年依願免官以來、

朝はパンと牛乳、その他は日本食を取られて居ます。硝子障子を透して「シダ」の木に積る六花の妙珠一堆、何となくクリスマス氣分を偲ばせました。

さて、福士家は奥州南部出の船大工でした。微族寒生、型の通り郷里を出て、父親と共に北海道福山の松前藩に奉公された段取りは、先生の祖父辨治と同巧であります。その後また箱館に移り、奉行所の造船技手となつて、御維新まで其處に居住されました。箱館滞在中、福士家に新空氣の這入つたのは、父親が日光見物の折、工藝の完美な有樣を見て、その時永遠に誇稱されるものは人間の技術であつて、その尊い人間が完成されて居らなければならぬと云ふことに感激し、福士宇之吉を江戸へ造船術修業に出したのであります。福士君は教育的利點の多い機會を逸せず、文化的教養をも怠らなかつた爲めに、大勢を誤ることなく、意義ある生活をされた方です。さうして箱館奉行所の海軍所の造船技手となりました。氏には兄弟姉妹が九人ありました。自分に子はがないので、緣戚から養女を迎へ、醫師を婿として居りました。その婿は第二高等學校の教授で、私が福士君の宅を訪れた時は、ドイツに留學中でしたが、その妻女が福士君の養女に當る方が、同氏の宅に同居されて居りました。

福士君の維新後の履歴は、先生に贈つた手紙の中にありますから、此所に記載いたします。他は北海道偉人傳中に在ります。

一、小生義三四年前より北海道地理取調の御用蒙り、昨年の初春には魯國領の東察加より千島國近邊まで出張、其後昨年八月末、魯國領より千島請取の際は、測量專務にて理事官に隨行す。然るに季節遲れの爲め、一二島に上陸、請取渡の間僅一時間の滯島、直に本船に歸り、旁々以て島嶼の實况は實現するの暇無之、實に遺憾の至り有之候。幸今般該島嶼に諸大臣出張に付、再度隨行を被命、現今出發の豫備中、諸事多忙中、何分寸暇を不得依て文略亂筆、要述の缺ぐる所もあり、足下完しく御洞察伏而冀ふ。頓首再拜。

明治九年六月九日　　福士成豊

西京　新島襄様足下

新島先生　廿三年一月廿三日、大磯にて永眠の節、公義君から福士君に「チヂイマシキヨス」と打電しました、その際福士君からの次ぎのやうな弔電を贈られました。

大磯百足屋　　　福士成豊

新島公義

伯父死去の由、邦家のため悲痛に堪へす、令閨落膽せさるやう頼む。

廿三年一月廿四日午後

四十字

右の弔電(てふでん)に答へた新島八重子夫人から福士君宛ての書翰(しよかん)。札幌二月十一日到着。

辨慶は如何にせしや

一書拜呈仕候。陳者亡夫襄永眠に就ては、匆々電音を以て御弔詞御送り被成下、難有奉謝候。人間死去の事は天命の存する處ろ、是非もなき次第とは申しながら、今日大磯に於て此始末を相見候事、夢の如く思はれ申候。幸に老母も差したる事無之候間、先以て御放神被成下度、願くは將來に於ても何舊來の如く御厚情を蒙り度、偏に奉願上候。

茲に謹て右御禮申上度、如此に御座候。草々敬白。

一月三十一日　　　新島八重子

福士成豊殿

福士君は右の書簡の餘白に、「辨慶は如何にせしや」と記しました。私はこれが何の意味で書かれたかを同氏に伺ふと、氏は鶴髪童顔を頗る引立たせて、人生朝露の如し、今日在つても明日は分らない、未亡人からその書簡を受取つた夜は、寒い風の吹く暗い晩で、悲痛身を噬むやうな思ひが致しました。働き盛りの身でありながら、隨分仕殘した仕事も多いでせうに、中途で逝かれてしまひ、大なる國家的の損失で、且つ生涯骨折り續けで、樂をする間もなかつたと思へば、自分が滅入るやうな氣になつてしまつたから、古武士の辨慶が如何なる事にも泣かなかつたことを思ひ出し、我と心を取り直すために書いたのだと語られました。最初から先生と福士君との間は、沈痛嚴肅な生を象徴して居ることを思ひます。

第九章

武士の思ひ立田の山もみぢ錦の衣きざればなと歸るべき

この歌は、當年の先生を象徴した歴史的照應のある、先生一代の名歌であります。普通世間に知られて居るものは、下の句が、「錦きずしてなと歸るべき」と訂正されて居ります。何時ごろ訂正されたかと云ふに、明治七年十一月歸朝して、安中なる兩親の許に暫らく滯在された時書かれた書幅は後者でありますから、事實は直ちに推斷されます。さうしてこの歌は、吟風詠月とは聊さか撰を異にしてをります。波瀾に富み、曲折の多い生涯を送つた、興味豐かな好話題たると同時に、先生の生涯の筋書でありました。一時社會の最も低い階級にまで身を墜としながら、少しも墮落せずに、また少しも士君子たるの志操を換へずに、二十歳前後まで受けた武士風の氣質を、依然として存續させてをります。先生自身にとつても、この和歌が激勵であ

り、また純眞な心情を、この和歌に書き纏めたものであります。福士君は、この和歌の意を汲み取るや、一刻も躊躇してゐることが出來ない程、心の亢奮を感じ、背水の陣を布いて、自己の全體に先生の脫國を脊負ひ込み、前にも後にも、唯だ一度而かも唯だ一つの生命を一瞬毎に縮めて行くやうな決意を此處に集中して、捨身がありの藝當を演じたので、その心意氣から寂びた底光りのする福士君の頭に、一切の方法が描かれたのでありました。左に記載の福士君の追懷は、それが先生自身としての本當の生活の根底を据ゑる爲めであり、國家を思ふ一念の爲めでありましたから、先生の決心は強い暗示を福士君に與へました。

「夫れ元治元年四月、「武士乃思ひ立田の山もみち錦の衣きされはなと歸るへき」の詠歌を小生に示さるゝは、則ち足下の我か邦家を憂て止まず、侭に此の志を發達す、以て其未聞を進化せしめんとの志望を抱かれ、其が救助に熱心の深きに感謝す。我身を忘れて秘かに國禁を犯す、以て六月十六日の深更を期す、米國商船ベェリアン號に同行す。急速の離別に臨み、足下は足下の志願を充分に完全せられん事を祈り、思はじ握手に感激せし事を今に忘れず。」(福士君が先生の歸朝を祝した文の一節)

先生いよ〳〵乘船脫國の當日、ニコライ教師の留守宅に一書を殘して、親の病氣危篤の故を

以て急遽歸國のやうに取繕ひ、暇乞ひして同邸を辭し、福士君、澤邊君と、先生と互ひに親交を契り、海岸通り山形屋といふ會席で別盃を交はしました。黄昏は漸く濃く四方にひろがり、陰影は追々深く重くなりました。併し宴席次第に活々とした光景を生み行くのでありました。この時先生の詠んで福士君に贈つたものが、前記の歌であります。たとひ未知の國とはいへ、現在の虛僞な、拘束的な、憐むべき生活から脫れて、自由な獨立的の生活に入るかと思へば、また鮮やかな歡喜の心持を經驗させます。されば、日陰者の人の視線を避けながらも、先生は流石に全身に異常の衝撃を感じ、

一枚破衣三尺劍。追懷往事思悠々。
從今得借鵬翼。歷覽欲遍五大洲。

の一詩を賦して料紙にしたゝめ、これを澤邊君に贈りました。追々夜が更けて、街頭の靜寂になつた頃を見はからひ、福士君は退席して、ボートを艤裝しながら先生を待つ。先生は大小を風呂敷に包み、變裝して豫定の所に行く。途中、亭犬かしきりに吠ゐて、下駄の緒を切つた爲め、先生は素足のまゝでボートへと急ぎました。福士君は先生を迎へ、無言のまゝボートを

本船へと漕ぎ出しました。

先生と福士君とは、共に危機一髪の線上に立つて、悲劇を化して悲壯美となし得る、詩的呼吸の人となりました。銘々が運命の如何に拘はらず、理想境を描き出して、これを樂しむべき獨立の權威を振りかざし、事件進行中の刺戟にも永遠に滅びざる自身の特色を貽し、萬象の一片に生命の不滅相を刻しながら、人間生活の歷史的意義の詩的高調に達したのであります。

さて、福士君は先生の脫國を引受けてから、絕えず出船入船に意を注いで居りました。今時で云へば、運動費とでも云ふべきでせうか、さう云へば福士君に、何か策略の氣味でもあるかのやうに受取られるかも知れないが、珠盤勘定といふものは一體、一定の方式に拘束されるもので、律義者ほど比較的、勘定の達者なものであります。則ち只で人に物は賴めないといふ意で船長の机やら手廻り品などをわざ〳〵高價に買ひ受けて懇意となり、その揚句、大秘密の計畫を船長に話し出しました。船長も流石に思案に暮れましたが、ドイツ系の米人だけに血の環りの早い男で、その相談を義俠的に脊負ひ込みました。この船長名はセボリー、其の父ばドイツ人で和蘭に移住し、そうして又米國に來たのです。

船はベルリンといふ名で、スクーナー型三本マストの百二三十トン位の船で、船員は船長以下七八人、皆な外國人ばかりでした。當夜先生は尾羽を打ち枯らした姿で、單衣に大小を風呂敷に包んだのを抱へ、福士君の寫眞をふところに納め、さうしてボートに乘りました。福士君は櫓櫂を手にして、波浪永へに消えぬ歷史話を描きました。無論。私はこの際の光景を新聞紙上の活字で想像するやうな華麗さはなかつたものと思ひますけれども、併しそれにしても先生がよくもさほどに身を瘦すまでに覺悟をされたものだと福士君にただすと、聲に應じてそして最も甚深の滿足を與へた返答は一應下の通りでした。何んといつても先生は屈從の怜悧を學んで一種の調和性が出來てをり、人から何と云はれても、對者に快感を與へるだけの態度がおのづから先生に備はつて居りました。無教育の水夫等に、穢多と惡口されてもジャップ、と謂はれても、一切頓着することなく河岸を換へて出精して見せるといふ氣慨が、先生にはあつたと福士君が語られました。

福士君の細心の注意と苦慮とによつて、先生等は深更の中に首尾よく本船に乘り移りました。先生は一度ならず二度ならず死の恐怖に打ち勝つて、さうして常に天國の喜びといつた新らし

い生活が、先生の上に加はつて行きます。先生は自分の意志を信じながら、而かも神の意志なくば何事も成るものでないといふことを深く感銘して、正義と信ずる處には、敍すその意志を大膽に表現して行きます。さて船に到着した瞬間、船長と福士君と先生との間には、無言のまゝで而かも力強い握手が交はされました。福士君は直ちに本船から離れる、先生は船室に姿を隱す。一切が電光石火の如く片附きました。吉田松陰は一朝にして蒙塵せざるを得ない、混亂と慘悲の事になりましたが、先生は福士君と云ふ仁の時機の觀測と人氣の觀測とをもつて上結果に參りました。而かもその實行が物凄いほど力強い一致團結の下に行はれて、恰かも一人の手足の如く統一的に活動されてをります。

先生の生涯は聖職に捧げられた爲めに、平和と愛の戰士としてのみ世に知られてをりますけれども、その前身は戰爭の場數を經た勇者の如く、さすが海軍傳習所以來、軍略を心得て死活に愛の結束を造り、相互を結合して割なき仲となり鬪たのです。さうして死活の數を閱したことも、百戰の將士に比して劣りません。自由の爲めには一身をも犧牲にし、正義の爲めには敢へて躊躇せぬ勇敢な戰鬪力を事毎に發揮して居ります。實に偉大なる人道の戰ひは、無爲

なる平和人のなす所でなく、眞の闘士ならでは出來るものでありません。

さて船に乘るや否や、船長室に導かれて、船長の調度私物の裡に身を潜伏いたしました。流石に千鈞の張りも一時に弛んで、一睡夜の明くるのも知りませんでした。翌朝、話し聲がするので不圖耳を欹てゐると、警吏が來て船を巡視するのでありました。息を凝らして刑の宣告でも聽くかの如く戰々兢々として居りました。やがてこれも無事に濟んで、船は豫定の如く錨をぬいて出帆しました。先生の周圍の陰影は次第に晴れて、全身に衝擊を與へ、全存在を爽快にしつゝ、目的を達するより外に途がなくなりました。この上は心のまゝに天下を周遊して、その決意を一點に集中することになりました。

さて、刹那〱の生命が何時まで活きて行くものかと思つて、先生は自分の悲劇の見物者となり、人間はどうせ一度は死なねばならぬと覺悟を定めた。時が、或る意味に於て既に死を超越したものであることを覺りました。荒れ狂ふ浪に洗ひ去られる船の運命を忘れ、自らその船の船頭であることさへ忘れて、先生の意識は最早や死の脅威を感ぜぬ程度にまでなりました。

想ふに先生は、理想家であつて、同時に科學者であつたから、その意志の動く道程は、科學に

よつて說明され得る行き方でした。故に權謀と見ゆる中にも、積極的建設があります、さうして科學者が往々陷いる卑近な功利主義に墮落せず、自己中心の偏狹な境地から救はれました。いはゞ唯物史觀、乃至唯物自然觀の上に、精神の詩的權威を主張する調和があつたのです。

星移り物變り、先生脫走の史蹟は時代を超越して、雄大な姿を印してをります。其處に當てば當年を象徵的に說明する詩的情趣が溢れて、先生の信仰を語り、精神の權威を物語つて居ります。かうした境地に在つて觀察した時に、私が以前自分の肉の束縛の中に於て先生の脫走の動機を眺めた時とは、餘程刺戟が變化して參りました。當時先生が、意欲の支配下にある現身の儘では容易に斷行し得る筈のものではなく、已に不思議な存在の意志に示唆されて動いてをり、且つ個人的の意識から遊離してゐたことが、十分に意識されます。誰でも一度この境地に立つて周圍を眺めることが許されるならば、同樣の心境を經驗することが出來るだらうと信じます。先生が令閨同伴で北海道に遊び、脫走の地點を說明された一節に斯うあります。

襄は當時の光景を一々指點して說聞かせました。そこに昔と替らす、其道の傍に英土利人ポーターと申す人の家あり、亡夫箱館に居候時は、ポーター商會とて中々盛なる者の由、其店に福士氏は番頭にて

同氏の許へ度々通ひたり、併其折は見る蔭なし、圖らずもポーター氏の名前が掛けあり、故に同氏を尋ねぬ。二階一室に、白髮の老人と其の子息が二人、實に見る蔭もなき御樣子。ソフアーは破れ、大理石の卓子は七分程かけ、靴は破れし所に他の切をあて、着物は所々につぎをあて、ロビンソン●クールソーの住居も斯くやと、妄想ひぬ。同氏は亡夫の來意を尋ねければ、亡夫は私は昔時、御店に福士氏の務あ居らるゝ時に、度々同氏に面會に來り、其の時より貴下をよく知れり。然し御挨拶は致せしことなく、御店の福士氏の御世話にて渡米致し、永年米國にありて勉學をなし、歸朝後同志社私立學校を建て、此度は病氣養生の爲め、札幌に行く途次、家内に昔出奔致せし時の場所を見せんとて、茲に來り圖らずも貴下の御名前を見て、昔時を思ひ出して御尋ね致したる次第なりと語れり。云々」

私はロビンソン。クルーソーの如き漂泊者の生涯を、自己の衝動に任せて盲目的の行動を探つた行き當りばつたりの男のやうにばかり、思ひ込んで居りましたが、結局、幸福な獨立の自由、さては健康そのものまでの中さへ、普通浮浪人と呼ばれて居る人たちの生活に存してゐることを發見した時、その點から見て、先生の大局に對する判斷が、根本的に合理的であり、さうしてキリスト教の人生觀に立脚し、人生に對する信念が、一段と高所に在つたことを覺りま

した。故に假令、滄海を臥床とし、廣い地平線に彷徨しても、恰かも火がその性に從つて天に向ふ如く、願望といふ靈的運動に入り、愛の對象がそれに歡喜を與へるまで熄むことなく、魂はこれに導かれ、これに傾いて、その喜びの對象に向つて活動を開始します。左に先生が渡米匆々、日曜學校の教師マッギー女史に語つて、乘船の光景を叙した一文がありますが、讀過悲壯の感じのするものです。

The eventul night came. The voyager met his three friends for tle last time. The cup of rice[1] wine was hassed from lip to lip in pledge of friendship. They all wished they were going too, cheered him on, and bade him good-by.[2] One of them — the clerk — promised to have a boat waiting at the water's edge near his store, at tweve o'clock, to take him to the Schooner, though Nee-sima was as much in dread of compromising, this faitful friend as of beratay-ing. himself.

At midnight,[3] a whispered word of parting, hashed footsteps, the muffled dip

of oars, and the true-hearted young patriot, who went to seek light and blessing for his country even more than himself, had stolen out from its shores like a gulpit.
(4)

This was on the eighteenth of July, 1864

先生が米國上陸匆々の生硬の英語と銘を打たるものですから、文章の好惡は暫く置き、脫走乘船のせつなの光景を描き得て、最も生彩あり含蓄ある意味のものです。第三者の幻想で書きたるものならば如問に華麗の文字を列排したればとて、先生の死活を賭した場面が鈍れます、兎に角英語の匂ひのあるものであります。そうして英語國民の社界に仲間入りをした事のある人でなければ書かれぬ文字です。若し、それ慾を云たならば、

(1)は Sake (rice brew) (2)は good-bye (3) は after 入れる(4)は Shores と訂正したならば恐くは完全に近ひものでしょう。

左に前假の英文を飜譯いたします。

印象のふかき夜は來れり、遙けき船路にいでたつ余を送らんと友は來れり、互ひに盃を交して盡きせぬ名殘りを惜みたり、この友等はみな同一の志向にて、余と行を倶にせんと切なる願望なりき、されば

余の爲め行を祝して、滿腔の同情を寄せにき、さて本夜十二時を斯して、余を親船につれゆくべく、友の一人なる英館商店の番頭は誓はれたり、余の滿足はさることながら、友をして暗黑と陷穽との血路にみちびくにわあらずやと戰慄せり、哀れ眞夜中になりし頃、波み打ち際の棧橋にて、感激と決心とに滿てる送別の聲が囁やかれたり、靜寂なる死の夜をやぶる櫓貝のをとのみ冴えにける、ああかくあることの何んぞ余一人のあこがれのみならんや、同胞の爲に自由と幸福とを、享樂せしめん志に外ならず憫むべきかなこの愛國者は、今ははや刑餘の人の如くに母國の海岸より、よみに葬られ了んぬ。

さて、先生の脱走に踏み込んで、力づくでも埒を明けようといふ氣勢を示した船長セボリー氏は、米國マサチユセッツ州セイロン市の產であります。膽略人並み以上に優れ、相應に目先きの見ゆる人でありました。終ひに決心の臍を固め、前途有望な青年をして、志を遂げしむることに致しました。これは一ッには、福士君の紹介に勵まされて、懸命になつたのではありませうけれども、窮鳥懷に入つた形の先生に欣んで握手を與へた彼の手は實に意味深重のものでありました。歸着するところ、彼は先生を通じて、人道的、平和的なアメリカの文化を傳播する機會を與へた人で、先生をして日本の文明史に最も大なる寄與をなさしめた人であるとい

ふ事を憚りません。その意味に於て彼はまた、新日本復興の恩人であると思ひます。實にこの船長の行き方は、一面から云へば、日米國交史の一側面をなして居ります。さうして其處には武士道以外の規範の動いてゐるのを認めます。從來、歴史的に餘りに閑却され過ぎて來た此の事實こそは、日本の文化史から見ても、否な志操の推移に徴しても、確かに大きな時代のポイントを劃して居ります。若しそれ政治的、軍事的の方面から見て、かのペルリの交渉が興奮的であつたとしたならば、これは寧ろ高い靜かな諧和的のものであつたといふことが出來ます。

この時、船長が福士君に與へた一封の承諾書は、生命ある眞の魂の聲でありました。恰かも大和魂を英文で綴つたやうな氣持ちのもので、それには感激と魅力とが溢れて居ります。船長が感激の泉を此處に發見した文書でありながらも、これをきつかけに、我が國公衆の思想の基底に於て封建時代の遺物を棄て、新哲學に立脚する人生觀の曉の鐘を打つたものとも、見ることが出來ます。かうした一國の文化に端境をつけた貴重な文献が、これを外にしてまたと何處にありませう。その文を讀み行けば、一字一句の中蠢くは血と誠とです。さうして感情の强度と彈力とをもつて全體を包括しつゝ、絶對的の自主自由、無拘束な自我の活動とが、全體の幻

影に不思議な優(やさ)しい詩的情緒(じやうちよ)を漲らせて居ります。

W. Y. Savry

Captain of the Schooner.

"Berlin" On the night of the 16th July, 1864. with Mr. Fukushi's request, that of the Captain Savry who were so kind taken this great risk beeing payed for Mr. Neejima as so far to Shanghai, on the night of the Hakodate harbour. He lifted this negative to Mr. Fukushi's hand, as his remembrans to be carried out Fukushi's wishes.

私が船長の書かれたこの英文を推奬した所以は文章でなく内面的に考へて見るとそこに人格的な問題を包藏するからです。そうして先生の命が繋がれて先生の陣立を改めさせた點は、惟た單に先生の恩人であつたのみならず、時勢をして悠然として適當に歩を進めしめた一契機となつたからです。文章其の物の體裁からいへば全然破格のものです。又可なりに脱線の處が多いようです。何んといつても獨系の逸和蘭人であります。若し之を近代の英語に直したならば、左の如き判り易きものになります。

On the night of July 16, 1864, at the request of Mr. Fukushi already made that captain savry would be so kind as to take the risk of helping mr. Neeshima to fulfil his desire to get to Shaghai; on that night, in the Hakodate harbor, he lifted this negative to Mr. Fukushi's hand as a token that his wishes would be carried out.

この譯文を左に記載します。

ペルリン號の船長セボリーは福士氏の御懇請により新島氏をして其の企てを徹底せしむる爲めに、余の一身を賭して、氏を上海に御同船まうすべしこの決意を表明する爲めに、余の影像を貴下に呈す。千八百六十四年七月十六日（元治元年）箱楯港にて

福士宇之吉様　　セボリー

さて、先生が再度歐米漫遊の節、即ち明治十八年四月、この船長に面會して、昔日の義俠を感謝し、且つ日本文化の急速に進歩した情況を語り、昔日を追懐して、互ひに久濶を叙したことを、先生は米國から取敢へず福士君宛に端書で通知しました。

前略。米國にては小生を日本より連れ出し呉候、甲比丹セボリー氏を相尋ねて同氏方に一兩日滯留、縷々昔話をなし、又貴兄の事など相談じ、甚相樂み申候。同氏も久々にて相尋候故か、殊の外喜び呉候同氏は當時はユーヨーク州中ブロックリン府に滯在被致候。

新島襄

福士成豐賢兄

先生は當夜脫國の實を擧ぐるために、數週間心力を盡し、別けてその夜の疲勞で反動的に、殆んど茫然としてその後の日を送りました。實にこの時ほど、しみしみ九死の界から蘇生したといふ感じを、覺えたことはありませんでした。さてそうして、一歩死から離れて活きて行くことが出來ると思つた時、新たにまた自分を脅かすところの不安の實感が襲つて來りました。それは他でもありません、封建社會の政治といふのは、もと〳〵支配階級者の思惟するまゝに規範を求めて形成されたものですから、この特殊階級を擁護するために、其處に根強い習俗的に偏見が潜んでをります。それ故、公儀から譴責でも受ける恐れがあると見たやうの事件に對しては彼等は思ひ切つた言動をするのでありました。先生は此度自分の脫國一條に就いて、兩

親兄弟友人が、それに連座して、事件が如何やうに發展するであらうか、また彼等が如何に呪はれるであらうかといふことを思ひ煩ひ、事件か感覺的に悲劇的に展開して參りました。これは無理ならぬ問題であります。福士君もまたやはり悲劇的の運命に襲はれて、先生を首尾よく脫國せしめてから、その後一ヶ年の間といふものは風の響にも一喜一憂…、官能的に恐怖するやうになり、平和の保證が全く閉ざされて、晴れやかな一日をも送り得なかつたといふことでした。

さて話は前へ戻つて、光榮を以て、終始した先生の船は、風を眞帆片帆に受けて、津輕海峽を西へ西へと航海して行きます。先生は最早や古い夢にこびり着いてゐる必要がなくなりました。神のやうな朗かな心持で、死をだに辭せじと思つた者が、人生の須臾なるを悲むことの無益を敎へられ、その結果先生は、何等報酬を望むことなく、自身船の雜役に從事することになりました。死の恐怖に打ち克つ人は、即ち彼れ自身神を見た人で、新しい生活はまたかうした機會から始まります。先生は墨繪のやうに薄らぎ行く母國の山々を見ながらも。心眼に永遠の姿を夢みつゝ、一碧平靜、海上自然の中に人間の足跡を印して行きます。先生の日記によれば、

海上至つて平穏で、平均一時間七浬の速力で航海したとあります。航海四日目に、先生が例の船長の銀のホークを、洗ひ落とした事件が突發したのです。この航海中、先生の常務は全くの雜役で、不快極まるものでありましたが、併し先生は　層の誠實を以てこれを處理し、またその感情を克服して、人間味の稀薄な雰圍氣の中に在つても、先生の彈力性ばかりは、材料と密接に融解して、靈魂の詩壇を形作つてゐました。先生はすべてのものを肉眼で見ず、此際特に精神の眼で觀たのであります。

既脱日本到支那海時。

男兒決志馳千里。自甞苦辛豈思家。
却笑春風吹雨夜。枕頭尚夢故園花。

先生乘船の當時、懷中には僅か一分銀で三兩しかありませんでした。隨分思ひ切つた旅行家です。それでもこれを全部取出して、その銀のホークのために、損害賠償として船長に差出しました。かやうに先生が困却し切つた時、直ちに驅け寄つた騷々しい支那人の料理人たちが、

冷笑的の態度で交ぜ返すやら、または日本の苦力を苦しめる積りかなんかで盛んに卷し立てた爲め先生は一人旅の心細さにやゝ氣を腐らせました。この航海中、幾分の景物を添へたことは前記の一條と、他にもう一つの事件がありました。便乘者の一人なる英人が、「ジョンブル」式を發揮した爲め、先生聊さか不可抗的の情熱の捕虜となつて、死か生かの恐ろしい緊張を示した一齣であります。この椿事は先生の眉間の疵に和韻したもので、先生を典型的に聖檀の人に祭り上げたところのそれです。先生としては餘り正直すぎた嫌ひがないでもありません。それは便乘者の英人が、先生に枕を持ち來れと命じたのに、先生が勘違ひをして、その爲めに眉間をやぶられたと云ひ傳へてをります。その時先生は、自分の船室に駈け込んで、日本刀の鯉口をくつろげ、件の英人を眞二つに切つて捨てようと覺悟したさうです。が然し徹頭徹尾、見當違ひで、眞面目に議論するのは、馬鹿げて居る心地がします。さて先生は日々の苦役で、生活にやゝ疲勞の一時期が續きました。誠實な人生の戰闘者でも、落ち込まねばならぬ人間の情熱には眼を蔽ふ事が出來ません。流石に先生も愛着の絆にほだされて、左の一首を詠まれました。

旅枕母の心を思ひやり夜半にもゆめは結ばざりけれ

又

ふるさとの母の心の淋しさをたびねの床に思ひこそやれ

先生は境遇が如何にあればとて、時代錯誤の精神に復歸するやうのことはありませんでした。それ故この船中もまた先生のためには、神聖の教壇でありました。

さて日本海は、この季節に於て、太平洋が梅雨で、比較的波が荒いのに反して、氣壓の勾配急ならず、温度の分布が平均して、その航海は愉快でありました。故に先生も一週間目から會話の稽古に取掛つたといふことです。航海後七日目に大山の尖端を見出し、また麗しい夕陽と雲の色彩との中に、裏日本の詩美の天地を眺め、また一面には道徳的慘虐の行爲のこの方面に多かつたことを思考することが出來ました。先生の船は例の九州と朝鮮との海峽から對馬を經て日本海に入り、北海道の北部から更に能登半島に逆轉する黒潮の一分派に乘つた爲め、九日目には早くも長門沖を通過して、豐後水道に入りました。この間始終、日本の相貌を見ながら明るい晴れた日となく、青く冷い夜となく、抑揚の強い風情を添へました。箱館出帆から十二

日目に船は上海に無事到着しました。先生この時次ぎの一詩を賦されました。

泊レ舟薄暮揚江口。風景自兼日出分。
一夜蛙聲頻入レ夢。尙爲二古舍舊地聞一。

かくして先生は、至る所に空氣のやうに文學を呼吸し、さうして其處に生命を讃美して居ります。その生命の背景に宇宙大の背景があり、偉大な人格が神々しく聳えて居ります。先生は全く平和主義者となつて、人類愛の感情に裏づけられ、「惡に敵するなかれ。人汝の右の頰をうたば、また他の頰を轉じてこれに向けよ」といふ殆んど無抵抗主義の域に這入りました。要するに總てが先生には啓示であり、默示でありました。一層はつきり言ふならば、それは先生の體驗に於て達した觀照の生活に外ならなかつたのです。これを直ちに日常生活に應用して、體驗上の法悅を自らも味ひ、また他人をも悅ばしめたのであります。かく萬事に切り盛をするやうになつたのは、恐くその生涯に於ける種々雜多の幻影と啓示とが、先生の信仰を統一して同じ調子を帶びさせたのにも據ることですが、別に時間的に眺めて、先生の一身上に「復活」の意

味さへ結び付けた程の眞の出來事は、嘉永六年丑の正月十五日、先生が未だ幼少の頃、木内神社佐倉宗五郎の祠を參拜したときであります。その次第と云は、下總國太田に板倉家の陣屋がありました。同所は安中藩の領地で海上匝瑳の二郡に亘り、草高一萬三千石其所の代官井出治平氏と、先生の祖父辨治、及び父民治とは親交の間柄で、「春興」といふ俳句の會が代官の宅で催されましたから、それを機會に參拜したのであります。

その時集會した人々は、いづれも同藩士でありました。先生の親父も祖父も列席したのです。その席の摺物に次ぎの如くあります。

初夢をゆめにはなさし朝日さす　是　水（父民治の號）
親は子を客にして待睦月かな　清　女
蓬萊や松のにほひの何處までも　董　洲
星かけの殘る湖水や初からす　雨　桃
初凧や島の煙りのよくみゆる　一　知
尊やな鶴もあやうるみ代の春　曲　江（祖父の號）

饒か家の隣り〳〵を霞けり　　樗年

よる年の力ためさん弓はしめ　　子楸

裏表月も日もさすやなき哉　　兎州

丑の春

番外

平生の見るものにせん櫻はな　　麗水（先生の號）

さて集會した、俳人の同勢が、うち揃つて佐倉神社に參拜に出かけた途中、向ふから領分内の百姓が乘りうちしたので、代官はその怠慢不禮を憤つて、鞭で打擲し、而かも豚のやうに扱ひました。この狀を見た先生は事實、百姓が生産して支配階級者の生命を維持して行くのに、倒さまに生活の管理を彼等から受けて居るのは、畢竟、民衆が生活の事實を考へ、または理解する事が出來ぬやうに、組み立てられた社會の罪であることを悟り。少年ながら、何時かはこれが合理的に引き直される時があらねばならぬと想つたのであります。この第一印象が先生を震動し、薫蒸して、且つ本質的に深く堀り下げた結果として、自己の人格的體驗に基いた生活

を人生全體に解釋し、これを最も大きく、最も深く徹底せしめて、個性の潛在性に十分の展開を遂げしめ、統一ある政府を樹てゝ、倫理的の動因が遍く支配するやうにしたいといふ意氣込みを持たれたのでした。替言すれば、生活の不合理に組み立てられて居ることが、先生に取つては如何にも心苦しい惱みであり、例の常識に働きかけ良心に觸れ、隨つて生活を動すの力となり、おのれの尊貴を自覺して來ると同時に、それを滿たす方便として、部分的には反對のあつたにも拘らず、大局から觀察して、先生は終ひに脱國したのであります。

第十章

斷髮之辭

新島幹

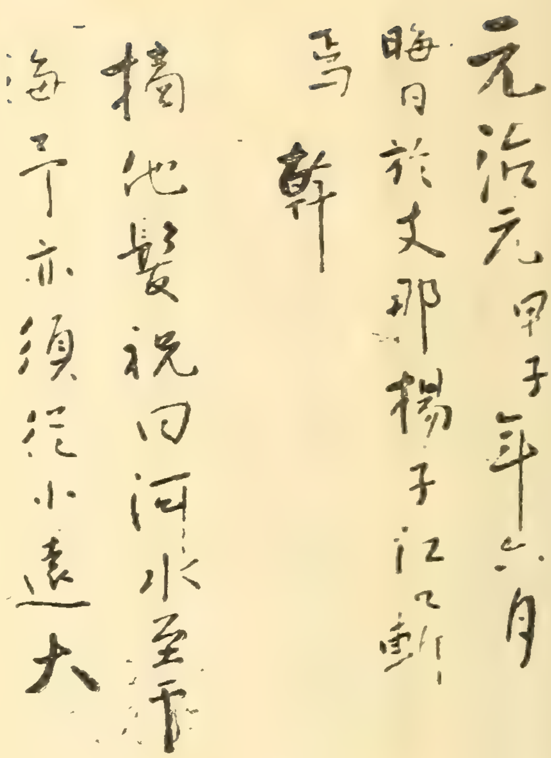
元治元年甲子年六月晦日、於支那楊子江口斬焉、即祝而曰、

摘他髮祝曰河水至千海予亦須從小遠大。

先生は楊子江で斷髮して、その半分を江に投じ、殘りの半分を所持されてをりました。それは現に未亡人の手に保存されてあります。

私共が安中教會で先生の二十周年紀念を開催した折、未亡人が前記「斷髮の辭」と共に、先生の毛髮の數筋を持參いたされましたので、それらを展覽する機會を得ました。私は渡米後、サンフランシスコ、ゴールドン●ゲート公園の美術館に、ナポレオン第一世の頭髮の、數筋保存

されてゐたのを見ましたが、その前に立てば英風永へに欽ずべく、而かも懐かしみのある貴い活きた歴史で、且つ千古の教訓であるを覺えます。若し先生の頭髪もかういふ風に保存された



ならば、日本の思想界の推移を何ものよりも鮮やかに語るものであらうと信じます。私は先生の一身上にとつて上海が心理上の回歸線で、而かもそれが地理上の回歸線と略ぼ一致して居るのを不思議に思ひます。日本人がこの上海まで來ると、その人相應に自己を透察し、その人の言行がその人全體の象徴となるなども、考へてみれば不思議に堪りません。先生が此處で斷髪したかと思へば、慶應二年、幕府から英國に留學を命ぜられた十四人、即ち川路太郎（寛堂）、中村敬輔（敬宇）、外山捨八（正一）、箕作奎吾、箕作大六（菊池大麓）、鳴瀨錠五郎、伊東昌之助（岡保義）、市川森三郎（平岡森三郎）、（湯淺源次、安井眞八郎、杉德三郎、福澤英之助、德川一郎、

林董氏等も、皆な此處で斷髮して居ります。お國自慢が出來なくなつたのか、或ひはこれまで國民的自負心が異常に多かつた所爲か、兎に角大抵の日本人は此處へ來て初めて大局を理解するやうであります。さうして至る所にドイツ人またはイギリス人の押し強く戰つてゐることや彼等が元氣を清新に保ちながら、自分たちこそ世界の他の民族を支配する使命を有するものであるかの如くに自負して、傍若無人に振舞つてゐることなどを見ては、百聞一見に如かずの譬へに洩れず、曾て幕府とか討幕とか唱へてゐた人たちも、既に此處まで來た以上、それが痴人の夢を解く底のものに過ぎなかつたことを知つたのでありませう。

さて先生の箱館から乘つた船は、鮭と昆布とを上海に陸揚げして、直ぐまた北海道に復航するのでありました。兎に角、今まで心眷々として故國を忘れなかつた先生も、嫋々たる清風の江上に波立つ、南畫のやうな逸氣に接しては、自然と無何有の鄕に入り、逍遙乎として塵俗を脫却したやうな思ひを懷かれたことでせう。少年時代、文献的に讀んでゐた唐詩撰や歸去來の賦が、一帶の前景に活々した光景を生んで行きます。駟馬高蓋の人もあれば、路傍の砂を積んだ上に橫臥する出世間家もあれば、樽の中に蹲み。上に布をかけて、鼾をかいて眠つてゐる人

物もあります。これらを見るにつけても、先生は當代の人間が昔し離騷を詠じたり、菊を東籬の下に採つた、陶淵明のやうな人ばかりでないことを知り、理想と實際との距離の餘りに遠いのに驚かされて、論語や孟子で得た人生觀だけでは、いよ〱見當が付かなくなりました。

先生は海外の空氣に觸れて、異常の求新本能を滿足させ、材料が嶄新なだけに、傑作の數日を送りました。何んと云つても、この時分の滿足すべき解答は、たゞ渡米の可能と云ふことでありました。若し機會がないとすれば、それこそ生存の壓迫、死活の運命となるわけで、腕力沙汰でも遣り通すより外に途がありませんでした。何とか纏りをつけねばならず、反射的に一派の悲しさが胸を壓して來ました。先生の胸には義憤性を帯びた呪咀感が強く湧き來つて、衷に炎を燃やしながらも、猶ほ且つ「聖旨の天になる如く、地にもなれかし」と祈るより外に途がなく一難去つて一難また來るといつたやうに、先生は常に愛ある神の鞭に打たれ通しでありました。さうして先生は海を見よ。天を見よ、汝の一上一下は天地も共に喜憂し、汝の向上は自然も共に歡喜し、汝が墮落すれば、天地も共に愴然として慟哭するであらうといふ實感を、痛切に感じました。人間萬事、神の意思なしには、生きようと欲しても亦、寸陰を伸ばすこと

が出來ず。死なうと欲しても亦、意の儘に死することの出來ないのは、我の深奥に自分を導く神の在るためであると信じ、先生は邁往直進、必要に向つて息を繼く間もない程に奮闘し、漸く米國に向つて出帆すべき船にありつくことが出來たのです。勿論、ベルリン號の船長が、僅か短時日の航海ながら、先生と十數日間海上生活をして、先生の強烈な意志の力、また側目も振らず一生懸命に活動する旺盛の元氣、且つは雜輩や便乘者の倨傲な言動も意に介せず、ひたすら、眞理を憬仰し、鑑賞する生活に達してゐるのを見拔いて、船長自身がこの危險を冒し、而かも滿足を感じたのですから、今回もまた米國行のワイルド・ロバー號の船長に向ひ、懇切に先生の保護を依賴して吳れた爲めに、斯くは好結果に運んだのでありました。

　ワイルド・ロバー號の船長は、名をエーチ・エス・テーラーと呼び、マサチユセツ州チヤサム市の人でした、この人はスコツトランドからアメリカに移住した人です。尤もこの姓はアメリカに多い姓で、いづれもスコツトランド系であります。先生の甫めて入學したフイリツプス、アカデミーの校長は、エス・エーチ・テーラーと云つて、たゞ最初の頭字が船長と違つてゐるだけです、このテーラー君がベルリン號の船長の依賴を快く引き請けて、此處に先生の初志を一貫

さすことになつたので、先生は愈よ自分の生活を以て福音を示すべく決意しました。先生は先づ此の船に移るや、否やそれまで一日も肌身を離さなかつた日本刀の大きな方を船長に贈り、且つ一切無報酬で船の勤務に従事することを約束しました。

さて、先生の北海道から上海までの航海所感によれば、結局、海上生活は晝夜の別のない時間の延長で、陸上生活のやうに絶えず時間といふ觀念の刺戟がないから、生活が落ち付いて、心力と體力とを元始的に、自然の素朴な中に置くことが出來ると云つてをります。自然を爛熟した都會生活や田園山河に局限して、而かも猶ほ自然を愛すと云ふ人は、根本的に自然の解釋を誤つてゐる人であります、さうでなければ自然を愛することの淺い人であります。卽ち人生を積極的に建設しようとする人は、十字街に立つて地上の繁榮から眼をそむけ、神への絶體信賴に生き魂の救ひに關與せざる一切を棄てゝ顧みず、その焦點を神にまで移し換へる人であらねばならぬと先生は云つてをります。

先生は本船の客室勤務に服すことになりました。本船に乗り込むや否や、船長は先生をジョーと呼びました。その動機の程は分りませんが、この稱呼は、強い熱と強い光りとを結合した

生命の所有者だつた先生にとつて、天來の聲でありました。先生が呱々の聲を揚げた時の名は七五三太で、此度靈活への誕生はジョーの名を以て迎へられることになりました。私の心證では船長が全然、卒爾に呼んだ名ではないと思ひます。たとへ先生は其の時蓬頭垢面であつたにもせよ、聰明の一點光は先生の一擧手一投足に意義を帶びさせたに相違ありません。随つて先生にはその點から、船長に隨喜渇仰の誠熱を捧げしむる、絶體不可抗の權威があつたと思ひます。即ち先生の如き稀有なる人格の投げた光りが、船長の心に深く徹したものでせう。元來、英米人は剽輕ですから、かやうな場合にはチャーレーとか、ジョンとか呼ぶのが通例であります。勿論、輕蔑の意が含まれたわけではありません。日本人同志にしても、名を知らぬ人に對しては相手が男子ならば、次郎さんとか太郎さんとか呼びます。それと同じ格で、米人はチャーレーと呼び、英人はジョンと云ひます。けれども先生の呼び名には、渾然たる人格の意義が含まれてゐました、

先生は七月四日の北米合衆國獨立祭を上海の海上で迎へ、その日の夕刻、船は福州に向つて出帆しました。此處で材木を搭載して、これを香港に輸送し、或ひはマニラの麻やサイゴンの

米を南方支那の沿岸に運送しながら、凡そ八ケ月間は香港を中心に游弋してゐました、翌年即ち一八六五年四月一日、マニラを出帆して、米國に向ひました。この時、英國船が本船に危害を加へるとかいふ風聞が頻りに傳へられた爲め、船長はそれに對して兵器彈藥を用意させ、素破と云はゞ對抗すべき準備を整へました。これは聊さか航海中の單調と倦怠とを破る底のものでありました。先生は潑溂なる犧牲、奉仕の念を發揮し、沈靜と明智とを以て戰鬪の準備、砲の照準等に大いに手腕を認められました。この事件は聊さか感情上の行きがゝりで、實はアメリカの南北戰爭が終局を告げたにも關はらず、交通機關が發達してゐない結果として、遠洋航海中に在る英米船は、猶ほ半信半疑の態度を以て大いに警戒に努めたからの事でした。けれども先生は總括的に英米人が、個性の尊嚴や自己の責任を知覺し、國權擴張のためには犧牲的精神を發揮して、銘々が哨兵的の動作をなし、國家の戰鬪を有利に導くやうに、軍需品なり何なり、缺乏を感ぜしめぬやう努力してゐる、チウトン人種の奮鬪的氣質に驚き、またその反對に南方アジアの諸方へ殖民しつゝあるラテン系の民族の外律的で、而かも前者に比べてその精神的發展の極めて貧弱なことに驚きました。尤も先生の船は、軍需品の性質を帶びたマニラ麻、

硫黄、獸皮等を多量に搭載してゐたのですから、誤解の中にも一面の事實はあつたのです。さてこれを日本内地の混亂紛雜に顧みれば、英米の色彩を背後に多く持つた勤王黨、若しくは討幕派と、ラテン系の色彩をヨリ多く背景に持つた佐幕黨との對立關係に、最早勝負か見えたようの氣がして、今迄は恰度、廬山に入るもの廬山の態を見ずとの譬の通りであつたと心付きました。

　先生は香港碇泊中、一日同市街を見物して、圖らずも書肆の店頭に漢譯聖書を發見しました。先生にとつては、これが偉大の發見だつたのです。即ち壯大新奇な滿足と幸福とを、この寶典の中から得られると信じたからであります。併し强烈な欲望と昂奮とは在つても、生憎く所持金がなかつた爲め、先生は此處に思案を定めて小刀を船長に提供して米貨八ドルを得て、遂ひに此の千秋渇望の聖書を手に入れました。尤も時間の上から言へば、先生が漢譯聖書を見たのはこの時が初めてゞはない、實は青年期、甘雨公の小姓だつた時に既にそれを見てゐました。それは近藤重造から公に贈つた聖書でした。即ち長崎に輸入した舶來品の荷詰めになつてゐたものであります。今猶ほ當時の殘物が、安中藩士の宅には往々發見されます。斯くして先生は

何時の間にか、眞の幸福への前奏として聖書を迎へてゐたわけですが、併し嚴密の意味に於て高き精神の王國が、先生のために其の扉を開き、人生の眞意義は此の關門を通じて、初めて捕捉されると知つたのは、實に此の先生の上海時代であります。固より無點の漢譯聖書でありますから、讀破するために苦痛を負ふべきは覺悟して、先生はその航海中、馬太傳、馬可傳、路加傳、約瑟傳と、順序に讀み終りました。さうして自分の苦しみぬいた體驗から、先生はヨハネ傳三章十六節にある「夫れ神は其の生み玉へる獨子を世に降し玉ふ程に愛し玉へり」といふ聖句に非常な共鳴を感じ、その感激を通じて、凡そ花の眞相を知る植物學者は、自分が花であらねばならぬ。即ち愛する爲めには知らねばならず、知る爲めには愛さなければならぬことを悟りました。さうしてそのために、先生の經驗は悉く徹底し、渾一して來ましたが、猶ほその上に、美しい理想を追求するためには醜い現實を卑むべきでなく、それを聰明に取り扱ひさへすれば、其處に最上の知慧が見出されるものであることを訓へられ、先生は凡ての香察を無關心に過ごさず、極めて周匝にその價値と標準とを省察し續けました。

香港を中心とした生活の八ヶ月間は、南方支那人や海峽植民地、さては南洋の土人など、こ

の附近一帶の米食を主とする人種の間に、民族的通有性のあることを發見し、且つその傳說や習慣やなどにも連絡のあることを見出し、先生は暫く自分自身の心を原始的の宗教精神に復歸させ、それを自己在來の道德的關係に結び付けてみれば、其處に一見正反對のやうに見做される事の中にも、實はそれ〴〵論理的の脈絡のあることを知り、これまで謎として自分の心に殘されてゐた疑問も、どうやら美事に解決されたやうの氣持になりました。さうして航海は自分に緣遠いものとばかり思ひ込んでゐたところが、それが結局、人生の研究で、而かも其處には新しい道德の曙光さへ認められ、自ら眞に隣人を愛してみて初めて、從來の如くたゞ抽象的に道德を說くことの、危險さが判明しました。

先生は恰かも桃太郎の鬼ヶ島征伐を今樣にしたやうなお伽噺の世界を航海しました。その間又清新の創意と放膽な行動とは、いづれも先生の境遇を改造する理想の遂行に、役立たぬものとてはありませんでした。赤道間近の太陽の威力と、氣象の變動とは、視界の光景に著るしい變化を與へ、紺青の海さへ全體に甚く疲勞と倦怠との氣を溢らして居ります。熱帶の海の面を引立たす飛魚は、恰かも銀箭を射るが如くに飛び交うて、海の色を一層明快な調子を引立せ誇

張してゐます。さうかと思ふと、海豚の一群が、豐かな情趣を湛えながら、船を追ひかけます。インド人、マレイ人等の赤銅色の皮膚、さうして血の氣に不足した痼弊さ、檳榔子を噬む女の唇の、牡丹を吐くやうな紅さ、ボルネオ、スマトラの土人の原始的な、而かも猿との距離さへ判明しないやうな相貌などを眺めるにつけても、先生はこの世界には、叮嚀に裏漉しにかけられた理屈だけでは、通らぬ社會もあることを知りました。またその邊の植物は放縱で、形相も杂然、混沌朦朧たるものでありました。船はペナンを出で、北緯十度の線を眞西に向つてインド洋を航海して行くのであります、日蔭でさへ百十度から百二十度を昇降するので、極度に生温かい自然は、たゞ漠然とその美しさを感じさせるだけで、心的生活とは緣遠い、恐らくは滅び行くやうな氣持のする、一種の雰圍氣に這入りました。右舷にセイロン島を望みながら、船の走り行く際、忽颯爽たる青嵐の吹き來ると共に、白雨沛然として臻り、色も香もない平凡な生活に詩興を點じ、油汗で古ぼけた地圖のやうに滲んだ肌襦袢も、そのために奇麗に洗ひ淨められ、全身浴みをしたやうな、爽快さを覺えるのでした。先生はこの氣象の中に、初めて華やかな色彩の羅列を見出し、さうして大きな波のうねりにも亦、美しい曲線のあることを知り、

それまで何等の情緒も興奮も持てなかつた赤道直下の景物に、漸く憧憬を感じるやうになりました。のみならず、先生は事物に對する愛の缺乏から、これまでの總てが渴の狀態に眺められたことを悟り、物事の平凡に見えるのも亦、愛の缺乏に由るものであることを知りました。船がアラビア海にさしかゝつた頃、先生の感情は炎々と燃え上つて一種矯激の念と峭直な思ひを以て絕えず波立つて居ました。

悲嘆を極めた、絕望の淵に沈んでも、白眼世に拗ねるがごとき孤獨に陷いることなく、反て溢ふるるものの包む感情となり、宇宙はただ人間が愛と調和を作る原料として、役立つものと徹底し、ますます感情を整理して行く的確な、方便をゐたのであります。

先生のやうに、特に優れた官能と、想像力とを、賦與されて生れた人を、天は窮地に陷しいれて、市井の通常人は、目前の仕事に追はれて、他を顧りみるだけの、餘裕を時間の上にも情操の上にも、有たなかつた、それに關して人類全體の、損失の意識を代表するやうにさせたので結局先生に取つては、散漫なる常識よりして、必要に應じて次第に宗教道德に分化せしめ、終にはこの同じ經過は、更に進んで生活を構成する、もろもろの要素のはたらくことになりました。

船は一時間平均十三マイルの速力で航海を續け、四月十八日にアフリカの東岸ザンジバル群島を通過しました。今までの色や、光や、觸感や、空漠たる單色の塗抹が、俄然、銅褐色に變り、面前には初めて見るやうな狂亂怒濤が襲つて來ました。この時先生は常人の感じ得ぬ氣韻を直觀し、その光景を藝術的に活寫しました、先生の日記に記されたその箇所は、別けても寫生的の生命が浮動して居ります。

本船は風を左舷船首に受け、半速力にて避航せしが、逆風の爲に狂亂奔騰し海水は爆布の如く甲板上に落ち來り、紫電一發、飛沫金紫の色に輝き、綠青色の潮水、此方を指して長蛇の如く走り來り、逆流電光の赫々たる、數條の金龍天に登るが如し。船體の最大傾斜、四十度乃至五十度に及ふ。甲板が海面上殆んど直角を畫く時、器物は散亂墜落し、食器棚のコップ、瓶、皿、鉢等、鏘然、瑲然、戛然たる響を發して轉動し破碎す。備砲の繫止鎖弛み、短艇の固定索伸び、各進路は銅索を緊張し細砂を撒布して各自之によりて步み、以て身體の顚倒を防ぐ。午後に至りて風力勁疾、其の力十に達し、大雨は盆を覆へすか如く、橫さまを顏面を撲し、風伯雨師雷霆を件ひ、霹靂轟然として、怒濤の蜿蜒として吶喊するや、高さ五十尺、長さ千尺を超え、波頂は高山の絕頂を望むか如く、波は千仭の深谷の如く、船體波

頂に登る時は、我體浮揚して恰も天に冲するう如く、而して波谷に陥るときは、奈落の底に入るか如く四顧朦朧として、光景悽愴を極め、風は檣桁を掠め索條を打ちて、刻々暴威を振ふ。軀を堅牢なる檣柱に固縛して、風浪に拉せらるゝを避け、奮闘努力、魂盡き魄逝き、爲す所を知らず。最早天命を俟つより外なきに至りし時、船は押し流されつゝ、幸運にもサンジバル群島に避難せり。云々。」

四月二十一日、先生は船の位置を測つて、南緯十二度、東徑三十五度、それによつてモザンピック海峡に入つたことを知りました。昨日までは人間の悲曲を歌ひ盡したが、さうして今日は世界が全く新たになつたやうな感じを懐かれました。曾つて北越の夜泊りに追分の曲を聞いて泣き、隱岐の島で欸乃の聲を耳にした時の緒情が、今猶ほ先生の心の何處かに持續されたものと見え、船長か曖黛糢糊たる水平線上にマダカスカル島を指示した時、先生は本能的に自己の脆い情感を抑へることが出來ず、何となく涙を誘ふやうな氣持になつたと告白されてゐます。船は南へ南へ航しました。先生は肱を曲げて、既に天下を取つたやうの氣にもなり、東漂西泊の生涯にその烈しい感情を直線的に發揮し、事象を求めつ、また精神を興奮させつ、詩美に充ちた航海を續けながら四月三十日といふに、早くも喜望峯に達しました。その頃から先生

の頭が多少復雜に働き始めました。それと申すのは十三世紀に、かのマルコポールが初めて此處を通過して、首尾よく探險したことの回顧が、先生をして何ものか、自己心中の弦線に觸れしめたからです。此所は先生のためにも亦、喜望峯であり得た地點で、「得たりと信せよ、されば得べし」との心情が先生の心に強く働きかけてゐました。これからゴツト岬に直航し、先生は其處で初めてリンコルンの暗殺されたことを聞きました。一同驚異の眼を見張りましたが、中でも先生は殆んど茫然自失の態に陷りました。それはリンコルンが、先生をして人間の威嚴と光榮とを意識せしめ、且つ先生の平生敬愛して措かなかつた大人格者であつたからであります。さうしてまた、世界人類の完全な融和にまで推し上げて來た其の理想に勵まされ、先生が足一度び米國に印したら、何を措いても早速この大人格者の謦咳に接することが出來ると思つて來たのに、その當てがすつかり外れたからであります。先生を乘せた船は、此所から一路直通米國に航しました。

航海中、先生は大いにその知見を廣めました。これが皆な先生の實生活に織り込まれて、色をなし音を發してをります。世界の大小は其の人の意識の大小で、全體を大處高所から見下ろ

せば、それだけ人間は大きくなるものであります。かやうにして先生は、世界平和主義の戰ひに使命を帶びた、有力の選手となつたのであります。先生は熱帶温帶に棲息する樣々の人種を見て、人間の道筋をはつきり知ることが出來ました。最も危險多いのは、國民的に强大なる故を以て、世界の他の劣つた民族を支配すべき使命を有するかの如くに誇負することで、その結果、併呑慾を姿に現はすことは、國民のために最も愼しむべきことであるとの主張でありました。即ち一民族が唯この理由のみを以て、征服者に自己の生活振りを强いることになると、アフリカの土人が悉く靴を穿くことになり、その結果、獸皮の需要供給の平均が破れて、結局は自分の生活に脅威を蒙るやうになります。これと同じく、米食をヨーロッパ人に强いるとしたならば、生産の調和を失して、米食人種の生活が不安になります。結局、地球上に熱帶あり、温帶あり、寒帶のあるのは、神の大なる經綸であつて、これを破るのは道德的に慘虐の行爲であることを知りました。

　斯くて先生が、死か生かの恐ろしい緊張を踏まれてゐる時、飜つて先生の家庭を見れば、これまた人間悲劇の絶頂とも言ふべく、先生の兩親や姉は、極度の心勞のために一寸した事にも

非常に感じ易くなり、憂鬱と喪心と悲哀とが、全身に喰ひ入るやうな氣持になつてゐました。さうして先生の生死の程も覺束ないために、彼等は悉く絶望的の氣分に襲はれてばかりゐました。

人間の情熱に眼隱しをされ、藩士の中には突つ拍子もない噂を流布して、先生を反逆人呼はりをなすものもあれば、情熱の捕虜となつて、新島家を繼子扱ひにする手合ひもありました。飯田君等のやうな健全な分子は、そんな衝動的の噂をてんから問題にしませんでしたが、それでも浮說が誘因となつて、結局事實と誤られさうな恐れがあつた爲め、先づ應急的の解決として、先生を藩士籍から抹消すると共に、幕府の遣責を避けるために非公式にそれぞれ諒解を得る手段を採りました。新島家の張子房たる辨治も重役方に運動し、先生の兩親方の謹愼振りも測々人に逼るものがあつたので、世間の攻撃は次第に緩和して參りました。さうして當代の藩主勝殷公も、先生を藩士から除籍する事だけで、事を濟まされました。

民治嫡子七五三太儀、去元治甲子年三月、中箱館表江海軍學科爲修業罷越候處、同六月同所より何れへか罷越何分にも消息不明に付、二男双六を以て相續爲致度、七五三太發嫡之儀、奉願候。

元治四乙丑年七月十日

御大目付衆中

必然の行き掛りとして、右の届書が祖父辨治の手から政廳に差出され、新島家は責任を引きて辨治が隱居を許可され、消極的の行動ながらも、よく幕府に對して責任解除の効を奏し、事件は案外容易に結局を告げました。更にこの裏面の消息を語れば、それはやはり飯田君、横井君等の公正な判斷が與つて力あつたもので、結局、新島家と彼等自身の蒙るべき不面目を輕減し得たのも、皆なこれらの人々の盡力に竢つところが多かつたのです。

さて新島家は、辨治といふ巨頭の公生涯が終局を告げ、また實質的な革新の動機を常に家庭の空氣に描き出しつゝあつた先生を失つた爲め、一旦新らしい道に踏み出した矢先きを、俄然再び暗憺たる雰圍氣に包まれました。さうして折角芽生へた新島家の黄金時代も、かやうな狀態で終局を告げ、その反動として感覺的な幽暗な神秘主義に移りました。物事を突き詰めて行く結果、感情が強く働いて、新島家の人々は八百萬の神々を禮拜しながら、先生の歸朝まで單に衝動的の禮拜を續づけました。正信迷信はさて置き、神信心、その現實的な痛みから離れて

容易く光明の世界に轉じ得る喜びを感じ、それによつて漸く悲劇的の破滅から救はれてをりました、たとひ觀念的にでも先生の運命が取り留められたと思ふ時、彼等は初めて苦惱の境地から救ひ上げられた氣持になり、また祈る以上は必ず其處に靈驗のあることゝ信じて、三ヶ日には目黑の不動、芝の琴平、日本橋の水天宮に奉施し、氏神や守護神には日參を續け、さうして目前に差迫つた大禍難を無事に避け得るやうに、加持祈禱を營みました。その讃歎の幡經が戸外に漏れて、往來の人の足を止め、悲哀の氣が磅礴として、今度は反つて世間の同情が、盛に新島家に灑がれるやうになりました。

新島家の人々は天地に跼蹐して、世間への交際も自然遠慮がちでありました。且つ造次、顚沛も、その不安には無關心で居られぬ所から、新島家の傳統である鋭敏な感受性が善い意味でも惡い意味でも、極めて有力な作用をなし、それの深酷な影響か、一家の氣持を世間の思惑に對して非常に敏感にし、明治七年の秋先生の歸朝時まで、さうした戰々兢々たる生活振りが續きました。維新後、新島家が安中に移住してからも、近在秋間村の金田氏といふ緣家を每月訪問しては同氏と共に其處から三里餘りの貝澤稻荷に參詣したといふ話を、私は金田氏に聞きま

した。その頃はまだ帯刀の時分でしたから、民治も亦その例に慣つて、いつも帯刀であつたとのことでした。

抑も先生が北海道箱館に海軍修業を命ぜられたのは、もとより藩の辭令には相違なかつたけれども、實は横井家老や新進の飯田君等が一隅を擧ぐれば三隅を知るといふ聰明な人たちであつたから、新しい國家の統一運動のための對策として豫て人材を養成し、列藩に卒先して世界的常識を準備しようといふ方寸の下に、計畫された一件だつたのです。それ故、先生と飯田君との間には萬事了解があつたわけで、先生が箱館表に於て英語や專門學の研究に適當な機會を見出すことの出來なかつた場合は、直ちに國境を横斷するといふ默契の下に出來上つた事件なのであります。從つて飯田君が、先生のために後顧の患なきやう全責任を負びて居るのは、むしろ當然のことです。飯田君の直話によれば、先生が江戸から北海道に向つて出帆の際、既に思ひ切つて海外に飛び出すことが分つてゐたから、飯田君は凡そ何時頃からして悲劇の到來するかを豫期して居つたとのことでした。元來なら、先生が江戸を出帆するや否や、機會を見計つて、先生の兩親を納得せしむる筈だつたから、飯田君は屢々新島家の門前を訪れたものださ

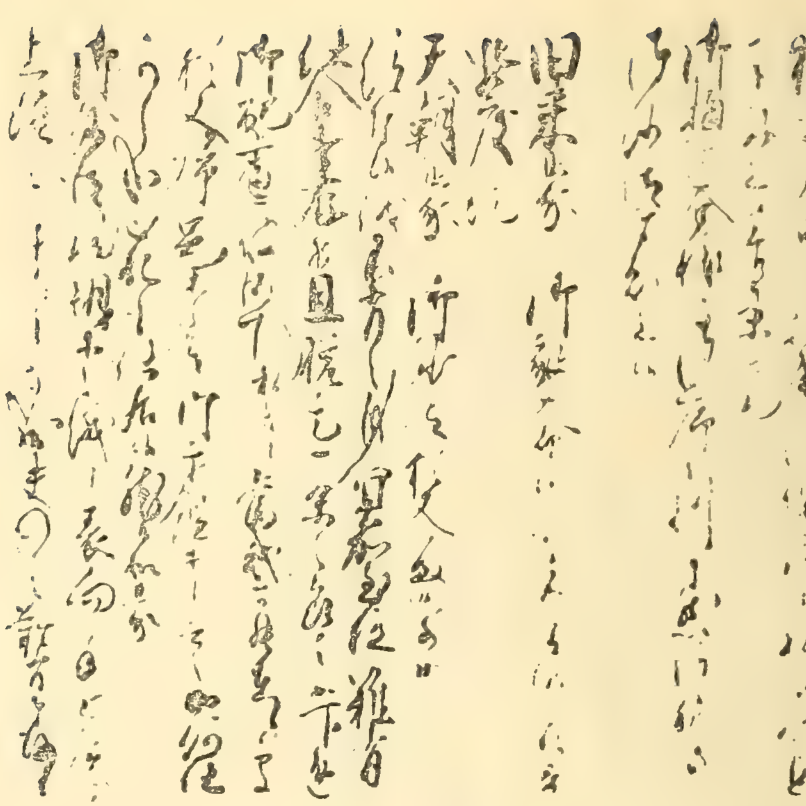
うだが、憂愁に深く閉ざゝれた家内の容子を見ては、自分の特別に冴えた腕前を信じながらも、さすがに寄り付き難く、さりとて事實を語ることは猶ほさら不可能の事でした。第一は公義に對する重犯にも等し、第二は兩親の許さぬ者を自分が幇助したとあつては、先方の出やう次第で全く抗辯に窮することゆゑ、飯田君は軒端まで身を寄せながら、その都度、折れた翼を搔いて一時逃れの日を送つてゐました。しかし新島家の人々の悲慘な遣瀨のない情況が心に刻まれ、且つ眼前に浮んで來る事、當面の形勢、必ずしも樂觀を許さないので、まゝよとばかり肚を据ゑ、更めて同家を訪問し、威嚴を表てに立てゝ、應對の混亂を避けながら、平靜な態度で一什始終を物語りました。その節飯田君が先生の兩親に說明された大要を、同君は私にも語り聞かされましたが、その大要は則ち左の通りであります。

　第一自分(飯田君)は先生の意思を十分汲み盡したと信じて居りますから、御兩親に對して申し上げた辨解も强ち自分の獨斷のみでないことは明かであります。御兩親も既に大略御承知の筈で、先生は廿兩公の意思を體し、西洋文化の中樞に入り興國のために必要缺ぐべからざるものを攝取したい、といふ强い希望と、深い信念とで、企てられたのでありますから、生命を全うして勝利と成効とを齎らすべきは

先生として當然のことであります。さうして先生は、日頃、深い修養のある方ですから、自己を忘れて無益な犧牲を排ふやうな掛念は、全然ありません。結局、一時の波瀾は、光榮に終局するための、犧牲に過ぎなかつたとの事です。さすがに、兩親ば我が子に同情の餘り、事此所に至り得るまでの我が子の苦心に、一時は泣き出しましたが、さすが辨治の負けじ魂と兩親の覺悟とで、これまで小さな心に寄り合せて、思案に暮れてゐた始末とは、案に相違した態度で、自分の申し入れに應じられました。尤も先生が單なる自己の衝動から、勝手氣儘の行動を採つたものならば、當然、不名譽の譏りも甘受するべきでせうが、それが先君の意思を體して、一身を賭したものとあれば、武士として最も生き甲斐のある途を選んだといふ事になるので、新島家のためには其の事が、非常な救ひとなつたのであります。先生が本然に武士道に活きたといふ印象を對象として、どのくらゐ爾後の新島家に蘇生の思ひがあつたか分りません。維新後、新島家が江戸を退去して安中に移轉する際、御家中に告別の意味で差出した一札はこの間の消息を最もよく說明して居ります。則ち、

猶以嚴暑、折角御保護被遊候樣、乍恐奉存上候。乍末筆、御惣容樣に御序之刻、可然御執成、御沙汰奉願上候。

一、舊來蒙　御懇命候悴七五三太儀、不存寄此度從



天朝蒙　御沙汰、猶又留學被
仰付候儀、不肖之身冥加至極、難有仕合奉存候。
悴脫走一條之節者、非常の配慮被成下、私も　當惑
罷在候處、猶又歸邑之義、御印鑑等も無之、如何
仕可く候哉と心配仕居候。然る處、蒙
御沙汰、歸朝等之儀も、表向手を廣げ、上陸之事に
も相成、夫のみ難有奉存候。偖、
一旦者、不忠不孝之者と申族も有之哉に承り候處、
此度蒙　命、
御先君様江之御奉公にも相成可申と奉存候。右就而
者、可相成御座候はゞ、私も　追々老衰仕、其上昨年
中より　種々心配等　仕候故、歸邑之事而已　樂居仕
合、旁以此度之廉に而、一先立歸之儀相成候者、猶
更上之
御尊名様も出、年來之修業之廉も相立、如何斗大慶

に御座候。對面上者、此後何年留學罷在候共、少しも厭不申候。右等之義も、荒々弘方よりも別々申遣候間、若都合相成候はゞ、一先歸邑可仕候と樂しみ罷在候。右樣之義も、不外　御懇命之義故、奉申上候。乍恐御推察可被成下候。

（備考）本文中歸邑とあるは先生の歸朝のことを意味す

明治四年七月　　新島民治

御家中衆中

さて先生は北海道から脫走の前日、委細書面を書き認めて、先生の兩親、飯田君、藩廳等にそれぐ、先君への御奉公のため據ろなく渡海を企てたる趣きを通信したのでありましたが、幸か不幸か、その書面が漸く御維新後に届くやうな滑稽が、演ぜられたのであります。今の郵便制度の時代から見れば、殆んど隔世の感なきを得ません、これと同樣の滑稽の再演されたのは、先生がアメリカのフイツプス、アカデミーに入學した時、その樣子を福士君宛てに通知した書面の中に、先生の兩親へ宛てた一書も同封されてあつたので、福士君はわざく東京に出で、新島家を詮索したけれども、終ひに見出すことが出來ず、已むを得ずそれを其のまゝ先生の歸朝時まで保存して、先生に返却したと云ふことです。維新後の瓦解の狀態は、實に想像以

上の混亂であつたと思はれます。

前略。足下先年米國御着之後、御實家へ宛御差越の御書信は、未だ屆兼候次第にて、卽ち別紙一八七三年二月十四日付を以て御報に及び候通り、小生出京中に屢々八方探索するも、御實家之御引越先き判然せず、不得止其儘所持罷在候に付、幸御返納申上候間、前條宜敷御推察被下度、此段只管御宥恕伏而乞ふ。

明治九年六月九日　　　　箱館　福士宇之吉

西京　新島襄樣　足下

瓦解後の新島家は、明治三年五月一日、江戸から安中表に引き上げ、再び日光と空氣との恩惠に浴することゝなりました。新島家に新紀元を劃した辨治も、勝てば官軍負ければ賊と、世事を雲烟霞眼視して、春秋幾年を此處に送り、さうして過ぎ去つた後の諸相をさつぱりと洗ひ去つて、超時間的の理想境を描き出した生活に入りました。隨つて生活に何の意匠のあるでなく、且つ又目的のあるわけでもなく、行住座臥すべて詩的直觀のまゝに動き、日入つて休み、雨降つて讀むといふ、境涯の閑寂さにありました。さうして安中では最初、上の尻長樂寺とい

ふ寺に落ちつきました。其處が火災に罹かつたので、再び上の尻の南裏なる龍昌寺の庫裡に引き移りました。その時おみよさんは、安中藩の儒者から懇望されたさうでしたが、家事上の都合で嫁入しませんでした。元來が器量人で、何一つ資格に不足のものがなく、界隈から娘たちの裁縫の師匠や作法の躾け方に調法がられ、隨つて相當の收入もあつたさうです。當時の裁縫弟子で、今に生存してゐる女たちが澤山あります。いづれも主婦となつて、キリスト教の家庭を造つて居ります。

先生脫走中の新島家は、辨治君とおみよさんとが兩花道の立役者で、先生の兩親は別段に特色もなく暮して參りましたが、そのうちに時勢が變つて來て、隱居仕事に金貸しをしたさうです。辨治は貨殖の道にかけても剛の者で、會計と交際とに獨特の能を具へ、それが生涯の經歷を造つた位でしたが、民治は容貌及び態度からして何等窮迫の樣子もなく、京童に惠比須と謳はれた程の人でしたから、金を儲けたり、事業を畫策したりする野心は、毫頭ありませんでした。且つ別に趣味も道樂もなく、たゞ日常差迫つた人々のために、ほんの慈善的に金貸を續けてゐたに過ぎません。龍昌寺の生活も約一年で切り上げ、其處から程遠からぬ新屋敷といふ處

に、江戸を引き上げた家中の新邸が出來たので、新島家も其處に移りました。當時隣家に山縣といふ方が住んで居られたが、同氏の話に新島家の人々はよく人を扶け本統に困難の人には志を濟さしめ、如才なく交際してゐましたから、一般に好印象を與へたさうです。

さて、その後廢藩置縣となり、新島家も家祿奉還願書を差し出しました。實際、武家の社會は生活の保證を奪はれたのですから、その當時の混亂は想像も出來ない位であつたさうです。安中の家老職二百石取りの者が、二十五石の割で公債を下附されたのです。

新島家の家祿奉還願書

熊谷縣貫屬

北第十一大區小六區碓氷郡安中住

士族

新島民治

（文化四年丁卯二月十四日生）

妻　登美

（同年十月十日生）外家族二人

一家祿九石

私儀去辛未以來歸藩し、夙に家祿奉還之志願日夜罷在候處、今般永世祿奉還御聞屆之御布告、謹而拜承仕候處、不圖資金下し賜候旨、難有仕合奉存候。就而は家祿奉還之上、資金拜戴仕、猶此上不朽之策相立候樣仕度、何卒家祿奉還之儀、御採用被下度樣奉懇願候、以上。

明治七年五月廿四日差出

安中士族　新島民治

熊谷縣令河瀨秀治殿

安中時代に於ける最後の新島氏の家屋は、今猶ほ同町新邸に存在してゐます。一閭の家を抱いて、夜は一穗の寒燈を點じ、修道院的の、空氣の中で唱經し、晝は南窓の下で剪裁いぢりを致したのであります。

新島家は末子雙六君を亡くしましてから、天保の昔、男系が殆んど絕えようとした場合の、深刻悲痛の經驗を再び繰り返して差し當り家督を相續すべき男子を選定せねばならぬことになり、朝夕途方に暮れてをりましたが、幸ひ懇親の人の勸めに從つて、同藩なる植栗家から次男球彌氏を迎へて、養子にいたしました。球彌君は公義と改名しましだ。この時、新島家は中小

姓格で、士の分に列せられてありましたから、萬事を士太夫たる慣例に從つて行ふため、その改名にも論語を擔ぎ出すといふ騒ぎでした。

新島錄彌實名

宣　稱

公　義　字　音

雅押子　義字草體

家語云獨居思仁公言言義其於詩也則一日三復白圭之玷此其所出也

明治四年未仲夏　　小林碩撰

これを辨治が襄さに、普通人を超越した新機軸を以て改姓したり、定紋を創案したり、創造的な衝動で而かも含蓄のある意味深長な形容詞を先生に冠し、七五三太と命名した事に比較するとその風情は餘程異なつて居るやうに思はれます。

餘談が少し長過ぎましたが、さてかの新島家の雙璧と云はれた雙六君は、遺傳的の素質に於て先生と異なる所多く、天性の才禀を文書の閲讀に磨ぎつゝ、春風怡蕩の家庭に成長したので

すから、その生活心理の諸相が先生と全く違つて居ります。藤田氏から得たる左記の書簡は雙六君の特色を最もよく描き出してをります。

拜啓秋冷之候處、益々御健勝奉賀候。新島故双六氏の事蹟御取調べの由、是は大賛成、愚老當時之益友にて、さながら大才子、且文章は非凡の天才、清樓に酒三行すれは、得意の焚書論を朗々誦讀する事今も眼前に髣髴致し居候。乍然文章全部を記憶し居らす候。御返事迄、早々。

明治四十二年八月十四日

東京牛込若宮町三八

藤田　穎

群馬縣碓氷郡安中町

根岸橋三郎様

第十一章

一八六五年四月、マニラを出帆して、四ヶ月間、海上生活を送り、先生は漸く米國ボストンに到着しました。恰かも八月十日の早曉で、先づ目に映ずるものは政廳の鐘樓、それが金紫の色に輝き、大厦高樓の丘に陟り岸に沿うて、蔭と光とを反射してゐる光景であります。それが先生の胸には何となく、聖地に踏み込んだやうな緊張味と、同時に新時代の先頭に雄姿を現はしたやうの感じを與へ、また一方にはかやうに、前途に希望と光明とを認めながらも、尙ほ且つ漂泊兒と云つたやうな寂しさに胸を撲たれずにはゐませんでした。悲壯と崇高との念が交々至るといつた有樣です。先生は無意識にポッケットから烟管を取り出して一服いたしましたが此の時先生の思ふやう、一旦獻身的に人類に奉仕すべく、決心の臍を固めた者が、この態は何んたる未練であらうかと、忽ち手にした日本式の烟管と烟草入れとを海に投げ棄てました。さてこれからは萬事自力で解決せねばならぬと、强い執着心が濃い眉根の間に起り、先生の相貌

は勇者のそれに相應しい感情の閃めきを示しました。さすがに先生は凡庸人と考へを異にし苟しくも國難の日に當り、一身の安全を圖るために、米國に遁亡したとあつては相濟まぬ、宜ろしく人道のために善戰して、暗殺の毒刄に斃れた大統領リンカーンを學ばねばならぬ、と決心されたのが、米國上陸時の先生の第一印象であつたといふことです。ボストンに投錨するや間もなく、船長は「ゴット」岬の家鄕に歸省して、二ケ月間休養いたしました。この間、先生は幼稚な水夫等と起居を共にして、無風流な日を送りました。隨分苦笑を嚙み殺して、忍耐する場合も多かつたのです。當時は南北戰爭終結後の不景氣風が凄しく吹きまくつて居た頃で、めつきり事業の縮小され、使用人もどん〳〵解雇されがちの場合でしたから、特に外國人を世話するやうの人もあるまいと、水夫等から揶揄はれ、そんな話にさへ先生は恐怖の念に襲はれました。

ある日、先生はボストンの市街を見物しましたが、黃金の文字が諸方の看板に光つてゐる、燦びやかな空氣に身を晒らした時、さすがアメリカは世界で最も美しい國であると思つたことでせう。爽やかな微風に吹かれるのも良い氣持で、其處には旅人の心を暗くする何ものも見當

りませんでした。それにつけても、飾りのない淋しい江戸の町の事が思ひ出されてなりませんでした。なほも丹精に眺めて行くと、美術品や巨匠の作品が店頭に飾られ、立派な商品が数多く陳列されてあり、店舗の窓掛けや道に沿うた立派な建物に、先生は異様の感慨に打たれました晴衣を着けた子供や女などの寄り集つてゐる廣小路の一角に本屋があつて、その二階のクラブと書いた看板が、先生の目を惹きました。此處はワシントン街とスクール街との角で、オールドコーナーといふ書籍店でありました。その二階のクラブに集つて來る人々は、ロングフエロー、エマーソン、ホーソン、ホルムスホワイター、ローエル等、皆な世界的の文豪でありました。殊にロングフエローの如きは、國民的詩人として世界に名を遺した人であります。先生は吸ひ込まれるやうに、群集と共にその本屋に這入り、かねて心に掛けてゐた「ロビンソン●クルーソーの傳を求めました。それから二階に上つて、文豪等の談笑してをる場所をも瞥見しましたが、各自無造作に喋舌り、高聲に笑つて、如何にもざつくばらんで、快活な空氣を漲らせて居る、單純な賑かな光景が、身に泌々と嬉しく感じられました。中にも白髪童顏のロングフエローに先生は全く魅せられたのです。不思議にもこれが緣となつて、先生は在米中、時々同

氏の邸宅を訪問して、非常な感化を受けました。

當時、この國民的詩人ロングフエローの邸宅は、ボストン郊外ケンブリッヂにありました。歴史的の建築物で、かの獨立戰爭の際、總指揮官ワシントンの、本營に充てゝ居つたものですが宏壯にして彫刻、繪畫等、善美を盡したものでありました。其處にロングフエローが椅子に凭れて、澄んだ美しい眼で、白百合のやうな純白の鬚に波を打たせ、而かも抑揚のある强い聲で先生を誨へるのですから、先生の感興は一層深く、且つその背景に歷史的の風情を含み、如何にも爽やかなものでありました。光を求めに出かけた先生は、いつも感慨に浸されました。秋水、萬里の堤防を決するやうに、西洋の文化を味ひ、一層、西洋の詩を諦視することが出來ました。さうしてそれが先生の生活回轉期ともなつたのであります。

さて、郊外の風景と詩人の雅懷とを時の華府駐劄、日本公使森有禮君に語り、先生みづから東道の主人となつてこの壯宅に訪づれ、ともぐ〵雄渾なる氣魄と澄明なる志向とを、この詩人から享け容れました。當時の光景を私は、圖らずも一九二〇年、萬國平和會議の歸途、サンフランシスコに立ち寄られた神田君から伺ひました。神田君の母校はアンホースト大學で、先生

と同窓の出身であります。どうしてこの大學を撰定されたかと問へば、それは全く森公使の取計らひでありました。森公使の考へでは、察するところ新島先生のやうな人物が出た學校だから、其處が善からう位の處だつたさうです。神田君が初めて渡米したのは十四歳の時で、その時、森公使は二十三歳、新島先生は二十七歳でした。一日、神田君が森公使に隨行して、ロングフェローを訪問したとのことでしたから、その際どんな會話が交換されたかと尋ねましたところ、神田君の答へられるには、當時まだ會話の理解が十分でなかつたから、何一つ記憶に止つてをるものもないが、たゞ極めて鋭い調子で議論を闘はした、森公使の颯爽たる姿が、今なほ眼底に殘つてゐると語られました。さうしてその際、ロングフェローは受け太刀ながら、而かも賢い教師の態度であつたさうです。後日、森氏が文教の局に當つた際、氏がよく西洋の文化を醇化し、その撰擇を誤まらなかつた識見の上には、特にこの詩聖の感化が多かつたのであります。

さて先生は、ワシントン街の角の本屋で「ロビンソン・クルーソー」を手に入れ、船へ歸へてから異樣の眼を見張つてそれを讀み始めました。空想めいた箇所はさまで先生の興味を惹かなか

つたが、先生の泌み〴〵深い印象を受けたのは、寄る邊なきロビンソン・クルーソーが、孤島に於て神に祈りを捧げる場面でありました。一面、凋れ切つたロビンソン・クルーソーが、祈りの度毎に活氣づけられて、心から晴れやかになつて行くその氣持に、先生は甚だしく共鳴を感じ此處に初めて先生みづから神に祈禱を捧げました。

ロビンソン・クルーソーで端なく思ひ出されるのは、長澤鼎君のことであります。先生在米時代の記事中に、先生より前に薩州人が一人、既に在米して居つたとありますから、それは必定東洋のロビンソン・クルーソーと云はれた長澤氏のことであらうと思つて、私は「サンタ・ルーザ」の葡萄園に同氏を訪問しました。丁度、感謝祭の當日で、氏は東部からの來客と共に卓を取り圍み、今昔とりどりの談話をされたが、同氏の語るところによれば、先生の名は承知しながら、遂ひに面會の機を得なかつたとのことでした。猶ほ氏の云はれるには、とにかく日本の學生として米國に來たのは、先生が筆頭第一であります。その後、慶應二年に、横井佐平太、同大平氏兄弟が、フルベッキ氏の周旋でニューヨークに渡り、海軍砲術を研究しました。明治の初年に、田尻稻次郎、服部一造、岩倉具綱、同具定、目賀田種太郎、金子堅太郎、富田

鐵之助、勝小鹿君等が、東部に留學し、明治八年七月、小村壽太郎、鳩山和夫、菊池武夫、齋藤修一郎君等が、文部省留學生として東部に來り、明治十年、珍田捨巳、佐藤愛麿君等が、東部に留學しました。東部で育つた人々は、牧師或ひは官吏となり、米國を正義人道の國と見做して居るのに對して、太平洋沿岸で育つた日本人は多く實業界に入つて、人間の學問は書物でなく、實際社會にあると見て取つたやうな趣きがあります。斯くの如くして、私共の先祖が攘夷と云つて騷いだ歴史を、今日眼前に河岸を換へて、北米の西岸から眺めて居るのは、如何にも奇體な對照であると、長澤氏は說明されました。

先生は祈禱を捧げて神秘的な興奮を呼び起こし、精神全體に不思議な活力を與へられましたこれまで恒に先生の生活を創造して來た概念は、明かに神の福音の解釋に相當すると思へば、先生はそれによつて猶ほ一層活氣づけられるのでした。兎角する間に、船長が歸船して、船の持主なるハーデー氏に先生の身の處置を相談したところ、とにかく同人に面會して、相當の助力をするであらうといふ福音を齎しました、其處で先生は船長に伴はれて、ボストン市ジョイ町にハーデー氏を訪ね、初對面から異常に深い印象を相手に與へました。而かも先生の柔かい

感情に包まれた、貴公子然とした容子は、宛かも船長の推薦の辭に背かず、ハーデー氏は一人の子供を授けられたやうな心持になり、馬太傳二十五章四十節の「兄弟のいと小さき者の一人に行へるば即ち我に行ひしなり」といふ聖句を思ひ出し、直ちに先生を養育することに決心いたしました。事實に據つてみるとハーデー氏がこの事を一時の衝動によつて取り上げたり、または單なる好尚によつて取捨したのでないと云ふことは、精確であります。私は歐米紳士の生活の基準が、聖書によつて統一され、醇化されてゐることに敬服いたします。

ハーデー氏はボストンの有力なる實業家でありました。また一面、人生の諸問題に就いても相當の準備と覺悟とを持つた人でした。米國バークレー太平洋神學校のナッシュ博士（新島先生と同じくアンフオースト、大學の出身）に聞くところによれば、ハーデー氏は更にまた米國外國傳道部の實行委員長でもあつたさうです。猶ほ氏の長子の未亡人に問ひ合はせた返事に、ハーデー氏はその以外にも公私の名譽職に推薦され、各種のタイトルを持つて居つたとのことでありました。夙に大學教育を受けたい希望であつたが、病身のために實現することが出來なかつたので、自分の子供は勿論、有爲の子弟を扶持して大學教育を受けさせました。新島先生

は即ちその一人だつたのです。ハーデー氏の長男は大學の教授になりました。先生とは殆んど眞の兄弟のやうに親密だつたさうです。今左にその長子の未亡人の手紙を掲げます。

April 9th. 1922.

445 Bacon Street,

Boston.

Dear mr. Negishi,

I am sending you by mail the Life and Letters of joseph Hardy Neesima, which will be of great interest to you, I am sure. It will answer many of your questions. my husband was Alpheus Hardy, eldest son Alpheus H. Hardy. Therfore I am his daughter-in-low. I know joseph, as he was treated like a son in my father-in-low's family, and the book I am sending was written by Arther S. Hardy son of Alpheus Hardy, who is the only surviving member of the Hardy family. mr. Hardy erened the Title of Honorable, through many

civic duties from posts of responsibility and trust, he was a most earnest christian and devoted to all good causes. my husband served in the Civil war as First Lientenant in the 45 Regiment of Massatusetts Ill. mrs. Alpheus H. Hardy, she died four years ago.

I think this all the necessary information. I have two sons, Alpheus S. Hardy (the Auther of Biograph of Neesima) and koger Hardy, machants in New York City, the former my eldest son visited Tokyo and the Doshisha some ten years ago. If you want any more information you can write to James L. Barton of the board of Commission for Eoreign mission's 14 Beason St. Boston, Mass.

Hoping you and your family are well and gaining all your desire in America.

Your sincirely,

Caroline Hardy.

千九百二十二年四月九日（大正十一年四月九日）

ボストン市ベーコン街四四五
カロリン　ハーデー

根岸様

拝啓ジョーセフ、ハーデー、新島傳と其書簡とを御送附申上候間御參考と相成べく信候該書に依り御質議の條々明瞭に相成可申候自分事はハーデー家に嫁したるものにて故新島襄氏が父といつくしみたる、「アルフユース、ハーデー」は卽ち自分のしうとに相當致し候。父は新島氏を我等の同胞の如くに養育致し申候。前記の書籍は良人の兄弟なるアーサ、エス、ハーデーの著に御座候。同人は猶生存致し居候偖父ハーデー氏はボストン市の特志家にして種々の公職に就き又は名譽職に推薦され候故、名譽稱號をうけ候熱心なる基督教信者にして諸種の慈善事業に關係致し申候。良人は南北戰爭の際マサチユーセッツ第四十五聯隊の一等中尉にて從軍致候。母は四年前逝去致候新島氏の敬慕致し居りし仁にて候ひき私の長男も矢張り新島傳を著はし申候。次男は紐育市にて目下商業に從事致し候。十年前日本を觀光致候其節京都の同志社を參觀致し候由。猶御照會の事有之候はボストン市ベーコン街の外國傳道會社に御照會被下候はゞ委細御返事可申候乍末貴家の御渡米の目的を十二分に遂げられ候様祈居候。敬具。

ハーデー氏のやうな洗練された紳士と交渉を生じたことが、第一次的の意味に於て先生の成功でありました。併し光明と歡喜とが見出され、先生の意志が實現されるまでには、隨分色々の曲折があつたので、端的に一度の會見で定まつたわけではありません。一つには先生の英語が未熟で、自分の志望をさへ平明に叙べることが出來ず、それには流石に寛容なハーデー氏夫妻も要領を得るのに惱まされたのです。船長の辯明とても元が和蘭人だつたから、先生の覺悟と希望もを十分に陳述することが出來ませんでした。船長は思案の末、一時先生を傳道會社の寄宿舍に引き取つて貰ふやうに交渉したが、滿員でそれも叶はず、結局水夫救濟會に預かつて貰ふことになりました。そこで先生は、先生の脱走の動機と目的とを文書に認めて、ハーデー氏に送ることに致しました。その邊にやはり英米人一流の遠き慮りがあつたのです。因みにハーデー家は英國イングランドの出です。

かやうに先生が春の光に接するやうな暖かい同情を得た恩人のハーデー氏は、ボストン造船所の社員で、且つ貿易商でありました。先生が支那から便乘して來た船も、やはり氏の所有船でした。こんな風に人間の運命が豫定されて居るものかと思へば、世の中にこれくらゐ不思議

のものはあるまいと思ひます。ボストン外國傳道局のバートン君から知らして貰つた書面を通じて、私は何となく、私の頭に深い印象を殘して居つたハーデー氏を、沈靜の眠りから醒まして、現實の色彩の中に見るやうな心地が致しました。

May 22, 1922.

Mr. K. Negshi
2115 Parker street
Berksley, California

My dear mr. Negishi ;——

I have just received this morning your inquiry regarding mr. Neesima, repoting your plan to write his biography.

You ask some specific questions. Mr. Alpheus Hardy lived in Boston. He was a membar of a shipping firm.

From Boston to Phillips Andober Academy is only about an hour by rail,

and to Amherst College perhaps three times that distance.……………………

Please let me know if I can be of any further assistans. I would suggest that you will probably find these books in the Pasific School of Religion in Berkeley. If not, cansult our American Board Office, Rev. H. H. Kelsey. D. D. 760 market st, San Francisco, California.

With every good wish, I remain,

Very faithfuly yours,

James L. Barton.

先生は同年十月十一日、水夫救濟會の寄宿舎から、志望履歴書をハーデー氏に送りました。大體の筋書は、私が既に先生の少年時代や青年時代の記事中に述べて置いたことを、簡潔に書き約めただけのことであります。即ち、少年時代に住んでゐた江戸の空氣や家庭の印象が、強く先生の身に感ぜられたこと、次ぎに志學の時代蘭學に這入つてから興奮しやすい頭に強い刺

載を受けて、無限の感慨に沈んだこと、その次ぎには先生の急進的な態度と、社會の傳統的精神とが、互ひに反撥し合つたこと、次ぎに先生の志望が呪ひの打撃を受けたこと、最後に新思想が先生に燃えるやうな感激を與へ、遂ひにそれが脱走となつて現はれたことなどを述べたものであります。固よりこれらは英文で綴られて居ります。一八六六年の春、先生がフイリップス、アカデミーに入學早々、「ボストン・デーリー、アドヴアイタイザー紙が、「日本の青年」といふ標題の下に、先生のことを書いた記事を掲載しました。幸ひ同新聞の切拔きを先生が、同年二月二十八日附で北海道の福士君宛に送つたものを、私は同君から惠與されて持つてをります。それが今日に於ては如何にも趣味ある響きを殘して居ります。その記事の中には、先生のフレツシユ、イングリツシユが、そのまゝ轉載されてゐるから、一層、興味を惹き起こします。さうしてそれには先生の直徑的急進的の態度と、拔群の戰鬪力によつて些の讓歩、妥協のない、尙い途を歩んで來たことを言ひ現はして居ります。

The story of a young japanese

Less than two years ago a yomg foreigner landed on our shores with a personal history so singular and suggestive that it in his on fresh English.

....

A day my comrade sent me a atlas of United States wich was written in China-letter by some American minister. I read it many times and I was wondered so mush as my braiu would melted out from my head because I liked it very much-picking out president, building free schoal, poor-house, house of correction, and machine working and so forth. And I thought a governer of every conntry must be as president of United States, and murmnred myself thrt o, governor of japan ! Why you keep down us a dog or pig ? We are people of japan. if you govern as you must love us as your children. From

that time I wished to learn Amerecan knowledge, but alas ! I could not get any teascher to learn it. Although I would not like to learn Holland. I was obliged to learn it, because many of my countrymen understood to read it.

....

"Why, goverment ? why uot let us be free ? why let as be as a bird in a cage or a rat within a bag ? Nay, we must cast away sush savage goverment. But alas : such things would have been out my power !"

....

When he did not use his eyes: however, it was to some purpose. "A day I visited my friend and I found out small Holy Bible in his library that was written by some American minister, with China language, and had shown only the most remarkable events of it. I lend it from him and read it at night. I was afraid the savage comtry's law which, if I read the Bible, goverment will

cross whole my family."

....

"I put down the book and look around me, saying that ',Who made me -- my parents ?

No ! my God. who made my table -- a carpenter ? No ! my God ; God let trees grow upon the earth. Although the carpentor indeed made up this table it indeed came trees. Thon I must be thaukful to God ; I must belive him, and I must be upright against him,"was the swift and just conclusion.

....

"Then 1 began to search some vessel to get out from the country"

A kind helper in this undertaking was one of his new friends, a young japanese in charge of an English store and understanding the language well. He secrued a passage for him in an American schaouer bound for Shanghai.

先生のハーデー氏に送つた志望履歴書は、極めて興味多き考察を惹き起こさしめ、且つ先生の心意の在る處を汲み取るのに十分なものでありました、米國上陸後間もなく綴りたる初心の英文であります、先生の面目が生地のまゝに髣髴としてゐます、言語に絕する先生自身の體驗でありますから、私の意譯では其心意氣を象徵することが出來ませんから差し控へます。併しWo! my God. の一節に蠢めいている志操は、全然先生の心意氣を語ると見るべきものであります。そうして其意義に含まれたる處は、富若しくは財に對する傳統の感念を立て直さうといふ、理想の萌芽を藏めたものであります、先生の看たる社會生活の疾患は、富その物を單に法律の規定丈けの解釋ですまして居るから、抽象的感情的に浪費する恐れがあると見たのであります。更に敷衍して言へば、富に對する根本思操が全然缺如して居るといふのであります。そうして千古不動の所有者は、獨り造物主のみであるから、我等の持てるものを社會人類の永遠の幸福を目安として、還元すべきであるといふのです、富の慾求を整正し又其を利導するといふ貴ひ意識を藏して居るものです。先生一流の精緻の知識と豐潤なる想像力とが表明さゝるものであります、是れが先生の出發點であり且つ歸着點であり活動の源泉です。それを讀んだハー

デー氏は、先生をして矢も楯もたまらず、直接行動を取らしめた心中を察して、遂ひに先生を保護することに決しました。其處で先生は其の月、ハーデー氏の宅に引き取られましたが、感情的にも心理的にも一層親しみが加はり、志望を達すべき機因が十分に熟して參りました。

一八六六年の春、先生はアンドヴアー邑のフリツプス學院に入學することになりました。ハーデー氏夫妻はわざ〳〵先生を伴ひ、フリツプス學院に參りました。此所はボストンから汽車で約一時間の距離です。何はともあれ、先生のためには英語を學ぶことが差當つての急務でありますから、院長テーラー君とハーデー氏夫妻との相談の結果、先生は英語科に入學することになり。其處に翌年の秋まで、二ケ年間在學しました。在學中、先生はハーデー氏や校長テーラー氏の膽入りで、ヒツドン君の宅に世話になつて居りました。さうして同邸に同居のフリント氏夫妻が、懇切に先生の英語の面倒を見ました。先生はアンドヴアー邑に滯在中、南教會日曜學校の靑年組に這入り、マツギー女史の教誨を受けました。前掲のボストンの新聞記事「日本の靑年」は同女史の手から記者に渡されたものであります。

フイリツプス學院に在學中の先生は、いつも若々しい新鮮な思想と、漲るやうな新鋭の元氣

とで、自己の本質を鍛へ、十年一日の如く燃えさかつた飛躍を試み、衷心から神と人とにいつくしみました。アンドヴァーに在學中は、「リップヴァン・ウインクル」のやうに近隣の人々にも稚さな心の人にも、將たまた大勢の交友にも、忘れ得ぬ印象を與へました。ヒッドン家の人々や、フリント夫妻などは、先生に對して最大の尊敬を拂ふ樣になりました。先生は「リップ、ヴァン・ウインクル」の小父さんとして、無限の廣さを湛えた海のやうに、快活な感じを人々に與へ、心の底から湧き出る無邪氣な笑を浴せかけては、人々を喜ばせてゐました。さて先生の學院で修業した課目は、自然科學、物理、數學、英語の四つでありました。同學院を出てアムフォースト大學に移る際、院長テーラーは先生の證明書に、"What he has done he has done well." と、書き與へました。これ、は慥かに先生の人格に殿堂を作り上げたのであります。

先生がアンドヴァーに來つて以來、不思議な意志に動かされ、敬虔な多くの徳を體現して、一種の力強い精神生活を營んだことは、地上に於て甞て見たことのない程、崇高なものでありました。これを最もよく說明して居るものは、アンドヴァーの二年間に、先生と始終起居を共にしてゐた、ヒンドン夫人の書簡であります。これによつて先生が偉大な心情の勝利者であり、

且つこれまで嘗めて來た複雜な事件とその悲慘の中から、展開された全圓の生活であつたことが分ります。ハーデー氏は先生を此のヒンドン氏夫妻に託して、その家から通學さすべく豫期して居りましたが、夫妻は閑靜の生涯を送るために、田園生活に這入つたのであるから、これ以上神經を惱ますことは好まぬと云ふ事情の下に、一旦ハーデー氏の依頼を斷つたけれども、先生の志望履歴書を見て大いに感激し、遂ひにその意志を飜して世話することになりました。實に「文は人なり」で、修辭學や文法は僅かにその輪廓に過ぎないことを、私はこの一事によつて了解いたしました。ハーデー氏もはやり同じ意味で此間の消息を物語つて居ります。

His English was broken then and his vocabulary small, but his heart was big and full of love. Through every word and act transparent shone the man, winning the respect of all. It is this characteristic which has fitted him to stand before kings.'

譯　文

彼の（新島先生）英語は未熟なれども志は遠大なり、一字一句に宿れる人格の影と響に應して流行する

生命は之ぞ尊貴の自覺なり斯の人こそ眞に王者の前に立て堂々として愧ぢざる人なるべし。

アンドヴァー在學中、先生は緊張した心の狀態を持續して、準備的の學科を嚴密に秩序立てゝ研究致しました。その際また屢々かの上海から來た船長テーラー君の宅を訪問して、十分の休養を得ました。さうして醒めた哲人のやうな態度で、アンドヴァーの生活を送りました。その後先生は愈よこの仙境に別れを告げて、アムフオース大學へ出發することになりましたが、日頃、先生を憧憬してゐた人々の手紙には、このアンドヴァー時代に於ける先生の面影を如何にもよく寫し出して居ます。

ヒツドン夫人からハーデー夫人に送つた手紙

アンドヴァー、一八六七年七月十一日。

今朝食事後、心の底に湧き出た感興を、親愛なるあなたに書き送ります。そも〳〵如何なる神の攝理でか、新島氏と二ケ年間起居を共にし、同氏の高潔無垢なる生活によつて實證された明るい福音は、わたくし共の薄弱な信仰の影に積極的內容を與へました。氏の活きた力は神の國の肯定を與へ、わたくし

共は神に於て一に連なるの聖旨を知りました。あなたが天から此の尙い東方の青年を我が子の列に惠まれた。ことに就いては、神の恩惠のあなたの上に豊かなこと羨やましく思ひます。この實は實に連城の珠よりも尙いものであります。誠に新島氏は活きた力を以て、至る所に神の榮光を發揮してをります。氏の常識の進步と道德に統一的基礎あると、眞に男子の莊美であります。且つ諸種の雜務の庶理、整頓、特に消費に就いては一毫の微といへども、天物を忽せにせねやう心掛けて、忠實に取扱ばれたことは、實に敬服いたします。あなたに請求するものは、何事も由らず躊躇するといふ動機は、確かにこの眞理から起るものであると察します。今氏と別れるに方つて、私情忍ひがたいもの丶あるも事實ですけれど、大學敎育が氏のために一段と人倫の規範となる門出だと思へば、わたくしは非常の愉快を感じます。それのみならず、初めの程は大學敎育を受けることの不可能であらうとまで信して居たものが、今は完全に受け得ることになつたのですから、氏の滿足は如何ばかりかと同情されます。これにつけ彼れにつけ世にも稀なる青年があなたの保護を通して完全な救ひの道に這入つたと思へば、あなたは婦人の中で最も惠まれた方であることを繰返し申し述べます。」(著者の譯)

アムフオースト時代、即ち一八六八年三月廿五日、先生からハーデー氏宛に送つた手紙の内

容は讀者に頗る興味の多いものであります。私共はそれによつて先生が、如何に節約であつたかを窺ひ知ることが出來ます。

「私の外套の袖と鈕の穴とが、殆んど摺り切れました。また色も褪めました。若し餘分の外套を御所持であるならば、教會行きに用ゐるために御惠贈を願ひます。併しお持合ばせなくば、このまゝにすごし、節制の價値が實人間の有すべき最も尊き德であり、又幸福を增進するの一層大なる理由あるを思ひ、天の御座に出でたる時、光榮ある着物をつけることの特權を得んことを。」

先生に緊密な資料として看過すべからざるものは、先生と同じくヒンドン氏宅に同居してゐたフリント氏が、アムフオスト大學の總長シーリー君に宛てゝ、先生を紹介した手紙であります。このフリント氏は、當時アンドヴアーの神學校の生徒で、他日聖壇に立つ準備をしてゐた人で夫妻とも學士であります。不思議な緣で、先生に最初から英語や數學を見てやつて居ましたが、先生の日常生活に於ける體驗上の擧措を、これ即ち人間の典型であるとばかりに、ひどく先生を敬慕し、崇高な人格的顯現であるかの如き意味をさへ結び付けて、調和ある世界を先

生によつて見出したと云つてをります。ヒンドン夫人の手紙といひ、またフリント氏のそれといひ、古典的な樂園が、再び獲得されたやうの思ひのあるものです。

「ハーデー氏に保護されてをる新島氏を、貴下に照會することは非常に幸福に感じます。余が二ケ年前アンドヴアーに在つた際、氏もまた同地に來て、圖らずも同宿する機會を御ました。氏がフイリツプス學院に入つて以來、非常の努力を以て勉强するのを見て、吾等夫妻は大いにこれに同情し、氏の豫備智識を增進する一助にもと、英語、就中、文法、綴字を主として敎へ、且つ算術代數（二次方程式）、平面幾何等を指導しました。氏は進んで測量術、三角術をも研究したい考へでありますが、此の後二學期も研究すれば、大略習得するであらうと思はれます。氏の數學の力には殆んど他人の及ひも付かぬ程の能力が現はれてをります。その他の學科としても通常以上の領域に進む可能力があると信じます。猶ほ氏は數に關係ある諸學科、（則ち生理學、物理學、化學等にも通曉し、純粹の心理上の問題や、倫理の如き形而上の現象にも、科學が經驗し豫定した所のものをも尊重し、それを規範とする傾向を持つて居ります。併しまた一方、忠實に科學的研究の結果を承認しながらも、他方、科學に超越する立場を把持することをも看過しません。換言すれば氏は、科學の至り得さるところ、哲學の達し得さるところ、卽ち

超智認的の境界に對して一路の光明を直觀してゐます。たゞ惜しむらくは、氏の眼疾固執にして、古典の研究に不便であらうかを恐れます。

氏の聖書を愛讀することは、如何に小說を耽讀する人にても及ぶべくもなく、或る章句の如きは、氏みづからの行動が、その全體の解釋となつて居ります。聖書は氏に取つては、精神の反影であり、統一であります。その他日常の處理、消費等の鎖末に至るまで、氏の信仰の力の發現でないものはありません。さうして氏にあつては、善の意識が最も迅速に働きます。從つて何事に由らず、十分に合理的、實證的の說明を得なければ、滿足の出來ない性質で、正さに聰明卓越者中の一人に加へるべき人格者であると余は信じます。氏は神を信ずる事を拒むよりは、むしろ從容として死に就く人です。キリスト教の諸集會には必ず出席し、報恩の念が極めて旺盛であります。余は新島氏が貴下の指導の下に益す向上發達して、完全の德を修め得るであらう事を信ずる者であります。」(著者の譯)

前段に私が飜譯したりし原文を附け加へて置きます。

From Ephraim Flint, to Prof. I. H. Seelye, Andover, August 31, 1867. At the request of mr. Alpheus Hardy I write you a few lines in regard to the bearer, joseph Neesima. ………… joseph has mastered arithmetic, algebra, and the first two dooks in geomctry. He is a very fine mathematician and is very desirous to study trigonomctry and surveying ………… I have never known a

person were absorbed in a novel than he in the Word of God. He has apprehended its meaning more readily than that of any other book. As the meaning of some new passage has flashed upon his mind his soul has been most profoundly moved. He is a genleman is his manner. I have never, in a single instance, knowu hime to be rude.........Hedoes his duty faith fully fearlessly Withont doubt he would go to the stalke rather than deny his master...... He is modest and retiring and his true worth does not immediately appear, but he is one of the noblest of men..................

From miss Hidden to mrs. Hardy. Andover, Jury 11, 1876............. From the first I have his influeuce thrown in my way. It has been a talisman oftentimes to check my forgetful heart, and for this reason even I am very sorry to have him leavo us. In him we are one in Christ,-the whole family of man. My dear mrs. Herdy, I feel that as God in his providence has given you the means and the heart to take this heaveu-directed wanderer into your charge, you have found a diamond of which the world is not worthy, of which you may well be proud, and...... Joseph will shine any where. I hope the change to Amherst will be advantageous to him.

第十二章

先生は一八六七年九月、アーモスト大學に進みました。さうして大學の北寮第八番室に寄宿しました。アンドヴァーのフイリプス學院時代には、何處か稚氣の愛すべき點もあり、また無頓着の所もあつたのですが、此度は境遇から云つても始終精神の緊張を感じてゐたので、それが反つて生理的によわき素因を作り、幾分の精神過勞と、リユーマチズムとを惹き起して、在學中は常にそれらに惱まされ勝ちでありました。併し先生はそれにも關はらず、以前に增すとも劣らない程の激しい熱意を以て、思索と行爲とに對する不斷の革命を煽りながら進んで行きました。從來、有意識的にもまた無意識的にも、智識の活動を指導すべき中心の思想は、刺戟に順應しながら發展して來たものです。替言すれば、先生の理想によつて征服された限りに於てのそれを客觀的に投射して出來た世界でありましたが、段々と精緻な知識と豐潤な思索とによつて、これが方便となるものを採用することに絶えず改整の考慮を施し、結局、個人の世界を

深く且つ確かにつかみ、その自己を國家の中に還えし沒入して、初めて自己の中に民族の映つてゐることを知り、自己を造り生み育てた民族に對する愛を感じ、必然的に新しい意味に於ける國家主義、民族主義を内容とする思想を養ひました。さうして一層國家の意識を強め、國家の活動を道德的に改善しようとする、烈しい喘ぎを續けて行きました。則ち先生の最大の目的は自分の生活の爲めに、隨つて他人の生活の爲めに、出來るだけ幸福を增し、不幸を減ずることになつたのです。故に自己の良心に觸れ、また自己の生活を動かすところの宗教、政事、道德産業に向つて科學を利用しながら、結局、想像力によつて行くよりも、智力によつて統一して行く方が、一層多く効果を齎らすことを認め、道德的特徵に於て近世生活を營む覺悟と準備との上に、先生はその志向を傾けました。則ち研究科目の撰擇に於て先生は特に、同胞をして潤澤なる物質の惠澤に浴せしめ、且つ日本の國土が科學的に說明する如く、土壤と空氣と、光線と水分と、すべてそれらの天然の資源を開拓さすために、一面また神の家宰としての義務を果たすために、理科を撰定しました。物質文明も、徹底すれば結局、人間の全圓的生活となりこれがなければ、友誼も隣人の愛も、國家の活動の上からは空語に均しいものであるといふ、

焦點を先生は見出されたのです。先生のさうした當年の意思や傾向は、飯田君に宛てた書簡から明かに窺ひ知ることが出來ます、今その一節を此處に記載しませう。

「何れ歸國の上は、此の道を旨張し、有志之子弟へ相傳へ、益國を愛し、民を愛するの志を勵まさん事を望む。且兼て學び得し事務を解するの地理、天文、窮理、精密等の學をも傳へ、富國强兵之策を起す耳ならず、人々己を修め、獨を愼むの道を教んと存候。但し人々己を修め、其身を愛するを知らば、己の住める國を愛せさるを不得候事、「自然の理なり。」(中略)我日本の開化に進を見ば、小生に於て餘の志願は無之候。「依て先生何卒小生の志を察し、小生の滯碍なく歸國相叶候樣、内々政府の有司と談判下し賜ひ、且此福音を講じ候はゞ、矢張舊例に由り、政府に於て嚴刑を加へ候哉、「又は小生假令福音を講じ候共、身に難澁は無之候哉、克々穿鑿被下度候。」

また恩人ハーデー氏に宛てた先生の書翰は、左の如くであります。

Amhert, June 15, 1868.

I began latly to collect minerals. became I thought it will be worth to me to knew something about them When I was home I thought Japan is a farming

country, but 1 think now she is a mineral country. There are several mines. of gold, silver, copper, iron, platium (latly discovered) and many precious stones. But the people generally keep temples of gods on summits of mountains. and dare not touch them, even though they see very of minerals very plainly, lest they should defile the temples of gods and gods would pour out wrath upon them. Perhaps I may not spend mush time for minerals when I go home, but 1 hope I well teach them only wise Creator, remove their foolish ideas, and stire them up to take in Christian civilization.

右　譯　文

余は從來日本國を農業國と心得たりしが、今は反て礦物の豊富なる國なることをさとれり、國中に金銀銅鐵白金の礦脈多し、然れとも、是等の寳庫たる山々の頂には神殿を奉祉し敢て發掘せしめず、余は地中に埋没せる礦物を發掘し、其惠澤を洽からしめんと欲すれとも、寧ろ余の急務は基督教を同胞に鼓吹し其文化の惠に依らしめんことなり。

先生が青年時代から火の玉と綽名されて、爆彈的に突き進んで傳奇的に來た思想の個人的集中は——人間生活の求心的傾向が、此處に地圖を書き換へて國家集中——遠心的傾向となり、その思想や行爲を規律するところのものは、自由と解放とへの發展を標的として進み、組合教會に籍を置いて、大學傳道部員の一人となり、キリスト教の諸集會や社會運動に參加しました。總じて統一することによつて始まつた。先生の生活は、社會全體の幸福の立場から見て、政治經濟、產業、道德、科學の形に於て顯はれましたから、總長、シーリー君と大學の構内に於て好個の對照を極めました。それは嚴密に云へば、科學的方法によつて飾られた靈的生活であります。

シーリー君は先生の學需品を自分で立て替へ、その他萬端を先生のためにまかなつてやつてゐました。シーリー君が世事に齷齪しない風格の人であつた所へ、傍ら先生がまた宏大無邊の人類愛を顯示し、この兩人が兩々相對して自然の調和を得たところの風韻が、やがて大學の空氣に生彩を與へて、アムホースト大學の校風を作る源となりました。寒暑の休暇中は多く校長の宅で暮し、氏が不在中の食事の時は、先生が代つてその位置に座を占め、先生の祈禱で終始

するほどの信望を擔ひました。

先生の生涯に於て、最も人格的の感化を受け、またみづから私淑してゐた人物は、總長シーリー君その人でした。先生は當然の歸結として、その後も濃厚にシーリー式を發揮して居ります。その行動に於ても、同志社の主義綱領に於ても、先生の腦裡に描かれだものは、總體的に觀察すれば、悉くその影響が現はれてをります。アムフオ！スト大學は、歷史、數學、科學、古典の四大部門に分れて居りました。先生は一八七〇年の卒業生で、バチラー、オブ、サイエンスの學位を與へられてゐます。さうして卒業の際は、クラス會から撰拔されて、式場で講演をいたしました。勿論、高調な修辭や雄辯といふ立場でなく、アムフオースト大學の校風を象徵した代表者としてのそれでありました。

さて、シーリー君はアムフオースト大學の第五番目の總長でしたが、同大學は氏の時代に於て最も優れた特色を發揮し、アメリカの文化に最も貢献のある人物を多數輩出して居ります。シーリー君は抽象的に云へば、堂々として威儀のあること、悠揚として逼らざること、思想の豐富にして端睨すべからざること、大局に着眼して、瑣末に拘泥せざることなどが、氏の風格

の特色であります。併し容貌魁偉、自ら任ずることの厚いために、その剛岸不屈の擧動が、氏の總長に任命された時、職員會の反對を受けた原因でありました。もう一つの理由は氏が共和黨の色彩を帶びてゐたからであります。氏は何處までも規矩準繩に嵌まつた形式が厭ひで、大學は大學みづからの自治體たるべし、それ以外には何等拘束を受くべきものにあらずと主張し卒先して大學の自治制を創定しました。さうして彼の謂はゆる(一)人格を作ること、(二)これを教養、陶冶することとの二つが即ち、アムフオースト大學の二大綱領であります。

シーリー君は、一八七七年から一八九〇年までアムフオースト大學總長の椅子を占めました。氏は一八二四年九月十四日、コンネツクチカツト州のベーセルに生れ、地方の教育を終へて、アムフオースト大學に入り、一八四九年に卒業、特別優等賞を受けました。次いで三ケ年間、ニユーヨク州のオーバン神學校で神學を研究し、一八五二年、ドイツに留學、ヘレー神學校で一ケ年間の研究を積んだ上、歸國しました。さうして一八五三年、第一ダツチリホームド教會の牧師となり、後ちアムフオースト大學の哲學倫理の教授となるまで、その職を續けました。一八七二年ヒツチコツク氏と世界漫遊をなし、一八七四年、ワシンボン知事の推薦で、マツサ

チコーセッツ州の州法並びに租稅徵集改正法案の委員に擧げられました。同年、氏の選擧區から衆議院議員として第四十四議會に送られました。この選擧は恐らく空前の理想選擧であつたらうと思はれます。何となれば、氏は單に一枚の端書を有權者に發送したゞけで、共和黨と民主黨との投票を悉く搔き集めることを得たからです。而かも氏は生涯、黨派に席を置きませんでした。アムフオースト大學總長スタンス氏が死ぬ時に、シーリー君を後釜に据ゑたのです。氏は非常に强健で、且つ腕力家でありました。一八九五年五月十二日の永眠であります。ユニオン大學のドクトル、デヴイニテイ、コロンビヤ大學のドクトル●オヴ●リテレチユアで、教育學、心理學、倫理學等の著書があります。なほその他にアルヴアーシユワツカー氏の飜譯もあります。

一九一九年六月十八日、アーモスト大學の卒業式でなされた、現今の副大統領クーリツチ氏の演說は、同大學の人格主義に立つてゐることを最もよく說明して居ります。

「諸君、本日は光榮ある卒業式に臨んで、いろ〳〵懷古的の感想に充たされました。いま司會者から卓上演說を勸められましたから、この機會に於て私の大學時代の樣子を述べる事は、寧ろ私の義務である

と思ひます。今から廿五年前に於て、大學に入ることは非常に幸福な人のやうに思はれ、また自分でも正さにさうした、境遇上の變遷を意識して、勇姿を校門に躍らすといつたやうの元氣者でありました。併し推理力の當否の度合や精神的動作の方面に於て、その刺激が單に新裝の驕慢に耽けるとゝつただけのことでありましたか、本大學は忽ち其子弟に一種のインスピレーシヨンを與へました。その結果、前に粗野だつたものも、今度逢つてみると、それが悉く畏敬の態度に變つてをり、その變り方の遽しいのに驚きました。これはどんな譯かといふのに、總長シーリー君の偉大な典型的な人格の薰化であります。それからウツド博士の高潔な趣味が、忽ち新入生に淸鮮な印象を與へるからであります。且つまたギボン博士のギリシヤ語に造詣の深いことは、古典の語根に透明な理解を與へ、その文字の智惠に一種の情緒的關係を結ばしめ、それが其のまゝ力ある倫理教育となるからです。例へば新入生が第二學年に進みギリシヤ語の「ソフモアー」に出逢ふ時、彼等がその文字の本質的の價値を、各自に體現すべき慾求を賦與されることなどが、即ちそれであります。ラテイン語の「コングニチー」といふ文字の語根に非常な積極的の趣味を見出し、常識以上に文化的の心事を發揮しようとする氣持を與へられることも、それと同じ事です。ギリシヤ、ローマの世界に發した心理的沈淪や、倫理的衝動の問題をすべて、斯くの如くにして求めて行くから、學生は非常な調和を得た素質の人となり、高尚言語動作の紳士となり、結局アムフオ

スト式の校風を發揮して、他の學校に見ることの出來ぬ、卒直にして崇高な特徴が現はれて來るのです。昔の同窓の名士にモース君あり、フリンク君あり、クローエル君、タイラー君、ガーマン君あり、現在もまた多士濟々、指を屈するに遑ありません。母校で養成されたる人々は、すべて斯くの如く現社會に奉仕して居ります。これらは實に諸君と共に非常の光榮とする所であります。

一國の文化は單に智識によつてのみ、成就されるものでありません。否な、その亂用は反つて文化の破壞であります。個々の人格の向上を目的としないで、社會の發達は贏ち得られません。吾々がアメリカのやうな政體に在つては、吾々は國政の容體ではありません。事實、主體の一部を構成して居るものであります。從て現實的の立場から云つて、個人の思想行爲は、社會道德を支配する思想行爲となつてゐます。故に吾人は善の意志の行はれる社會を作り上げ、そうしてその環境の恩惠を個人にまで還元させればなりません。この實際的の經綸は、積極的創造を生命とする古典の精神を學ぶことに由つて、實績を擧げる事が出來ます。滿ち行く潮のやうな底深い愛國心が、サーモピリーの戰ひに現はれてをります。かの三百人のギリシヤ軍を以て、百萬のペルシヤ軍を惱ました國祖ワシトンの告別演說の趣旨にもまた、この古典的の活力が潜んで居ります、リンカーンのゲッデスバーグの演說に充ち溢れてゐる、憧憬的の精神の根元にも、ギリシヤ、ローマの文化がその光りをば添へてゐます。即ちそれは新鮮な創造

的の活力そのものです。デモステニス、シセロの雄辯に、愛國の血潮が漲り、プラトーンやアリストテルスの哲學に、力强い人格か具現されて居ります。さうしてギリシヤの文化も、ローマの帝政も、その偉大な精神の開展に於ては悉く、古典中の古典たるキリスト敎の契機の潤ひに外なりません。人類の意識自力の救ひ、一切の歸趨が、聖書に求められます。吾が大學の精神は、この寶典の理想を强調し唯一の神に信頼して、時代の上に働く勇者となることに在ります。我々はこの母校の精神を永へに神の義に處し、工場の煤烟の中にも、農園の黒い土の中にも聖壇を立て、神の榮を現はさねばなりません。」

先生は有らゆる新しい試み、企て、運動、宣傳等に對して、事毎にシーリー君の波紋を漂はせて居ります。同志社はアムフオースト大學の延長であり。先生は日本のシーリー君であるやうの感じが、私にはしてなりません。さうしてシーリー君が、不偏不黨でありながら、猶ほ且つ共和黨の色彩の濃厚であつた如く、先生にもまた何となく自由黨系の傾向がありました。輿論政治、立憲政治などいふ言葉は、それまでは事實上同黨伐異でありましたものが、先生の思想を通しては、それらも純粹の言葉として新らしい意義を帶びるやうになりました。さうしてそれが新たに輿論を準備すると共に、個人の對社會的方法を示す教育と立法、或ひは宣傳と設備

とに、新らしい個人の自發的の制度を催進しました。先生の思想の體系は、心理學、倫理學、社會學、星學、物理學、化學など、そのいづれを採つてみても、その組織は、それが經濟的に合理的に生活に役立つといふことに限られて居ります。故にどの種の學問でも、皆な同一程度に經濟的に、合理的に生活に役立つ體系に出來上つて居るのであります。

さて、先生は一八六六年、アンドヴアーのフイリツプス學院時代に、學院所屬の教會の聖餐式に連なつて、洗禮を受けました。これが第一義的には、先生が神學をアンドヴアーで修める緣故となり、第二義的には、組合教會の一員となり、第三義的には外國傳道會社に密切の交渉を生じた所以であります。學院所屬の教會は組合派で、その中に外國傳道局が置かれてありました。それは實際に於てアンフオースト大學の卒業生から成立つた施設であります。

一體先生の受洗は何を意味するかと云ふのに、それは先生の智力と德性が進むに從つて、當然歸結されねばならなかつた問題で、唯物的なるものと精神的なるものとが、先生の體驗によつて全部同質のものとなり、先生の眞の實在となつた靈妙一味の消息です。さうして創造力を自己に發見し、それを自己存立の原因とし、目的とし、手段とした、則ち自己の本質の全體と

して認識する時代にまで進んだ、先生の論理的の發展であつたのです。

先生がボストン「アドバータイザー」紙に頼まれて、日曜日に就ての意見を述べたのは、先生が日曜日を嚴守することを同紙の編輯者が承知して、特にその題を先生のために撰んだのです。この記事はその後、同市案内記に轉載されました。これはまた先生が岩倉使節一行と旅行した折に日曜日を嚴守した理由を解くものであります。何んと云つてもボストン市は國粹保存主義が大體の基調をなしてゐて、則ち聖日を嚴守するといふことが、清教徒上陸以來の傳統的精神となつて居りました、その後一七四六年に至つて、その法規は緩和されたけれども、それまでは聖日勵行法案といふものがありまして、極端と思はれるまでに拘束を加へたものです。さうして其の精神は時代と共に消磨されましたが、紳士間の心法としては猶ほ十分の効力を有し、家毎にその精神が傳はりました。

先生が「日曜日」なる題の下に書かれたものを見ると、如何にも清教徒が信仰を人類の最も神聖なる權利と認めて、この聖日を蹂躙することが、天賦の人權を侵害するかのやうに考へて、非常に嚴格にその日を墨守してゐた彼等の態度を手に採るやうに見えます。則ち左の如く認め

られてあります。

「一七四〇年頃は、聖日を守る法律さへ出來てをりました。土曜日の晩から日曜日の夕方までを聖日として、各自魂の救ひをひたすら神に祈るのみで、殆んど市街を歩く人も稀でありました。「萬已むを得ずして外出する場合は、たとひ知己に逢つても互ひに挨拶を交はすことすら致しません。「水撒き、「庭いぢりは勿論、「儀式なども一切擧行しません。ホテルは滯在中の客に限り、僅かに接待するだけでたゞ慈善に關する行動だけは勿論自由に、公けに許されてありました。嘗て一人のフランス人が、ホテルで聖日に笛を鳴らした爲め、町中の人から制裁を加えたやうのこともありました。斯熱い信仰が人々の心に滲み透つて、力强い人格に光と影とを投げ與へて居りました。この習慣は一八五〇年頃まで引き續き、殊にボストンけ清教徒の市街として、聖日を守ることは嚴格に保持されて居りました。斷食や安息日に關する傳說は主キリストの時代ばかりのことかと思つてゐたところが、淸教徒は今猶ほその掟を固く守つて居ります。併し移り行く世の中と共に、この宗教的慣習も何時しか薄らいで參りました。」

一八七〇年七月、先生は大學を卒業しました。實は一八六九年の卒業であるべき筈でしたが、例のリューマチズムのために一學期遲れて、七〇年の卒業となつたのであります。先生はその

際、卒業講演の光榮を擔ひました。日本の特待生といつた格であります。卒業生が全體で五十人のうち、四十九人までがバァチエラー・オヴ・アーツで、先生一人だけがバァチエラー・オヴ、サイエンスであります。別に聰明の差を說明する譯ではありますまいけれども、なんだか先生の特色を帶びてゐたことは、說明に値ひすることと思ひます。當年の同大學卒業生の名簿中に見出される先生の記錄は、次ぎの如くであります。

BACHELOR OF SCIENCE
JOSEPH HARDY NEESIMA, 1870
ANDORER THEOL. SEM.: 1874
L. L. D. 1889

さて、先生は大學卒業前後から、日本の同胞を啓發する任に膺る覺悟でありましたが、その當時外字新聞の報道に、橫濱でヤソ教信者が六十人、捕縛されたる事が見ゑたので、混沌たる刺激を受けて不安の念に襲はれ、そのために先生は幾度か苦惱し、また一面には故鄕を憧憬するの情抑へがたく、悲痛交々臻り、左の書面を例の先輩且つ友人たる同藩の飯田氏に送りまし

た。その一節に左の如く讀まれてあります。

「扨此度愚弟へ申越候通、小生歸國之一條如何致して宜哉、先生の御周旋を勞し度候。兼て御存之通小生義公禁をも不顧、臥櫪千里に驅する志を立て、遂に海外に跋渉し、千辛萬苦今日に至るは、全く國を愛するの深による。然し國禁を犯せし段、國刑を免れざるを得ず。（中略）小生の亞國に於ての親友中に亞人と相成り、亞國大統領の保護を得て、日本へ歸る可きが宜しきと、若し日本人刑を加へは、亞國の大統領より宜しき所置の有之候ゝ有之段如何して宜しき哉、是又御告可被下候。」

一八七一年二月廿五日　　新島襄

飯田逸之助様

先生は學問の到達し得る境地に達し、科學の到り得る處を究め、今またアンドヴァー神學校に入校し引き續いて神學を研究致しました。これで見ると先生は、一見何等自分に縁のない學科を大學で研究しましたやうにも見えますが、實は科學的人生觀から突き進んで、これを基礎として更に高く、更に廣い統一原理を發見し、究極萬有の生命といふ概念に歸着し、我動くに非らずして、神我に於て動くのであるといふ統體に到り着いたのが、則ち先生の神學校時代の歸着點でありました。この際、最も痛ましい出來事は、先生を救ひ上げた船長テーラーが、不

慮の死を遂げたことであります。先生はその際の感想を左の如く記してをります。

「余の身に取り善き教訓を學んだ、人は何時にても神に召さるゝ準備が無くてはならぬ。船長の死に特殊の意味を否へて、常に心の緊張を保たなければならぬ。偖、十二月十三日、月曜の朝、一人の使者が余に悲報を遽しく手渡した。胸に制えきれない動悸覺えつゝ、讀めばテーラー船長の死去の報知であつた。其の時余の心は、根底より破綻を感じ、且喪心せり。夢か現か、疑惑を強く催すまゝに椅子と倚りて、暫時沈默した今更ながら、人は不時に對する用意がなくてはならぬと、痛切に感じた。やをら身を起こし、壁に掛れる船長の寫眞の前に立ちて、敬意を表すれば、彼は瞳をつめて、余を見て居る。而して何か優しき言葉が唇をついて出てんとする様子である。どうしても死んだとは思へぬ。そこで電信局へ驅け付けて、若しや此の電報が人違ひでないかとただせば、否と應ぶ。よりて其の足で、停車場へと急ぎ、汽車に乘込んだ。印象が總て陰欝で、沈痛の極であつた。汽車を下りた時は、がく／＼として打ち震ふ膝を、蝙蝠傘にすかり、辛くも其宅に着したり。妻君には殊更目を避けて、その兄弟達に逢つたが先立つものは涙で、顔を上ぐる事も出來ない。余は上海で救はれてより、彼の仁慈博愛の情が、常に余の胸中に住みて、忘れ得ぬものであつた。余を亞米加に於ける兩親と仰ぐハーデー氏夫妻に依頼した

のも彼であつた。而して彼は余に運命の開拓の機會を與へてくれた。此の夏訣れる時に、彼れ船長は余に熱き接吻を與へたが、思へば之か最後であつた。今やこの恩人は大理石のやうに冷く横はつてをる。余は靜かに默禱を捧げた、而して遺族の爲に祈禱した。嗚呼。」

この時、先生の捧げた祈禱は、「默示錄」第七章第十七節でした。

さて、一八七二年二月十六日、岩倉大使の一行が、米國首府ワシントンに到着しました。これが、先生に取りて完全なる自我實現を獲得する、絕好の機會となりました。同日、森公使から先生に對して、使節一行のために米國教育制度の調査をなし、且つ東道の主人となつて一臂の勞を執るやうにとの、懇切な依賴がありました。當時、先生はまだ神學校に在學中でしたからとにかく、謝絕する考へでありましたが、恩人ハーデー氏やシーリー君の肝入りで、否や應なく公使の請求に應ずることになり、遂ひにワシントンに出かけて、大使一行に面會しました。

舊式の煩文縟禮を棄てゝ、最敬禮九十度とあるところを、先生は三十度ぐらゐの角度で、初對面の挨拶を濟ませました。當時の光景を、先生からハーデー氏に文通した中に、

When he ascertained that it was he stepped forward from his seat, shook my hand, and made a most graceful yet most diguified bow to me, asking me to be a kind friend to him. He bowed himself 60° from the perpendicular. So I made like bow in retnrn.

右　譯　文

岩倉大使は立て余の前に來られ、余に握手し、體を六十度に屈して、慇ぎんに挨拶をなせり。余も又相當の敬意を表せり。

と認められてあります。先生は冷靜に確實に其等の諸情が光明と指導とを將來し得るよう。且つ又實際を探究するといふ首先の仕事となりました。

先生は新しき刺戟と、生命の本流から横溢する熱情を以て、内心の純潔を礙ぐる一切を除去する爲めに、獻身犧牲の意力を高調して、基督教の宣傳福音等一切の障碍より自由ならしめる事の承認を得ました。之れが我國に於ける神國といふ出發點よりして人類の成功的連帶性を建

設し、且つ精神基礎の上に一個の團體を創設したのです。

さて、大使は明治四年十二月、東京を發し、翌五年正月、サンフランシスコに上陸、マーケットのグランド、ホテルに投宿しました。それは現今のパレス、ホテル跡に在つたもので、當時サンフランシスコ第一流のホテルでありました。一行の總人員百餘名。木戸孝允、大久保利通、伊東博文、田中不二麿君等を網羅し、岩倉大使は烏帽子直垂の裝束で、手には笏を持ち、件廻りには刀を提げた大男が、二人附隨して居りました。當時の有樣を、或る人の記錄に殘つてゐるのを見ると、斯うあります。

「さて、愈々ホテルに御着になつて、公始め一同は椅子に腰掛けず、カーペットの上に跪座したので、先づ接待の米國人を驚かした。此頃、相馬永胤、オークランド市にスクールボーイとして在住して居たが、大使の招きに應じて馳せ參じ、一同の體たらくを見て膽をつぶし、米國の風俗習慣などを申述でたと云ふ事である。此一行は實にサーカスの行列同樣で、全米人の好奇心を挑つた。併し一行はそんな事には氣が附かない。」

此處に於て先生の要求は悉く容れられ、これまで歷史上の事情から惰性的に保持されてゐた、

先生の罪の意識が全く拭ひ落とされて、一層の志向を發揮することになつた爲め、此の響きが自然先生の家郷にも傳はり、父民治は藩士に向けて左の公開狀を差し出しました。

「一舊來蒙　御懇命候忰七五三太儀、不存寄此度從　天朝蒙　御沙汰、又留學被仰付、不肖の身冥加至極、難有仕合奉存候。且脫走一條之節は、不一方御配慮被成下、私義も當惑罷在候處、猶又歸邑等之義御印鑑等無之、如何可仕哉と心配罷在候。然を處蒙　御沙汰歸朝之義も、表向手を擴げ上陸之樣に相成夫のし難有存候。」

先生は田中君と共に米國の有名な教育機關を視察し、また米國文部の當局と往來し、傍らシーリー君が便宜を與えて、略ぼ滿足な調査が出來ました。その造り上げた教育制度の體系は、同胞の情操と統覺とを融解し、個人の能力を發展し、また現に如何なる障礙が、同胞の活動の上に及ぼして居るかの事實をも考量し、速かに常識教育を施すべく、その機關の齊整統一を計つたものであります。即ち制度、學術、乃至倫理の問題を一貫して、正當の意味に於ての人格を養成しようといふ草案だつたのです。

一八七二年三月十日、先生は一行と共に米大陸を離れました。十二、十三、十四日とも濃霧

に襲はれ、船は舵首を轉じて、ニユー、フォンドランドの海岸に沿うて走り、此處ではまた時々驟雨に冒され、絶えず向ふ風で船腹の動搖甚しく、田中君が先づ倒れたけれども、「オールドジヤツクと自稱した先生は、食堂では勇を鼓して健啖し、談話室では一行の米國觀察談で議論の花を咲かせました。先生は此處でもまた華やかに個性を發揮することが出來、大使一行のアメリカ視察の總括的價値が、何となく先生一個の力に歸納されたやうの有樣で、先生の人格は兪す完全な調和が取れて參りました。先生はシカゴ大學のエリオツド博士、牧師レキシントン君、グウドウ井ン夫妻その他英國の紳士等と興味のある談話を交換しながら、英國に到着しました。着英後、グラスコー、イデインバラに兩日を送り、ロンドンで一行と再會した先生は、更に英國、フランス、ドイツ、ロシア、イタリーと周遊して、田中君と共に專ら教育制度を取調べました。さうしてフランスの不信心、ドイツの科學萬能等と揶揄し、イギリスの智巧な自己是認的の氣分が、さま〴〵の形となつて流れてゐることや、ロシアの痼疾的な印象や、さてはエールの卒業式にキリスト教的の空氣の稀薄なことや、渡航中或る名士の酒盃に親んでをつた不釣合ひなどを評して居ります。木戸氏と田中氏とは特に先生を同伴して歸朝し、仕官する

樣にすゝめました。

さて件の草案の精神たる修身と理科との二大綱領に分ちました。修身は理科の精神で、理科は修身の系體であるから、その何れもが同一精神の上に立ち、照應的にまた相互的に好果を得ると云ふのが、力說せられ高調せられ、眞髓となつていたのであります。事實に於いて、吾が國教育の精神となつたのであります。實はかうした消息に於て、先生が日本の文政に貢獻した功績は、自然沒するわけに參りません。それが後ちに事態は一變して仕舞ひ、修身と理科との間に截然たる二元的の傾向を生じ、終ひに今日に至つたのであります。先生はこの一行と視察旅行中、如實に犧牲的精神を發露して一行に淸新なる刺戟を與えましたから、追々一行中には聖書の研究が始まつた位でした。

筆少しく岐路に入りますが、明治五年七月、太政官から頒布された學制は、現在吾が帝國の教育の基礎をなすものであります。「自今以後、一般の人民、華士族、卒、農工商、及び婦女子必ず邑に不學の戶なく、家に不學の人なからんことを期し、」徹底的に義務教育を普及したのでありますが、これは岩倉特使隨行の田中不二麿君が教育制度主査主任の下に、先生が英米の制

度、就中米國の制度を參酌して、重もに立案作成したものであります。さうして用語は慶應三年、先生が安中同藩の友人飯田氏に送つた書面の中教育に關する說明の用語と全然同一であります。その文字に含まれる價値と精神とは、教育の機會均等を計り、實際生活に効果のあるやうに仕向たもので、つまり個性の發展と擴張と、將た人間の興味と立場とを、親切に釋明したものであります。政府も新思想としてこれを重んじ、それによつて新たに學制を布くことになりました。裏面の消息としては、かの米國々務省の教育局長及びシーリー博士が、先生の爲に材料蒐集及び調査上の便宜を與へた事は隱れもない事實であります。また愛國詩人と云はれたエマソンの、品性の教育と德教が常に先生の行爲の內容となり、森公使がまた直接、間接に聲援したことも、與つて力あることは疑ふまでもありません。けれども重もに先生特有の奉公をなす事を目的とのたのであります。

布告

人々自ら其身を立て、其產を治め、其業を昌にして以て、其生を遂るゆゑんのものは、他

なし、身を修め、智を開き、才藝を長ずるによるなり。而て其身を修め、智を開き、才藝を長ずるは學にあらざれば能はず。是れ學校の設ある所以にして、日用常行、言語書算を初め、士官農商、百工技藝、及び法律政治、天文醫療等に至る迄、凡人の營むところの事學あらざるはなく、人能く其才のあるところに應じ、勉勵して之に從事し、しかして後初て生を治め、産を興し、業を昌にするを得べし。されば學問は、身を立るの財本ともいふべきものにして、人たるもの、誰か學ばずして可ならんや。夫の道路に迷ひ、飢餓に陷り、家を破り、身を喪の徒の如きは、畢竟不學よりしてかゝる過ちを生ずるなり。從來、學校の設ありてより、年を歴ること久しといへども、或は其道を得ざるよりして、人其方向を誤り、學問は士人以上の事とし。農工商及び婦女子に至つては、之を度外におき、學問の何物たるを辯ぜす、又士人以上の稀に學ぶものも動もすれば國家の爲にすと唱へ、身を立るの基たるを知ずして、或は詞章暗誦の末に趨り、空理虚談の途に陷り、其論高尚に似たりといへども、之を身に行ひ、事に施すこと能はざるもの少からず。是すなはち沿襲の習弊にして、文明普ねからず、才藝の長せずして、貧乏、破産、喪家の徒多き所以なり。是

故に人たるものは、學ばずんばあるべからず。之を學ぶには、宜しく其眞を誤るべからず。之に依て、今般文部省に於て學制を定め、追々教則をも改正し、布告に及ぶべきにつき、自今以後、一般の人民、華士族、農工商、及び婦女子、必ず邑に不學の戸なく、家に不學の人なからしめん事を期す。人の父兄たるもの、宜しく此意を體認し、其愛育の情を厚くし、其子弟をして必ず學に從事せしめざるべからざるものなり。高上の學に至ては、其人の材能に任かすといへども、幼童の子弟は男女の別なく、小學に從事せしめざるものは、其父兄の越度たるべき事。

但、從來沿襲の弊、學門は士人以上の事とし、國家の爲にすと唱るを以て、學費及其衣食の用に至る迄、多く官に依賴し、之を給するに非されは、學ざる事と思ひ、一生自棄するもの少からず。是皆惑へるの甚しきものなり。自今以後此等の弊を改め、一般の人民他事を抛ち、自ら奮て必ず學に從事せしむへき樣、心得へき事。

右之通被仰出候條、地方官に於て、邊隅小民に至る迄不洩樣、便宜解譯を加え、精細申諭、文部省規則に隨ひ、學問普及致候樣、方法を設置施行の事。

明治五年壬申七月　　太政官

然るに先生は生憎との視察の旅行中、例の持病が起つて、それを根本的に治療するために一行と分れ、數ケ月間ベルリンに滯在しました。さうして當時の消息を左の如くハーデー氏宛に通知して居ります。

「貴下に相談を致さずして、大略任官の交渉を打ち切りました。何卒私の專斷をお許し下さい。第一田中君の慫慂は個人としてのもので、氏が失脚致したならば、私の地位を保證する者がありません。さて私が歸朝すとせば、政府の仕事に忙殺されて、社會に奉仕することが出來なくなります。且つ神學校の修業が了りませんから、それを修了するまで、神學の研究を續行したいと思ひます。抑も十字架を負うて主に從ふのが、私の願望であります。願くは神學の研究を成就するため御、同情あらんことを願ひます。只今金子を貴下に郵送致します。支給された中から節約したものであります。御領收を願ひます。云々。」

前便以來、神經衰弱にかゝり、餘程健康を害しました。併し幾分か快方に向つて參ります。

またハーデー夫人宛にはドイツのクリスマスの模様を左の如く通知してをります。

「私はドイツに於て最も樂しき美しいクリスマスの光景を見物致しました。當地はこの生誕日を祝すること、特に盛んであります。十二月の初めからクリスマスの市が立ち、除夜まで續きます。店は青葉で飾られ、露店も玩具で充たされます。初めの五日まではサンタ、クロースの人形を陳列して、人の目を惹きつけます。最後の五日間は、サンタ、クロースの市であります。クリスマス、ツリーが蠟燭で飾られ聖句を入れたジンヂャー、ブレッドや、筬、その他のガラス細工か列べられて、店々が輝き、町の辻々は小供で一杯になります。押し合ひつ、笑聲が方々に起こります。乳母達は子供を抱へ、兩親たちはクリスマスの裝飾品や常盤木を自宅に運ひ、何れの店も滿員で、實に賑やかであります。さて買ひ集めた贈り物は、クリスマスの當日まで、夢にも知らせません。二階の一室に、滿艦飾を施したクリスマスの木に吊して、その日の來るのを景氣づけます。裏長屋の憐れな人々も、子供の愛に引かされて、市には出掛ますが、自分の外套で子供を蔽うて、なる可く玩具を見せないやうにして行くやうな、いぢらしい群れも澤山にあります。當日はクリスマスツリーは既に技の折れる程贈り物で一杯になります。親類や子供が集つた時に、初めてその部屋を解放致します。この一夜は地上に於ける天國のやうな趣きを現出します。除夜の祝がまた引續いて景氣を添へます。クリスマスツリーも再び、綠を盛り返して趣向を

つけます。曉近くなるまで大聲で「新年來れり〳〵——人々福なれや」と呼びつゝ、喇叭を鳴し、鐘を叩き、空罐を轉がして、跳び廻ります。一夜明くれば、知るも知らぬも「おめでたう」を云ひ交します。町の混雜はフランス革命當時のパリを忍はせると、旅宿の主人は私に物語りました。」

先生は一八七三年九月、再びアンドバアーの神學校に歸り、翌年六月二日に、卒業致しました。「日本に於けるキリスト教の宣傳」といふ題で、卒業演說を試みました。同年四月三十日、傳道會社の對策に應じて宣教師となり、日本傳道中のゴルドン、グリン兩氏の援助をなすべく愈よ旅裝を整へて歸朝の途に就きました。

第十三章

今までは大名やら、小名やら、天領やらが、日本國中に小さな區域を立て、關所を設けて人間の通行を監視するといつたやうな有様で、文明の進歩發達も極めて幼稚なものであつたが、明治六年廢藩置縣の制が布かれ、行政區劃としての郡縣の外は、海内を擧げて悉く陛下の赤子となり、新らしい世界が突如として開けました。封建の政治を情趣とし、また氣分として生きてゐた人々は、徳川幕府がひつくり返るなどは思ひも寄らず、永劫不滅のものと心得てゐたのですから、それが主觀の強調と手傳つて、散髪にはなつてもやはりピストル型の曲げが戀しく廢刀しても、腰の落付きが惡くて風邪を引いたといふ滑稽が、眞面目に語られたものださうです。分り切つた事が分らず、當局者は隨分持て餘したものであります。一般の民衆は何と云つても御題目主義で、ヤソ教などを宣傳すれば、開戰でも強いるかのやうに響き、同胞の生活に關する思想と情操とは非常に動搖し、異端百出、互ひに扞格し、齟齬し、當初、衝動によつて

亂雜に、勝手に、手當り次第に掻き集め拾ひ上げたるものは、どの途整然と統一するの必要がありました。さりとて、これに當るだけの見識と實力とを備へた人も見當らないので、文教の當局者も晏如たるわけに行かず、現代の社會生活の要求と理想とを標準に、とにかく一つの計畫を以て貫かれた完全な組織體とすることに努めました。

抑も、社會生活と教育制度とは、常に密切な有機關係がありますから、十分に教育を改善するの必要は、容易にうなづかれます。隨つて比較的高度の智識をもつた人々は、悉く官府に網羅され同胞の性情と文化的要求とを標準に新文化の建設に關して攻究を進め、その方法を解決しようと致しました。かゝる場合に於て、陰ながらまた公けにも、先生のやうな人物に期待の掛けられるのは、當然の順序であります。其處で今まで家を棄て、名を捨てゝ、米國に亡命してゐた先生をば、不圖、回顧することになりました。その結果、大學南校並びに外務省から先生の親許に左の如き照會がありました。

五月十四日、大學南校より御呼出に付、小田權大屬出頭致し候處、外務省御達と同樣、

其藩新島七五三太儀、此節米利堅に遊學致し居候旨、同國人より申立有之候間、同人並に父、身分、

且航海之年月等、早々可申立旨、脇屋大録殿被申達候に付、左之通差出。

安中藩　新島七五三太

同藩士族父　同　民治

右七五三太儀は、目下米利堅アーモスト學校に入學仕居候由、又年齢當未年二十九歳に相成申に付、此段申上候。以上。

大學南校御中

また外務省から安中藩への通牒に對して、同藩から前文とほゞ同様の屆書が出てをります。
それが當時の安中藩の簿書中に左の如く記載されてゐます。

五月十三日、外務省より御呼出に付、小田權大屬出頭致候處、其藩新島七五三太儀、此節米利堅に遊學致居候旨、同國人より申立有之候間、同人並に父、身分、且航海之月日、早々可申立旨、脇屋大録殿被申達候に付、夫々手續相濟まし候。

安中藩　新島七五三太

同藩士族父　同　民治

右七五三太儀は民治嫡子にて、去元治甲子年三月中、箱館表江海軍學科修業相越候處、同六月同所より米利堅船へ乘組、同國アーモスト學校に入學仕居候由、又年齢當未年二十九歳に相成申候、此段申上候。以上。

外務省御中

これより前き先生は既に岩倉全權使節の一行によつて、政府に出仕を慫慂されました。また北海道の開拓使長官からも、津田仙氏を通じて寵招を受けました。が先生はいづれも謝絶しましたといふわけは、根本主張に於て到底融和しない所から、先生は自然當然の順序を踏むことに決心されたのです。たゞ疑ひのない所は、政府の人々は新らしい材料を持つて居ながらも、それを古い法則に隷屬せしめることによつて、古い眞理を維持しようとする傾向があり、量に於てまた應用に於て進歩を持ちながら、質に於て創造に於て進歩を缺いたことであります。赤裸々に言へば、眞の意味の學問や、眞の意味の知見を體現するやうのことは、恐らく覺束なく、彼等はその資料たる外來の刺戟を利用する一事に限られ、餘り實行を急ぐために、それの觀念化に餘裕を與へぬ始末となり、單にそれの理想化にのみ焦燥するだけで、終ひに徒らに空想に

耽けるのが、自然の成行きであります。先生はこれに對して正確にその刺激の性質を認識するやうに、またそれを享け容れた以上、出來るだけその價値を發揮し、それに反應を見出したい考へでありました。結局、彼等の功利主義、物質主義、科學萬能主義は、その工夫反應に於て空想に流れやすく、それに反して先生の體驗は、一見實際に緣遠いやうではありますが、實行的人格的の國民を作り上げる上に於て、人間の要求を標準とし、それの概念まで改造した後に初めて採用しようといふのですから、瞑想的でありながらも、科學的の堅實味があります。

さて當時は大體、國民の生活と思想とが、未だ一體として組織されてゐませんでした。それが何より不徹底であつた證據であります。一層適切に云へば、西洋の文化と在來の文化とが、纔かに淺薄な功利思想によつて物理的に混合されてゐたゞけで、未だ雄渾な氣魄と澄明な志向とによつて化學的に飽和されて居なかつたのであります。つまり總てが生活方針の輪廓に過ぎなかつたので、それが實際生活に役立つためには、それを役立たせる場合と、個人の要求とに應じて、特別に個性化せねばならぬといふ考慮が缺けてをつたのです。其處に先生の深い智惠と卓見とがあつたので、我が同胞の生活を自由に豐富にするためには、宗教がその最も自然な

最も端的な最も理想的な表現であると、先生は見たのであります。さうしてその結果、人間の智力と徳性とが進むに從つて、同時に他の機關にも密接な交渉を生じ、經濟的に合理的に生活に役立つであらうことを見究め、先生は其處に自分の主義行動を築き上げました。かうした生活の光明が攝取された時、其處には物質的對象もなく、精神的對象もなく、たゞこれらに對する欲求の起つた場合、人はその欲求を滿足させる材料もしくは條件としてだけ、臨機の處置を執るに過ぎません。さうしてそれが、自己の體驗となり、眞の實在となつた曉には、金錢も、名譽も、慈善も、愛國も、均しく心的となり、靈的となるのです。先生は即ちさうした信條によつて生活を統一することが、人生に最大の意義と最大の價値とを賦與するものであると信じられたのです。

左の英文の一節は當路者と多少感情にもまた意見の杆格を生じた機微を語るものです。即ち一八七二年八月十日、先生が露都から恩人ハーデー氏宛に書き送つたものであります。

Two of our party who are influenced by French infidels and German rationa-

lists went out for sightseeing on the Sabbath morning and hired one guide without consulting me.

新時代の到來と共に、先生は正さに政治的に歩を進むるであらうと察せられたので、先生に脱藩の際の助成者であつた飯田君が、さてこそ「男子功名富貴秋」と勢ひ込んで先生に文通しました。然るに先生はその際、極めて哲人的な態度を執られ、自分としては同胞を啓發するの任に膺るのほか途がないと、豫て先生の胸に宿した素晴らしい理想を縷々記述して、左の一封を飯田君宛に寄せました。若しそれ先生が外面的の人であつたならば、或ひはこの際全く方向を一變したかも知れません。どの途、政治家は徒らに高翔し、科學者は頻りに功名心を煽り、實業家は金儲けにばかり沸騰してゐたやうな明治の當初に、ひとり先生だけが、地味な精神の高調を誘發すべく、撓まざる勇氣と努力とによつて、その身骨を破碎してしまつたのは、先生の犧牲的精神を徹底せしめた結果であらねばなりません。

新島先生がアメリカから飯田君宛に送つた書簡

慶應三年丁卯六月十七日所載の貴答、千八百六十七年十月五日の朝、僕の留在せるアーモスト學校へ相達し、拜讀數回、平生下さぬ半行の涙も、偏に先生の書に對し、裳を濕さゞるを得ざりし。扨先生、強健なるよし、珍重に候。僕に於ても、健全にして勉強致し居候間、何卒御安慮。鹽田氏より、慥に僕の箱館よりの書簡御落手被成候由、承知仕候。先生の僕に任する所甚大なり。僕不肖と雖。國家の爲に寸力を竭さん事は、僕亦心望む所。然れとも僕は今脫羈不羈の身、神の徒となり候故再び頭を下け、藩邸に歸り、僅かの俸祿を甘ぜん事を嫌ふ。去れど僕、敢而富貴功名を望むに非ず。富貴功名は花上草頭の霜露なり。僕は眞神の臣にして、我日本の民なる故、眞神日本の爲に丹心を盡さん事は、僕の急務と云ふべし。班超の筆を投、萬里の封侯を得し事、僕に於而浮雲の如し。

皇國の形勢、大に變換せし由、長州畔く伐之不克由、昭德公薨じ、一橋公拜將軍せし由、新帝立給ふよし、(僕が〇〇〇〇將軍の爲に缺字せぬは我輩共造化の工を受たる者にして、乃〇〇と同等の人間なる

による。)朝議幕論、彌開國に歸せし由、兵庫も開港のよし、兵制の變ぜしよし、承知仕候。熊若君の早世給ひし由、僕に於而實に長大息の至に御座候。双六殿の林家へ入熟せし趣承り、是は全く先生の御取斗と存じ、奉謝之至に御座候。向後は彼れ洋學を攻め候樣いたし度候。米利堅文物の盛なる事、筆端に盡し難く候得共、少々此國の教育の盛なる事を左に記し候。

何れの都會、何の邑何の村落なりとも、フリー學校と申し、一切謝禮を拂はぬ學校なり。此は人々の家財に應して、年貢を金にて取上げ、此學校の雜費とせり。(但し當國にては、人民の產に應じ、年貢を助け候故。日本の農夫より重き年貢を取て、商人より格別税金を取らぬに比すれば、萬々寬容なる仕方也。女子も男子に齊しく學校へ遣し、算術、地理、窮理、天文等の學を教へ候間、此國にて夫人の役に立つ事をびたゞし。

私學校と申は、殆ど日本の手習場に齊し。公學校と申候は、或る富貴人、金を與へて立たる者にして此學校へ參る書生は、其相應の金を拂はねばならぬ。如何となれば、其金を以教師方を求むるによる、玆に而書生の學ぶ所、諸術の外、ラテン、グリーキ語なり。且大學校と申は、公學校より一段高尚なれとも、其學ぶ所殆ど同じ。但し一年の謝金は、凡三十六えんなり。船學校と申者あり。此は手くせの惡き、又は親の手におゐぬ小供を、或る大なる兵船に集め置き、大統領より入用を拂ひ、讀み書き算術を

敎へ、旦日々檣上に上げ、帆を取扱ふ事を敎へ、成長の後、軍艦之水兵となせり。幼院は大統領より、又は人民より金を出し、立てたる者にして、棄子或は孤子を養ひ上ぐる所なり。之は恐しき雜費のよし。如何となれば、數百人の小兒共に、衣服をよきに衣せ、ウバ、モリをやとひ、かつ數多の敎師方を招き諸稽古を仕込み、聖經等も厚く敎へ候由、往々其の幼院より人物の起るよしに候。

所々に兵學校有之候。書生の入用は大統領より支排らひ候由。小兒は四五歲より最早學校へ罷越し候故八九歲の比ひには通例の書を讀むに差支なし。如何なる窮人の子なり共、誰も自在に學校へ入る事かなひ候故、讀み書きの出來ぬ者甚少なし。右に付日本の農夫を考ふれば、甚氣の毒千萬なり。農夫も矢張〇〇と齊き人間なり。然るに日本にては農夫を愚になし、豚犬の如く取扱ひ、重き租稅を取上候事、實に理外にして、暴なる政道と云つべし。かつ日本の士人の格式を論する等の事、實に笑ふ可き事なり。

米利堅戰爭後、北方の人民金を集め、敎師方を南方に遣し、諸藝聖經を黑人に敎へし故、當時は黑人往々敎化し、以前に比すれば、國益に相成候よし。此國より十四五年前に、敎師を支那に遣はせしに、當時は多くの支那人、昔な孔孟を棄てゝ、至聖の洋敎に入候故。國人には金を集め、十年を不出る內に、千人の敎師を支那へ遣る事を企たり、但入用は、凡二百萬ドルなるよし。

扨、亞人は英人と違ひ、外國を奪ふ事を不企、只々至聖の道を萬國へ擴め、共に其道を樂しみ、共に

有無を通じ、厚く兄弟の交りを爲さん事を望むなり。支那人殆孔孟を去んとせり。然れば我日本何を以て教を立るや。孔孟の道を去、佛道をこぼち、至聖純粋の耶蘇教を奉ぜねばならぬ事。論を用ひずして知るべし。此教は日本の申魔教には之なく、かつポルトガル人の教へし天主教とも違候。此天主教は、國人の奉する聖教に比すれば甚愚にして、殆ど日本人の孔子の道と佛道とにひとし。先生何卒、メリケンの政教、日に盛なり風俗月に改まる事、何故かを御推察可被成候。是は全く教の然らしむるところ色々申度候得共、紙上に一朝夕には盡し難く候故、遂々可申上候。且歸鄉の上、僕の見聞する所を以て、先生と論を上下せん事を望む。與露自ら親愛の情を爲し、萬一盡難樣、唯願加養自愛。

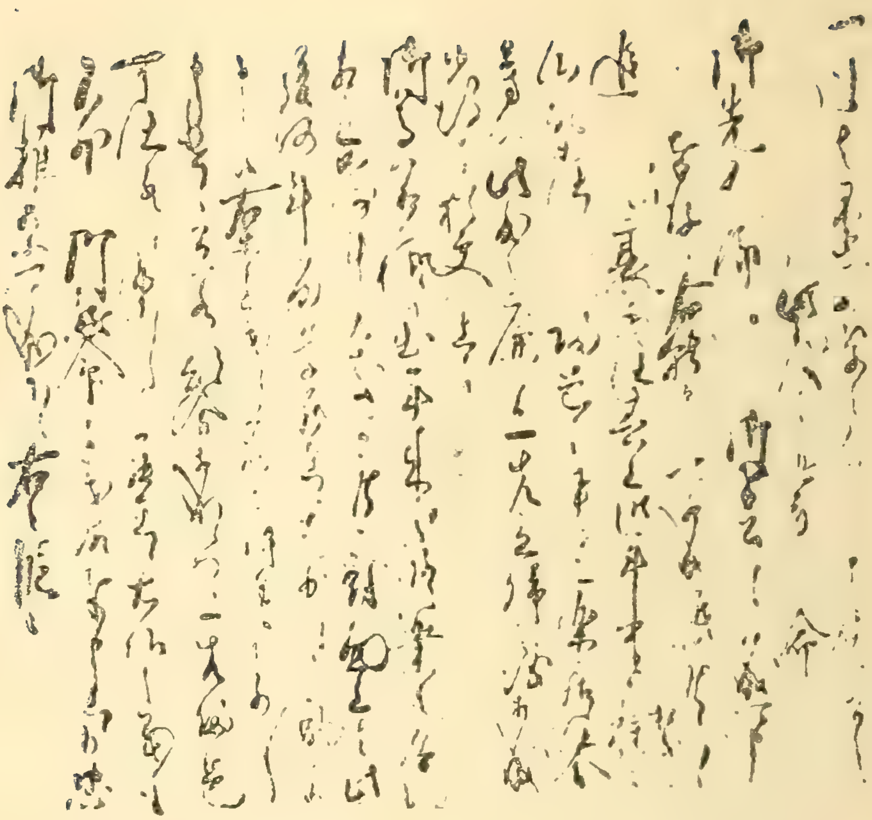
千八百六十七年十二月廿五日

新島敬幹

再拜

飯田逸之助君　梧下

再白。賢兄僕の双親愚弟への厚遇、實に謝するに言なしと云つべく候。此後倘賢兄の眷顧を勞す。僕の愚姉みよの文には、委しく妻君の厚遇を記し、僕よりも厚く奉謝すべきよしを申せり。之に依而何卒妻君へよろしく御鳳聲有之度、御禮をおのべ可被下度。本文の趣は、横井、菅沼、江場諸君の外、一切



御秘し置可被下候。
僕の寫眞像、一個呈し候間、御落掌可被成候。
已上。
亂文之義は御免。此は意より出て紙に落し候間、其文甚拙なり。以而先生の文之意を取て、文の體には御注意なさらぬ事を望む。今日は聖人ヤソの降誕の日なるよし

同書を得しより、「家郷千里書難得。不取敢燈前匆々看」の意を解し候。

當國（たうごく）に而日本の評論（ひやうろん）は甚よろしく、人々の中には、我日本十年を不出して頗教化に赴き、獨一眞の妙道救主耶蘇の明教を奉するならん。さすれば必らず人之道を辨へ、國も自ら振ひ候はん云々と。

何んたる心謂（しんてう）の書き方でせう。良心（れうしん）にも刑

罰を受くるといふその時に、斷じて所信を述ぶるの勇氣は、先生でなければ能はぬところです。文字の書振は姑く別問題として、噬みわけて見るとさすがに先生は、國民が物質と生命とを分離した遣り方に、業を煮やしたのであります。政治も哲學によつて動くべきで、宇宙の眞相を見究め、國家の意義を考へ、政治の根本義を辨じ、理想を立て、然る後に人民及び事物を誘導して行かねばなりません。たゞ盲目的の政策ばかりで、その場その場を切り拔けて行くことを、唯一の政治と心得てゐるものは、何時でも國家を賊するものです。

さて明治六年に、米國宣教師ゴルドン氏が、上州安中に參りました。氏は先生がアメリカに滯在中に懇親を結んだ方であります。このたび傳道のため日本に派出されることになつたので先生は氏に依賴して、自分の兩親を慰めて貰ふことにしました。氏は傳道を兼ねてさうした依賴をも受けて、安中に來たのであります。然るに意外にも、安中城下の人々は勿論、舊藩士でさへもが、先生の襄と改名されたのを知る筈なく、ゴルドン氏からその物語りの概略を聞いて、初めてそれが新島七五三太であつたことを知つたやうな有樣で、隨分滑稽なことでした。この時舊藩士小林竹七郎、吉村庸行、關島武昭の三君が案內役で、萬事ゴルドン氏を斡旋したさう

です。尤も氏には友野力といふ通辯が随行してゐたので、人々の會話には差支へがありませんでした。ゴルドン氏は端的に改造の日本は、新島さんのやうな實行才能のある思想家、純正のキリスト教を信仰する者の言に耳を傾け、常識を速かに養成し、個性と機會との關係を接近せしめ、且つ各個人が相互にヨリ深厚な同胞感を抱かねばならぬと主張したさうです。猶ほ氏は語を繼いで、新島さんは人一倍誠實心のあるお方で、例へば通常の人は、道徳心よりも虚榮心に支配されやすいものであるのに、新島氏は自分は安中藩の微族寒生であることを明らさまに述べ、毫も體裁を造るやうのことをしなかつた。それ故、それらの點が反つて社會改造の指導者に相應しいとて、米人社會の囑望を受けて居られたが、今また諸君に逢うて氏の巨細を聞知し、一層氏に對する敬服の念を高めたと話したさうです。またゴルドン氏は、先生が氏のために書いて與へたいろは四十八文字と、日本數字の書き方を記したものをポケットから出して、皆なに示したとのことです。以上は例の關島老人から私の直接聞いた話であります。

　次いでフルベッキ氏が、安中を歴訪して説教を行ひました。さうして氏の日本語での説教には、聽衆一同が魅せられたさうです。氏は聽衆の中に士族連中の多いのを見て、正宗の名刀を

例に取り、これには丁々撥止と大和魂か打込んであればこそ、稀代の業物が出來上つたのであるから、人間も同樣に、善の勝利を目的とする戰ひに、油斷や怠慢は大の禁物、靈魂の力を强調して、日に三復しなければならぬと云はれたさうです。猶ほ氏は、新島君は聖心雄手、學と術とを完全に準備された人で、諸君の敎師であり、益友であると、激賞しました。當時、安中地方の人々の詮議立てを聞くと、先生は最早や「超人」とか巨人とか、「英雄」とか、「天才」とか、いづれ人類の水平線を突破した何ものかのやうに考へ、さてはキリシタンの妖術を使つて、奇々妙々の事をやるに相違ないと、途方もない想像をしたものださうです。而かもその先生が近いうちに歸朝するといふのですから、地方人は驚畏の眼を以て先生を迎へようとしました。何と云つても、當時西洋人といへば、御本尊が新しいだけに、同じ言說でも卓見の如く響いたのでありますから、安中地方の人々の頭には、米人は釜のやうな帽子を冠つて、四五十里もある所を日歸りで演說を聞きに出掛けるなどゝ、先生の書面を復聞きして勝手に揑造された想像が混入してゐた爲めに、先生の友人千木良君の日誌などには、左の通り振つたことが誌されてをります。

明治七年十一月、新島襄氏米利堅より歸朝す。初めて耶蘇教を安中學校及び龍昌寺に講說す。一日、安中學校に於て道を講ずるや、熊谷縣高崎支廳の官吏來りて聽聞す。安中の士族及び近傍町村の人民、多く來りて聽聞す。蓋し信じて來るにあらず、新島氏の顏貌を見んとして來るなり。

併し一方、藩の有識者は、やはり念入りに押し問答をしながらも、互ひに心靈上の研究をしてゐたから、先生の歸朝に先立つて、神に召さるゝ素地を開拓してをりました。とにかく、彼等が先生を豫言者のやうに待ち望んだ眞摯の情は、キリストが鄕里に歸つた時の群集心理と同斷で、一種の概念崇拜の空氣が、先生の身邊を包圍して居りました。

さて先生は一八七四年、則ち明治七年の十月三十日に、米國サンフランシスコを出帆して、歸朝の途に就きました。此度は北米の大陸を一氣に横斷して、太平洋に出ましたが、先生はそれによつて、曾て心のまゝに天下を周遊した青年時代の深刻な經驗を、今また鮮かにする機會を得ました。即ち先生は自己の肉身愛慕の至情を國家全體に押し擴げ、國家の利害休戚を直ちに自己の利害休戚となし、更にこれを世界人類から宇宙全體に推し及ぼしました。元治の昔、悲劇的に北海道箱館を脫け出で、巡禮の旅に立つてから爾來風霜十年、今回の歸朝は先生にと

つては、實に内的生活に非常な變化を齎らした、勝利の「復活」であります。船は合衆國の太平洋郵船コルラド號で、船積五千トン、九ノット半の速力、横濱までは二十日間の航程です。今日の汽船と餘り差異はありません。さうしてこの航路は、一八六七年政府の補助の下に開かれたもので、コルラド號は、その頃の太平洋及び太西洋に於ける一等船でありました。サンフランシスコ出帆以來、いはゆる船日和で、心もおのづから明るく、日毎に感覺を新鮮に保ちながら、際限のない波路を踰へて、船脚を進めました。その昔先生が反叛人として、箱館港ゟ闇に紛れて脱走し、暗く沈んだ肉體と精神の束縛の中に在つて海面を眺めた時と、今度の晴れ晴れした航海とでは餘程その趣きが違つて見えたであらうと思ひます。

先生の乘つた船は、上等船客が四十五人、三等船客が、二百三十人殆んど各國の人種を網羅して居りました。船客が鬱さ晴しの情趣を追求することに顰縮して、先生はこれらと全く沒交渉の位置に立たれ、たゞ同行の宣教師並びに江戸の藥學校に招聘されて行くドイツ人の博士と閑談する位に過ぎませんでした。航海の二日目に生憎船が暴風雨に逢つて、船客は殆んど悉く惱まされました。この航海中先生に關する逸話が幾つも殘つて居ります。先生にもその張り切

つた力に多少の緩みが來たものでせうか、みづから波浪の健兒と信じて居られた先生が、この週間を通じて船室に籠城しました。先生はこの暇を利用して、エーテル氏の著した佛教論を耽讀しました。この事は先生が歸朝後、恩人ミセス、ハーデーに送つた手紙の一節にも書いてあります。

I have read through Eiteles Lectures on the Buddhism and some other bookes and am interniting to write Japanese sermon.

先生が青年時代から才氣に驅られ、一時的の好奇心や昂奮のために動搖しやすい生活を統一して來たのは、心を禪定に潛め三昧の發得を圖つたお蔭です。かの「碧巖錄」や「傳習錄」は、先生の青年時代の愛好書でありました。また先生が屢々參禪したことは、本書の前編に於て既に記述した通りであります。さて多少消極的な心狀に動かされたやうな所があつたにしても、境遇の變轉や危難に遭つて猶且つ終始一貫、胸奥に持ち續けて來た先生の淸淡な心境は、何と云つても此の禪から強い暗示を受けて居ります。先生が曾て同志社の講堂で、鞭を以て自分の手

を打ち、自身を責めたことなどに就てみても、先生の心境には言語に絶した禪味のあつたことが思ひ合はされます。且つまた同志社を相國寺に隣接して建設したことなども、敷地の都合といへばそれまでの事ですが、相國寺が禪宗であるところを見れば、興味の豐かな好話題が、其處に發見されるではありませんか。畑の違つた大内青巒氏が、先生と肝膽相照らした友人であつたことは、世間周知の事實で、而かも同氏は禪の人でありました。これらは私に異常の好奇心を起させます。

もう一つ船中の好話題は、ドイツの博士と、その外一人の英國の紳士と先生と、が討論をしたことです、その際、先生の言論には對手を沈默させるだけの力があつたのです。博士は其時敬服して、貴下の論旨はキリスト教の尙い精神に佛教の潤ひが加はつて居るのだと、激賞したとのことです。私は先生が眞理の前には自繩自縛なく、人間の眞相と生命と觸れ合ふ所の一切を攝取する、その包容力の大なる點に、感じ入るものであります。

先生は同年十一月二十一日、横濱に上陸しました。兵子帶姿の體裁や双子縞に前掛の人々を見て、さすがに先生の氣持ちが一時的の好奇心と昂奮とから一寸動搖したのも無理ではありま

せん。併し、無方針な亂雜な生活狀態や、單に外からの刺戟に引摺れるだけで、その根底に於て安定を缺いだ、國民の容子を見るにつけても、一種力强い暗示がおのづから先生の胸奥に湧き興つてどの途靜かに聖職に身を捧ぐべきであるといふ熱烈な要求が刻々に力强く內心に燃え上つて來ました。其處で先生は矢も楯もたまらず、僅か上陸の日の午後から翌朝までを橫濱に費しただけで、二十二日には匆々上京しました。その時先生は左の如き感懷を歌に詠まれました。

　故鄕にかざる錦ははこの中身にまとふべき時にあらねば

取り敢へず先生は、外務省に出頭して、口頭で歸朝を屆け出たところ、外務省では何分命令のあるまで、先生に滯京せよとの達しでした。併し先生は、義務のためには何物をも犧牲にして惜しまない人だけに、また故なくして他の拘束を受けることを屑しと致しません。其處で子としては、兩親の安否を一刻も早く問ふべきが當然であるところから、事情を具して、早速安中に出發しました。先生は人力車三輛を雇ひ、二輛に荷物を載せ、一氣に三十里餘の道程を安中へと驅け付け、その日の午後十一時、安中傳馬町山田屋文次郎旅店に到着しました。

先生の歸朝當時の日本は、何んとなく一般の空氣が停滯してゐた時で、それが啻に人物經濟の原則に背くのみならず、聖上の大御心なる民本的政治を行ふ上の障碍ともなつて居るので、其處に暗い不安の影が射してをりました。さうして眼前に横はつてゐるところの大きな危險は不用意の中に無意識的に人間の生命の重要な力點を切り離してしまつて、何等の省察も何等の觀照もなく、殊に一國の文化の進展に關して留意するもの、極めて稀だつたことです。故にそれに對して新局面を開いて行くためには、教育と宗教とによつて內省を鋭くし、自己の思想を明確にし、自己の情操を純化して行かねばならぬことを知り、先生はそれによつて、豫て自分の觀測に更に確實な裏書を與へました。

先生は山田屋に到着して、取り敢へず使を兩親のもとに馳せ、明朝九時に歸省すべきの旨を申し送りました。さて安中の秋は初冬にかけて、蔭の暗い沈んだ淋しいもので、全く氣も心も滅入つてしまひます。米國ボストンのやうな明るい町を追想すれば、この場合の先生はまるで日蔭の道に這入つたやうな氣分であつたらうと思はれます、それのみならず、その宿所の町並一連が遊廓で、その三味線や太鼓の騷ぎは、先生のためには餘りに時代錯誤の現象だつたでせ

う。明治十八年、群馬縣が卒先して廢娼したのは、恐らくは先生の安中に於ける此の第一印象が萌芽となつて、湯淺氏の縣會議長時代に果を結んだものでありませう。先生は早朝支度をとゝのへて兩親のもとに歸省しました。早くから兩親は何事も手につかず、ひたすら孝子の歸宅を待ち受けて居りました。近所の人々も迎ひに出て居りました。その時の出迎人の一人から當時の印象を訊くと兩親は先生の姿を見るや否や、殆んど驚倒の態で抱擁し、暫は嬉し涙に搔きくれ、たゞ無言の挨拶が交換されたのみで、一種言ふべからざる感激の情に襲はれたと申してをります。まことに尤もの次第で、これまで十年間も果敢ない夢を續け、始終惱ましい悲劇的の危機に立つてゐたものが、今現に天國の喜びにも譬ふべき幸福に出會つたのですから、無理もないことです。その場合の先生は、額の疵に男性的の勁さを示し、全身が彈力に充ち溢れてゐながらも、猶ほ物に動じない落付を見せてゐたとのことでした。

先生の家出の時には、祖父辨治、末弟雙六君、姉、兩親といふ頗る賑やかな家族でありましたが、今は姉おみよさんと兩親のみで、閑寂な境遇でありましたから、その夜の夢はどうしても圓やかなわけにはまゐりませんでした。翌朝、父民治は早くも身支度をして、一里餘りの板

鼻なる琴平神社に、祈願成就の禮參りをなすべく出かけようとしたのを、先生が遽だしく驅け寄つて抱ぎ止め、座敷に伴れ戻つたさうです。その場の光景がどんなに劇的であつたかは、察するに餘りあります。先生は親父の氣持を十分了解しながらも、萬一老いたる父が琴平社の斷崖から滑り落つるやうの事がありては、取り返へしの付かぬことであり、且つは神慮を惱ます事ともなるから、この場を無事に避くべき妙計を案出したのであります。當時安はには理髮所が一軒もなかつたさうですから、洋行歸りの先生には、どんなにか不自由であつたか分りません。私の老友桙田氏は器用な人でしたから、先生のために素人の刈込みをやつたさうです。

先生が安中に歸られたといふことは、異常の性質のものであつたに相違ありません。何となれば、新たに興りつゝある一種の科學萬能主義を憧憬しつゝも、思想感情の奧底に於ては、尙ほ依然として樣々の神秘的な色調を帶びた表現の漲つてゐた時代であつたからです。人々は皆な一樣に足を聳てゝ先生を凝視し、または手を携へて先生のもとに集り、先生の人格に興味を感じると共に、翌日の期待に猶ほ一層の興味を感じるやうの次第で、門前恰かも市を成す有樣でした、其處で先生は近所の淸水氏の座敷を事務所に借り受け、此所で晝間の應接萬端を取扱

ひました。

歸省後第三日目に、安中小學校(舊藩の造士館)で先生の日本に於ける覺醒運動の第一聲が擧げられました。さうしてその結果は必然的に、人間の再生に潑溂たる意氣と决心とを與へ、視線を世界の文化的國民の上に放散させました。この時先生は外遊十年間の體驗の總和の上に立つて眞純の精神喚起を基礎とした個性の復活を力說し、前例のないほどの熱意を籠めて傳統的外律的の倫理道德や、宗教を宍膚なきまでに解剖し盡されました。當日の傍聽者は、當時の區長後ちに戶長となつた格の人々が主もで、おほよそ八十人ばかりの聽衆が、近鄕近村から集つてまゐりました。また熊谷縣高崎支廳の官吏も來聽しました。安中キリスト教會史の第一ページに、例の千木良氏が左の如く記してをります。

明治七年十一月、新島襄、米利堅より歸朝す。初めて耶蘇教を安中小學校及び龍昌寺に講說す。一日安中學校に於て道を講ずるや、熊谷縣高崎支廳の官吏參り聽聞す。

明治七年十二月、新島氏、西京に轉居す。東京より路を取る。

明治八年一月一日、新島氏東京及び橫濱より送ろ所の、支那譯及び日本譯の聖書到着す。依て同志に

配付す。

明治七年十一月、新島氏米國より歸郷の節、初めて耶蘇の福音を聞いて互に喜ひ、假に一社を設け、各若干金を新島氏に托し、聖書を求め勉强せんとす。名づけて舊邸連中、新邸連中と云ふ。(千木良氏の教會日誌から拔萃す。)

舊邸連中人員

横山貞吉	渡邊作次	小口稔
山本盛德	山口德	小野直
齋藤候文	猪狩忠寬	關島武昭
植栗義達	荻原洲平	黑川昌壽
津金豊昵	江場廣太郎	私山成貞
小林禎	星野舍熙	千木良昌庵
根岸松齡	海保芳澄	
星野輝	山田亨太	
植栗源二郎	內藤肇	

以上二十四人

左の四名は別に若干金を出して、聖書を求め勉强す。

湯淺治郎　山田光就　森本成德　岡村榮懷（以上四人）

やゝ後れて明治十一年、先生が安中に再度歸郷の時、先生から洗禮を受けた方々が、隨分世間から批議されたことは、何んと云つても當時の事であつたから、想像するに難くありません。併しそれは、自身に對する切なる要求と、理想の表白であります。落葉折葉に埋もれた霜枯の安中に疾風が枯葉を巻いて、颯爽たる火の燃え上つた如く、自由の大義を熱心に烈しく叫んだ先生はあくまで生命の人でありました。當時先生の説教を聞いて改宗した人々は、偶像や位牌を焼き棄てたさうです。今にその半焼けの大黒像が藏されてゐて、一場の好話柄となつて居ります。その他安中の遊廓の主人連中が、一旦は無茶苦茶に寂しい氣焔を上げたものゝ、自然に先生の説教を納得して、廢娼令に先立つて正當の營業に從事した人々が多く、或ひはまたキリスト信者になつたものもあります。

先生の全生涯を通じて、相互扶助の對立的關係に在つた福士君が、先生の歸朝を祝した書簡は、隨分歴史的回顧の深いものであります。最も部分的には、本書の前編のところどころに拔萃しましたが、今その全文をこゝに纏めて記載します。

足下三願を遂げ、御歸朝を祝す。

足下、元治元年六月、我國事を救んと、萬里を隔つて米國に、文學を志して遠とせす、頗る艱難辛苦を忍ひ、其盡す所の實效を米國に耀し、大に探究する所ありに、今又歸朝せらる。其結果、同志社の創立と成る。猶時勢の進歩と共に、追々全國に盛進せられん事を祈望す。

回顧すれば、既に十有貳年前、足下、一身の前途を詠れにる一首は、即ち左に、

　武士の思立田乃山もみす錦の衣きされはなと歸るへき。

夫れ元治元年六月、此の詠を小生に示さるは、則ち足下の我か邦家を憂て止まず、爲に此の志を發達す。以て其未聞を進化せしめんとの志望を抱かれ、其が救助に焼心の深きに感謝す。我身を忘れて秘かに國禁を犯す、以て六月十六日の深更を期し、米國商船ベエリアン號に同行す。急速の離別に臨み、足下は足下の志願を充分に完全せられん事を祈り、思はじ握手に感激せしことを今忘れず、

再來渡米、アンドウワなる處に於て勉學中、一八六六年二月廿八日發信書に添へたる米國新聞記事 Story of a Young Japanese の文意と、箱館滯在中、小生に示せる足下の熱心と、各々對照するに、其企望空しからず、文學日を重て月に進み、其功績足下の意の如くならん乎。此の書信を讀み、又彼の米國人の足下を評する所の眞言を參照するも、足下は我國制度一變せさる後ならでは歸朝も束なしと、日夜國制の改革を待受る所、豈料らんや、明治元年戊辰以來、國の制度革り、今日の開明に至るは、實

に惑天の美事と云ん乎。且つ足下の先見に卓識なるを感服せざるを得ず。

足下、先年米國御着の後、御實家へ宛御差越の御書信は、未た屆兼居候次第にて。即ち別紙一八七三年二月十四日付を以て御報に及候通り、小生出京中は屢々八方探鑿するも、御實家の御引越先き判然ならず、不得止其儘所持罷在候に付、幸ひ御返納申上候間、前條宜敷御推察被下度、此段只管御宥恕伏而乞ふ。

御惠贈之御眞像は、乍不敬小生寢所に掛けて、毎朝ゴーデ、モーネングと拜禮罷在候。孰れ不遠小生も御用之都合を見斗へ、出京之砌は幸ひ近頃御住所江鐵道も落成の由に付、御伺公可仕之心組に御座候。尙ほ其刻は山海の如く陳述可仕候也。

一、小生三四年前より、北海道地理取調之御明蒙り、昨年之初春には、魯國領加察加より千島國近邊江出張、其後昨年八月末、魯國領より千島群島請取の際は、測量專務にて理事官へ隨行す。然るに季節遲れの爲め、一二島に上陸、請取渡の間、僅か一時間の滯島、直に本船に歸り、旁々以て島嶼の實況は實視するの暇も無之、實に遺憾之至に有之候處、幸ひ今般該島嶼に諸大臣出張に付、再度隨行を被命、現今出發の豫備に付、諸事多忙中、何分寸暇を不得、依て文略亂筆、要述の缺くる所もあり、足下、宜

しく御洞察伏而冀ふ。頓首再拜。

明治九年六月九日

函館

福士成豐

西京

新島襄樣

足下

第十四章

漂泊の永い月日を過ごしたのち、久方振りで安中に歸省した先生は、この滯在三週間に、前代になかつたところの、壯大新奇な、文明創造の種子を下ろしました。當時は說教者も聽衆も眞劍でした。どちらも動やもすると危險の區域にまで進入して刑辟に倒れる位のことは、覺悟を極めてゐたものであります。何んと云つても明治五、六年の頃までは、キリシタン宗門嚴禁の高札が、率土の兆民に徹底してゐたものですから、其處に不安な暗い影の射したのも、無理ならぬことです。現に市川某が洗禮を受けて、彈正臺に召し捕はれ、生死不明でしたから銘々神經が銳敏になつてゐたものです。私の父は字を「宣教」と申しましたが、それさへお上に遠慮せねばならぬと藩廳から注意を受け、「松齡」と改名した位ですから、現今の人々には全く想像も及ばぬものがあるでせう。

明治十八、九年の頃、私の少年時代の記憶として覺えてゐる出來事の中に、不穩の文字が信

者の家に帖られたり、またヤソ教退治の演說が再々寺院で催されたり、果ては辯士の音頭取りでヤソ教退治といふ數へ歌が熱狂的に高唱されたり、世人の態度は殆んど變調を呈して居りました。野も朝も共に多少の謬見に囚はれて居たやうの感があります。一般に官吏をば自分等を治めるものとは思はず、事ある時に咎める役とばかり見てゐたやうな、幼稚な時代でしたから先生の安中に於ける演說に、高崎から二三の官吏が傍聽に來だり、時の群馬縣令が先生に面會を申し込んだりしたことが、如何にも誇張的に傳へられ、何んとなく事なくしては濟まぬやうに思はれました。群馬縣令揖取元彥氏が先生に面會を申し込んで來た時、先生は簡單に答へて、公務に關する用件ならば此方から伺候すべく、若しさうでなければ何卒蔽屋に御來車を煩はしたいと言つてやつたさうです。先方の申込みに相當した返答ではありますが、當時の挨拶の仕方からみれば何となく其處に多少意志の疎通が缺けてゐたかのやうにも考へられます。併しこれらも過去の邪宗門から來た一種の反抗的態度とみれば、その中に何程かの新しい暗示が示唆されます。

先生は人の所望するまゝに、自作の詩歌や、自己の中心から湧き出た警句を、揮毫して與へ

ました。この時代のものには、「約瑟」と銘を打つてあります。先生にはかうした文人調子があるかと思へば、また現代生活の先驅者となり、勇者となるには、煤烟を回避せずに、その濛々囂々たる中を邁往する覺悟がなくてならぬ、さうして實利的、物質的生活を深化し、徹底させて行けば、結局、精神生活に達して、其處に全圓的の滿足を見出すであらうと主張されました。即ち現代の生活が前代のそれと異つて豐富なのは、現代の人間が創造した潤澤な物質文明を機關に持つて居るからだとの主張の下に、先生は日本の物質文明が全體、歐米のそれに比較して甚だしく劣つてゐることを看破し、一方、國民の教育機關として同志社を安中に設置すると共に、併せて一大工業會社をも同地に興こさうと考へられました。それ故、先生は安中滯在中、日々數里を跋渉して、水利を視察し或ひは礦石を探集するなど、その方面にもまた力を用ゐました。友人も先生の活動振りを目撃して、參考材料を寄贈するものが澤山ありました。先生から舊友添川鉉之助氏に出した禮狀によつても、その一端が伺はれます。

一昨夜は何の風情もなく、甚恐縮之至りに候。陳者、石類數品御投與被下、難有落掌仕候右御禮旁、如此候也。

新島襄

明治七年十二月十八日、先生は上京いたしました。その間際に先生の兩親が息子の提唱に滿足を感じ、精神生活を憬仰するやうになりました。その一事が先生の雄志をどれだけ振興せしめたか分りません。かの日蓮上人が傳道の第一着手に、慈母に授戒を與へたことの心情と同様であります。その當時の消息を先生がハーデー氏の所に通知した左の一節によつて、明かにその模樣を窺ひ知ることが出來ます。則ち、

「父は此の時以後、神佛の偶像及び祖先を禮拜する事を廢止したり。而して予は父の同意を得て、金石、土木、紙片等を以て造れな神々の偶像を神棚より取り出し、悉く之を燒き棄てたり。予は玆に、母が火中に投じて燒らんとせし紙製の諸神數葉を、貴下に呈す。今や我家には一の僞神なく、また一の偶像なし。今より後、父母は眞の神を禮拜するに至るべし。我儕互ひに過ぐる十年間を無事に生存し來り、此の世の別れをなすに先立ち、再び此處に相共に見ることを許されたるは、予の感謝して措く能ざる所なり、希くは益々救主に近づき、キリストのために全身を献け得るやう、予の爲めに祈り玉はんことを。此の地に於て爲したる三週間内の些細なる働きは、著るしき祝福を蒙りたり。予若し其の事情を報じな

ば、貴下は必ず予の成功に驚かるゝならん。」

猶ほ此の時、父民治の歌に次ぎの如きものがあります。

愛のもし心にとめてつとむれば
　　つみもつくらず世を安くへむ

七十四翁　是水

先生は雄志と希望とに昂奮を感じながら、安中を後に上京しました。優れた生活の空氣を吸つた先生の目から見れば、社會上の問題や思想信仰の問題や、すべてが一から十まで、一國の運に繫かつて居らぬものはないとさへ、考へられるのでした。中には冷靜な理路を辿らねばならぬ事もあり、當面の實利を捉へて施設しなければならぬ事もあり、また識者と意見を鬪はさければならぬ事もあり、十年の昔、先生が理想のまゝに意志を猛烈に實現した時と變つて、機會と便宜とを考慮の中に置かねばならぬ必要が頗る多く、先生の意志の力を要する時期となりました。

上京匆々、先生は伊藤博文氏に面會しました。當時氏は工部卿で、豫ねて先生に對しても甚

深の理解をもつて居り、且つ先生と同時代に略ぼ同じ社會の空氣を吸つた人であり、互ひに性格の差別こそあれ、また立場の相違こそあれ、各自の聰明な立言に對しては、相互に敬意を表してゐた仲であつたから、伊藤氏の公生涯に體驗した智識は、先生に取りては有力な助言でありました、氏は先生に。郷里に割據して天下に貢献しようとするよりも、地を東京に相して準備するやうに勸めました、さもなければ寧ろ關西に行く方が利益であると說かれました。また一つには當時プレスビテリヤンが旣に東京に地盤を開拓して居つて、アメリカンボードは神戶を中心に關西に向けて布教を集注するやう希望してをつた際のことゝて、先生は容易に伊藤氏の忠言に耳を傾けました。

伊藤氏は大阪を將來の工業都市にしようといふ方針で、まづ模範的に造幣局を自分の設計の下に新設しました。さうしてこの視察を前に控へてゐた伊藤氏は、切に先生の同行を勸誘しました。勿論、先生の精練された科學的智識の造詣を承知してゐたので、氏は先生からそれに就いて新しい何ものをかを提供されるであらうと、豫期してゐたのであります。先生も丁度、キリスト教宣傳の中心地たる神戶に行く途中であつたから、話は早速纏まりました。そこで先生

は明治八年一月一日横濱に到着して、漢譯及び日本譯の聖書を求め、それらを安中の信者に送り、翌二日、伊藤氏と同船で出帆いたしました。途こそ變れ、「人」一に奉仕することの欲求の外何ものも望まぬ人たちの事ですから、その胸襟を開いて語り合ふ談論は、極めて意義のあるものでした。さうしてそれが後日、先生が如何なる理由で同志社を京都に設立したかを語る機縁ともなりました。

さて大阪に到着後、先生は問題の工場を參觀しました。世界的の眼光を具へた先生に取つては形式だけの事に就いては別段の驚きもありませんでしたが、けれどもたゞ一つ目に着いたことは、政治上の天才者たる伊藤氏が、新生の文化のために非常に實行を急いで居たことでした。先生は伊藤氏と木戸孝允氏との照會て、大阪の府知事渡邊昇氏に面會しました。さうして同氏に向つて、一學校を此の大阪に創設したいと相談に及びましたが、時機尚早といふことと、外國人の教師を居住さすことが、まだ法規上許されて居らぬといふ理由の下に、結局、話が纏まらずに大阪を去ることになりました。かの群馬縣知事と云ひ、この大阪府知事と云ひ、卒直に言へば傳統的の政治意識に囚はれた形で、事勿れ主義を採つたのであります。その後先生は明

治八年の夏、京都府知事槇村正直氏に面會しました。恰かも京都に第一回勸業博覽會を開設しようとする間際でしたから、府知事はその實際の施設を先生に依囑しました。先生も自分の擇む途であるから、好結果を博覽會に與へることが出來ました。さて從來、複雜した心理に眼を閉ざして來た當局者も、博覽會成功の結果、先生に對する態度を全く異にし、それがやがては先生が宿志を遂げる曙光となつて現はれて來ました。この際先生は、博覽會の施設に關して、屢々往復交渉した山本覺馬氏と、知己になりました。この山本君は識見家で、且つ京都府の顧問として相當に地盤も出來て居り、幹部の會議に實權を握つて居る處から、專ら同君が有志者の間に奔走して、現在同志社の敷地に、一校舍を建築することが出來たのです。やがて明治八年十一月二十九日、先生は山本氏と結社して、私塾開業の公許を得、直ちに同志社英學校といふ看板を掲げました。これが則ち同志社の萠芽であります。

先生が此の度の旅行中に、圖らずも伊藤氏の携帶した山陽詩集を繙いて、

濃蹶峽顚孰抗衡。梵王獨不樹降旌。
豈圖右府千軍力。難拔南無六字城。

を見た時に、これを新らしい意味に解釋して、人は何んでも感激に突き當つた時に、初めて其の中に偉い精神が出て來るものであると解しました。乃ち關西人は貨殖の道にかけてこそ勇者であるかも知れない、けれども、精神的に恐らく縁遠いものであらうと見て居つたところか豈圖らんや實は偉大な敬意を拂はねばならぬことを知り、先生はその時初めて京都こそ同志社に約束された地點であると感じました。別言すれば、關西人の萬事に形式を捨てゝ、内容を重んずると云ふのは、畢竟、人間の質に重きを置くので、自體が新文明の發祥地であるとの解釋に逢着しました。

かうして京都に同志社が生れました。これを企てた者の、またこの相談に乘つた者は、正しく彼等の現に置かれた環境をよく考察し、また適切に彼等の能力を發揮し、運用したものであります。勿論、同志社の施設に萬事の切り盛りした人の先生であつたことは、云ふまでもありません。併し、山本覺馬君の熱心な奔走と聲援も、無視することは出來ません。換言すれば、先生の智的圖式を以て示された計畫を成就せしめたのが、則ちこの山本氏であります。先生がその昔、脫藩した際、幇助者に飯田君があり、脫國の掩助者に福士君がありましたが、今また

この山本君を加へて、先生の生活の轉機若しくは事業の完成に、これらの三明星のあつたことを我々は記憶しなければなりません。

さて山本覺馬氏は會津の產であります。會津が京都守護職であつた關係上、氏は京都に在住してゐたので、これが機緣となつて先生との交渉が生じました。幸ひ現京都市商業會議所會頭濱岡光哲君が、山本氏と舊交のあるところから、私は濱岡氏を京都室町の邸に訪ひ、同氏の口から其の間の消息を仔細に承り、先生對山本の關係が如何に切實なものであつたかを明かに知ることが出來ました。第一、先生の奇峭と山本氏の圓熟と、其處に一種の調和が釀されました。先生の機鋒は山本氏の情誼を透して、初めて異な豐潤の色を帶びたのです。若しそれ山本氏の巨軀颯爽の英姿と、近代生活の先驅者であつたことは、何んといつても當年隨一の仁でありました。氏が法律經濟の蘊蓄造詣に就いては、さすが松方氏すらも舌を卷ひて居たさうです。嘗つ國事に對して桐野利秋に書を致し、それが轉じて岩倉公の清鑑に入つたといふことです。

會津藩の寒生から身を興した山本氏は、初め擊劍を學び、馬術槍術は獨步であつたさうです。蘭學が實際生活の改造に役立つて、氏は一人の敵を學ぶことの必然に沒頭し切れず、一度は萬

人を敵とすことさへも學んで見たが、それにも全然悅服し切れずに、何んにせよ個性が醇化され靈化されなければ、眞の滿足を得られる筈がないと悟り、人間の根本的の性情から正しい徑路を辿つて、先生の敎養に親炙して來たのです。先生もまた氏と事を共にするのが最良の策と信じ、相共に提携したのです。

山本氏は西修の薫陶感化を受けた一人だつたさうです。その識見器量を伺ふと、一寸當世に比儔を見ないといふ程でした。個人的に見ても福澤諭吉氏などより遙かに勝れてゐたとのことです。惜いかな維新大事の間際に失明足跛して、氏が腦底に包藏してゐた計畫の芽を收めてしまつたのは、殘念至極の事でした。氏の令室は名は時枝、才色兼備で、氏が京都府會議長時代失明した夫君の側に在つて、議事錄等の處理をしたさうです。戊辰の變に妻女に扶けられつゝ京都を落ち延びて、山崎まで遁れたところを官軍に捕はれ、京都の薩摩屋敷に入牢したのです。此の時氣丈の妻女は官に願つて共に入牢し、夫君の看護をしたいと申し出たさうです。

さて最初は微々たる同志社でありましたから、先生の鼓吹が如何なる影響を齎すべきかを考察の外に逸して居た佛敎の各本山が、明治十一年、一齊に立つてヤソ退治を始め、或る時は先

生が米國への歸化人であるなどと、詭辯に滿ちた策略を用ひて、群衆の心理を煽りました。「坊主が憎くければ袈裟まで憎い」譬の通り、當時の同志社の教授デヴィス氏が、比叡山で天幕避暑をしたまでは無難でしだが、遂に公けの沙汰となり京都府と滋賀縣との管轄區域の爭ひまで惹き起したさうです。同志社理事中村英助君最初よりの緣故者で、種々是等の談を承りました。

筆は少しく飛びますが、同志社の現在敷地は、明治七八年の頃賣り物に出たのを、前記諸君の肝入りで買ひ取つだものです。大部分薩摩藩邸の跡でありますが、その外相國寺や個人のものも併合して居るのださうです。また丸田町の住宅は濱岡君の名義で坪一圓で買ひ取つたのださうです。當時先生は三條の目貫屋旅館に立て籠り、山本君の宅が參謀本部であつたです。

同志社設立の始末

幕政の末路、外交切迫して、世運轉た危殆に傾き、人心動亂するの時に際し、不肖夙に海外遊學の志を懷き、脫藩して函館に赴き、暫く時機を觀察してありしが、遂に元治元年六月十四日の夜半、竊に國禁を犯し、米國の商船に搭し、水夫となりて勞役に服すること凡そ一年間、海上幾多の困苦を嘗め、漸

く米國に到着するを得たり。爾來益志を決し、他日大に我邦の爲に竭すところあらんと欲し、遂にアムホルスト太學に入り、日夜勉學に怠らさりしが、未だ幾年を經ざるに數々篤疾に罹り、形骸空く志を齎らして其郷の土と化せんとせしが、幸にして一生を萬死の間に快復するを得たりと雖とも、爲に大に躰軀の健康を害し、學業上障碍を受くること極めて尠からざりき。然れども苟も學業の餘暇あれば、必す諸州を歴遊し、山河を跋渉し、務めて建國の規摸を探り、風土人情に通するを以て事とし、到る處の大中小學より、博物館、書籍館、盲唖院、幼稚院、其他百工技藝の講習所、百種物産の製造所に至る迄、概ね之を撿閲し、或は諸州の學士有名の人物に接見し、親しく其議論を聽くを得て、大に悟る所あり。以爲らく、蓋し北米文明の原因多端なりと雖も、其能く制度文物を隆興せしめたる所以のものは、要するに敎化の力にして、其敎化の力の如此偉大なる所以は、敎育の法其宜を得たるにあることなりと。是に於て始めて敎育の國運の消長に大關係あるを信じ、身の劣才淺學なるをも顧みず、自ら他年歸朝の日は必ず善美なる學校を起し、敎育を以て己か責任となさんことを誓ひたり。

明治の初年、故岩倉特命全權大使の米國に航せられしや、文部理事官田中不二麿君之に随行し、歐米諸國敎育の實況を取調べらる。時に襄正にアントヴア邑に在て勤學せしが、亦召れて文部理事官隨行の命を蒙ふる。襄敢て之を辭せず、直ちに旨を奉じて理事官と偕に、先づ北米中著名の大中小學校を巡視し、

終つて更に歐洲に赴き、蘇格蘭、英倫、佛蘭士、瑞西、和蘭、丁抹、獨乙、魯西亞等の諸國を經歷し學校の組織教育の制度等を初とし、凡そ事の學政に關する者は、聊か之を觀察講究するを得、其周到善美を盡せるを觀て、感益々切なり。惟らく、抑々歐洲文明が燦爛として其光輝を宇内に發射せしものは主として教化の恩澤に因らざるはなし。而して教化は文明の生命にして、教育は治安の母たることを悟り、愈々歸朝の後は、必ず一の大學を設立し、誠實の教育を施し、眞正の教化を布き、以て社會の安全を鞏固ならしめ、以て我邦の運命を保ち、以て東洋に文化の光を表彰せんことを望み、造次にも顚沛にも敢て之を忘るゝことなかりし。且又隨行に先立ちて、忝なくも我邦大政府より特旨を以て、曩に國禁を犯して脫奔せし罪科を免除せられ、如之數々登官の恩命を蒙りしが、襄に於ては將來誓つて一身を教育事業に擲ち、以て眞正の開明文化を我邦に來さんことを望むの切なるより、固く辭して拜せず。理事官と歐洲に別れ、再び米國に航し、アンドヴァ神學校に歸り、勉學年を累ね、遂に卒業の初志を遂することを得たりき。

明治七年の秋、襄の將に米國を辭して歸朝せんとするに際し、偶々碧山州ロトランド府に於て、亞米利加傳道會社の大會議あり。襄の友人にして此會に與る者頗る多きに因り、諸友を要し勸めて臨會せしめ、且つ訣別の詞を需めらる。襄乃ち會場に赴き、演壇上米國三千有餘の紳士貴女に見へ、平素の宿望

を開陳して曰く、凡そ何れの國を問はず、苟も眞正の文化を興隆せんと欲せば、須らく人智を開發せざるべからず。社會の安寧を保全せんと欲せば、必ず眞正の敎育に依らざるべからず。方今我邦日本に於ては、現に戊辰の變亂を經て、舊來の陋習を破り、封建の迷夢を醒して、明治の新政を行ふの際、社會の秩序破れ、紀綱紊れ、人心歸着する所を知らず。今日に於て我日本に眞正の敎育を布き、以て治國の大本を樹立し、以て人智を開發し、以て眞正の文化を興隆せんと欲せば、宜しく歐米文化の大本たる敎育に力を用ゐざる可からず。回顧すれば今を去る十一年、曩の鄕國にありしや、當時の國勢日々に危きに瀕するを觀て、憂憤の心に堪へず、慨然五大洲歷遊の念を發し、一片訣別の辭もなく、父母、弟妹、鄕友に別れ、衣食住の計もなく、幕府の大禁を犯して、一身の窮困を顧みず、愈々蹶つて愈々奮ひ、生命を天運に任せて、成業を萬一に期し、孤行單立、長風萬里の波濤を越へ、遂に貴國に渡來せしも亦、只眞正の開明文化の眞正の自由幸福とを、我日本國に來さんことを祈るの丹心に外ならず。顧ふに我邦同胞三千餘萬、將來の安危禍福は獨り政治の改良に存せず、獨り物質的文明の進歩に存せず、一に敎化の烈德出力を効し、敎育の方針其宜を得ると否とに係はること、昭々乎として復だ疑ふべきに非ず。今や曩貴國紳士諸友と袂を分ちて、恙なく我國に歸るを得ば、必ず一の大學を設立し、之が光明を假りて我國運の進路を照し、他日日本文化の爲に聊か涓埃の報を效す所あらんとす。嗟呼、滿場の聽衆諸君よ。

嚢の赤心實に是の如し。誰か嚢が心情を洞察し、幸ひに斯の一片の素志を翼賛する者ぞと、且つ演じ且問ひ、慷慨悲憤の餘り、不覺數行の感涙を壇上に注ぎ、情溢れ胸塞り、言辭を中止する其幾回するを知らず。語未だ盡きざる、聽衆中忽ち人あり、背後に直立して揚言すらく、新島氏よ、予今氏が設立せんとする學校の爲に一千弗を寄附すべしと。是ならん華盛頓府の貴紳醫學博士バーカ氏にてありし。其言未だ畢らざるに、碧山州前府知事ベジ氏も亦起つて、一千弗を寄附するの約を爲せり。之に次ぎ五百弗、三百弗、二百、一百、或は五十、三十弗贈與の約ありて、靜肅たる場中忽然として、歡呼の聲宛ながら沸くが如し。既にして慇懃に良朋諸士の好意を謝し、離別を告げ、將に演壇を下らんとする時、一老農夫あり。痩身襤褸を纒ひ、徐に進みて、嚢の前に至り、戰慄止まず、懷中より金二弗を出し、黯然涙を垂れて曰く、余は碧山州北なる寒貧の一農夫なり。此二弗は今日余が歸路、汽車に乘らんとして携へし所なり。然れども今子が演説を聞き、深く子が愛國の赤心に感激せられ、自ら禁ずる能はず。假令ひ余老ひたりと雖も、兩足尚能く徒歩して家に歸るに堪ゆ。これ固より僅少数ふるに足らざるも、予が他日建設する大學費用の一端に供するならば、余の喜び何ものか之に過ぎざらんやと。已にして會散じ、嚢亦ロトランド府を出で行くこと、未だ一里ならざる時、忽ち背後より嚢を呼ぶ者あり。顧みて之を視れば、一の老婦なり。急に嚢に近つき絮々語つて曰く、嫗は近村の一寡婦にして、貧殊に甚し。然れど

も教育の一事に於ては、聊か素志を助けんとするの意あり。今嚢中僅に所有の金二弗を呈す。然るに曩に會場に於て敢て之を言はざりしは、誠に其輕少なるを愧ぢて面已。寡婦の微志幸に領取あれよと言畢つて泣く。襄轉た米人が我國を愛するの懇篤なるを思ひ、感喜之を受け、曾て友人に語つて曰く、ローランド府集會に於て最も襄が衷情を感動せしめたる者は、彼の老農夫と老寡婦との寄金にてありしと。其後四方有志者の贈る所陸續雲集し來り、襄が宿志を達せんとするの基本、略は定まるに至れり。既にして纜を桑港に解き、明治七年の末、始めて本國に歸着し、日夜學校設立を計畫してありしが、八年一月大坂に於て偶々故内閣顧問木戸孝允公に謁し、乃ち公に向つて眞正教育の要理を說き、併せて平生の宿志を吐露せしに、公深く之を稱賛せられ、別ふるに公は曾て在米の日より襄と相識るを以て、專ら政府の間に周旋し、襄が志を貫徹するに務め賜へり。襄乃ち地を京部に卜し、前文部大輔田中不二麿君、前京都府知事槇村正直君の贊助を得、遂に山本覺馬氏と結社し、明治八年十一月廿九日、私熟開業の公許を得て、直ちに英學校を開設したり。是卽ち今の我同志社の設立せし始末の大略也。

新島　襄

先生が在米時代岩倉全權一行中の木戸孝允氏と許してゐたことは、先生が恩人ハーデー氏に

宛てた書面の中に屢々散見してをります、さうして木戸氏は眞に先生を殊勝な人と認めて、同胞の一人の悲める者を慰め、望みを失へる者に望みを與へることは、最も貴重の仕事であると信じ、畢竟氏は人間中心主義、即ち人間の性情の本質と生活の本義を究める先生の事業に、最も同情と理會をもつた、人でした。何んといつても當時はまだ、社會の風潮が先生に辛くあたり驚くべき詭辯に滿ちた時代でしたが、さういふ際に木戸氏が嚴然として、公人、私人的に、また同藩士の關係から京都府知事槇村正直氏や滋賀縣知事中井弘氏に先生を紹介し、直接間接に聲援したことは、丁度主キリストに對して豫言者ヨハネの役割りをつとめたもので、先生を社會的に紹介したのは、實にこの木戸氏でありました。

（二）先生が同志社の主義綱領とした所のものは、速かに同胞の常識を養成し、各自を文化の光明に浴せしめたい考へでありました。また同志社大學設立の趣意にしても、宗教以外に人道主義的の傾向を帶び、必ずしもキリスト教の宣傳や傳道師の養成を目的としたものではありません。結局、先生が幾多の辛苦を嘗め、幾多の曲折を經た、幾多の失敗と、幾多の成功とを閲した所のものを同胞に傳へて、動機と刺激を整齊し、情操を醇化し、個人の品性の發展を標的として、

先づ人物主義の教育に重きを置きました。これは在來の日本の社會になかつたところの全く別個の教育系統であります。さうしてその態度に當然含まれた精神は、科學と常識とをもつて衝動を醇化し、刺激を整正し、慾望を整頓し、近代文明の特長たる自己良心の尊貴、自己能力の權威を徹底せしめて、理想の基調と生活の向上を奬勵するにありました。故に同志社の自然の發展としては、普通人の標準に照らして生活の過失を尠くし、個人的に將た社會的に生活の根本義を究め、またその特色としては、キリスト教主義をもつて復活の血路を開ひたものです。この理想から實際への標號として、同志社の徽章が生れました。アッシリア語の「國」といふ文字であります。等三角形が等巨離關係をもつて頂點に結ばれた三位一體、智仁勇の表號であります。

結論

私は一本筋に、自分の途を辿りながら此處まで書き續けて參りました。が、同志社創立以後の先生に就いては日夕薫陶を受けた仁の中に適任者があらうと信じますから、それはいづれ精はしい資料を有つた方に讓ることにして、私の書きたる總量に決算をいたします。

先生は新島家に累積した動力を新しい運動に向け直し、科學によつて、更にそれを强めました。さうして自然と物とを分析的に考量して行く理論の用心深い態度をもつて、次ぎ次ぎに起つて來る事件に適應さして行きましたから、人が禮樂射御書數と騷いでゐた時代に早くも德目羅列の儒敎が外面的な皮相のものであるとなし、且つそれらの學徒は、論語を讀んで生涯何等の惡事をなさないだけで「仰いで天に愧ぢず俯して地に愧ぢず」で濟ましてゐる人々は實に微力且つ無力の人たちであり、隨つて社會の競走即ち國際競爭場裡に於て早晩滅亡すべき人達であるとなし、何よりもまづ人が社會の有要分子たるために偏見を去つて科學的精神に投合した

職業的の人とならねばならぬと考へ海軍傳習所に入たのが、抑も正當の方向に進展したのです。

已に科學に由つて、其の實驗の精神と方法とに依つて、主觀の偏見に陷り易い儒教の缺陷から解放された先生は、その心的成熟に近づくと共に、過渡的の年齢を充たす所の心調及び意志的努力の動搖中に於て動かすことの出來ない規範を要求するやうになり、始めて中心問題をば人生の上に移し、諸の經驗から人格はその原理に於て實に尊貴なるものであるといふ確信の下に自己獨自の人格を創造し、これが又人類社會全體としての人格を完成することであるとなし、さてこそ境遇の超越乃至對象の征服となり脱落したのであります。

さて「フイリツプス」學院時代は、先生自身の確認する所を尊重して、強大耐久集中と云ふやうな態度を持續して、故意に諸方面の訓練をいたしました。そうして「アムホースト」大學時代は、同胞民族國家社會等に對する關係をも考察して、直接日用の生活に役立つ科學の研究實驗に沒頭し、何時しか科學の精神に於て知識を科學の範圍外にまで及ぼし、其處に宗教的情操に表現の場所を與へ、神學校時代に連絡されました。

さて歸朝後、同胞の社會は猶ほ著しく幼稚な域に停迷してゐる處から、まづ啓蒙的施設を急

ぎ生活の現實方面を力說いたしました。そうして教育を通じて人格を陶冶し、人生觀上行爲上の理想政治上文明上あらゆる方面に新らしい適應を企圖されました。其の意を敷衍すれば同胞が未だ悅服し切れなかつた耶蘇の心靈の呼吸を以て、人間の窮りなき新なる路を開き同時に、共同生活を正しく構成し其全活動をして向上せしむるやう、社會其ものをも改造すべく心懸けたのでした。さて教育と政治は最も親密な關係があり、教育の延長が政治であり經濟問題であり、社會問題であり同時に倫理問題であります。結局、先生の態度に含まれた教育と政事此の二つの側面を互ひに塡補して經世家として始めて先生の面目が完全に表現せらるゝと思ひます。

昔者一將功成つて萬卒骨を枯らすといつた英雄主義の裡をかいて、先生は民衆と共に生きた無冠の帝王であります。

附録

先生に對する感銘、人々の記憶と記錄とに、まだ新鮮なところのものですが、就中、先生と最も緣りの深い未亡人が感激して書かれた追想の記こそ、實にその響きを永遠に傳ふべきものであり、また更に新しく耽美的に先生の面影を偲ばしめるものでありませう。その言句の一つ一つに燦爛たる和韻と熱烈な潛勢力とが、見出されます。即ちそれらの言葉のもつ力強さは、未亡人の追憶によみがへる原始的光と熱とに外なりません。私共が先生の二十周年紀念會を安中教會で催した時、未亡人は壇上に立つて、深い感慨に打たれながら、その追想記を朗讀されました。而かもその時、會衆は陰慘な色合に湧き立ち、私は犇々と逼り來る感激のために、宛かも陰暗な世界に突き墜されたかのやうな氣持で、その時間を過ごしました。要するにこの未亡人の言葉から、先生が今なほ如何に美はしい良人として、深い愛の姿をもつて、未亡人の上に柔かに働きかけて居られるを感じたからです。さうして未亡人の澄み切つた音讀のうちにも、

尙ほ折々は打ち顫へた音調が聞かれ、また抑揚の强い先生の面影が、會衆に交はりながら躍動してをりました。もう一つ私の頭の中に閃いたことは、昔し私の未だ稚さなかつた頃、先生がこの夫人の手を曳ゐて、勞はりながら此の會堂に來られたことの記憶です。

亡愛夫襄の發病覺

新島八重子

明治十八年十二月末、米國より歸京、其後は何時も病氣勝ち。

同十九年七月、播州垂水瀧茶屋萬龜と申す所に、海水浴に行き、少しき泳ぎをなせば、動氣甚强くなり、其時より度々動氣の異變を覺へ、心配を致し居る。然し心臟病なる事不明。

翌二十年四月十六日、夜半發病。十七日朝、脈數百二三十。直にベレー氏を迎へ來て、診察を願ひしが、此度は餘程大病なるとの事、妾は日夜着護をなし、十七、八、九日には、咳嗽非常に出で、血啖も出で其折はとても全快は六ケ敷と心配をなしれ居れり。然し神は彼をまだ此世に置き給ひて、追々全快。

仙臺東華學校開校の爲め、六月十一日、當地を出立、神戸より滊船にて横濱に上り、東京に行き、上野十二時の汽車にて黒磯まで行き、同所に一泊。十四日朝、馬車に乘り、白川まで行、又た人力車にて福

島に行一泊。旅館にて綱島氏御夫婦と共に晩食をなし、亡夫と綱島氏と、同地傳道の事に付相談、夫人と妾とは同地を見物に出、十五日朝出立、仙臺に行、十六日、東華學校開校式に臨み、暫時話をなす。又松島見物に行、兎角疲勞を致す故に、何事も靜かになし居て、同月二十九日、仙臺を出立、荻の濱より滊船にて箱館に着、同所にて昔し國禁を犯して出たる波止場を見物に行、其折の話を聞。其所に昔しと替らず其道の傍に、イギリスの人にてボーターと申す人の家あり。亡夫の箱館に居候時は、ボーター商會とて中々盛んなものゝ由。其店に福士氏は番頭にて、同氏の許へ度々通ひたり。然し其折は見るかげも無し。圖ずもボーター氏の名前が掛あり故に、同氏を尋ぬ、二階一室に白髮の老人息子が二人、實に見る蔭もなき御樣子。ソフアーは破れ、大理石の卓子は七分程かけ、靴やれし所に他の切をあて、着物所々につぎをあて、ロビンソン●クルーソーの住居も斯くやと妾想ぬ。同氏は亡夫の來意を尋ねければ亡夫は私は昔時御店に福士氏の御世話にて渡米致し、永年米國にありて勉學をなし、歸朝後同志社私立學校を建て、今度は病氣養生の爲め、札幌に行く途次、家内に昔し出發致せしの場所を見せんとて、玆に來り圖らずも貴下の御名前を見て、昔時を思ひ出して御尋したる次第なりと語り、同氏の言るゝには御存じの通り昔しは中々盛んに商法も致し、多數人も使ひ居りしが、店の都合惡しく思はしからざれば、或人に持逃げられ、只今大商人となりをる人も多く有れ共、唯一人尋來る人も無し。然るに貴君は店の

者の世話になり候とて尋下され、實に有難しとて落涙せらる。亡夫御病氣の御様子故御見舞の印とて、何程か金子を差上げ宿に歸りたり。箱館より小滊船にて小樽に着し一泊。七月八日、札幌に着し、福士氏の長屋を借りて住ひ、日々馬に乘りなどして養生をなし、餘程身體も宜敷、喜びて居る折柄、八月十三日米國の大恩人ハーデー氏の死去の電報着す。其夜より又た病氣となり、其悲しみの有様は、中々妾の拙き筆紙に書き盡し難く、日夜亡夫を慰め居たり。札幌にては、親しき友人とては一兩人（其一人は大島正健兄也）のみ。段々歸京の日も近き、少々快くもなりぬれば、九月十四日、札幌を出立し、横濱に着す。夫れより鎌倉、江の島の見物して、東京に上り、十月二日に歸京す。

二十一年元日朝、同志社に行くの途次、御苑内の甲ケ辻邊にて非常なる動氣起り、一足も歩むこと出來ず、其邊に人力車もなく、如何ともなす能はず、暫時立留り、目もくらみ、何も見へざる由なりしが、漸く少々氣分直りたれば、靜かに同志社に行き、會堂にて新年の挨拶をなし、暫く話をなして會堂に行きけるに、氣分惡くなり、妾の乘來りし人力車にて歸宅しければ、妾は他の人力車にて歸宅せし。其時より病氣は益々惡く相成り、ベレー氏方に度々迎へを遣はし、同氏は不在にてよう／＼午後四時過に來診せられ、病甚だよろしからざれば、今後は高音にて話などは決してならずと禁られたり。是迄は動氣起り候折には、五六時間にて直りしも、今度は中々全快せず、二十一年一月より動氣は、二十三年一月二

十三日まで全快せざりき。病中同志社の諸兄に面會を醫者より禁ぜられし折に、妾に語りて嗚呼つらき事かな、諸兄に面會も出來ぬならば、寧ろ天國に行たし、醫者は餘り八ケまし過ぎる云々と申しぬ。

二十一年四月十三日、知恩院にて同志社大學の爲めに、京都市中の人々を招きて演説をなし、同十六日、當地を出立、東京に行き、二十二日、井上樣の御邸にて發病す。五月二十二日より相州鎌倉保養院にて養生、妾は六月八日、鎌倉に行き見れば、亡夫の身體は非常に疲勞の樣子にて、足には輕き草履をはき一手は杖、他手は看護婦の肩にかゝり、靜かに歩み居りし。其樣を一目見たる時は、實に斷腸の思あり、妾が參りてより、朝夕濱邊叉たは八幡宮大佛邊まで、緩々と歩みて、散歩するを常としたりしが六月十四日、東京に歸り、麻布仲の町粟津樣の御世話に相成たり。七月二日、醫士難波樣より橋本先生の傳言あり。襄先生には内々にて、宅まで妾に來る樣との事なり。丁度ケットを求求めに行く序あればば難波氏の宅に參りければ、同氏内々妾に申されけるは、橋本先生の見込にては、とても今度は先生の御病氣は全快は覺束なし。心臟の皮薄くなり居れば、若しや非常に驚く事にてもあらば、其皮破れて血にまじり、腦まで上り、腦の筋至つて細く、其處に心臟の皮行留まると卒中となる故に、それとなしに大切なる事は聞置く樣、豫め夫人まで申せとの事。難波氏より其御話を承りし時は、何とも申されざる心地、嗚呼、其時の苦しさ、實に筆紙には盡し難く、ケットを求めに行く勇氣も無くなり、さりとて

亡夫は、夜半に涼敷して身體冷へては困難と思ひ、氣を取直して傳馬町行き、ケットを求め、粟津氏の晦宅に歸る。亡夫は妾の歸りの遲きを待居り、妾はケットを求め、其品を見せて何氣なき樣に致し居れども、心中若しも亡愛夫が、卒中にて今晩にても死去致さば如何抔と、種々思ひ居りしに、其折亡愛夫は本日難波樣にて何と言はれしや（亡夫は難波氏が內々妾に宅にまで來れと申されたるを聞居たり）、最早長くはあるまじくと申され候はんと申し、妾は何と答へん樣もなく、唯先立つ物は涙のみ。其折亡愛夫の申すには、不信者ならば醫士の言ふことは病人に知らさぬはよし、余は此病氣に罹りしより兼て覺語は致し居ると。共に手を執り、涙ながらに醫士の言はれし事を話せば、此身は元より神に差上げ、又た神より何時召されても、喜びて御前に行く、然し卒中ならば、最愛の汝に暇告も致すことの出來ざるは、甚だ氣の毒なり。然し夫れも聖旨ならば致方なしと申しぬ。實に其折りの事を思へば斷腸々々、若しも死去致さば暑中なり、とても死體を京都まで持歸ることもならず、毛髮を切取り、死體を火葬になし、持歸るの外有まじく抔、種々考へ、安眠も出來難く、其夜より幾度か夜半、亡愛夫の寢息を伺ひ、妾は日夜の看護にて疲勞し、或時は亡夫の目覺め居れるを知らずして、寢息を伺はんと手を出せば、其手を捕へ、八重さん未だ死なぬよ、安心して寢よ、餘り心配をなしてよく寢ないと、我より先に汝か死すかも知れず、左樣なれば我が大困りだから安眠せよと、度々申したり。

七月十九日の朝、井上様御出に相成、今日午後四時頃より大隈様に、先生を我馬車にて大切に御連れ申す故に、御心配無き様にと、御親切に仰せ下され、又た態々御迎へに御出下され、其夜同志社大學の爲に金參萬貳千圓出來、十一時頃に歸宅、非常の悦にて共に神に感謝をなして、十二時に床に就く。大學の醫ベルツ先生の命によりて、上州伊香保に參ることに致しけるが、其折りには病氣は大分宜しかりき。二十四日、鶴田氏を御依賴致し、前橋に向て出立し、妾は二十五日出立、京都に歸り、種々の用意を整へて、八月十三日伊香保に行き、九月十四日まで逗留して東京に歸り、十月二十四日歸り、十月二十四日歸京す。十二月十二日、神戸諏訪山和樂園に行き保養す。

二十二年三月三十日歸京、又た二度二週間程神戸にて養生す。同年八月二日より播州垂水瀧茶屋に海水浴に行く。二十日より有馬温泉に移り、三十日歸朝す。十月十二日、東京に向て出立、是實に二たび歸らざるの出立の日也。十一月二十九日、前橋に大學校の爲に行きて發病す。十二月十二日東京に歸り同月二十七日、相州大磯百足屋に赴く。

二十三年一月十一日より又々病重り、十六七日は少々快く、十九日朝より病惡しく、午後四時頃電報來る。妾は二十日朝出立、大磯に其夜十一時に着す。鳴呼、變りはてたる顏、實に何と言ひ出す様もなし。小崎、徳富兩兄既に御出下され居り、幾何か心強く感じけるが、亡愛夫の容態を見たる折は、と

ても全快は六ケ敷有る様子なりき。面會の折り亡愛夫申すには、此度は他病か實に今日は苦しく、又は今日程汝を待長き一日はなかりしと。實に愛情厚き事、妾死すまで又後世迄も忘れ難し。信仰に富み、憐憫に富み、堪忍び人を免すの力、すべて妾の學ふべきこと斗りなり。實に厚情又た言ひ難き情は、只神と妾と知る計なり。嗚呼、幾度神に願しか、又幾度失望せしや、幾度神に求めしや、嗚呼實に悲しい哉、今は嬉敷も浮事も共になせし我最愛の友、此浮世に在らず。神は此罪深き妾を何時まで此世に置き給ふか。妾只た日夜望む、天津御國、最愛、信愛の夫と共に、限なき御樂を受る事を日夜祈る耳。

明治二十三年一月二十三日、最愛の夫は二時四十分此世を去る。妾の左手を枕となし、幾度呼びても答へなし。嗚呼、思ひ出せば涙の種、實に斷腸々々。

明治二十三年二月十日識す

新島八重子

新島家の發祥の地たる、上州碓氷郡郷原を彩どる萬象は、新島家の趣味を物語り、信仰を談じさうしてその家族の主義主張に向つての建設的努力を代辯するものであります。換言すれば

新島家の歴史的、道徳的の意義は其處の風土の自然を解して、初めて了解されるものです。古色蒼然たる諏訪宮の社頭や、迷雲汀徊する妙義山や、碓氷川の嬋妍など、その意味でやはり、先生の思想を胚胎するのに與つて力あるものでした。これを情緒的に云へば、新島家の先祖の彼方に隱れたる運命が、世と共に推し移り、自然の感應と相俟つて、靈妙な傳統の光を投げて居るのであります。越鳥の南枝に巣をかけ胡馬の北風に嘶くと云つたのも、それを演繹すれば生々の道に躍動すべき暗示であります。

群馬縣上野國碓氷郡鄕原村々誌

沿革

建置。本村の建設起原は、舊記の供證に據る者あらされば詳なるを得ず。

名稱。往古より碓氷の郡にありて、現時の名稱鄕原を唱へ、今に至る迄變更せしことなし。

所屬。稻田の莊に屬するか、詳ならず。

管轄。天正十八年、榎下在城安中左近太夫正盛、此地を領し、左近太夫亡ぶるの後、同年より慶長九年迄十五年間、當國箕輪在城伊井兵部少輔直政、同左近太夫直勝、高崎へ城き移る迄之を領し、直勝

の子兵部少輔直之、安中に城き、慶長九年より正保二年迄四十二年間、之を領し、同年より寛文七年迄二十三年間、安中在城水野備後守之綱、同信濃守元知、之を領す。寛文七年より延寶九年迄十五年間、安中在城堀田備中守正俊、之を領し、元和元年より元祿五十年迄二十二年間、板倉伊豫守重形之を領し、同年より寛延二年まで四十八年間、内藤丹波守正森、之を領し、寛延二年より明治二年迄百二十八年間、安中在城板倉佐渡守勝淸より代々之を領し、明治二年より同五年迄四年間、安中藩の管轄に屬し、同年より六年迄二年間、熊谷縣の管轄となり、同年より又群馬縣に屬し、同十二年より十八年に至る迄、碓永郡役所の管理に屬し、同十八年より原市村戸長役場と聯合す。

位置

本村は同郡の稍々中央に位し、松井田驛と原市村の間に在りて、中仙道之を貫通せり。

幅員

東西。　二十七町十間。

南北。　拾八丁二十間。

周圍。　六　千　間。

面積。　七十九萬八千二百九十六坪。

地味

色。黒壤輕鬆なり。
質。磽确にして、膏脂に乏し。
適種。麻、蕎麥、稗、里芋、桑は最も適せり。

全地形勢

闔村の地勢たる、南北共に川流に劃して、乾艮の兩位、稍々伸出し、狀恰も平目(ひらめ)の如し。頭西に向ひ、尾東を指す。而して南方、人見村及び西上磯部村の界を、鬣とし背となす。北方腹部は中後閑、國衙の兩村に蝕入す。疆場丘陵多く、其余皆平垣土地狹小なりと雖も、耕作に宜しく、蠶桑の利益を以て供給、自ら足れり。中仙道は中央を貫穿し、沿道は家屋接續し、殆ど市街の狀をなす。人情、風俗、氣候共原市に同じく、民業は農蠶にて、生糸太織を以て物產とす。而して此地の特產として、好評を博するは麻のより糸となす。

琵琶の窪（新島家發祥地）

四町九反四畝二十八歩。九十一筆

氏神は諏訪神社

本村の西端、字琵琶の窪に在りて、中仙道の北崖に位す。祭神。建御名方命、都美歯人事太玉命の二柱を祭祠す。本社は舊くよりの鎮座なりしと雖も、勸請起原に至りては訊す可らす。

上毛安中人根岸橘三郎。撰鄉之前輩新島先生傳。將排印以行世。以予同籍貫。來屬後序。夫先生天下士也。生爲教誨津梁。沒爲士林遺愛。道德功業固自足千秋。復何待于區區傳述焉。撰者乃屑屑然積歲月力。以爲斯篇者。何也。葢事有曠百世而相感者。故聞伯夷之風。有頑廉懦立之效。聞柳下惠之風。有鄙寛薄敦之化。先生高風亮節。聞于一世。而其所以辛酸刻苦。百折不撓。終克成其志業者。非有人傳述。固無從而盡知。幸得其傳而悉其平生。其精神氣魄。必有默相感者。即青年士子日夕繙覽。思齊之念。願學之心。焉得無油然與起乎。方今民志搖蕩。輕佻成俗。士習之敗。靡知所止。此篇一出。可以警鄙薄之俗。可以立頑懦之志。則撰者之功。豈徒傳先德顯鄉賢而已。此則予之所樂而。稱道者。因書而置諸簡末。

荒木寅三郎

Printed in Japan

大正十二年一月二十日印刷
大正十二年一月廿五日發行
大正十二年一月廿五日二版
大正十二年一月三十日三版
大正十二年二月十日四版
大正十二年二月十五日五版

定價三圓

新島襄之奥付



著作者 根岸橘三郎

東京市京橋區尾張町二ノ十五
發行者 福永文之助

東京市芝區南佐久間町一ノ三
印刷者 和田操

發行所
東京京橋區尾張町
振替東京五五三番
警醒社書店
電話銀座（一六九九番
　　　　　一五八七番

徳富健次郎著
ゴルドン將軍傳

定價100圓
送料 8錢

將軍の一生は決して滑かな生涯ではなかつた。凡俗共は將軍を變物と呼び少狂漢と目した。五十二年の生涯は將軍が苦難を背負つた歴史であるが、而も心中何等の憤怨の態なく、見す〳〵犧牲となつて吾血を以て國民の罪を贖はうとした。その殉道的生涯に感激した著者が、強烈なる熱情を以てその生涯を描いたものである。

村田勤著
ナイチンゲール孃傳

定價230錢
送料 12錢

ナイチンゲールは尋常一様の婦人ではない。近代的看護婦の模範であり、又赤十字事業の隱れたる元祖である。時の女皇が、男子ならば陸軍大臣にしたいと仰せられた程の女傑である。堅い信念を持し高い理想に生きて、人類に奉任した愛の化身である。本書は最も信ずべき孃自身の言葉や書翰を織り入れて其生涯を描いたものである。

村田勤著
宗教改革史

定價150錢
送料 18錢

十餘年間苦心の結果たる此著は、近世文明の淵源たる十六世記に於ける宗教改革の起原及發展を舒し、それを成功せしめたる時代思潮を明かにし、その大事に參せし偉人、俊才、碩學、傑僧等の傳を叙し常代歴史上の大波瀾大活劇を描き、特に國家と宗教との關係に意を注ぎ我國の將來に對し一個の燈明臺たらんことを期せり。

西村天行著
石井十次詳傳
信天記

定價250錢
送料 18錢

岡山孤兒院の創立者として、幾多の薄倖なる孤兒の父となつて苦を忍びながら、犧牲的生涯を送つた石井氏の詳傳にして、其溢るゝが如き清き愛と奉仕の信念の背後には、常に燃ゆるが如き熱烈なるキリストの信仰があつた。實に「神は愛なり、力なり」の教訓を痛切に暗示せる生きたる人格者の姿を本書中に見ることができる。

有島武郎
森本厚吉共著
リビングストン傳

定價100圓
送料 10錢

兩著者が基督教の信仰に燃えし札幌農學校在學時代、神の愛に勵まされて亞弗利加に渡り、蠻煙瘴霧の間に決死傳道に從事し、遂に骨を異域に埋めしリ氏の人格に感激して著はしたものなるが、爾來十八星霜森本氏は依然信仰を變へざるに有島氏は之を離れるに至り巻頭に五十頁の告白文を掲げ、森本氏亦自己の立塲を明にせり。

2